博 士 論 文

埴輪生産体制の継続と断絶

(Continuity and interruption of production systems of *haniwa*)

2017 年 9 月

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

原田　昌浩

立命館大学審査博士論文

埴輪生産体制の継続と断絶

（**Continuity and interruption of production systems of *haniwa***）

2017 年 9 月

September 2017

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

Doctoral Program: Major in Humanities

Graduate School of Letters

Ritsumeikan University

原田　昌浩

HARADA Masahiro

研究指導教員：矢野　健一　教授

Supervisor：Professor YANO Kenichi

『埴輪生産体制の継続と断絶』

原田　昌浩

目　次

序　章　埴輪研究の現状と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

第１章　埴輪研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

第２章　特殊器台形埴輪の系統と編年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11

第３章　巨椋池を介したⅡ群円筒埴輪の流通・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　34

第４章　中期大型古墳群の埴輪生産（１）　京都府久津川古墳群の分析・・・・・・・・・・・・・・・・　47

第５章　中期大型古墳群の埴輪生産（２）　兵庫県西条古墳群の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・　65

第６章　山城地域における古墳時代後期の埴輪生産・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　87

第７章　王権周縁部における埴輪生産の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106

終　章　王権中枢の埴輪生産への予察と展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 118

引用・参考文献・・ 120

図表目次

図１　特殊器台形埴輪出土遺跡分布図・・・・13
図２　特殊器台形埴輪の各部名称・・・・・・14
図３　元稲荷古墳出土の特殊器台形埴輪実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
図４　元稲荷古墳出土特殊器台形埴輪詳細写真－１・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
図５　元稲荷古墳出土特殊器台形埴輪詳細写真－２・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図６　元稲荷古墳出土特殊器台形埴輪（未実測資料）・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図７　竪穴式石槨盗掘坑埋土出土埴輪実測図・20
図８　再検討された箸墓古墳出土資料・・・・23
図９　全形の復元できる特殊器台形埴輪・・・24
図10　口縁部～頸部の諸形態・・・・・・・・25
図11　透孔単位の基準・・・・・・・・・・・26
図12　特殊器台・特殊器台形埴輪・円筒埴輪の最下段の製作技術・・・・・・・・・・・27
図13　特殊器台形埴輪の文様構成模式図・・・・・・・・・・・・・・・・・28・29
図14　特殊器台形埴輪の工人集団の系統・・・32
図15　対象遺跡分布図・・・・・・・・・・・35
図16　共通する盾形埴輪・・・・・・・・・・38
図17　山城地域のⅡ期の埴輪（１）・・・・・39
図18　山城地域のⅡ期の埴輪（２）・・・・・40
図19　山城地域のⅡ期の埴輪（３）・・・・・41
図20　和泉地域のⅡ期の埴輪を有する古墳・遺跡と当該期の遺跡分布・・・・・・・・・44
図21　同一の製作技術・文様を有する衝立形埴輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
図22　明石地域における五色塚古墳を中心とした古墳分布・・・・・・・・・・・・・・・46
図23　久津川古墳群とその周辺の主要古墳分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
図24　久津川車塚古墳・梶塚古墳の調査区と墳丘復元図・・・・・・・・・・・・・・・・50
図25　久津川車塚古墳・梶塚古墳出土円筒埴輪の底部法量散布図・・・・・・・・・・・・51
図26　久津川車塚古墳・梶塚古墳出土の埴輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
図27　久津川古墳群出土円筒埴輪底部法量散布図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・54
図28　久津川古墳群出土円筒埴輪底部法量散布図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・55
図29　山道東古墳、芝ヶ原９号墳、芭蕉塚古墳、青塚古墳出土の埴輪・・・・・・・・・56
図30　久津川古墳群出土埴輪におけるＢ種ヨコハケ各種の出現頻度・・・・・・・・・・57
図31　古墳時代中期の久津川古墳群における埴輪生産の様相模式図・・・・・・・・・・59
図32　加古川下流域の主要古墳・遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・66・67
図33　西条古墳群古墳分布図・・・・・・・・68
図34　人塚古墳　墳丘測量図・調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
図35　人塚古墳　出土円筒埴輪・・・・・・・68
図36　人塚古墳　出土形象埴輪（１）家形埴輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
図37　人塚古墳　出土形象埴輪（２）蓋形埴輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
図38　人塚古墳　出土形象埴輪（３）各種器財・鶏形埴輪　・・・・・・・・・・・・・・71
図39　行者塚古墳　墳丘測量図・調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
図40　行者塚古墳　出土円筒埴輪・・・・・・79
図41　尼塚古墳　出土円筒埴輪・・・・・・・80
図42　日岡山古墳群古墳分布図・・・・・・・81
図43　北大塚古墳　出土円筒埴輪・・・・・・81
図44　カンス塚古墳　出土円筒埴輪・・・・・82

図45　西山大塚古墳　出土須恵器・円筒埴輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
図46　里古墳　出土円筒埴輪・・・・・・・・・83
図47　東沢１号墳　造り出し出土埴輪・土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
図48　時光寺古墳　出土埴輪・・・・・・・・・85
図49　加古川流域の古墳編年・・・・・・・・・86
図50　古墳時代中期の埴輪生産モデル・・・・86
図51　物集女車塚古墳　第4次調査出土円筒埴輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
図52　物集女車塚古墳　円筒埴輪の製作工程復元図・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
図53　物集女車塚古墳　円筒埴輪のハケメパターン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
図54　天塚古墳出土円筒埴輪・・・・・・・・・93
図55　広隆寺旧境内出土埴輪・・・・・・・・・94
図56　清水山古墳出土埴輪・・・・・・・・・・95
図57　山田桜谷古墳群採集埴輪・・・・・・・96
図58　穀塚古墳出土埴輪・・・・・・・・・・・97
図59　天鼓の森古墳出土埴輪・・・・・・・・・98
図60　塚本古墳出土埴輪・・・・・・・・・・ 100
図61　鳥羽古墳群出土埴輪・・・・・・・・・ 102
図62　舞塚1号墳出土埴輪 ・・・・・・・・・ 103
図63　対象古墳分布図・・・・・・・・・・・ 104
図64　近畿地方の前方後円墳の分布・・・・ 108

表１　特殊器台形埴輪出土遺跡一覧表・・・・13
表２　各属性の出現・・・・・・・・・・・・・31
表３　久津川古墳群出土円筒埴輪の製作技術比較表（１）・・・・・・・・・・・・・・・・52
表４　久津川古墳群出土円筒埴輪の製作技術比較表（２）・・・・・・・・・・・・・・・・54
表５　西条古墳群と日岡山古墳群の円筒埴輪比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
表６　物集女車塚古墳　第4次調査出土円筒埴輪の属性対応表・・・・・・・・・・・・・91
表７　対象古墳の埴輪一覧・・・・・・・・・ 105

凡　例

・本論文では、別刷図版を作成せず、挿図を使用した。

・本論において使用した図面は、特に注記のない場合、基本的に各報告書に拠っている。

・各章で引用文献を明示したが、それ以外にも参考とした文献が多数あり、131頁以降に掲載した。ただし、各章の文献と重なるものもある。

序　章　埴輪研究の現状と課題

１．埴輪研究の意義

埴輪は、日本の古墳時代を代表する遺物である。中国各王朝や朝鮮三国においても巨大な墳丘を有する墳墓は存在しているが、そこに埴輪のような土製の焼き物をぐるりと配列することはなく、埴輪は日本列島の古墳に独自の遺物である[註1]。

また、生産遺跡や儀礼を行ったと考えられる一部の遺跡を除くと、埴輪の出土はほぼ古墳に限られる。古墳づくりが当時の社会において中心的な位置を占めていたと考えられる古墳時代について研究する上で、そこに配置される埴輪の研究は避けて通れないものといえる。そのため、埴輪の研究は比較的初期から行われてきた。ただし初期の研究は、埴輪とは何かという意味論や、人物埴輪から当時の服飾を想定するようなものが主流であった。詳細は、次節以降で述べるが、埴輪の本格的な研究が行われるようになるのは戦後のことであり、中でも円筒埴輪については、川西宏幸の「円筒埴輪総論」（川西1978）の発表以降となる。川西は、円筒埴輪の焼成技法、製作技法に着目しその新古の組み合わせから山城地域の円筒埴輪を５期に編年し、それが畿内地域の円筒埴輪とも共通することを確認した。その上で、日本各地への円筒埴輪を編年し、その導入の背景にはヤマト政権の伸長があるととらえた（川西1981、1983、1986、1988）。ほぼ同時期に、轟俊二郎は下総地域に展開する円筒埴輪について考察し、形態・技法・刷毛目工具の異同などをもとに系統性を重視した編年を構築した（轟1973）。この２名の円筒埴輪の編年構築手順は、大きく異なる。川西が大局的に円筒埴輪の流れを追っているのに対し、轟は地域内での円筒埴輪の展開を追う。当時の資料状況をみると、轟の扱った下総地域ほどまとまって埴輪が出土している地域は少なく、あっても各地に数古墳ほどである。そのため、まずは全国的にその埴輪がどの時期に帰属するかを検討する必要があり、川西編年が重宝された。1980～1990年代までの円筒埴輪研究の主眼は、川西編年を基本に展開し、製作技法の検討が主になる。川西は、山城地域の円筒埴輪を、黒斑の有無で大きく２つに（焼成技法）、外面２次調整の有無と有るものの細分で４つに、その他、透孔の形状底部調整や断続ナデ技法、突帯の形状なども考慮に入れて、Ⅰ～Ⅴ群に分類し、副葬品の年代観との整合性からそれが時期的変遷であることを証明した。そして、その変化が山城地域のみでなく、全国でも同様の流れがあることを確認し、円筒埴輪編年を確立した（以下、川西編年と称する）。川西はこの円筒埴輪編年を基礎として、畿内政権の拡大という文脈で畿内と各地域の円筒埴輪を比較した（川西1988）。Ⅰ～Ⅲ期の畿内から地方への直接・間接的影響、Ⅲ～Ⅳ期の窖窯導入の地域差、Ⅴ期の地域色の発現という「円筒埴輪の諸現象」が、古墳の規模や副葬品の内容とも連動しており、これが畿内政権の政治変動とリンクしていることを述べる。藤沢敦が指摘するように、川西編年は円筒埴輪の製作技術上の画期を捉えたものであり（藤沢2002）、その後の資料増加などによって細分がなされたとしても大局としての変更はなく、その枠組みは基本的に有効である。

川西編年によって、古墳を発掘することなく採集された資料からある程度、古墳の築造時期を想定できるようになったため、特に地域において埴輪の資料紹介や編年作業、古墳の編年作業が進展した。そのような基礎作業の蓄積は膨大であるため、ここでは一部しか取り上げない。畿内の大型古墳の多くが

宮内庁による陵墓・陵墓参考地などの治定を受けており、特に畿内が他地域と比べて研究が遅々としている。宮内庁資料が展覧会で周知され、また、治定されていない古墳の調査が計画的になされたことによって、資料が蓄積し、畿内においても2000年代以降特に埴輪編年の再構築がなされた。

Ⅰ期の円筒埴輪は大阪府玉手山古墳群を中心とする玉手山古墳群研究会により、百舌鳥・古市古墳群や玉手山古墳群は埴輪検討会によって、精力的に川西編年の見直しと新しい編年大系の再構築が行われている。しかし、特にⅠ期の円筒埴輪についてはその系統・系列的理解が把握しづらい状況もあり、議論の余地が残る。

Ⅱ期は、高橋克壽によって明示された「斉一的な鰭付円筒埴輪」を中心とする埴輪群（高橋1994）の解釈をめぐって、論争が続いている。高橋は、Ⅰ群の古墳造営ごとの一回性の強い生産体制による円筒埴輪と、生産体制においてまとまりの増すⅡ群の円筒埴輪の隔絶性を重要視するが、廣瀬覚や鐘方正樹はⅠ群からⅢ群までの連続性を重視している（廣瀬2006、鐘方2007）。

Ⅲ・Ⅳ期の円筒埴輪についても論争が続いている。特に、古市古墳群の嚆矢となる津堂城山古墳にB種ヨコハケが出現することもってⅢ期の開始とみる埴輪検討会を中心とする研究者の解釈（埴輪検討会2003）と、同古墳の埴輪の様相がⅡ群の延長で解釈できるとしてそれを批判する廣瀬の解釈（廣瀬2010）とが対立する。このようにⅢ期の開始については議論が分かれるが、Ⅲ・Ⅳ期の埴輪の細分については、B種ヨコハケの細分とその出現率、底部高の縮小傾向から一定の変遷がつかめつつある（一瀬1988、上田1996）。しかし、古市古墳群にせよ百舌鳥古墳群にせよ、大型古墳の外堤や墳丘裾や１段目などの限定された調査資料が研究の対象となっており、実態としての埴輪の様相がつかめているとは断定できない。B種ヨコハケなどの特要素の変遷のみで新古を判断しなければならないなど、依然として資料的な制約があり研究の遅延が指摘できる。

Ⅴ期の埴輪の編年は、多くの場合が須恵器と共伴しているため、須恵器の年代を根拠に決定されている。地域を超えて広がる埴輪の規格を意識した検討や、特徴的な技法を有する埴輪の検討（畿内における尾張型埴輪など）は多く行われている一方で、埴輪そのものの検討を通じた編年は少ないといえる。また、この時期多く出土する人物･動物埴輪などは解釈をめぐる議論が多くを占めており、編年作業はほとんど行われていない。一方、石見型埴輪などの一部の埴輪は、文様や形態を詳細に検討した編年作業が行われている。

そうした編年研究の到達点と言えるのが、埴輪検討会の作成した埴輪検討会編年になる（埴輪検討会2003）。近畿地方の埴輪を重点的に検討し、円筒埴輪の諸技法の新古や消長から川西編年をより細かな小期区分へと昇華させた。対象としたのが近畿地方の主要古墳ということもあり、使い勝手もよく、頻繁に引用されている。しかし、この編年は主要古墳を対象としたため、ある時期は奈良県の古墳、ある時期は大阪の古墳が標識古墳になり、各古墳間の関係が見えないことに問題が残る。すなわち、古墳群の中での埴輪の展開が無視され、ぶつ切りで評価されているのである。おそらくこの背景には、埴輪生産が古墳築造のたびに組織され、終われば解体するという体制であったという想定があるものと推測される。この想定では轟のような系統性を重視した編年構築は不可能である。確かに、古市古墳群や百舌鳥古墳群において、墳丘、埋葬施設、副葬品、埴輪などを総合的に明らかにできている大型古墳の調査事例は希少であり、古墳群内での全体的・系統的な把握は難しい。そのため、資料の揃っている古墳を

優先的に標識とすることは、当然と言える。

他方、地方の古墳群に目を向けると、古市古墳群や百舌鳥古墳群では難しかった、古墳群の全体的な把握が可能であるような調査事例が蓄積されている。本論文において分析の対象とするのはそのような古墳群である。調査事例の蓄積された古墳群の埴輪生産を通時的に分析することで、古墳同士の関係性も明らかになり、古墳群の領域把握や、首長系譜の実態把握が可能となる。

以下では、埴輪生産体制を明らかにした成果を、その分析方法に主眼を置いて紹介し、その到達点と課題を浮き彫りにする。その上で、本論で対象とする古墳群の埴輪生産の分析にどのようにその方法論を導入させることができるか検討し、次章で本論での分析方法を提示する。

２．埴輪生産に関する研究―その方法と結論―

埴輪の研究は近世以降、長い歴史があり、特に近代以降の研究については膨大である。それらを大局的に見たときに、下記のような方向性で進められていると考える。A：埴輪の意味について（埴輪起源論、人物・動物埴輪論）、B：埴輪の新古について（編年論）、C：埴輪の作り方について（製作技法）、D：埴輪の生産体制について（生産論、工房論）、E：埴輪製作者について（工人論）である。他にも多様な方向性で研究が進められているが、基本的には上記５つのどれか、またはそれらを組み合わせたものである。それらの研究の背景には、当時の古墳時代研究の流調も深く関わっている。概略すると、明治前期の萌芽期には、お雇い外国人を中心とした埴輪の起源や機能に関する言説にはじまり、明治中頃以降の日本人学者による古墳の発掘調査に基づく埴輪の性格・機能に関する研究、戦後の重要古墳の発掘調査による埴輪の起源に関する研究、円筒埴輪については近藤義郎・春成秀爾による「埴輪の起源」（近藤・春成1967）で論争がほぼ収束し、川西宏幸による「円筒埴輪総論」（川西1978）の発表後は、その編年の細分化の方向へと進む[註2]。形象埴輪については、依然としてその性格・機能についての論争が続くが、水野正好による「埴輪芸能論」（1971）以降は、発掘調査で得られた配置に関する知見を基にした論が展開される[註3]。

Ａ、Ｂの視点からの研究は、歴史解釈と結びつきやすく、その研究史も厚い。埴輪の表面などに遺された痕跡についての研究（Ｃ）は編年研究が一定の落ち着きを見た頃に特に詳細になされるようになった。特に2003年の埋蔵文化財研究集会にともなって作成された『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会編2003）は、写真や拓本を提示しつつそれらの痕跡から復元できる埴輪の製作技術について詳述しており、到達点を示している。

その一方で埴輪の生産体制（Ｄ）や、埴輪工人について（Ｅ）は、方法論的には轟俊二郎の『埴輪研究　第１冊』の時点で一定の成果を得ていにもかかわらず、その視点や背景は引き継がれることなく途切れてしまっていた。轟は、下総地域の円筒埴輪の編年に際して、系統を重視した。この系統とは、すなわち埴輪工人集団の系統である。轟の工人集団の系統を重視する研究方法は、1990年代になってようやく発展的に引き継がれることとなる。

犬木努は、１古墳の埴輪を形態や製作技術によって分類した上で、ハケメパターンの異同を検討し、同じ工人が製作したと考えられる「同工品」を抽出し、工程ごとの分業体制の有無、ハケメ工具の共有・占有などを検討した（犬木1995）。その結果、工程ごとの分業はなく、基本的にハケメ工具は工人

が占有する状況を確認している。この１古墳での分析結果を基に、複数古墳の分析結果をつなぎあわせて総合し、工人の動向に迫った（犬木2005）。

犬木の同工品論の視点は、ほかの関東地方の埴輪研究にも引き継がれ、城倉正祥による九十九里地域（城倉2009）や埼玉古墳群を中心とした研究（城倉2011ｂ）などで成果が上げられている。

近畿地方では、同工品論を機軸とした研究の導入が遅れており、古墳時代前期の廣瀬覚による一連の検討（廣瀬2006、2007など）や、中・後期古墳の田中智子による新池埴輪窯（田中2008）と菅原東窯検討（田中2013）など、一部にとどまっている。

なお、同工品論が展開する前史として、吉田恵二による経塚古墳の分析（吉田1973）、川西宏幸による淡輪古墳群の分析（川西1977）、樫田誠による矢田野エジリ古墳の分析（樫田1992）などの、一古墳内の詳細な分析や、横山浩一（横山1978）や木立雅朗（木立2003）によるハケメ工具の分析なども存在しており、これらの検討作業があって現在の同工品論に展開していることを追記しておく。

さて、同工品論以外に系統を追究する視点は、藤井幸司による製作工程の復元による系統把握がある（藤井2005）。藤井は、窖窯焼成導入後の円筒埴輪について、粘土の積み上げから調整までの工程を分類し、各類型の消長を王都共に、その類型を系統として把握し、西日本を中心に製作技術類型ごとの系譜を追究した。近畿地方では、犬木や城倉が対象とした関東の埴輪のように完形に復元できる資料が少なく、破片から想定できる製作技法とその集合体である製作技術を体系的に把握し、その分類を系統として消長を追うことができることを示した点は、評価できる。

以上、埴輪の生産を系統的に把握し、編年を組み立てていく研究の方法について概説してきた。これらの研究によって非常に多くの成果が上がっているにもかかわらず、以下の点が課題として残っている。

まず、資料上の問題である。これは研究者がどうこうできる問題ではないが、特に近畿地方では埴輪の生産遺跡の発見例が非常に少なく、基本的に供給先である古墳での出土資料が対象になること。さらに、大型古墳の場合特にそうであるが、全面調査された事例はほとんどなく、限られたトレンチ調査で出土した資料であること。そのために破片資料が大半を占め、全形を見据えた分類が困難であること。などが挙げられる。

次に、近畿地方の埴輪研究は、そのほとんどが編年研究であり、その方法は製作技法の新古とその組合せから導き出すものである。確かに古墳時代前期の資料は少なく、系統を追うことは困難である。しかし、中期以降については資料も多く、丹念に分析すれば系統を把握した上で編年を組み立てることもできるであろう。中期以降については前述の田中智子が、数は少ないながらもその可能性を示したものとして同じく廣瀬覚の成果があるにもかかわらず、同工品論的な視点はあまり取り入れられていない。古墳内分析では、近年の宮内庁による陵墓参考地の調査で出土した資料について加藤一郎が分析を加えたものがあるものの（加藤2011a,b）、既出の資料の再検討や新出資料の詳細な分析さえあまり行われていない。

また、古墳間の分析についてもほぼ行われておらず、形態的特徴や技法的特徴から、資料の系統を押作業は行われているものの（石見型埴輪、断続ナデ技法や淡輪技法の検討）、それらを総合した藤井幸司のような視点での検討は少ない。

そして、最後に、時代を通して埴輪生産体制の変遷を追究し、時代背景と絡めて説明した論考が少な

い。野上丈助による先駆的な検討（野上1976）や高橋克壽による検討（高橋1994）はあるが、古墳内分析・古墳間分析を経て得られた生産体制や工人の実像を踏まえて、再度検証する作業はできていないと言っていい。そのため、いまだに高橋による埴輪生産体制のイメージに固執し、その枠から抜け出せていない論考も目立つ。

以上のような埴輪研究の成果と課題について、発展的に継承し克服していくのが本論の目的である。次章以降、具体的な方法論と分析に入っていきたい。

註

1　朝鮮半島南西部の全羅南道には、前方後円墳をはじめとする日本列島と関係の深いと考えられる古墳が築造されている。それらの古墳の中には埴輪を有するものもあるが、本論ではそれらについては対象としない。

なお、これらの全羅南道地域の古墳や埴輪については、その築造背景や被葬者像をめぐって論争があり、下記文献に詳しい。

韓国考古学会（庄田慎矢・山本孝文訳）2013「三国時代　栄山江流域」『概説　韓国考古学』同成社　pp.306-324

高田貫太　2012「栄山江流域における前方後円墳築造の歴史的背景」『内外の交流と時代の潮流』（一瀬和夫ほか編『古墳時代の考古学』７）　同成社　pp.85-102

崔　榮柱　2013「韓半島の栄山江流域における古墳展開と前方後円形古墳の出現課過程」『立命館文学』第 632 号　立命館大学人文学会　pp.12-23

朴　天秀　2001「栄山江流域の古墳」後藤直・茂木雅博編『東アジアと日本の考古学』Ⅰ　同成社　pp.3-31

坂　靖　2005「韓国の前方後円墳と埴輪」『古代学研究』第 170 号　古代学研究会　pp.1-20

坂　靖　2016「３～６世紀の埴輪」『韓日의古墳』韓日交渉의考古学－三國・古墳時代研究会 pp.305-314

2　2010 年頃までの埴輪研究史については、下記文献に詳しい。

城倉正祥 2012「埴輪」『古墳時代研究の現状と課題』上　古墳研究と地域史研究　同成社　pp.343-362

廣瀬 覚　2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社

3　これらの時期までの埴輪に関する研究史については、下記文献に詳しい。

橋本博文 1988「埴輪の性格と起源論」『論争・学説　日本の考古学』第５巻　古墳時代　雄山閣　pp.168-246

第１章　埴輪研究の方法

１．本論における埴輪の定義と年代観

前章では、埴輪研究史を大まかに振り返り、その到達点と課題を明示した。中でも、埴輪生産の動向を考慮に入れた埴輪編年の再構築が急務になると考える。それは、川西編年以降重視されてきた、技法の新古に基づく編年では説明しきれない現象が多々存在していることに要因がある。地域における埴輪生産の動態を、埴輪製作技術の系譜（工人の系譜）と埴輪生産体制の変化を追うことで明らかにし、それを他地域と比較することで、変化や継続の背景を探る手がかりとなると考えるからである。

よって本論では、地域の埴輪生産を分析し、さらに地域間の比較によって古墳時代における埴輪生産の実態を捉えていきたい。その際重要になるのは、「継続性」である。技法の新古によって並べられた埴輪に、技法の継続性という縦糸を通すことで、そのつながりをより明確にする。そのようにして組み上がった地域における埴輪の編年を基にして、埴輪生産体制を明らかにする。そして、埴輪の生産体制の変化と、その要因について考察していくこととする。

そこでまず、本論における埴輪の定義を確認しておきたい。

埴輪は古墳時代を通して配置された。しかし、その配置の方法は古墳時代を通して一定だったわけではなく、幾度かの画期をもって展開したことが明らかにされている（高橋1996など）。大まかには、埋葬施設直上で埴輪や土器の配列される段階、それらに家形埴輪や器財埴輪を加えて配列される段階、それらが造出・くびれ部へ配列される段階、そして、外堤へ人物・動物埴輪の配列される段階となる。埴輪配置方式に見られる画期は、前方後円墳などの古墳における葬送儀礼などの何らかの祭祀の変化を示し、それらを解釈することで古墳時代のイデオロギーの変遷過程を追うことができる。

また、埴輪は単体ではまず存在せず、円筒埴輪に至っては大量に古墳へ配置される。大量に器物を生産するには、強弱はともあれ整った体制が必要になる。その体制も古墳時代を通して、また、地域を越えて均質ではない（高橋1994）。そういった差異を通史的に捉えることで、埴輪生産から当時の社会システムを想像することができる。

埴輪の祖型は、弥生時代終末期に吉備地方（現在の岡山県南部）で墳墓での葬送祭祀に使用された、特殊器台形土器・特殊壺形土器であることがほぼ確実である（近藤・春成1967）。特殊器台形土器や特殊壺形土器は、墳丘に大量に配置されておらず、墳頂での葬送祭祀に少数のそれらのセットが使用されたと推測される。特殊器台形土器は、その最終型式とされる宮山型の段階で近畿地方にも伝播しており、宮山型の特殊器台形土器の出土する奈良県中山大塚古墳では、墳丘の数箇所に集中して置かれていたことが分かっている（豊岡ほか1996）。宮山型特殊器台形土器と、器台としての痕跡である脚部の消失した都月型の特殊器台形埴輪の両方が出土する奈良県箸墓古墳でも、どちらも宮山型特殊器台形土器と同じく墳丘の数箇所でまとまって出土する（徳田・清喜2000）。都月型特殊器台形埴輪のみが出土する京都府元稲荷古墳でも、宮山型特殊器台形土器と同様に墳丘の数箇所にまとまって出土している（近藤・都出1971）。ところが、都月型特殊器台形埴輪と普通円筒埴輪の両者が出土する奈良県西殿塚古墳では、都月型埴輪は墳頂などの特別な数箇所でのみ出土し、普通円筒埴輪は墳丘の各平坦面に立て並べていた

と考えられている（福尾1991、松本ほか2000）。西殿塚古墳の円筒埴輪は、突帯設定技法によって突帯が割り付けられ、基部に粘土帯を用いるなど、大量生産の必要性から生じた製作技法が取り入られている。

特殊器台形土器は墳丘に大量に立て並べられず、墳丘で局所的に使用されたのに対し、大量生産に対応した普通円筒埴輪は墳丘を取り囲むように立て並べていたことが、初期の埴輪配置古墳の様相から読み解ける。このことからも、円筒埴輪が大量に並べることを目的として成立したことが想定できる。よって、本論では、特に円筒埴輪の定義を、墳丘に大量に立て並べることによって外界と墳丘内とを遮蔽するために生産されたもの、とする（註１）。

次に、本論を展開するに当たっての埴輪の大まかな変遷観を確認しておきたい。

円筒埴輪は円筒状の胴部に、突帯と呼ばれる粘土紐を数条貼り付け、突帯間の数箇所に透孔を穿つ単純な形態をしている。しかし、それらは古墳時代を通じて同じ形状だったわけではなく、技法の変化とも対応して常に変化している。技法的な円筒埴輪の変遷観は川西宏幸によって呈示され（川西1978）、基本的にそれに異論はない。形態的な変遷は埴輪検討会などによって検討されているが、形態と技法の両者を分類の基準として織り込み、複雑なものとなっている（埴輪検討会2002）。そこで、本論では古墳時代を通した円筒埴輪の変化を形態的・技法的により単純に捉えたい。、

Ⅰ　群：突帯設定技法によって突帯間隔はほぼ揃うが、底部高は突帯間隔と揃うかそれを上回る。透孔は長方形・三角形・円形・半円形・鉤形など多彩で、１段中に３孔以上を原則とする。口縁部形態は、受口・外反・極狭・直立など多彩である。
奈良県西殿塚古墳、メスリ山古墳、京都府寺戸大塚古墳、平尾城山古墳を指標とする。

Ⅱ　群：突帯設定技法によって突帯間隔は揃う。底部高は突帯間隔を大きく上回り、逆に口縁部高は突帯間隔を下回る。透孔は長方形・三角形・円形・半円形で、１段中２孔で、胴部段間で縦列に配置される、最下段にも半円形・三角形などの透孔が穿孔される。
奈良県マエ塚古墳、上の山古墳、大阪府萱振１号墳、津堂城山古墳などを指標とする。

Ⅲ　群：突帯設定技法により、底部高・突帯間隔・口縁部高がほぼ均等に割り付けられる。透孔は円形が主体で、１段中に２孔、隣接する段間で縦列・直交する向きに配列される。
奈良県室宮山古墳、コナベ古墳などを指標とする。

Ⅳ　群：形態的特徴はⅢ群と変わらないが、この群より無黒斑となる。
大阪府誉田御廟山古墳、大山古墳、奈良県ウワナベ古墳などを指標とする。

Ⅴ　群：突帯設定技法を行わないため、突帯間隔が不揃いである。透孔は円形が主体で、１段中に２孔、隣接する段間で縦列・直交する向きに配列される。外面２次調整が省略され斜めハケに近い1次調整縦ハケによって調整される。突帯は断続ナデ技法や押圧技法によって成形される。
奈良県牧野古墳、大阪府南塚古墳、京都府物集女車塚古墳などを指標とする。

以上、円筒埴輪をⅠ群からⅤ群に大別した。円筒埴輪の各群は、川西編年の各期とほぼ対応しており、群をそのまま期に置き換えて、時期差として捉えることが可能である。よって、本論では以上の分類を基礎として、考察を進めていく。

副葬品をはじめとする古墳時代の諸要素については独自の変遷観を持ち合わせないため、和田晴吾による古墳時代11期区分を基本とする（和田1987）。よって古墳時代前期を和田編年の１～４期、中期を同５～８期、後期を９～11期として扱う。前期初頭は１期、前期前葉は２期、前期中葉は３期前半、前期後葉は３期後半から４期、中期初頭は５期、中期前葉は６期、中期中葉は７期、中期後葉は８期、後期前葉は９期、後期中葉は10期、後期後葉は11期にそれぞれほぼ対応している。

２．本論の分析視角と構成

以下では前章で浮き彫りにした課題を克服するために、本論でとる方法論を呈示したい。

現状の埴輪研究においてもっとも欠如している視点は、系統性の把握が甘い点である。埴輪研究のうち最も精緻な編年研究において重要視されるのは、技法の新古であった。これは、川西宏幸の『円筒埴輪総論』で呈示された視点を引き継いでいるものである。実際、技法の新古をより細かいレベルで比較できるようになったことで、埴輪自体の新古はより詳細に把握できるようになったのは事実である。しかし、１つの古墳群にある複数の古墳から出土する埴輪が技法上は新古関係にあっても、それが示すのが工人集団の連続中におこった技法上の変化なのか、それぞれの古墳の埴輪が違う集団によって生産されたものであるかについては判然としない。つまり、技法が示す新古についての説明がなされていないのである。

そこで、本論では、製作技法の総体である製作技術に視点を当て、技法の新古から導き出される埴輪と埴輪に経糸を通すことができるのかを検討する。その方法として以下の手順を踏む。

まず、一古墳における埴輪の全体像を把握し、同工品論に近い分析を行う。完全に同工品論といえないのは、以下の理由がある。

第一に、資料は基本的にトレンチ調査による出土であり、全体像をとらえているものではない、第二に、埴輪列資料や墳丘流土、葺石転落石上などの資料は破片になっており、全形を把握できないものが多いこと。そのために、製作技法の痕跡や工具痕跡が不明瞭なものが多いこと。これらの理由により、犬木や城倉による同工品論とまったく同じ視点は採用できない。

よって、同工品論的な視点での古墳内分析は不可能であり、それは同時に、古墳間分析も不可能である。その点を克服する方法として、藤井幸司による、製作技術を考慮に入れた分類が有効である。

それは、胎土、規格、内外面調整、ハケメ工具の異同を識別、分類することによって工人集団を抽出し、その集団が一古墳の埴輪生産においてどれくらいの規模や構成であるかを検討する方法である。

以上の古墳内分析を行った上で、古墳間分析を行っていく。古墳間分析に当たっては、まずは同一古墳群内など近隣の古墳、そういった古墳が少ない場合は、同様の資料が出ている古墳の資料と比較することを基本とする。

上述の作業を古墳時代の各時期の資料に対して行い、最終的に古墳時代を通して埴輪生産体制の変遷を追究していく。

第２章では、前期初頭の特殊器台形埴輪に焦点を当て、京都府元稲荷古墳の詳細な資料観察から導き出した埴輪製作技術の復元から、当該期の資料との比較を通して特殊器台形埴輪の生産体制の復元を行う。

第３章では、前期後葉から中期初頭にかけてのⅡ群円筒埴輪に焦点を当て、山城地域北部における各古墳出土資料に対して詳細な分析を行い、和泉地域や明石海峡付近の地域の同時期の資料分析の成果との比較を通して、当該期の埴輪生産体制について復元していく。

第４章では、中期を通して階層構成型の古墳群を継続させている京都府久津川古墳群の埴輪を分析する。分析の中心となるのは久津川車塚古墳の資料で、古墳内分析を丹念に行う。その上で古墳群内の資料との古墳間分析を行い、古墳時代中期の埴輪生産体制の一端を復元する。

第５章では、第４章と同様に中期古墳の資料を対象とするが、階層構成型にならない古墳群の資料を対象とする。また、ここでは兵庫県西条古墳群の人塚古墳の形象埴輪の分析を主軸に据え、円筒埴輪と総合的な古墳内分析を行う。その上で行者塚古墳や尼塚古墳、近隣の古墳との比較を通して、埴輪工人の系譜を追う。

第６章では、後期古墳の資料を対象とし、京都府物集女車塚古墳の資料の古墳内分析を基軸に、近隣の古墳との古墳間分析を行う。その上で古墳時代後期の埴輪生産体制を復元する。

第７章では、第２章から第７章までの検討結果をまとめ、古墳時代を通した埴輪生産体制の変遷を記述する。さらにこれらの作業を通して課題として浮かび上がった、首長系譜論と埴輪生産体制の問題を整理し、あらたな首長系譜論の展開について予察する。

終章では、古墳時代の王権中枢における埴輪生産体制を総合する。

註

１　一方で、特殊器台と同様に墳丘に局所的に配置されたのが形象埴輪である。円筒埴輪と同様に大量に列をなして配置されることはない。墳頂の方形埴輪列の一部、造り出しの埴輪列の一部、外堤などの一部からの出土が多い。

第２章　特殊器台形埴輪の系統と編年

はじめに

古墳時代は前方後円墳を代表とする古墳の築造が、社会や政治体制を反映した時代である。弥生時代後期後半には列島の各地で農耕・飲食儀礼を中心とした政治・宗教的なまとまりが形成され、墳墓の様式や青銅祭器などに現れている。奈良県箸墓古墳（280m）を皮切りに前方後円墳の築造が本格化すると、そのような地域的なまとまりが解体され、全国的に箸墓古墳の影響を受けた古墳が築造されるようになる。つまり、地域的なまとまりを超えた、全国的な連合が形成されるのである。

このような社会状況をより詳細に検討できる資料として、埴輪がある。埴輪は古墳時代を通して古墳に配置される。いわば、古墳を成り立たせている重要な要素なのである。その埴輪は、現在の岡山県南部にあたる吉備地域を中心に盛行した墳墓祭祀用の土器に過ぎなかった特殊器台形土器（以下、特殊器台）と特殊壺形土器（以下、特殊壺）が変遷して成立したものと考えられている（近藤・春成1967）。前方後円墳の諸要素は、特殊器台のみならず各地の墳墓に用いられた様々な要素を取り入れていると考えられている。しかし墳墓に大型の器台・壺を列べ、のちの円筒埴輪列に至るのにどのような変遷を追えるかについては、現在も結論が出ていない。

本章では、特殊器台形埴輪について検討を加え、埴輪の成立過程や、その背後にひそむ社会の状況についても考察したい。

１．特殊器台形埴輪に関する研究史

検討を加えるにあたり、現在の研究の到達点とその課題を整理する。

特殊器台形埴輪に関する研究は、埴輪の起源を探る検討作業の中から派生している。埴輪、特に円筒埴輪の起源が不明であった時期と、近藤義郎・春成秀爾による「埴輪の起源」（近藤・春成1967）以降とでは、研究そのものの前提条件がまったく異なっている。仮に、「埴輪の起源」より前の研究を萌芽期とすると、戦前と戦後とでさらに細分が可能である。萌芽期の前半は、『古事記』・『日本書紀』に記載された埴輪起源説話を前提とした解釈を基本としており、人物埴輪や動物埴輪の起源についての考察が主となる。円筒埴輪については、土留めや柴垣であるという説が出されていた[註1]。

戦後になり、皇国史観から解放されると古墳の発掘調査が各地で実施されるようになる。中でも奈良県桜井茶臼山古墳の発掘調査では壺形埴輪が後円部頂に方形に埋設された状態で発見されたことで、埴輪の起源が壺にあるのではないかという見解が提示されることとなる（上田1955）。その他にも奈良県布留遺跡の調査で出土した朝顔形埴輪から埴輪の起源について論じたものなどがある（置田1977）。また、九州の福井式甕棺と近畿の有孔器台が複合して円筒埴輪となるとする見解（原田大1954）など、その他にも多くの円筒埴輪起源説が呈示されるが、結局その解決には至らなかった。

各地で発掘調査や表面採集を含む分布調査が進む中で、主に岡山県で胴部に文様を施す器台資料蓄積されつつあった。これらを型式学的に列べ、円筒埴輪への変遷の道筋を示したのが「埴輪の起源」である（近藤・春成1967）。立坂型、向木見型、宮山型までが特殊器台形土器、脚部が喪失して墳丘に埋め

られることを前提として製作される都月型を特殊器台形埴輪とし、主に文様の精緻さを基準に型式学的に配列した。この論文の発表ののち、箸墓古墳などの大和の大型古墳や京都府元稲荷古墳などにおいても特殊器台形埴輪があることが報告され、大和と吉備の資料を中心に編年研究が進んだ（狐塚1976など）。都出比呂志は京都府元稲荷古墳の特殊器台形埴輪が、文様は都月坂１号墳のものより退化しているものの前方部頂の一画にのみ配置されていることから、埴輪としての画期は都月型ではなく、その後の多量配列に求められるとした（都出1971）。発掘調査によって、配置方法まで判明している資料は、現在でも元稲荷古墳以外にはない。

1980年代以降1990年代までは、表採や発掘調査により資料が増加し、「埴輪の起源」を基調とした詳細な検討が進む。宇垣匡雅は、特殊器台・特殊器台形埴輪の胎土の違いに着目し、足守川、旭川、吉井川の各流域からなる３群をみいだし、ある特定の製作集団による製作と配布を想定した（宇垣1984）。また、特殊壺、特殊壺形埴輪の底部穿孔法の差異を時期差ととらえ、各資料と対応する器台の文様による変遷観の裏付けをとった。なお、普通円筒埴輪の成立と多量配列は必ずしも吉備である必然はないとしている。

その後、兵庫県権現山51号墳や岡山県七つ坑１号墳などが調査され、特殊器台形埴輪が出土し、検討が行われる。そこでの中心は、文様論を基調としてものであった（高井1987など）が、安川満は、内外面調整や基底部外面調整など製作技術の差に着目した（安川1991）。安川は、特殊器台形埴輪の製作に吉備の製作集団の関与を確信しつつも、より複雑な様相を予想している。

安川の論が嚆矢となり、その後は製作技術論を中心とした論調が展開する。古市秀治は、基底部内面のヘラケズリに注目し、特殊器台と特殊器台形埴輪の技法的連続を指摘した（古市1996）。有馬伸も製作技術論に着目し、そこに形態的要素と共伴関係を組合せ、都月形器台、円筒埴輪ともに奈良盆地内で創出され、吉備に逆輸入された可能性を想定した（有馬1998）。北井利幸は受け部・脚部に着目して、特殊器台の使用方法を検討し、系統的な把握を試みた（北井2009・2010）。

近年では、西殿塚古墳の資料を検討した宇垣匡雅（宇垣2013）や、箸墓古墳の資料の再検討を行った加藤一郎（加藤2014ａ・ｂ）、元稲荷古墳の資料の再検討を行った筆者ら（原田2014）など、既出資料の再整理・再検討が進められている。

上述のように、特殊器台形埴輪の研究は、「埴輪の起源」以降、文様を中心とした議論がメインストリームである。文様の変遷や系統の検証作業が不足しており、基本的には共伴する壺、特殊壺の編年を基にした並べ替えと、後付けの説明に過ぎない。1990年代からは製作技術にも目が向くものの、製作集団を見据えた系統的把握はできていない。

そこで本章では、ます少ないながらも全形を見据えた形態的分類を試みる。そして、特殊器台形埴輪の製作技術、特に粘土積み上げ技法と底部内面調整技法の検討に重点を置いて分類し、それらの対応関係をチェックしていくこととする。分析対象は、特殊器台形埴輪の形態的特徴と文様を有する資料（図１、表１）である。文様・形態と製作技術が工人集団で共有されていると仮定すると、上述の分析視角をもとに類型化が可能で、吉備と大和の地域間交流が読み解けるようになるものと考える。

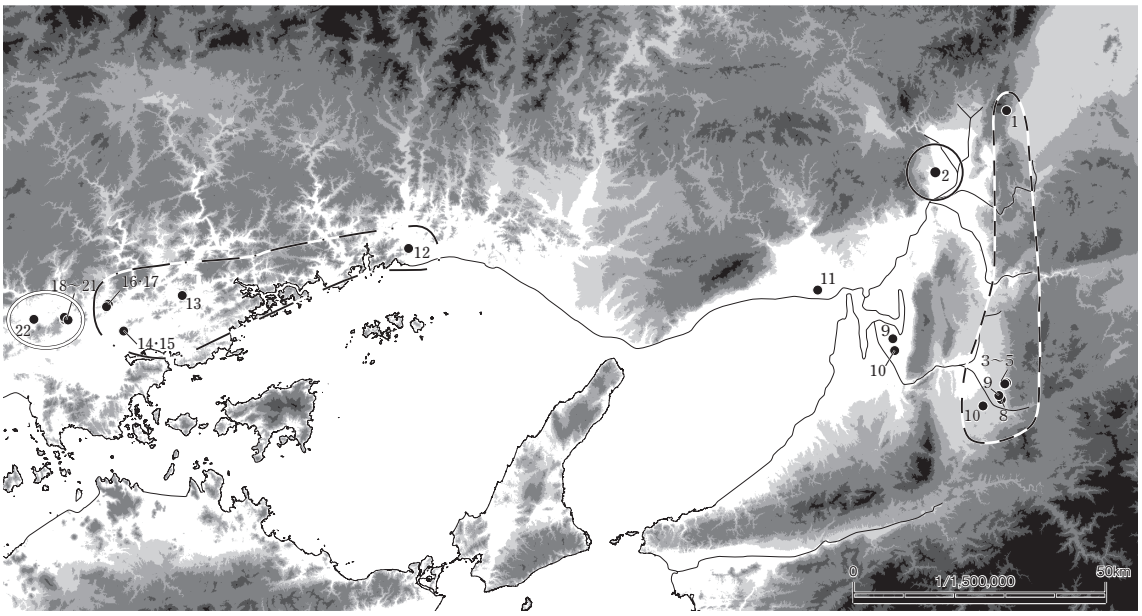


図１　特殊器台形埴輪出土遺跡分布図（番号は下表と対応）

表１　特殊器台形埴輪出土遺跡一覧表

No.	古墳名	所在地	墳　形（遺跡種類）	墳丘規模（m）	器　台			普通円筒	壺		朝顔	配置箇所
					宮山	都月	円筒		特殊壺	壺形		
1	壺笠山古墳	滋賀県大津市	円	50	○	○			○			墳頂
2	元稲荷古墳	京都府向日市	前方後方	94		○	○			○		墳頂
3	中山大塚古墳	奈良県天理市	前方後円	130	○	△	○		○	○		墳頂
4	西殿塚古墳	奈良県天理市	前方後円	234	○	○		○	○	○		器台は墳頂、円筒は墳丘囲繞
5	東殿塚古墳	奈良県天理市	前方後円	144	△	○	○	○	○		○	埴輪区画
6	箸墓古墳	奈良県桜井市	前方後円	280	○	○			○	○		墳頂
7	纒向遺跡	奈良県桜井市	集落	-		○						
8	葛本弁天塚古墳	奈良県橿原市	前方後円	70	○	○			○	○		墳頂
9	萱振遺跡	大阪府八尾市	集落	-		○						
10	小阪合遺跡	大阪府八尾市	集落	-		○						
11	西川遺跡	兵庫県尼崎市	集落	-		○						
12	権現山 51 号墳	兵庫県たつの市	前方後方	43		○			○			墳頂
13	浦間茶臼山古墳	岡山県岡山市	前方後円	140		○						墳頂
14	操山 109 号墳	岡山県岡山市	前方後円	70		○						墳頂
15	網浜茶臼山古墳	岡山県岡山市	前方後円	83		○						墳頂
16	都月坂１号墳	岡山県岡山市	前方後方	33		○	○			○		墳頂、多量配列？
17	七つ坑１号墳	岡山県岡山市	前方後方	47		○			○	○		墳頂
18	矢部大坑古墳	岡山県倉敷市	前方後円	47		○			○			墳頂
19	矢部 B42 号墳	岡山県倉敷市	円	5 ～ 6.5		○						
20	矢部堀越遺跡	岡山県倉敷市	転用棺	-		○			○			
21	矢部伊能軒遺跡	岡山県倉敷市	散布地	-		○						
22	宮山墳丘墓	岡山県総社市	前方後円	38	○							

凡例：各遺跡文献は、本文の末尾に伏した遺跡文献を参照。器台の分類については、宮山型文様をもつものを「宮山」、都月型文様をもつものを「都月」、文様をもたないが透孔配置が都月型と共通するものを「円筒」とした。普通円筒とは、都月系とは区別される、Ⅰ群円筒埴輪の製作技術によるものを指す。

２．特殊器台形埴輪の型式学的検討

詳細な検討に入る前に、筆者が詳細に観察し、報告した元稲荷古墳の特殊器台形埴輪についてその所見を述べたい。

図３－１

形態　円筒形の胴部に６条の突帯がめぐり７段に分割する。その上に３cm 程直立したのちに外反する頸部をもつ。その上に約４cm のほぼ直立する口縁部をもち、いわゆる受け口状の口縁部形を呈する。２・４・６段目には逆三角形・巴形・三角形を１単位とする透孔が、１段中に４単位穿孔される。

文様　３・４・６段目には、ヘラ描き沈線によって文様が施される。４・６段目は、三角形透孔と巴形透孔の周囲に直線と弧線が描かれており、都月型といわれる文様である。巴形透孔の周囲を４条１単位の沈線で蕨手文がめぐり、その上下に同じく４条１単位の斜線文が配される。蕨手文の左右には、２条１単位の右上がり斜線文を基本として、その間に右下がり斜線文が配される。３段目は４条１単位の縦方向の直線の間に４条１単位の右上がりの斜線を２組配した文様が施される。比較的残存度の高い６段目の文様は、途中で施されなくなり、段間を１周しない（図４－３・４）。その他の段では文様が段間を完周するか判断できない。

法量　復原高は約 76cm である。各段の高さは、最下段が 15.3cm、第２段目が 10.2cm、第３段目が 10.4cm、第４段目が 10.2cm、第５段目が 10.2cm、第６段目が 10.4cm である。底部径は約 31.5cm、口縁部径は約 33.5cm である。

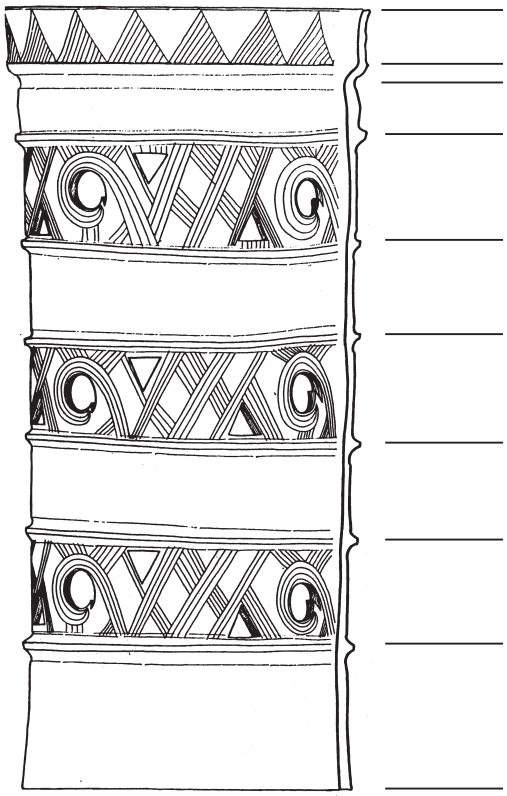


図２　特殊器台形埴輪の各部名称

製作技術　欠損部分は石膏で補填して完形に復原されており、断面観察によって粘土接合痕跡を確認することはできない。胴部外面はタテハケを基調とし、２段目より上段はタテハケの上からヨコナデを施して表面を平滑化する。胴部内面は、３条目突帯付近まではヘラケズリが施される。ケズリの方向は、２段目内面では上から下方向、１条目突帯付近では左上から右下方向、底部付近では左から右方向である（図４－６）。底部付近のケズリが、それより上部のケズリを切っている。このことから、倒立して内面をヘラケズリしたものと想定できる。３～６段目内面はタテハケののち丁寧になでられている。頸部は、屈曲のはじまる高さまでヘラケズリが施される（図４－５）。ケズリの方向は右から左横方向である。頸部外面はヨコナデが施され口縁

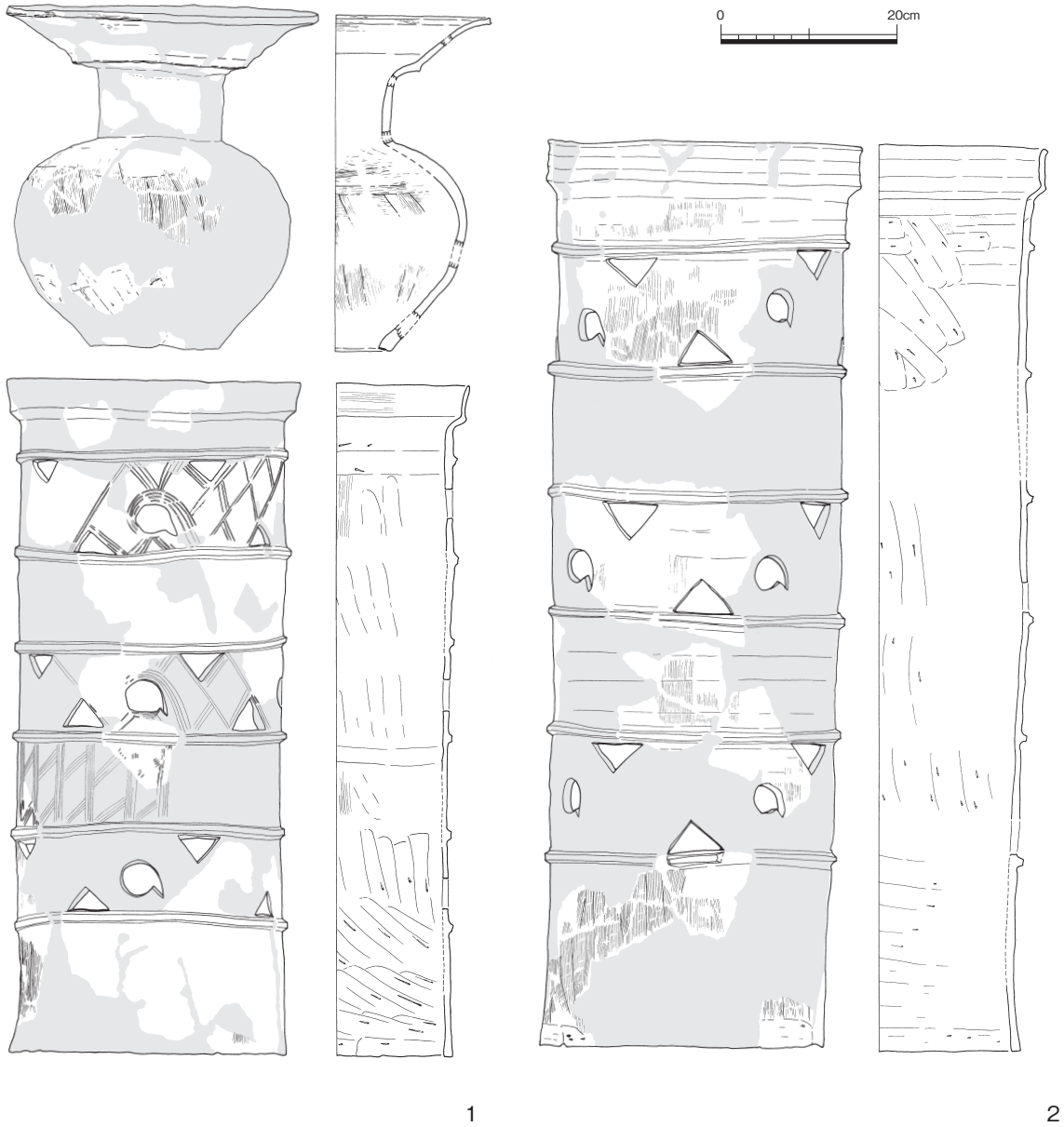
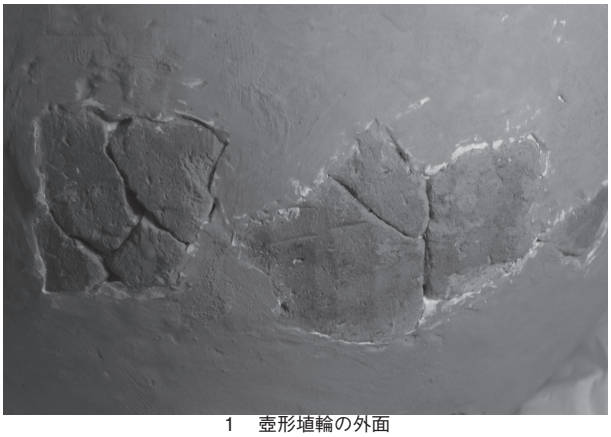


図３　元稲荷古墳出土の特殊器台形埴輪実測図

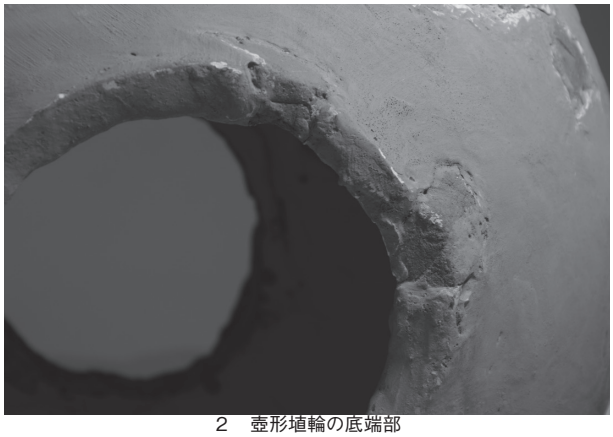
部に近い部分は外反させる。頸部の上にほぼ直立する口縁部を載せ、外面はヨコハケののち丁寧にヨコナデを施し、内面はヨコナデで丁寧に仕上げる。口縁端部は内外両面からのナデでやや尖り気味になる。すべての調整ののち、赤色顔料が塗布される。赤彩されたのち透孔が穿たれる。それは、透孔の切除面に赤色顔料が及ばないことから推測可能である。文様は透孔穿孔後に施されるものと考える。黒斑は明瞭でなく、焼成は良好である。

図３－２

形態　円筒形の胴部に６条の突帯がめぐり７段に分割する。その上に３cm 程直立したのちに外反する



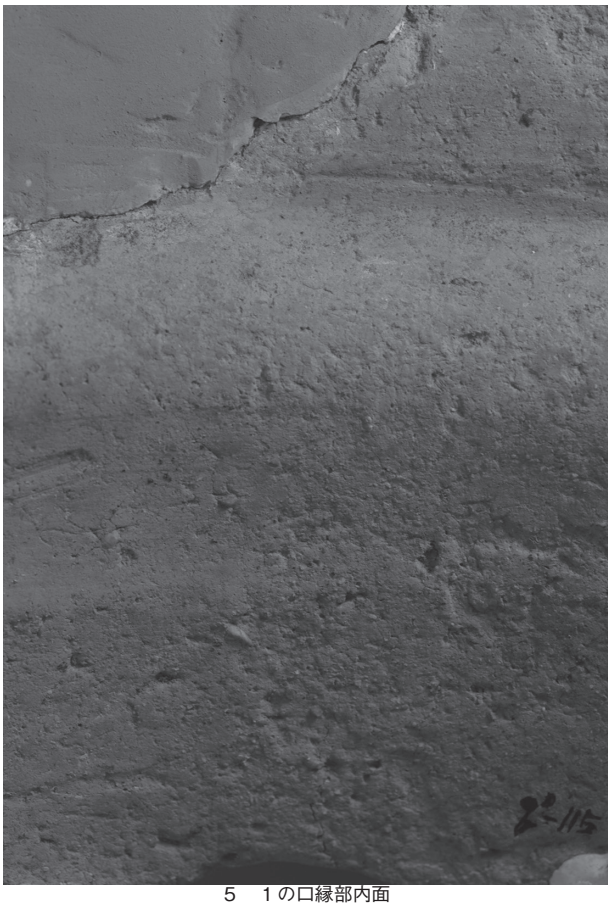
１　壺形埴輪の外面



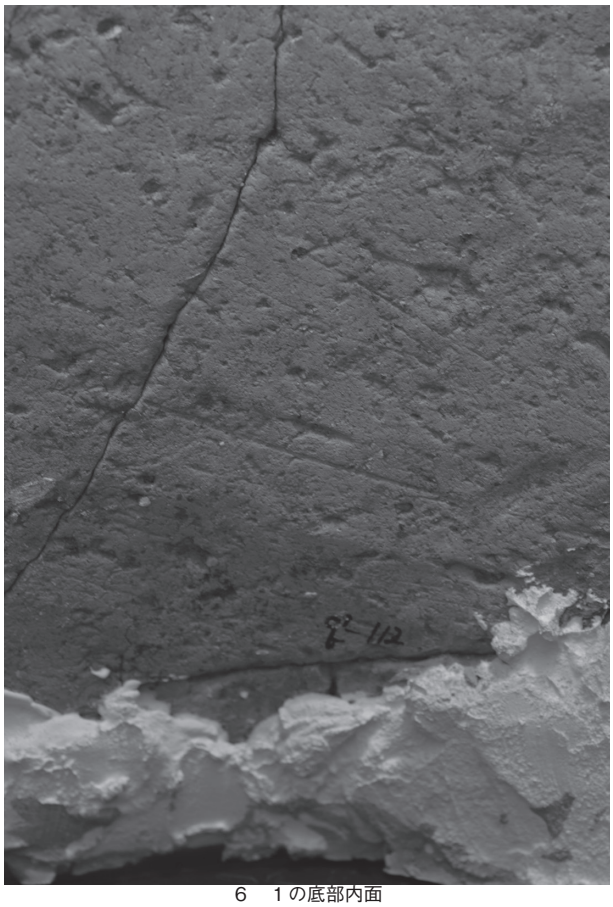
２　壺形埴輪の底端部

３　１の６段目外面　線刻の左端

４　１の６段目外面　線刻の右端

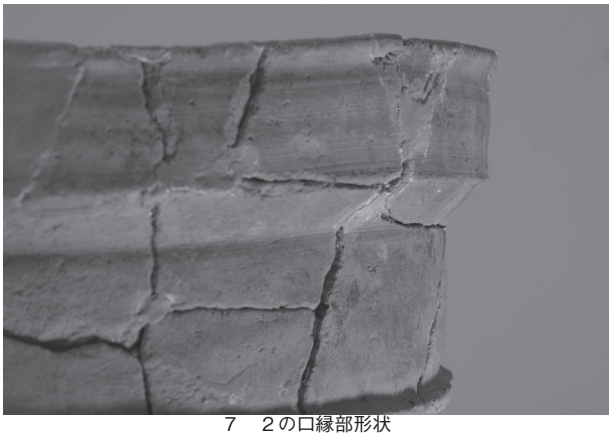


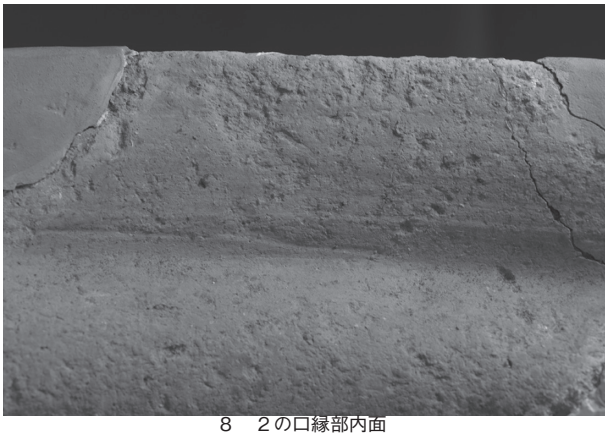
５　１の口縁部内面

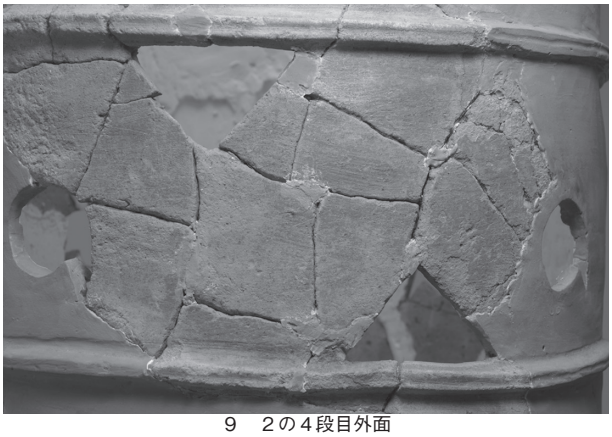


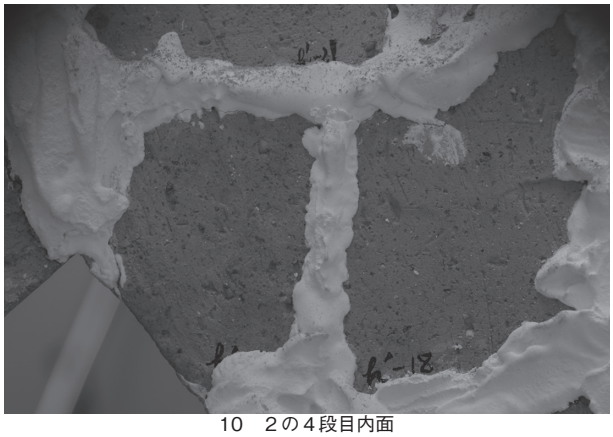
６　１の底部内面

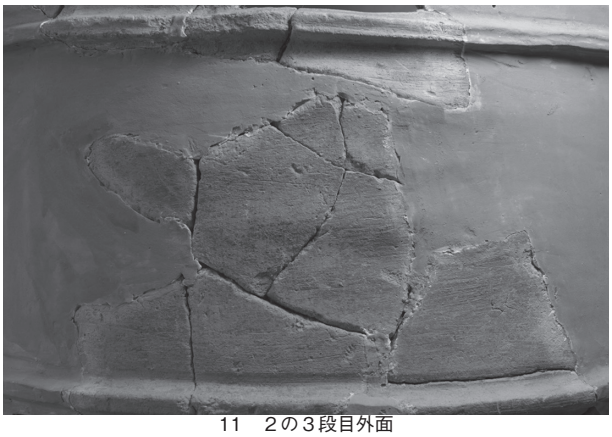
図４　元稲荷古墳出土特殊器台形埴輪詳細写真－１

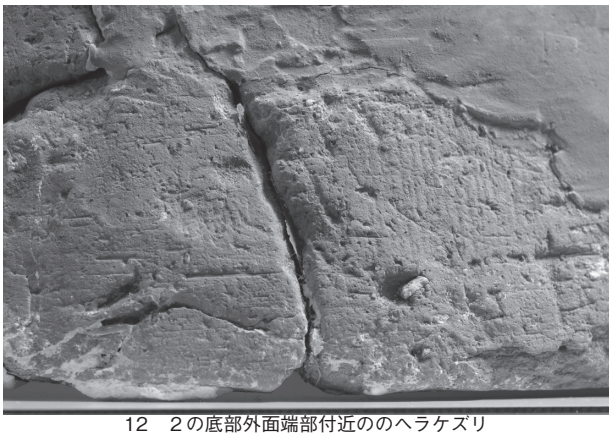

７　２の口縁部形状


８　２の口縁部内面


９　２の４段目外面


10　２の４段目内面


11　２の３段目外面


12　２の底部外面端部付近ののヘラケズリ

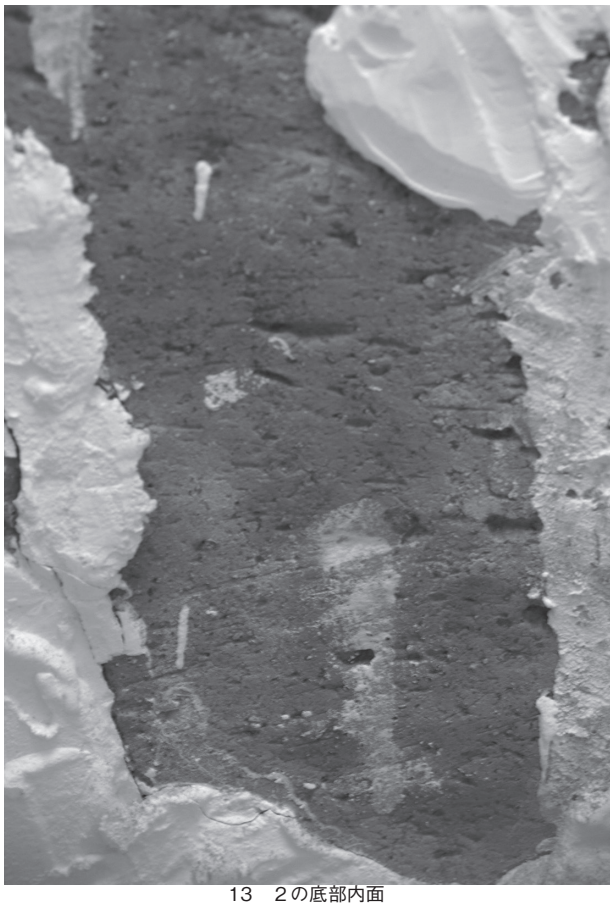

13　２の底部内面

図５　元稲荷古墳出土特殊器台形埴輪詳細写真－２

頸部をもつ。その上に約４cm のほぼ直立する口縁部をもち、いわゆる受け口状の口縁部形を呈する（図５－７）。２・４・６段目には逆三角形・巴形・三角形を１単位とする透孔が、１段中に４単位穿孔される。透孔の周囲に線刻は施されない（図５－９）。

法量　復原高は約 103cm である。各段の高さは、最下段が 21.6cm、第２段目が 13.6cm、第３段目が 13.6cm、第４段目が 13.6cm、第５段目が 14.6cm、第６段目が 13.6cm である。底部径は約 32.5cm、口縁部径は約 35.6cm である。

製作技術　欠損部を石膏で補填して完形に復原されており、断面観察によって粘土接合痕跡を確認することはできない。胴部外面はタテハケを基調とし、２段目以上ではタテハケの上をナデて表面を平滑化する（図５－９・11）。底部外面の接地面付近に、左から右方向へのヘラケズリが認められる（図５－12）。胴部内面はヘラケズリを基調とする。ケズリの方向は、１・２段目では水平に近い左上から右下方向の斜め方向（図５－13）、３段目では上から下方向、４段目以上では下から上方向へ向かう（図５－10）。頸部付近にヘラケズリに切られるタテハケが見られることから、ヘラケズリに先行してタテハケ調整が行われたものと推測できる。頸部外面はヨコナデが施され口縁部に近い部分は外反させる。内面は、胴部から連続するヘラケズリが見られる。頸部の上にほぼ直立する口縁部を載せ、外面はヨコハケののち丁寧にヨコナデを施し、内面はヨコナデで丁寧に仕上げる（図５－８）。口縁端部はナデによって面を形成する。黒斑は不明瞭で、焼成は良好である。

以下は、図化に至っていないが、写真の公表されている資料[註2]について言及する（図６）。

１は突帯と透孔の部分で、透孔の周囲にヘラ描き沈線がめぐる。すでに拓本が公開され、元稲荷古墳の特殊器台形埴輪の基本文様とされている[註3]。突帯間隔は、透孔の形状と文様の構成から、11.5cm 前後と想定できる。成形は、太さ３cm 程度の粘土紐を内傾接合で積み上げる。外面はタテハケののちナデるが、ハケメは完全には消し切れていない。内面はヨコハケ・ナナメハケののち突帯の貼付に際して一部をナデる。文様は、巴形透孔の周囲に３条１単位の蕨手文を配し、正逆三角形透孔の１辺に平行する４条１単位の右下がり斜線と、その間に配される右上がり斜線文で構成される。透孔が段の途中で途切れるかは不明である。製作技法からは４段目に相当する部分と想定できる。

２は巴形透孔とその周囲の蕨手文、さらに蕨手文の上に配される斜線文が残存する。外面はナデられたのち施文される。内面は上へ向かうヘラケズリが施される。文様は、２条１単位の蕨手文と３条以上１単位の斜線文で構成される。製作技法からは６段目に相当する部分と想定できる。

３は正逆の三角形透孔の各１辺と、その間の斜線が残存する。上下の突帯は残存していないため判然としないが、突帯間隔は 13cm 程度である。外面はタテハケののちナデられるが、ハケを完全に消しけらない。内面は風化が著しく判然としない。文様は、三角形透孔の１辺に平行する４条１単位の斜線文が交差する。さらに交差点の右には「＞」字形で４条１単位の文様が施される。この文様は元稲荷古墳の他の文様を有する個体には見られないパターンであり、「元稲荷 C」となる可能性もあるが、接合する破片がないためにここではその可能性のみを指摘しておく。

４は６段目から口縁部が残存する。口縁部径は 36.0cm に復原できる。６段目の突帯間隔は、14.6cm である。成形は、太さ２～３cm の粘土紐を内傾接合で積み上げる。外面はタテハケののちナデるが、ハケを消し切れていない。頸部から口縁部まではヨコナデで調整する。特に頸部と口縁部は強くナデつ

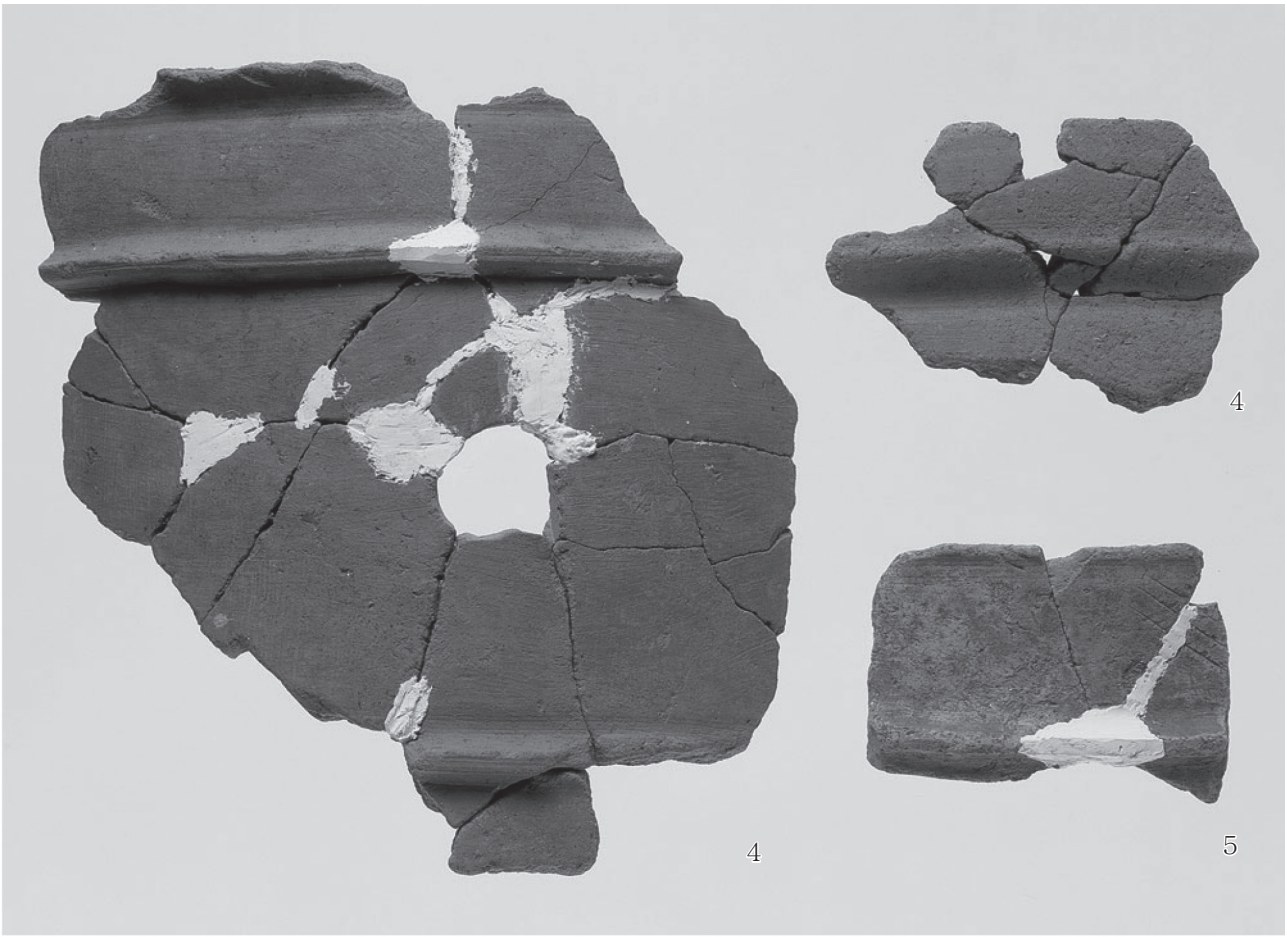


図６　元稲荷古墳出土特殊器台形埴輪（未実測資料）

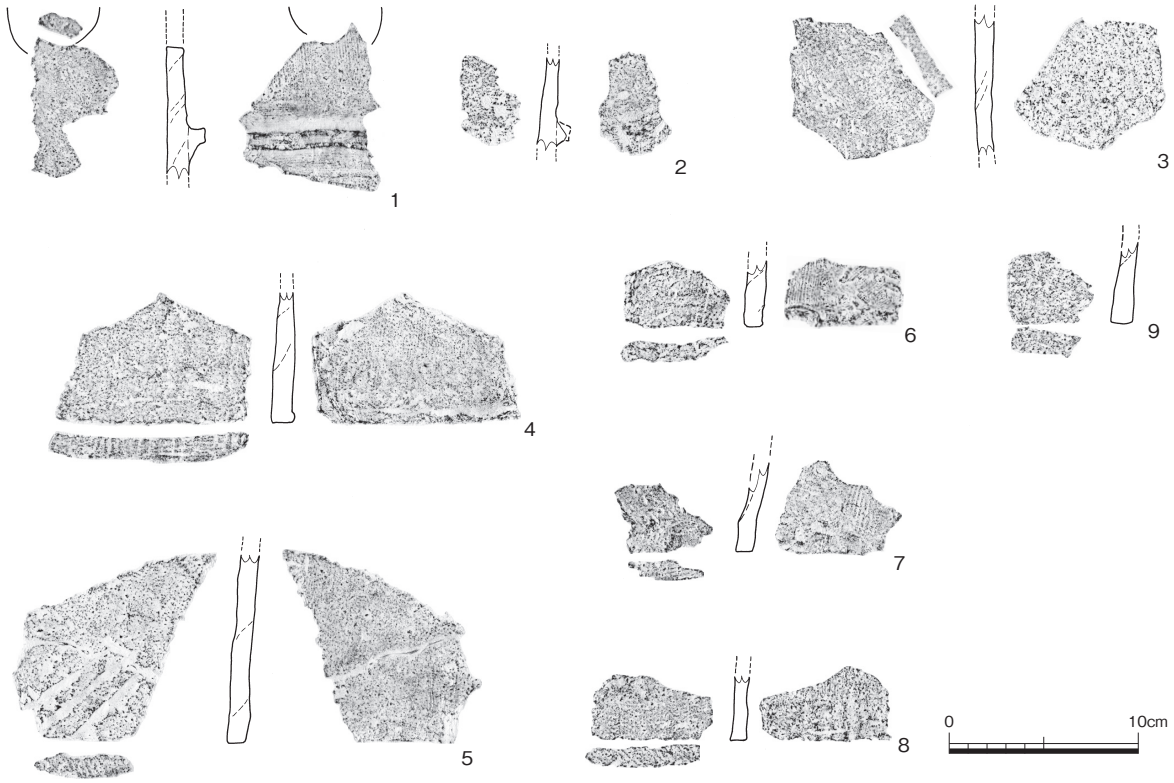


図７　竪穴式石槨盗掘坑埋土出土埴輪実測図

けられて凹線状になる。内面は５段目から６段目の巴形透孔の高さ付近までは上方向へのヘラケズリが見られ、その上の６段目はタテハケである。頸部から口縁部はナデによって整形される。

５は直立する口縁部と考えられる。内外面とも風化しており調整は判然としない。突帯のすぐ下に逆三角形透孔の上辺が残存している。口縁部は端部付近をナデてやや外反させ、端部は丸くおさめる。外面には一部、赤彩が残存する。

後方部竪穴式石槨盗掘坑埋土内出土資料（図７）

１は突帯および巴形透孔の部分である。透孔の周囲にヘラ描き沈線はめぐらない。成形は、太さ２cm 程度の粘土紐を内傾接合によって積み上げ、外面をタテハケ、内面を丁寧なナデによって仕上げる。突帯は丁寧なナデによって貼り付け、整形される。外面には赤色顔料が付着している。

２は突帯の部分である。全体的に風化しており、原形をとどめておらず調整も判然としない。成形は、太さ２cm 程度の粘土紐を内傾接合によって積み上げる。突帯整形時のナデが見られる。

３は逆三角形透孔の一辺が残存する。透孔の周囲にヘラ描き沈線はめぐらない。整形は、太さ２cm 程度の粘土紐を内傾接合によって積み上げる。外面は風化のため判然としないが、内面は下から上方向へのヘラケズリが見られる。透孔の穿孔面には赤色顔料が残る。

４は底部である。成形は、太さ３cm 程度の粘土紐を基部としてその上に太さ２～３cm の粘土紐を

内傾接合によって積み上げる。外面はタテハケ、内面は左から右方向へのヘラケズリが見られる。底端部には、作業台と考えられる木目圧痕が残る。

５は底部である。成形は、太さ２cm 程度の粘土紐を基部とし、その上に３～４cm の粘土紐を内傾接合で積み上げる。外面はタテハケ、内面は右から左方向へのヘラケズリが見られる。底端部には、作業台と考えられる木目圧痕が残る。

６は底部である。成形は、太さ２～３cm 程度の粘土紐を基部とし、その上に粘土紐を内傾接合で積み上げる。基部の部分のみが残存するが、内傾接合の粘土接合形態を残して剝離しており、以上のように判断できる。外面はタテハケ、内面は上から下方向へのヘラケズリが見られる。

７は底部である。成形は太さ２cm 以上の粘土紐を基部とし、その上に粘土紐を内傾接合で積み上げる。埴輪６と同様に基部の部分のみが残存するが、内傾接合の形態を残して粘土が剝離していることから、判断できる。外面はタテハケ、内面は下から上方向へのヘラケズリが見られる。底端部には、作業台と考えられる木目圧痕が残る。

８は底部である。粘土接合痕等は確認できない。外面はタテハケののち、底端部付近を左から右方向へのヘラケズリが見られる。内面は左から右方向へのヘラケズリが見られる。底端部には、作業台と考えられる木目圧痕が残る。

９は底部である。成形は、太さ３cm 程度の粘土紐を基部とし、その上に粘土紐を内傾接合で積み上げる。外面は風化のため調整が判然とせず、内面は左から右方向へのヘラケズリが見られる。

小　結　上述の観察結果をもとに、当古墳出土の特殊器台形埴輪の特徴を以下に述べる。なお、後方部と前方部の埴輪で胎土・焼成・製作技術に大差はなく、同時に製作・樹立されたものとして以下の記述を行う。

形態・法量　６条突帯７段構成の胴部に受け口状の口縁部をもつ。胴部２・４・６段目に正逆三角形・巴形の透孔を配す。透孔の周囲に直線と弧線で線刻を行う個体（図３－１）も存在する。以上の特徴から、都月坂１号墳出土例を標識とする特殊器台形埴輪の範疇で捉えられる。復原された個体からは、大小２つの規格が存在したものと考えられる。出土状況から、小型品には壺形埴輪を載せていたと想定され、小型品に壺を載せた高さと大型品の高さが約 103cm と近似値となる。底部高・突帯間隔も大小で異なっており、両者が最初から別の規格で製作することを意図していたものといえる。

文様　文様は、小型品にのみ施される。巴形透孔の周囲に蕨手文が、正逆の三角形透孔の斜辺と平行して斜線文が配される。文様は、図３－１に施される構成と、拓本が公開されている破片の構成の最低２種類がある。公開された写真には、この二者に該当しない破片もあるが、復原に至っていない。以下、復原可能な２構成について詳述する。

元稲荷文様Ａは、図３－１の６段目に施される文様から復原した。巴形透孔の周囲にヘラ描き沈線４条を１単位とする蕨手文を配し、その周囲に２条を１単位として正逆三角形の二辺に平行する斜線文が配される。斜線は右上がりの線が優勢で、左上がりの線は右上がり斜線間に描かれる。三角形透孔の左辺と平行する右上がり斜線を文様の両端としており、文様は段間を一周しない。

元稲荷文様Ｂは、すでに拓本が公表されているが、公開された写真も考慮に入れて復原した。内面調整の特徴から４段目に相当する部位と推測する。巴形透孔の周囲に３条１単位の蕨手文を配し、その

周囲に４条１単位の斜線文を配す。元稲荷文様Ａと異なり左上がりの斜線が優勢である。巴形透孔の左上、三角形透孔の上には、２条１単位のＶ字形の文様がある。なお、段の途中で途切れるかについては情報が少なく判然としない。

Ａ、Ｂで文様構成が異なる理由として、文様Ａの透孔が文様Ｂの透孔よりやや小さいという点が挙げられる。文様Ａは、透孔が小さく文様を施すことができるスペースがより広いため、右上がり斜線が２単位施される。一方文様Ｂは、透孔が大きく文様を施すスペースが狭いために、左上がり斜線が１単位しか施されない。両者とも突帯間隔はほぼ同じであることから、透孔の大きさの違いが文様構成の違いにも影響を与えているものと推測できる。

なお元稲荷古墳出土例では、特殊器台形埴輪の口縁部に一般的にみられる鋸歯文の線刻が見られない。

製作技術　底部は破片の断面観察から内傾接合を確認でき、正立状態で粘土紐を積み上げている。このことから、特殊器台形土器に多く見られる反転製作は行わないものと推断される。底部内面は上から下、または左から右方向へのヘラケズリが確認できる。この調整は上下を反転して行った調整である。復原個体からどの高さまで積み上げた段階で反転するかを考えると、小型品では下から２段目、大型品では下から３段目でケズリの方向が反転することから、上述の高さ付近と考えられる。これより上については、いずれも内傾接合によって粘土紐を積み上げるものと推測される。大型・小型品とも外面はタテハケののちナデで丁寧に調整され、内面もタテハケののちナデを行い、口縁部に近い部分ではヘラケズリによって薄く仕上げる。口縁部は器壁に凹線状の凹みができるほどの強いヨコナデによって整えられる。口縁端部のおさめ方は大小で異なっており、端部に面を持たせるものと、面を持たず尖らせるものとがある。口縁部まで仕上げたのち、透孔の穿孔、施文、赤彩が行われる。透孔の穿孔面に赤彩がおよばないことから、赤彩→穿孔・施文の順で行われたと考える。

以上の所見を総合すると、形態は、６条突帯７段構成の胴部に受け口状の口縁部をもつ。胴部２・４・６段目に正逆三角形・巴形の透孔を配し、透孔の周囲に直線と弧線で線刻を行う個体も存在する。復原された個体には２つの規格が存在し、小型品には壺形埴輪を載せていたと推定され、小型品に壺を載せた高さと大型品の高さが近似値（約103cm）となる。両者が最初から別の規格で樹立することを意図して製作されたものである。

文様は、小型品にのみ施され、元稲荷Ａ、元稲荷Ｂの２種以上を復原した。なお元稲荷古墳出土例では、特殊器台形埴輪の口縁部に一般的にみられる鋸歯文の線刻が見られない。

製作技術で特記すべき点は、特殊器台に多くみられる反転製作技法を行わないことである。それは底部から内傾接合で粘土紐が積み上げられていることから判断できる。古市秀治は元稲荷古墳出土の埴輪に底部反転製作技法が存在するとしているが（古市1996）、今回確認できた資料からは反転製作技法を示す外傾接合のみられるものはなかった。しかし反転製作技法の名残ともいえる、底部内面の反転ヘラケズリがみられる。この点は後述するが、製作技術の系譜から元稲荷古墳の埴輪について考える際の鍵となる。

①形態の検討

特殊器台形埴輪は、近畿地方と岡山県を中心に21遺跡・古墳からの出土が知られている（図１、表

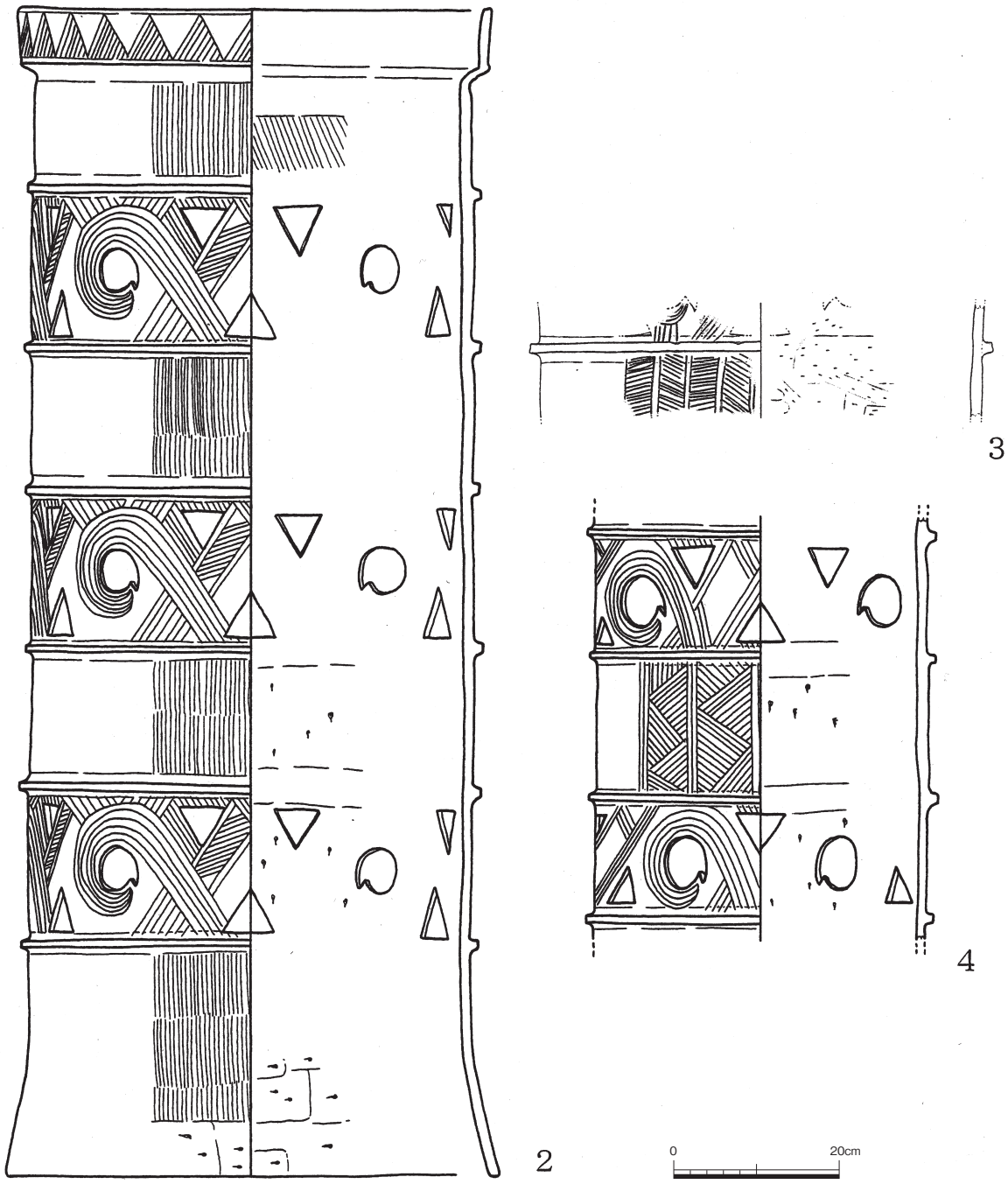


図８　再検討された箸墓古墳出土資料（加藤 2014 a より）

１）。それらのうち、全体の形状が判明する資料は、京都府元稲荷古墳、岡山県都月坂１号墳、矢部堀越遺跡出土資料のみである（図９）。それらの資料から分かる全体の形態は、ほぼ垂直に立ち上がる円筒形の胴部に６条の突帯をめぐらせ７段に分割し、下から２・４・６段目に正逆三角形、巴形を１単位とする透孔とその周囲の線刻があり、口縁部は受け口状になるというものである。

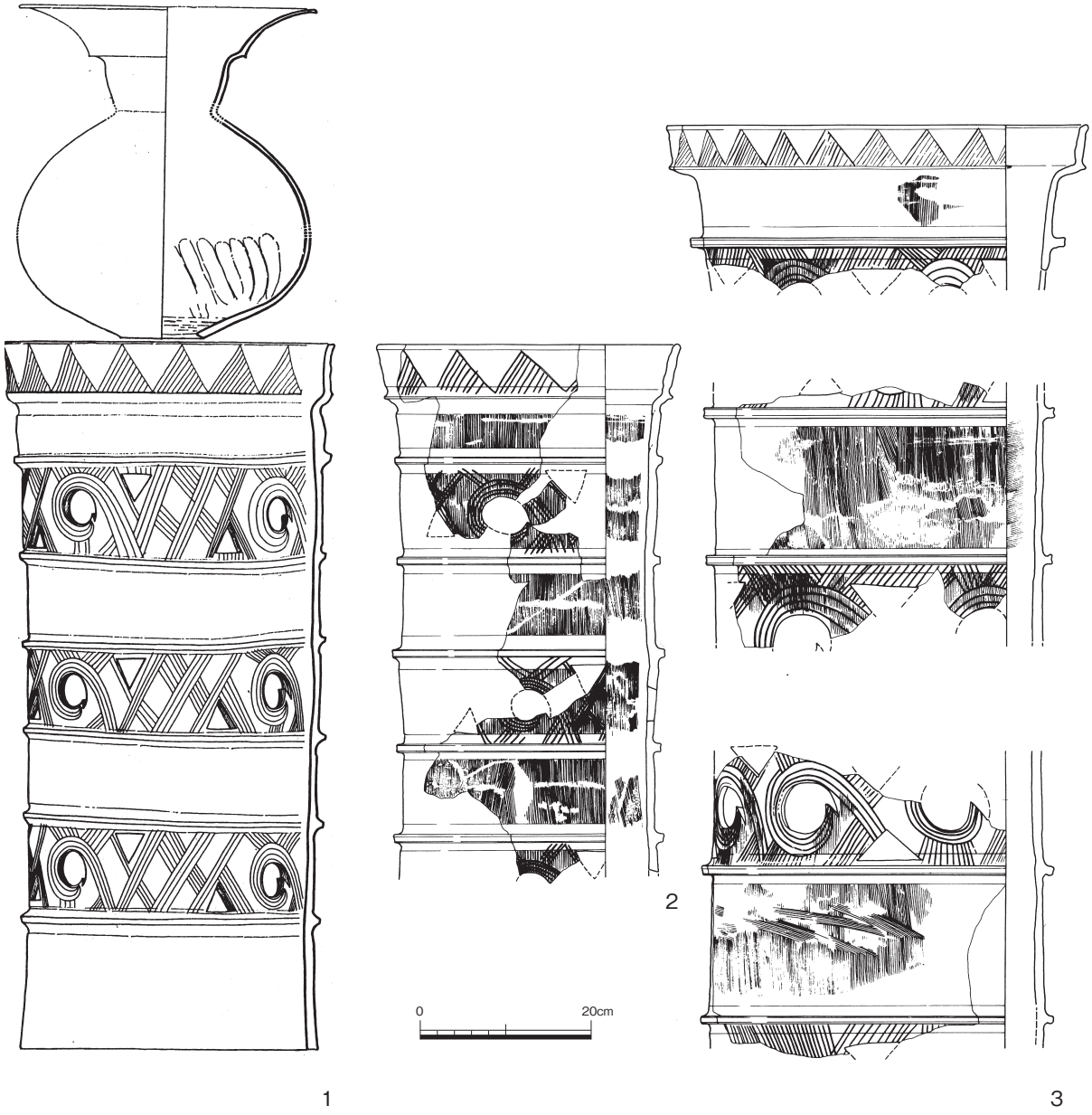


図９　全形の復元できる特殊器台形埴輪
１：都月坂１号墳、２：矢部 B42 号墳、３：矢部堀越遺跡

ではまず、各部位の形態的特徴から分類を試みる。

【頸部～口縁部】（図10）

特殊器台形埴輪の頸部から後円部の形態は、頸部上半を屈曲させ外反口縁状にし、その上に口縁部をつけるという点で共通するが、その断面形態は以下の通り分類できる。

Ａ類：頸部と口縁部の接着面が広い。葛本弁天塚古墳、宮山遺跡群、中山大塚古墳から出土した宮山型特殊器台が該当する。口縁部も直立かやや内傾する。

Ｂ類：頸部と口縁部の接着面が、口縁部の幅とほぼ同じかやや狭い。岡山県矢部堀越遺跡、箸墓古墳の特殊器台形埴輪が該当する。

Ｃ類：接着面はＢ類とかわらないが、頸部の屈曲させる高さが小さくなり受け部が小さくなる。兵庫

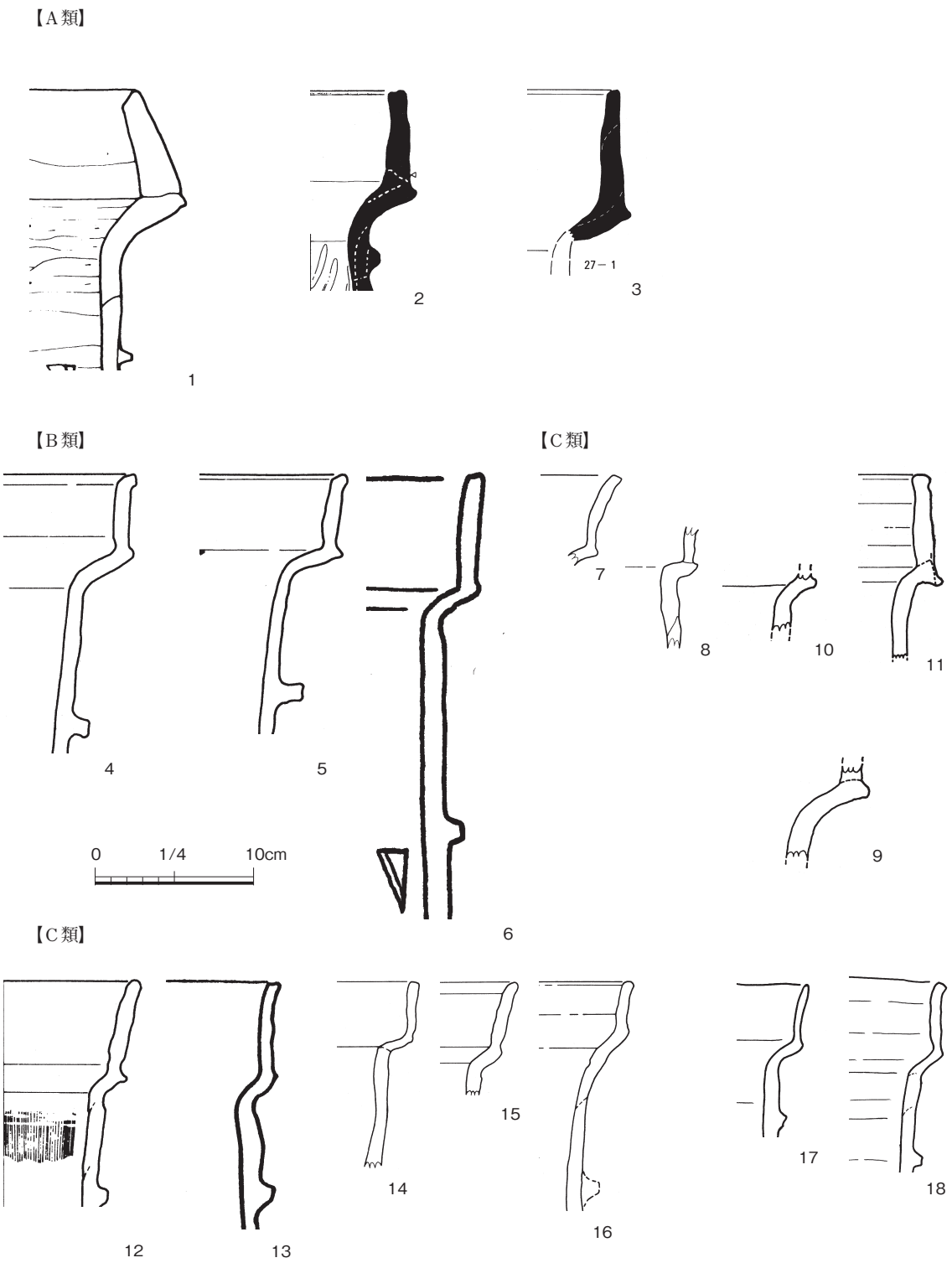


図 10　口縁部～頸部の諸形態

1：宮山遺跡、２：葛本弁天塚古墳、３：中山大塚古墳、４・５：矢部堀越遺跡、６：箸墓古墳、７・８：権現山 51 号墳、９～ 11：西殿塚古墳、12：矢部Ｂ 42 号墳、13：都月坂１号墳、14 ～ 16：七つ坑１号墳、17・18：元稲荷古墳
（各報告書より）

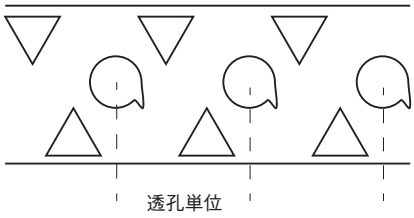


図 11　透孔単位の基準

県権現山51号墳や、岡山県都月坂１号墳、京都府元稲荷古墳などが該当する。頸部の屈曲度合いもＢ類よりやや小さくなる。

口縁部から頸部にかけては、本来、壺を載せるために丈夫に製作されていたと考えることができる。よって、その機能が失われていく方向に形態が変化すると考えることができる。よって、Ａ類からＣ類への変化を想定できる。

【１段中の透孔単位数】（図11）

特殊器台形埴輪の透孔は、正逆の三角形各１つずつと巴形１つを１単位としている。この透孔単位が１段中にいくつ存在するかをみていく。

１段中の透孔単位が５単位以上になるのは、権現山51号墳、矢部堀越遺跡、箸墓古墳の資料である。矢部堀越遺跡の透孔は、正逆の三角形がほぼ上下に配置されており文様も巴形透孔の上部を中心に展開している。

１段中の透孔単位が４単位になるのは、都月坂１号墳、元稲荷古墳、矢部Ｂ42号墳、七つ坑１号墳である。矢部堀越遺跡のものとことなり、正逆の三角形が離れて配置される。

ここで、特殊器台の１段中の透孔単位をみてみると、宮山遺跡群のものは６単位、向木見型の矢谷墳丘墓は６単位、西山遺跡、柳壺遺跡などは８単位、向木見遺跡のもので10単位となる。つまり、特殊器台の１段中の透孔単位は６単位以上であり、多いものほど古い傾向を示している可能性が高い。よって、特殊器台形埴輪になったとき、５単位以上のものはより古い傾向を示している可能性を考えたい。

②製作技術の検討（図12）

次に、製作技術の検討を行う。具体的には、基部の成形技法、基部内面の調整技法、反転製作技法の有無をみていくこととする。

Ⅰ類は反転製作技法である。円筒状に粘土を内傾接合で積み上げ、完成時の脚部を疑似口縁部として製作する。内面は製作時に下から上方向へのヘラケズリをする。その後、反転させ、先ほどの工程で底部であった部分を上にし、その上に粘土を内傾接合で積み上げる。そのため、完成時には上から下方向へのヘラケズリを確認できる。古市秀治は特殊器台形埴輪もすべてこの技法により製作されているとした（1996）が、筆者の観察では、そうでない技法を確認できたため、以下それらについて記述する。

Ⅱ類は、基部から内傾接合で粘土を積み上げ、ある段階でヘラケズリを行い、その上へ内傾接合で粘土積み上げるものである。底部から口縁部まですべてが内傾接合によって積み上げられている。元稲荷古墳、箸墓古墳、権現山51号墳などの埴輪が該当する。

Ⅱ類のうち、ヘラケズリを特殊器台のⅠ類と同様に胴部を反転させて行うものをａ類とする。反転調整技法としておく。

また、Ⅱ類のうちヘラケズリを反転させずにおこなうものをｂ類とし、正立調整技法とする。

さらに、基部から内傾接合で粘土を積み上げ、内面にヘラケズリを施さないⅢ類も存在する。

さて、ここで特殊器台に後出するⅠ群円筒埴輪の底部製作技法をみてみると、高い粘土板を基部として用い、その上に粘土紐を内傾接合で積み上げている（廣瀬2013）。つまり、Ⅲ類に近い製作技術とい

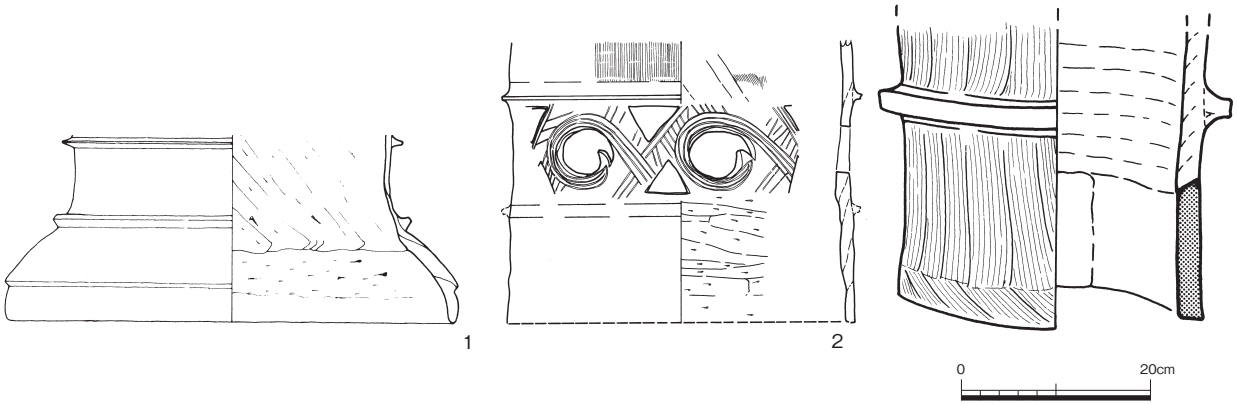


図 12　特殊器台・特殊器台形埴輪・円筒埴輪の最下段の製作技術
（１：宮山遺跡、２：権現山 51 号墳、３：Ⅰ群円筒埴輪の基部成形技法）
（１・２：報告書より、３：廣瀬 2013 より）

える。Ⅰ群円筒埴輪は古墳に大量に配置するために生み出されたものであり、底部の製作技法にも効率化が図られており、Ⅲ類からの変化と捉えることができる。製作工程の手間を考えると、Ⅲ類に次いでⅡｂ類が効率的である。Ⅰ類やⅡａ類は、途中で反転させる工程を挟むため、作業効率的には低いといえよう。よって、底部の製作技法ももⅠ類からⅢ類を経て、Ⅰ群円筒埴輪のものに変化すると考えることができる。

③文様の検討（図13）

次に文様の検討をおこなう。

宮山型特殊器台は、S字形の連続文様が特徴である。

これが都月型の特殊器台形埴輪になると、ワラビ手単位と上下三角形透孔の辺に沿った斜めの右上がり単位と左上がり単位によって構成される。宮山型のような連続文様ではなくなる。都月型の文様についても分類が可能である。

箸墓類は、ワラビ手単位と右上がり単位を基本に構成され、その間を右下がり線などで埋める。透孔単位数は５以上である。

権現山類は、箸墓類と基本は同じだが、充填文様が少なくなる。また、右上がり単位が２以上のものが出現する。透孔単位数は５以上である。

矢部堀越類。ワラビ手単位のみで構成され、右上がり単位はない。ワラビ手単位の間隔が狭く、透孔単位数も５以上である。

七つ坑類（都月ｂ類）は、ワラビ手単位間に「ｒ」と呼ばれる文様帯をもつものである。七つ坑古墳、都月坂１号墳、矢部堀越遺跡で確認できる。

都月類は、ワラビ手単位間の右上がり単位数が２以上であり、充填文様は少ない。透孔単位は４が基本となる。

元稲荷類は、ワラビ手単位は存在するが、右上がり単位は形骸化し、「左上がり単位」が優勢となるものである。

基本的には、透孔のない部分を線刻で充填する意識の強いものほど先行している可能性が高い。元稲

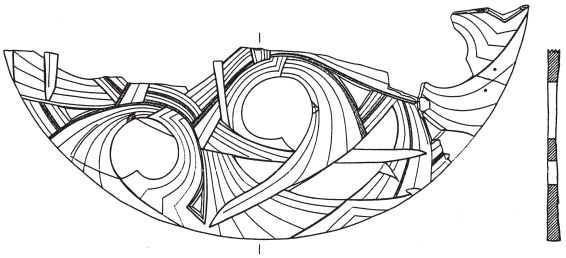


図９　纒向石塚古墳出土弧文円板

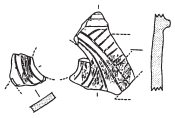
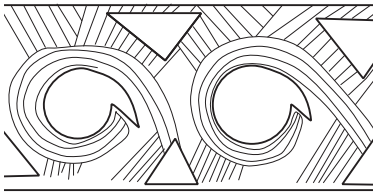
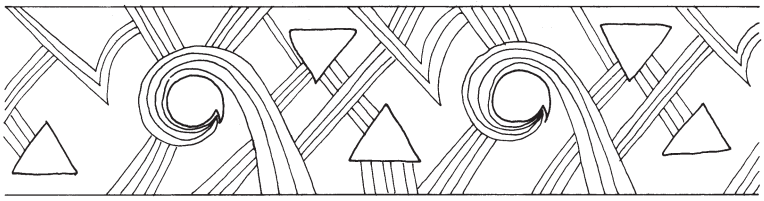


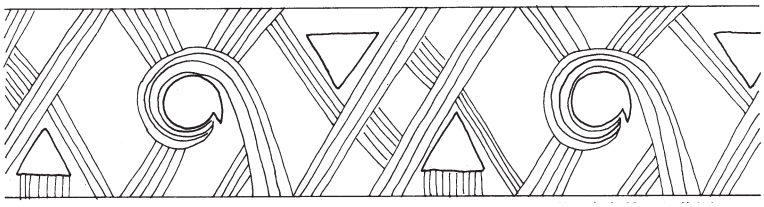
図 10　纒向遺跡出土特殊器台形埴輪



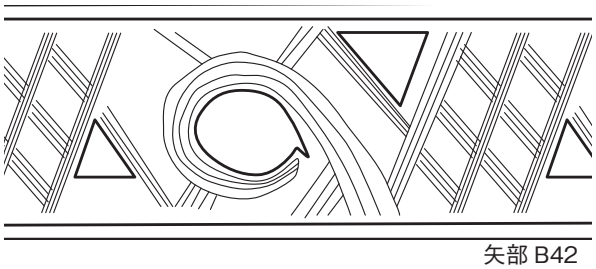
矢部堀越



七つ坑１号

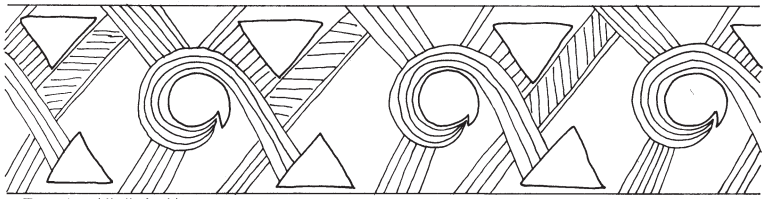


都月坂１号

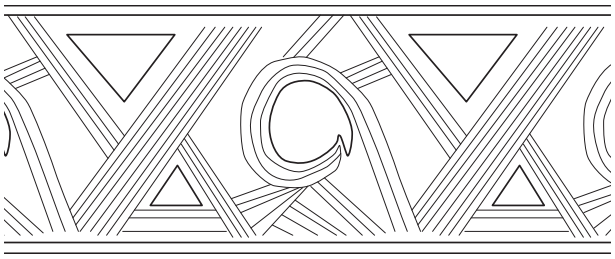


矢部 B42

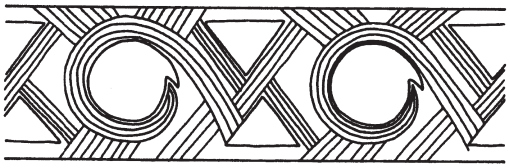
図 13　特殊器台形埴輪の文様構成模式図（縮尺は任意、各報告書より）

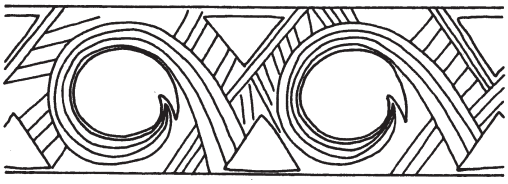


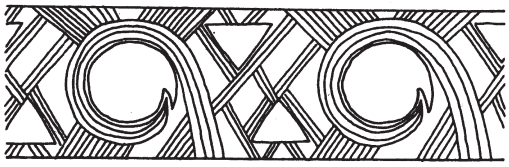
箸墓



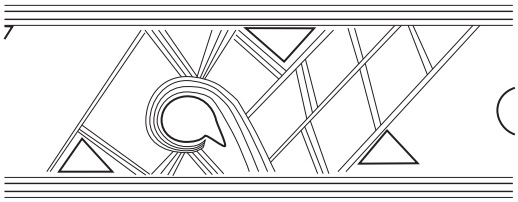
西殿塚







権現山 51



元稲荷 A

元稲荷 B

荷古墳の特殊器台形埴輪の文様は、一周せず、透孔単位１つ分より少し広い範囲に施文されており、文様の退化具合とも対応して、より新しい傾向を示しているものと考えられる。

④胎土の検討

胎土についても、資料によって含まれる混和剤の種類が異なっており、分類することができる。

大和系は、胎土中に角閃石を多く含む。奈良県出土のものはこの大和系の胎土になる。

都月系は、胎土中に角閃石と、シャモットと呼ばれる赤色の砂粒が特徴的に混入する。七つ坑１号墳、都月坂１号墳、矢部伊能軒遺跡出土資料などが該当する。

足守川系は、粘土素地は都月系と似るが、シャモットをあまり含まない。矢部伊能軒遺跡の一部と、矢部堀越遺跡、矢部Ｂ42号墳の資料に特徴的である。

乙訓系は、元稲荷古墳出土資料のみが該当し、チャートを多く含み、地元の胎土を用いていると考えられる。

これらの粘土素地の違いは、生産地が異なることを示しており、これらの資料が併存する場合は、工人集団の差と捉えることができ、逆に、時期差と考えられる場合は、生産地の移動、すなわち工人の移動を想定することができる。

⑤出土位置の検討

最後に、これらの特殊器台形埴輪の配置の方法から検討する。

発掘調査によって出土位置が確実で配置方法まで分かる資料は、元稲荷古墳の１例のみである。元稲荷古墳では、後方部墳頂の埋葬施設上と、前方部墳頂埴輪区画に６～７個体が配置されていたことが判明している。配置状況までは分からないが、検出状況から配置箇所を特定できるものとして、権現山51号墳が挙げられる。ここでも後方部墳頂などの限られた箇所に配置されていたようである。

表採資料ではあるが、位置がある程度正確に分かる資料として箸墓古墳と西殿塚古墳が挙げられる。箸墓古墳では、後円部墳頂には特殊器台、特殊器台形埴輪、特殊壺形埴輪が配置され、前方部墳頂には大型二重口縁壺が配置されていた可能性が高い。西殿塚古墳でも後円部墳頂にのみ特殊器台形埴輪が配置され、墳丘平坦面と墳丘裾には普通円筒埴輪が配置されていた。

以上のように、特殊器台形埴輪は、墳墓から出土する特殊器台形と同じく、墳頂のある限られた箇所に数個体配置されている状況を想定できる。しかし、春成秀爾は都月坂1号墳において100個体以上が墳丘各段と墳頂にあったと想定する。近藤義郎などは墳頂平坦面にのみ、より少数の配置を想定しており、見解が分かれている。筆者も実資料を見学したが、100個体以上になるような出土量ではなく、むしろ10数個体であり、多量配列はなかったものと考えている。

３．系統と編年

以上の分類を踏まえて、各資料の属性対応表を作成した（表２）。文様、胎土、底部成形技法に同じ属性をもつまとまりを見出すことができる。このまとまりを、地域または流域の名前から、大和系特殊器台形埴輪、旭川系特殊器台形埴輪、足守川系特殊器台形埴輪とそれぞれ名付ける。大和系特殊器台形埴輪は、角閃石を多く含む胎土で、底部成形技法Ⅱａ類（反転調整技法）を用い、文様は箸墓類を基本とする。

表２　各属性の出現

古墳名	頸部～口縁部形態			底部成形技法				透孔単位		文様	胎土
	A	B	C	Ⅰ類	Ⅱａ類	Ⅱｂ類	Ⅲ類	５以上	4		
葛本弁天塚古墳	○			○				○		宮山	大和
箸墓古墳		○			○			○		箸墓	大和
浦間茶臼山古墳				○							
中山大塚古墳	○				○					宮山	大和
権現山 51 号墳			○		○			○		権現山	
西殿塚古墳			○		○	○	○	○		西殿塚	大和
矢部 B42 号墳			○		○			○		堀越	足守川
矢部堀越遺跡		○						○		堀越	足守川
		○								都月	足守川
矢部伊能軒遺跡			○		○					都月	吉井川
		○								堀越	足守川
七つ坑１号墳			○		○		○		○	七つ坑	都月
矢部 B42 号墳			○				○		○	都月	都月
都月坂１号墳			○	○	○				○	都月	都月
元稲荷古墳			○		○				○	元稲荷	乙訓

旭川系特殊器台形埴輪は、シャモットを特徴的に含む胎土で、底部成形技法Ⅰｂ類（反転製作技法）を用い、文様は都月類を基本とする。

足守川系特殊器台形埴輪は、足守川系の胎土で、底部成形技法Ⅱａ類（反転調整技法）を用い、文様は堀越類を基本とする。筆者は、これらの３つは工人系統差とみている。この見解は、宇垣匡雅の見解（宇垣1984、1997）とも合致し、それぞれの地域で別の工人集団によって生産、配布された可能性が高い。ただし、これらの系統から漏れる資料も存在している。それらの資料の底部成形技法をみると、反転調整技法（Ⅱａ類）が採用されていることが観察から判明した。つまり、製作技法は大和系特殊器台形埴輪の影響を受けており、これらの資料の生産にあたっては大和系特殊器台形埴輪の工人が関与した可能性が考えられる。

以上を踏まえて、編年を組み立てていく。まず、宮山型（系）特殊器台は、現状では葛本弁天塚古墳と箸墓古墳などの大和、および岡山県宮山墳墓群の２箇所で生み出される。製作技法的にも文様的にも両者は共通しており、同一の工人集団が生産に携わった可能性はある。ただし、どちらが先行するかについては判然としない。

次に、特殊器台形埴輪が生み出されるが、これについても、大和と吉備の双方で生み出された可能性が高い。ただし、吉備では宮山型と同様の製作技術（Ⅰ類）を引き継いでいる（浦間茶臼山古墳）のに対し、大和では新たに反転調整技法（Ⅱa類）が生み出されて、ほとんどの古墳に採用される。特殊器台形埴輪が生み出された初期の段階は、文様も精緻で透孔単位も５つ以上である。

そして、透孔単位が４つになる最後の段階に突入する。この段階になると、吉備の特殊器台形埴輪の文様も簡略化が進んでおり、配置する古墳も旭川流域に限られるようになる。

以上をまとめると、特殊器台形埴輪は、大和と吉備の双方で生み出された可能性が高いが、次第に吉備の特殊器台形埴輪生産は衰退し、大和で生み出された技法を導入して存続させたという図式が成立し得る（図14）。

古墳時代前期初頭の古墳は、諸地域の様々な要素を取り込んで、新たなものとして各地に広めている可能性が考えられているが、特殊器台形埴輪についても、吉備のものを取り込んで大和化した上で吉備

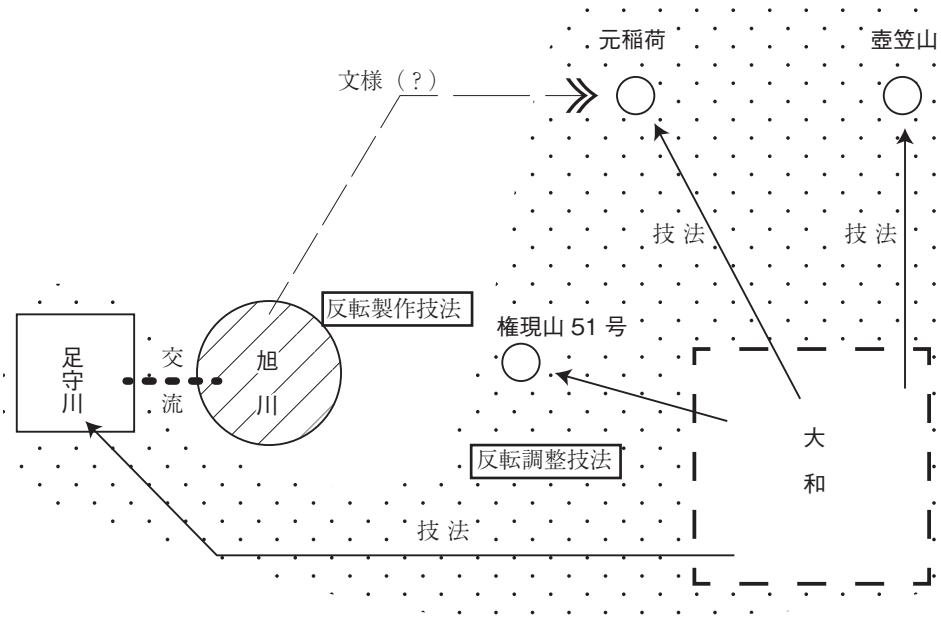


図 14　特殊器台形埴輪の工人集団の系統

に逆輸入されている様子を捉えることができた。生産体制についても、王権中枢勢力が次第に統制するようになり、大和の影響を受け入れた工人集団のみが存続し、埴輪生産を担った可能性が高い。

おわりに

ここまで、数は少なくまた破片資料が多いながらも、再検討が進みつつある特殊器台形埴輪について、製作技術と胎土から系統把握を試み、編年を組み立ててきた。その結果、製作技術と胎土には系統差、工人集団差と捉えても差し支えないことが判明し、各系統内で変遷を追うことができた。

そして、その変遷を追うことで、大和と吉備の特殊器台形埴輪生産の体制についても若干踏み込むことができた。前期初頭の古墳が各地の墳墓様式を取り入れ、それらを発展させ、やがてそれを各地の古墳に導入させていくという流れの中で、特殊器台形埴輪についてもその流れに則って生産されていたことが判明した。

つまり、有力首長が個別に埴輪工人を組織するのではなく、王権中枢との関係の中で、工人集団が組織された可能性が高いのである。こういった埴輪生産体制は古墳時代前期、Ⅰ期と呼ばれる時期の埴輪生産にも引き継がれている。王権中枢の埴輪生産と地域の埴輪生産がダイレクトにつながり、たとえ地域で古墳が継続して築造されても埴輪生産が継続しないような体制は、前期初頭にさかのぼる可能性が高いことを示すことができた。

註

１　埴輪の起源・性格に関する論争の経過は、（橋本1988）に詳しい。

２　近藤喬一・都出比呂志監修2004『向日丘陵の前期古墳』向日市文化資料館

３　近藤・都出1971

第３章　巨椋池を介したⅡ群円筒埴輪の流通

はじめに

古墳は一定の地域に複数基が連続性をもって築造されることが多い。こういった古墳の集合体を、古墳群と呼び、古墳群における古墳同士の関係性から当時の社会を復元することが可能である。例えば、大型前方後円墳とその古墳に隣接して築造される小型の方墳や円墳などの関係を、主墳と陪冢という関係と捉え、階層化社会の一端を解明することができる。また、大型前方後円墳が連続して立地する現象を、被葬者である首長の系譜が連続するととらえることができる。さらにオオヤマト古墳群や古市古墳群といった大王陵の墓域移動と結びつけて、それが全国的な現象であるとした「首長系譜論」などは、古墳群を政治史的に捉えるための重要な研究成果である（都出1988など）。

これらの議論では、水系や古代寺院の建立されるまとまり（これは古代の「郡」に相当するとされる）が、一定の意味のあるまとまりとして考えている。ところがこのまとまりが、古墳時代を通して同じ範囲、領域であったのかについての議論はほとんどされていない。また、古墳群で連続する古墳を首長系譜の継続と捉えているが、立地状況などからの状況証拠に過ぎず、遺物・遺構などの考古資料からの立証はほぼできていない。本論で分析するように、実はこの小地域を超えた広域のまとまりが古墳時代前期後葉から中期初頭にかけて存在した可能性が高い。本章では、共通する埴輪の様相を介して、当該時期の埴輪生産と古墳群・地域について考察する。

１．山城地域におけるⅡ期の埴輪

検討の対象は、山城地域北部の、桂川右岸の乙訓古墳群と、宇治川北岸の黄金塚２号墳、桂川・宇治川・木津川の３河川が合流し淀川となる地域のすぐ南に位置する八幡丘陵の古墳群である。これらの地域の古墳は、埋葬施設まで調査されているものも多く、編年を組む際の検証が可能であり、また、階層差を考える指標ともなり、検討するに十分の条件をそなえている。よってまずは、対象とする古墳の概要とともに、埴輪の観察結果を記す。

Ⅱ期の円筒埴輪は廣瀬覚により編年が組まれており（廣瀬2006）、筆者もその編年に特に異論を認めない。ただし、一部に筆者と異なる見解があり、その点は明記しつつ各資料の時期を与えていきたい。

大山崎町境野１号墳　全長57.5m、３段築成の前方後円墳である。墳丘は竹林になっているために大規模な削平を受けており、調査の時点では粘土槨と考えられる粘土層が露出していた。攪乱土中から、緑色凝灰岩製の管玉、車輪石、石釧の破片、鉄刀がみつかっている。辛うじて残存していた墳丘平坦面には、埴輪列がめぐり、墳丘斜面には葺石が施工されていた。埴輪列の埴輪は、芯芯間で55～75cm間隔で配置されていた。墳頂部からの転落と想定される家形埴輪も見つかっている。前方部東側の墳裾付近から、食物形土製模造品と、笊形土器の破片が見つかっている。

円筒埴輪は、４条５段構成または５条６段構成に復元できる。底部が高く、突帯間隔の約２倍になる。口縁部高は突帯間隔の約半分か、突帯間隔よりやや狭くなる。底部の第１条突帯寄りに半円形、円形、方形の透孔を穿ち、胴部の何段目に透孔を穿つかは不明であるが、口縁部の真下の段に半円形の透孔を

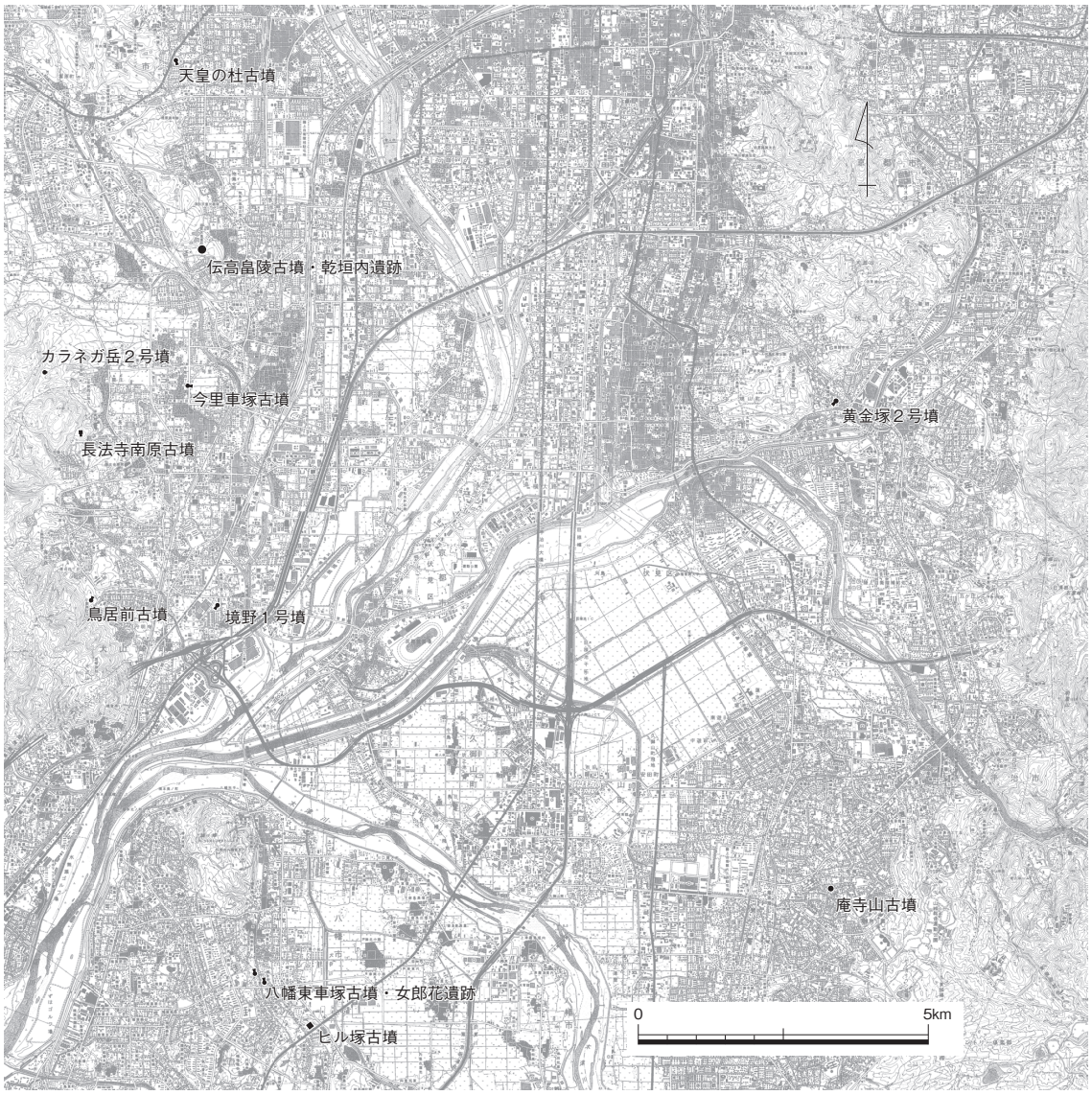


図 15　対象遺跡分布図

穿つ。外面１次調整はタテハケで、２次調整ヨコハケである。ただし、２次調整ヨコハケは、小工程や突帯の成形に際して施されたものであり、Ⅲ期以降の埴輪にみられるB種ヨコハケのようなものではない（古閑2007）。突帯の貼り付けに際して、Ｌ字状工具によるものと考えられる方形刺突痕と断続凹線（廣瀬2000）を確認できる。破片をすべて確認したが鰭付埴輪と考えられる資料は存在しない。

朝顔形埴輪は口縁部が二重になる通有のものと、頸部から直立気味に開き、途中で屈曲して外反する１次口縁の上に、前者の朝顔形埴輪より２次口縁が短くなる２次口縁をもつものの２種類を確認した[註1]。前者は胴部から肩部・口縁部までが接続し、形状が判明する。後者は接合検討を行ったが、接合する資料はない。ただし、胎土や焼成、調整技法から、同一個体と考えられる個体がある。これは、頸部突帯が、一番くびれた部分には無く、頸部からやや離れた肩部にまで下がった位置につく。同様の朝顔形埴輪は、天理市東殿塚古墳にも存在する[註2]。

八幡市女郎花遺跡 八幡東車塚古墳（前方後円墳、94m）の東方隣接地から多量に埴輪が出土している。

円筒埴輪は、完形に復元できない。底部高が突帯間隔の約２倍に割り付けられる個体と、突帯間隔とほぼ同じ個体があり、前者は底部の第１条突帯寄りに半円形透孔、２・４段目に長方形透孔を３方向に穿孔する。後者は、２段目の第２条突帯寄りに半円形透孔を、３段目に長方形透孔を３方向に穿孔する。底部に穿孔される半円形透孔については、高橋克壽が大阪府萱振１号墳の円筒埴輪の分析に際して述べるように（高橋1992）、本来の第１条突帯が省略されたために、第１条突帯寄りに穿孔されたものと考える。よって、前者は最低でも４条５段、後者は５条６段となる。また、口縁部とその下方２段分が残存する個体をみると、口縁部のすぐ下の段に円形透孔を３方向に穿孔している状況を確認できる。１段中の透孔が３つ以上の場合はⅠ群円筒埴輪とする考え方（廣瀬2010）に従えば、Ⅰ群円筒埴輪とⅡ群円筒埴輪が混在するのが、女郎花遺跡の埴輪といえる。ただし、廣瀬がⅡ－１期とした時期の埴輪は、Ⅰ群円筒埴輪が一部混在しつつ、主体はⅡ群円筒埴輪となるので、本資料はⅡ－Ⅰ期の資料と考えて差し支えない。

製作技術をみると、第１次調整タテハケの後、２次調整がないものと、２次調整にストロークの長いヨコハケを行うものの２者がある。このヨコハケについても、境野１号墳のものと同じく、小工程や突帯成形に際して施されたものである。突帯の割付には、方形刺突が採用されている。

出土状況からは東車塚古墳のものと断定できないが、東車塚古墳は戦前には既に大規模な削平を受けており、梅原末治の聞き取りによると、東側には円筒埴輪列がめぐっていたことが判明しており（梅原1920）、ここから埴輪が流出した可能性を考えたい。判明している埋葬施設（粘土槨？）や、副葬品（内行花文鏡、鼉龍鏡、倭製神像鏡、翡翠勾玉、鉄製武具、鉄剣、鉄鏃）も埴輪の時期と大きくずれない。

長岡京市長法寺南原古墳　全長62mの前方後方墳で、後方部の竪穴式石槨から、三角縁神獣鏡４面、内行花文鏡１面、盤龍鏡１面、玉類、鉄製武器類、鉄製農工具類が出土している。墳丘は、竹林になっているために大きく削平を受けており、出土した埴輪も原位置を留めたものは可能性のある２個体を除いて、ない。円筒埴輪は普通円筒埴輪、鰭付円筒埴輪ともに５条６段に復元されており（清家1992）、２・５段目に三角形・円形・方形の透孔を縦列に配置するものと考えられている。外面調整は１次調整タテハケで、２次調整に境野１号墳のものと同様のヨコハケを行うものもある。ヒレの幅は７cm前後９cm前後、11cm前後の３種類がある。ヒレの貼り付けに際しては、突帯を切り取ってから貼り付ける部分に条線を刻むものと、突帯を指で押しつぶしてから胴部に刻みを入れるもの、突帯をＶ字に切り込んだ後に胴部にも刻みを入れるものがある。これらヒレの法量と技法の相関関係、円筒胴部の製作技法の相関関係を検討した杉井健によると、鰭付円筒埴輪製作する工人は、普通円筒埴輪も同時に製作し、最終工程のヒレの貼り付けに際してはそれまで円筒部を製作していた工人とは別の工人が作業に当たっていた可能性を考えている（杉井1992）。筆者も観察から同様の見解を得ており、兵庫県五色塚古墳のように工人集団の最小単位まで統制のとれたような生産体制（廣瀬2006）ではないと考えている。

なお、付近から盾形埴輪を転用した埴輪棺が発見されており、黄金塚２号墳、乾垣内遺跡出土のものと類似している。

京都市天皇の杜古墳　全長83mの２段築成の前方後円墳である。葺石があり第１段平坦面の埴輪列が検出されている。芯芯間で約55㎝間隔で配置されていた。

円筒埴輪は、完形に復元できない。透孔は２段目に方形、口縁部真下の段に三角形に穿孔される。底部高は突帯間隔より高い。口縁部高は突帯間隔の１／２に満たない。外面調整は１次調整タテハケの後、境野１号墳と同様の２次調整ヨコハケを施す個体が多い。破片を含めて、鰭付埴輪はない。

向日市乾垣内遺跡　伝高畠陵古墳（円墳、65m）の北方約120mで埴輪棺が発見された遺跡である。円筒埴輪の破片は少数のため不明であるが、特徴的な盾形埴輪が復元されている（図16）。類似した盾形埴輪が後述の京都市黄金塚２号墳でも出土しており、形態・文様・技法ともに共通しており、同工品と考えられる。

長岡京市今里車塚古墳　全長約74mに復元される前方後円墳である。墳丘はほとんど削平されており最下段の葺石を辛うじて検出している。なお墳裾の葺石の外側には柱穴が一定間隔で見つかっており、周濠からは笠形や衝立形の木製品が出土していることから、木製樹物が配置されていたと考えられる。埋葬施設は不明であるが、倭製方格規矩鏡が見つかっている。周濠内から埴輪片が出土しており、墳丘平坦面には埴輪が配置されていた姿が復元されている（高橋1988）。

円筒埴輪は、全形を復元できるものはないが、周濠外から見つかっている埴輪棺は８条９段の大型品で、貼付口縁のものがある。ただし、墳丘出土の埴輪片の中に貼付口縁のものは少ない。周濠内の埴輪は、鰭付円筒埴輪が多く混じる。鰭付埴輪は透孔が残存しない。普通円筒埴輪の中には円形透孔を千鳥状に配置する個体も存在している。外面１次調整はタテハケで、境野１号墳と同様の２次調整ヨコハケを施す個体も存在している。

八幡市ヒル塚古墳　一辺約50mの方墳で、３段築成となる。墳丘外表に葺石、埴輪列をそなえる。埋葬施設は、粘土槨２基で、方角規矩鳥文鏡・鉄器（刀・剣（渦巻き飾り付含む）・槍・鏃・斧・鎌・鉇・蕨手刀子・鑿）が出土している。埴輪は再整理を行った結果、以下の点が判明した（北山2017）。

埴輪は、段築平坦面埴輪列、墳頂埴輪列、埴輪棺にそれぞれ配置・使用されていた。墳頂から検出された埴輪棺は全形を復元でき、５条６段構成で、器高は104㎝である。底部高は突帯間隔より高く、突帯間隔と口縁部高は一致する。この個体に透孔は穿孔されておらず、特製棺の可能性が考えられている。外面１次調整はタテハケで、２段目以上の各段には２次調整ヨコハケが施される。突帯の割付には方形刺突が採用されている。第１段平坦面からは鰭付円筒埴輪を転用した埴輪棺も見つかっているが、こちらは突帯間隔＞口縁部高となる。本来は透孔があったものと推測されるが、遺存状態が不良のため形状・配置は不明である。外面調整は前者と同じである。鰭は口縁部端の高さまで取り付くものである。鰭の接続に際しては、突帯を切除した後に縦方向の刻線を入れる。埴輪列に配置された埴輪は底部のみ

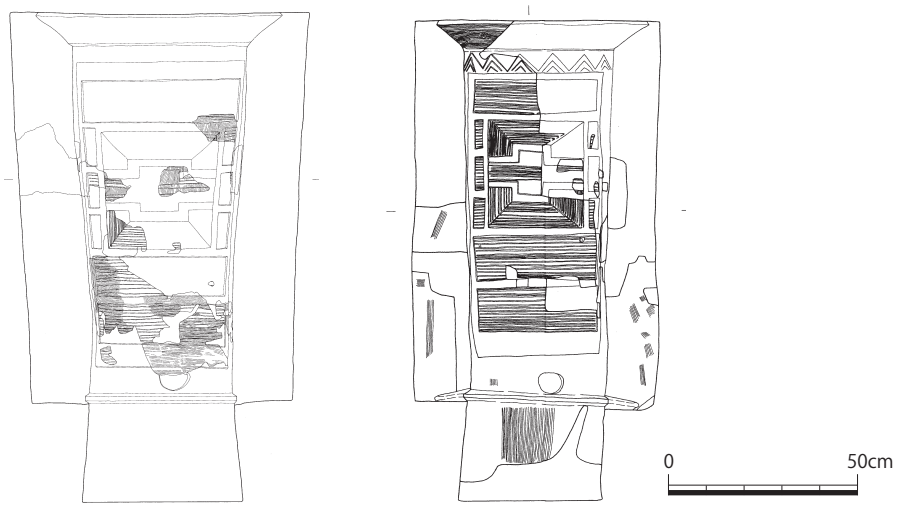


図 16　共通する盾形埴輪（左：乾垣内遺跡、右：黄金塚２号墳）

の残存で、全体形状は不明である。底部の高さ、径の違いから複数の規格があった可能性がある。底部に円形か半円形透孔を確認できる資料も存在する。

墳頂埴輪棺の規格は、奈良県上の山古墳と大阪府萱振１号墳のものと共通であり、また口縁部高が突帯間隔より短くなる資料が存在することなども共通している（高橋1992）。透孔の配置は不明であるが、定型的な鰭付円筒埴輪が存在することなどを加味し、女郎花遺跡出土資料よりも１段階下がったⅡ－２期としておきたい。

京都市黄金塚２号墳　全長138.8mを測る前方後円墳であったと推定され、構成に様々な削平を受けており墳丘の遺存状態はよくない。後円部墳頂に粘土槨と考えられる断面を観察しており、小札革綴冑、鉄製刀子などが知られている。

後円部北側の埴輪列がほぼ全面にわたって調査されている。そのため埴輪の配置方式が判明している。11本を基本単位として、両端を盾形埴輪、中間の１本を朝顔形埴輪とする。埴輪の設置に当たっては、盾形埴輪をはじめに設置してその間に埴輪を配置する方式をとっていたものと推測されている。配置される円筒埴輪は４条５段構成で高い規格性があるが、口縁部高により６つに大別し、調整技法等によりさらに19類に分類される（藤薮1997）。この分類された最小単位を工人集団の最小単位と捉え、埴輪の配置に当たってもこの単位を基本に作業に当たっていた可能性が高いとされる。

黄金塚２号墳の埴輪で注目されるのは、埴輪列中にも配置される盾形埴輪である。先述の乾垣内遺跡、長法寺南原古墳のものと同形式といえる。特に乾垣内遺跡の盾形埴輪とは、形態・法量だけでなく、文様構成や製作技法に至るまでが酷似しており、同工品と考えて差し支えない。

大山崎町鳥居前古墳　全長51mの前方後円墳で、３段築成だが平野側にはもう１段の付設段が確認さ

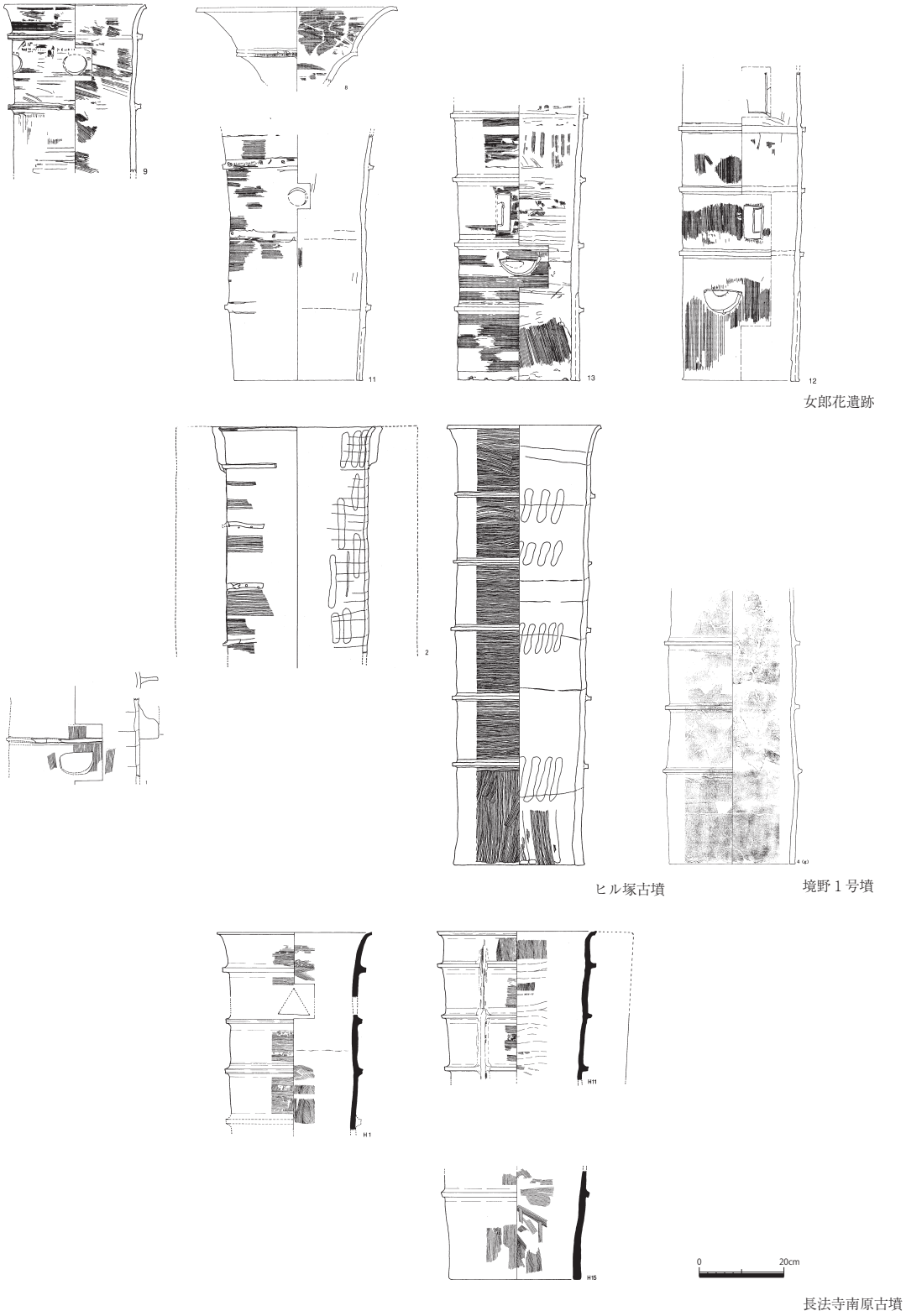


図 17　山城地域のⅡ期の埴輪（1）

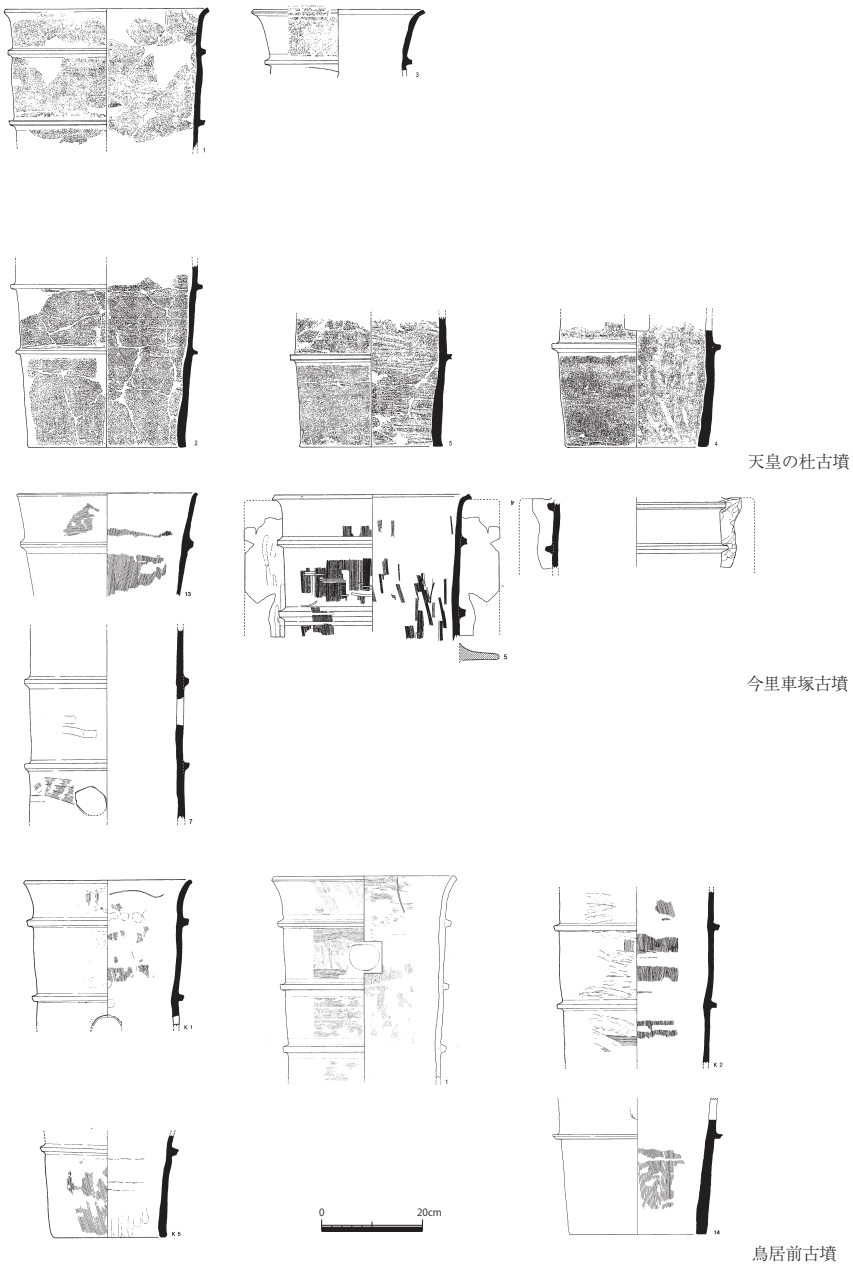
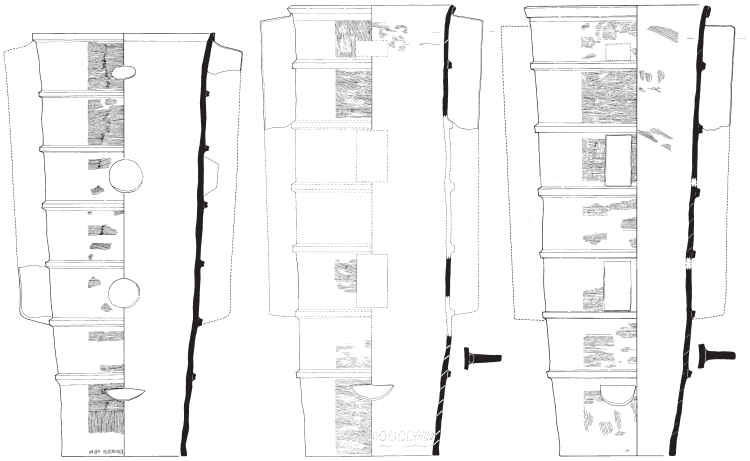
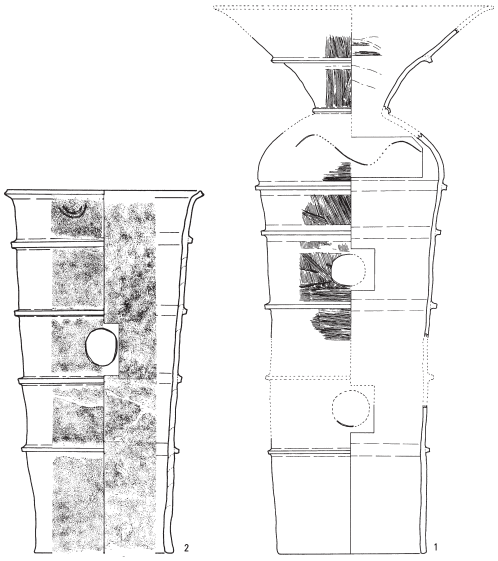


図 18　山城地域のⅡ期の埴輪（２）



庵寺山古墳



黄金塚２号墳

図 19　山背地域のⅡ期の埴輪（３）

れている。後円部の竪穴式石槨から、画文帯神獣鏡、玉類、短甲、刀剣、鉄鏃、巴形銅器などが出土している。

円筒埴輪は最低でも４条５段に復元でき、透孔は円形のものを２・４段目に縦列に配置する。一部に千鳥配置になる可能性のある資料もある。外面１次調整はタテハケで、２次調整にヨコハケを使用するが、Ⅲ期以降の埴輪にみられる定型的なＢ種ヨコハケではない。鰭付円筒の可能性がある破片が存在する。

宇治市庵寺山古墳　直径56mの円墳で、粘土槨を有するが、盗掘を受けており副葬品の出土はない。墳頂埋葬施設上に方形埴輪列が確認されており、鰭付円筒埴輪が配置されていた。方形埴輪列の内部には家形・蓋形・甲冑形埴輪が配置されていたと考えられ、破片となって盗掘坑内より出土している。

方形埴輪列に配置された円筒埴輪は、６条７段に復元できる鰭付埴輪で、１段目に半円形、３・５・６段目に円形か方形透孔を縦列に配置する。口縁部は貼付口縁になっており、鰭は第２条突帯から口縁部直下までの範囲に及ぶ。器高は85㎝前後で、底部高は突帯間隔よりやや高く、突帯間隔と口縁部高はほぼ一致する。外面１次調整はタテハケ、２次調整はヨコハケであるが、Ｂ種ヨコハケではない。鰭が２条目突帯からつくこと、貼付口縁になっていること、外面調整に２次調整ヨコハケが多用されていること、形象埴輪の様相などから、Ⅱ期の中でも最新段階と考えられる。

出土したすべての円筒埴輪の規格性は高く、調整技法も揃うことから、統制のとれた生産体制であった可能性が高い。

２．巨椋池を介した埴輪の流通

以上、山城北部地域の古墳・遺跡出土のⅡ群円筒埴輪について記述してきた。これらの資料の中には、同じ規格、文様を持つ形象埴輪が存在するなど、共通する点が多い。例えば、乾垣内遺跡の盾形埴輪と、黄金塚２号墳の盾形埴輪は、文様の類似度が高く、製作技術も同一と言える。つまり、両古墳の盾形埴輪の生産には同一の工人集団が携わっていた可能性が高い。

同様の状況は円筒埴輪・朝顔形埴輪にも存在し、黄金塚２号墳の朝顔形埴輪の肩部にあるヘラ記号と、鳥居前古墳の円筒埴輪内面に見られるヘラ記号は同一である。器形や施文する箇所は異なるが、共通する記号が持つ点は評価したい。

これらの資料を有する古墳・遺跡の分布をみると、桂川右岸の乙訓地域と、木津川左岸の八幡地域、同右岸の庵寺山古墳、宇治川北岸の黄金塚２号墳と、一見するとまったく別の地域と考えられるような箇所に所在している。ところが埴輪の共通性は各地域が別のものではないことを示しており、各地域を結ぶ媒介として淀川に注ぐ３河川と巨椋池の存在に着目したい。埴輪が共通するような生産体制を想定することができ、これらの各地域が一体となる地域を超えたまとまりが形成されていた可能性が高いと考える。

古墳時代前期前葉から中葉にかけては、乙訓地域の古墳群で埴輪が配置されるが、その生産は一過性のもので、古墳の築造のたびに組織され、築造が終わると解体するようなものであった（廣瀬2002）。古墳時代中期になると、城陽市の久津川古墳群や長岡京市恵解山古墳、宇治市二子山古墳など各地に大

型前方後円墳が築造されるが、第４章で明らかにするように、埴輪の生産・供給は古墳群を超えるものではなく、地域を超えるようなものではない。前期後葉から中期初頭にかけての、巨椋池を介した埴輪の生産・流通の状況は前後の時代のそれとは大きく異なっている。

Ⅱ群円筒埴輪の高い規格性・斉一性は大和北部の佐紀古墳群との関連が想起されている（高橋1994）が、木津川を通って佐紀古墳群と直結するこれらの地域は、そこからの情報をすぐに入手することができたのであろう。

３．他地域の検討事例

上述のように、古墳時代前期後葉から中期初頭にかけて、山城北部地域では、それまで首長系譜として扱われていた古墳群や地域の範囲を大きく超える範囲で共通する埴輪がみられることを特徴として捉えることができた。そこで、広域に埴輪を流通させるような埴輪生産体制がとられていると考えられる事例を集め、検討を加えることで、山城地域北部における古墳時代前期後葉から中期初頭の埴輪生産体制を評価したい。

Ａ　和泉地域におけるⅡ期の埴輪

和泉地域のⅡ期の埴輪は、岸和田市貝吹山古墳が嚆矢となり生産が開始される。その後、同時地において和泉地域最大の同市摩湯山古墳、その後の貝塚市地蔵堂丸山古墳などを経て、和泉市和泉黄金塚古墳、さらには百舌鳥古墳群へと連続的に埴輪を配置する古墳が築造されている。

さて、同地域の埴輪生産を考える上で、生産遺跡と考えられている高石市などに広がる大園遺跡は、重要なカギを握る。筆者らが行なっている埴輪の整理作業によって重要な知見が得られつつある。

大園遺跡からは、円筒埴輪、家形埴輪、盾形埴輪、蓋形埴輪、衝立形埴輪、冠帽形埴輪、甲冑形埴輪、船形埴輪、木樋形土製品、土製棺などが出土しており、近くに削平された古墳がないことや、谷部に投棄されたような状況から、生産遺跡と考えられている（三木ほか2015）。

特に注目されるのは衝立形埴輪で、全国で出土した衝立形埴輪の総数をも上回る個体数があり、形態と文様からみると、大園遺跡のものが最古に位置付け得る可能性が高い。

この衝立形埴輪は、周辺の菩提池西遺跡の古墳や、５㎞南に位置する摩湯山古墳に接して築造される馬子塚古墳からも出土している（図21）。大園遺跡で生産されていたとするのであれば、古墳群や河川を基本単位とする集落の単位を大きく超えて、流通していることになる。

この現象の理由として、摩湯山古墳の築造を契機とした広域にわたる連合を考えたい。摩湯山古墳の前段階には、久米田貝吹山古墳が築造されているだけで、ほかに首長墳と呼べるような大型古墳は築造されない。貝吹山古墳の調査では、Ⅱ－１期の円筒埴輪、朝顔形埴輪、鰭付埴輪が見つかっているが、摩湯山古墳にも近在する風吹山古墳などにも系譜を追うことができない。つまり、貝吹山古墳に配置するために工人集団が組織されたが、埴輪を作り終えると解体し、引き継がれることはなかったのである。貝吹山古墳の築造の背景には、火山石製刳貫式石棺の存在から、王権中枢と讃岐地域との仲介としての役割を想定できる。突然、貝吹山古墳の首長が出現したのではなく、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて画文帯神獣鏡を入手し、数世代にわたって保有していたとと考えられており（下垣2016）、こ

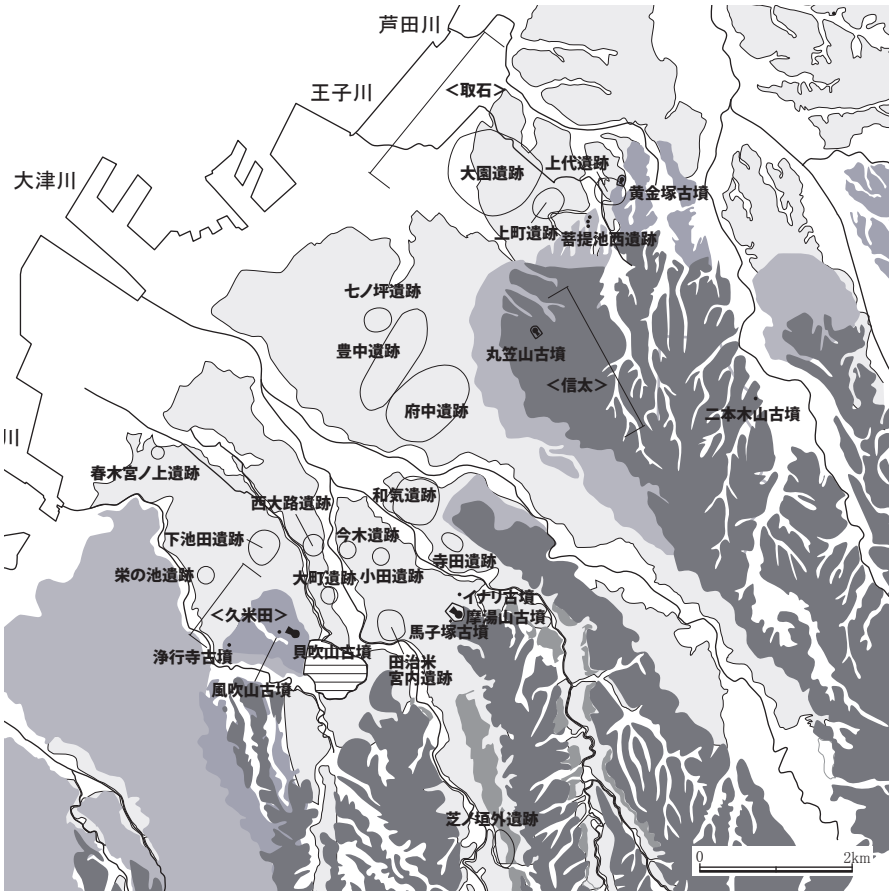


図 20　和泉地域のⅡ期の埴輪を有する古墳・遺跡

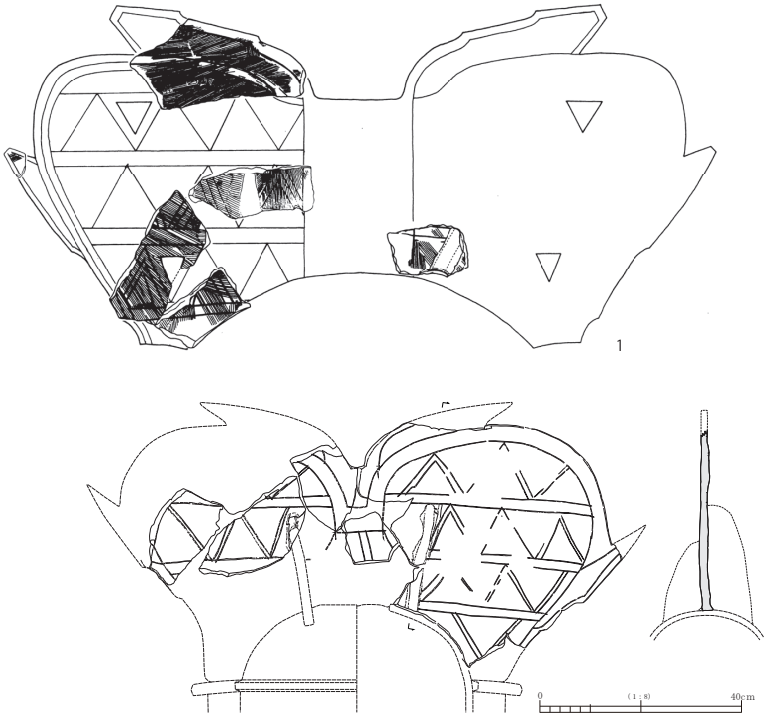


図 21　同一の製作技術・文様を有する衝立形埴輪（上：馬子塚古墳、下：大園遺跡）

の地域は当初から重要視されてはいたものの、古墳の築造までは至らなかったものと推測できる。

摩湯山古墳は当該期において和泉地域最大の、全国的にも奈良盆地を除くとトップクラスの古墳であり、この段階には、摩湯山古墳の被葬者の王権における地位が上昇したのであろう。５㎞もはなれた大園遺跡から埴輪を運んだ背景としては、集落動態からのアプローチがなされており、狭い地域内での集落間分業体制から、地域を超えた協業が行われるようになったためにおこったとされる（三好2016）。地域を超えた協業のより発展した形が、古墳時代中期の畿内でみられる生産・流通システム（和田2003）、「造墓コンプレックス」などとも呼ばれる体制（菱田2007）、前期後葉から中期初頭の和泉地域における埴輪の拡がりはまさにこの過渡的状況を表しているものと考えられる。

Ｂ　明石地域におけるⅡ期の埴輪

明石海峡を望む位置に築造された五色塚古墳もⅡ期の埴輪を有する大型前方後円墳（全長194m）である。透孔の形状・組合せ等により13類に分類でき、ヘラ記号や口縁部高によって細分ができ、この細分された単位は工人集団の最小単位と考えられている（廣瀬2007）。細分化された工人集団を編成しているにもかかわらず、全体としては規格的で統一のとれた生産体制である。

五色塚古墳のために組織された埴輪生産工人は、周辺に分布する古墳の埴輪生産にもかかわっており、小壺古墳、歌敷山東古墳、歌敷山西古墳、舞子浜遺跡の埴輪棺にも同一の埴輪が配置・利用されている。さらに、10㎞近く離れた幣塚古墳や念仏山古墳からも同一の埴輪が見つかっており、五色塚古墳の埴輪を工人集団の製品の広域流通を示している。

五色塚古墳についても、摩湯山古墳と同じく同時期においてトップクラスの墳丘規模をほこっており、王権中枢との関わりの中で埴輪生産がなされたことは間違いないであろう。

当該地域においても、中期古墳の吉田大塚古墳には五色塚古墳で組織された埴輪工人集団は継承されておらず、五色塚古墳とその関連古墳の築造が終わると、解体されたものと想定できる。

４．古墳時代前期後葉から中期前葉の埴輪生産からみた当該期の社会、政治構造

以上、和泉地域と明石地域における同時期の埴輪生産をみてきたが、この２つの地域には共通点がある。それは、摩湯山古墳や五色塚古墳といった当時でもトップクラスの墳丘規模をほこる前方後円墳の築造を契機に埴輪生産体制が組織されている可能性が高いこと、その生産体制は継続しないこと、広範囲に埴輪を供給していること、である。この点が山城地域北部における古墳の状況とは異なっている点である。しかし、山城地域北部は木津川を介して大和盆地にすぐ到達できる地域である。当該地域の集落動態をみると、Ⅱ群円筒埴輪が盛行する時期に首長の存在を想起できるような大型建物等を有する遺跡は見つかっていない（柏田・古川・浅井2016）。一方で、水上交通の拠点であるためか、外来系の土器を有する集落が一定数存在し、手工業生産を担っていた遺跡（芝ヶ本遺跡など）もあることから、集落の機能分化は進んでおり、和泉地域と同様の社会をなしていた可能性が高い。

そう考えてよいのなら、摩湯山古墳や五色塚古墳のような大規模前方後円墳は築かれないものの、広域に集落が連携して協業するような体制ができており、その各集落の首長の墳墓として築かれた古墳が点在しているものと捉えることができる。巨椋池を介して協業した集落の中には、埴輪生産を担うよう

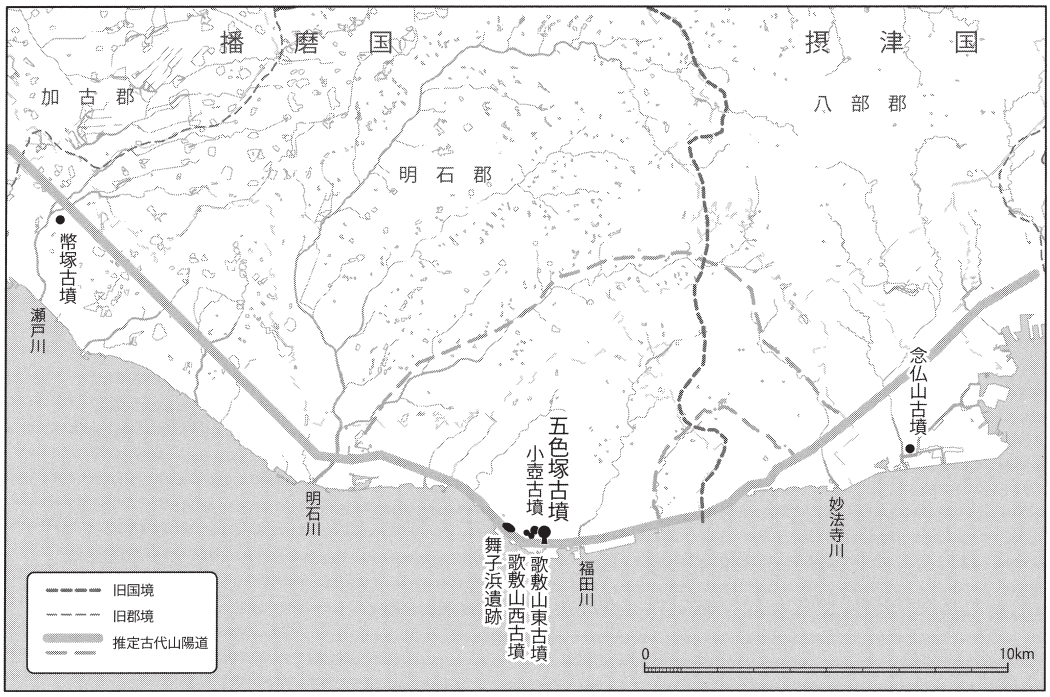


図 22　明石地域における五色塚古墳を中心とした古墳分布

な集落あるいは工人集団がいたことは想像でき、そのために共通した埴輪が広域にみられているのであろう。つまり、山城地域北部におけるこうした埴輪生産のあり方は、当時の社会状況によって生み出された可能性が高く、摩湯山古墳や五色塚古墳のように王権中枢が直接的・戦略的に配置したであろう大型前方後円墳がなくても、成立し得る体制であったのであろう。

おわりに

古墳時代前期後葉から中期初頭にかけての埴輪生産体制について、山城地域北部のⅡ群円筒埴輪の分析を中心にして検討を加えた。その結果、当該地域の埴輪には、これまでの首長系譜の議論で考えられてきた古墳群の範囲や地域を超えて広域に共通した埴輪や類似した埴輪がみられることが判明した。その理由として、狭い地域内での集落間分業体制から地域を超えた協業体制をとるように社会構造が変化し、埴輪生産についても協業体制をとった結果、広域に分布している可能性を想定した。摩湯山古墳や五色塚古墳のように王権中枢が直接的・戦略的な影響力を行使して埴輪生産体制に変化を及ぼした可能性もあるが、むしろその体制を実行できるような社会構造に到達しており、影響を受けなくても同じような体制をとることができた社会であったことを評価したい。

註

1　古閑2007では壺形埴輪の可能性を考えている。

2　向日市埋蔵文化財センターが実施した、五塚原古墳第８次調査で後円部西裾から出土した埴輪棺にも同様の形態をもつ朝顔形埴輪が使われていた。調査を担当した梅本康広氏によると、妙見山古墳の資料にも同様の形態の朝顔形埴輪があるとのことである。

第４章　中期大型古墳群の埴輪生産（１）　京都府久津川古墳群の分析

はじめに

古墳時代は、墳丘の形と規模で王権と地域首長との連合・同盟関係、さらには階層差を表現した時代である。その中でも古墳時代中期は大阪府大山古墳（前方後円墳、約486m）をはじめとした巨大古墳を頂点に、中小古墳が秩序だって築造されている。墳丘に表現された秩序は埴輪にも反映されており、大型墳ほど条段数の多く径の大きな大型埴輪が、小型墳ほど小型埴輪が用いられる傾向にある。

ただし、墳丘に応じた埴輪の使い分けが古墳時代中期を通して同質であったのか、また使い分けられる埴輪を生産する工人集団がどのように対応しているかについては、一部の先駆的な研究（高橋1994）をのぞいて解明されていない。特に、川西宏幸による埴輪編年（川西1978）のⅢ期とⅣ期の埴輪は、両者ともにＢ種ヨコハケを用いており、違いは黒斑の有無から判断される焼成技法の差のみと考えられ、一括して検討されることが多い。Ⅲ期とⅣ期の埴輪が生産や使用法まで含めて同質に扱えるのかについては検討の余地が残る。

そこで本章では、古墳時代中期の埴輪の詳細な分析を通じて、墳丘に応じた使い分けや一古墳内での埴輪の使い分けの実態を解明し、その使い分けが生産の段階から意識されたものかについて検討する。そして、埴輪工人集団の地域への定着についても検討し、前後の時代との比較から、古墳時代中期の埴輪生産の特質に迫る。

１．研究方法の呈示

検討をはじめるにあたり、いくつかの前提と方法を呈示する。

まず、埴輪生産を担う工人・工人集団・工人組織の識別について考察する。一古墳の埴輪を生産するにあたり数人の工人による工人集団が複数編成されたと考えられるが、この工人集団が複数集まって工人組織となる。工人や工人集団を認定する手段として、同工品分析がある（犬木1995、城倉2009など）。埴輪工人が駆使する諸製作技法と工具痕等の組み合わせから、同工品が認定されている。さて、工人集団内では、埴輪の諸製作技法の集合体である製作技術が共通するものと考える。それは、製作技法や埴輪成形の行程はある集団内において工人同士が交流することではじめて伝わるものと考えるからである。当然ながら一つの工人集団には複数の工人が所属するため、細部の形状などは異なっている。しかし、埴輪の成形工程や製作技術は一致している場合が多い。もちろん複数の工人集団で製作技術が同じになることもあるが、その場合は工人の管理が徹底された生産組織といえるであろう。いずれにしても、埴輪の製作技術の異同を検討することで埴輪工人集団を見出し、それらの集団同士の距離感や、集合体である埴輪工人組織の構造を理解していくことが、埴輪生産の解明には有効であると考える。

また、生産組織の解明には、本来であれば生産遺跡の検討が欠かせない。生産地・消費地の両方が分析されることでより立体的な生産像に迫ることができる。しかし、関東地方や近畿地方の一部などのごく限られた地域でしか生産地が判明していない。生産地が判明していなくても、古墳出土の埴輪は大量であり、また調査の蓄積によって資料の比較も容易であることから、古墳出土資料の検討だけでもあ

る程度までは生産像に迫ることができると考える。

上記の前提に則った上で本稿での分析方法を呈示する。まず、対象としては古墳時代中期を通して古墳の造営が継続する地域が望ましい。特に、首長墳を頂点にした階層構成型の古墳群が継続している場合が望ましい。それは、埴輪の使い分けの様相を通時的・階層的に追うことができるからである。さらに、使い分けられる埴輪を生産する工人集団がどのように対応しているかを検討できる。そして、埴輪生産を担う工人集団・工人組織が古墳群において定着しているか、古墳造営のたびに組織されているのかについても考察できる。

以上のような分析が可能であり、さらに埴輪が分析に耐えうるほど大量に出土していることが望ましい。さらに、編年的・階層性の裏付けを得るために副葬品の様相も判明していることが望まれる。

以上の条件を満たす古墳群として、京都府久津川古墳群（図23）があげられる。そこで、以下では久津川古墳群の分析を軸に論を展開する。

２．久津川古墳群の分析

（１）久津川古墳群久世支群の様相

久津川古墳群は木津川右岸域、京都府城陽市を中心に分布する（図23）。木津川に流れ込む河川とそれらによって形成された扇状地形によって３支群（北から広野、久世、富野支群）に分けられる。本稿ではその中でも大谷川流域の久世支群を対象とする。当支群での造墓の開始は庄内式段階の芝ヶ原墳丘墓（芝ヶ原12号墳）や上大谷６号墳であり、前期には尼塚１号墳や尼塚古墳などが築造される。中期には、当該地域の盟主墳といえる久津川車塚古墳、芭蕉塚古墳という大型前方後円墳が連続して築造される。また梶塚古墳や丸塚古墳、青塚古墳などの中型墳や正道遺跡方墳群のような小規模墳も築造される。古墳時代後期になると当支群での造墓活動は衰退し、北側の宇治川流域や南側の青谷地域に造墓の中心が移る。

久津川古墳群では発掘調査が数多く行われ、副葬品の内容もある程度判明している。戦前の梅原末治による久津川車塚古墳の調査（梅原1920）をはじめ、戦後の宅地開発などに伴って相次いだ破壊に際して西山古墳群や尼塚古墳の調査が行われた（堅田・白石1962・山田1969）。副葬品の判明している古墳が多く、埴輪の編年を検証する際に有効となる。

そして、埴輪の出土も多いのが当支群の特徴といえる。当支群では宅地開発などに伴う調査によって多量の埴輪が出土しており、出土状況もある程度判明している。そのため埴輪の使い分けを検証することが可能である。さらには多量の埴輪から編年を組むだけでなく、埴輪生産にまで踏み込んで検討できる。

最後に、それらの成果を総合的に検討し古墳時代中期の政治構造を考察するモデルにまで昇華された古墳群であることも検討の俎上に載せる理由となる。和田晴吾は、古墳時代中期の南山城地域が久津川車塚古墳を頂点とし、規模や内容の劣る古墳をその下位におくピラミッド形の階層構成を体現した地域として評価した（和田1988・1994）。そして南山城でみられる現象が、古市古墳群・百舌鳥古墳群などの大王墳群の様相と同一であり、さらにそれらの古墳の構成を基調にした階層秩序が全国の古墳群でもみられることを証明した。その結果、古墳時代中期が首長連合体制の最も成熟した段階としたのである。

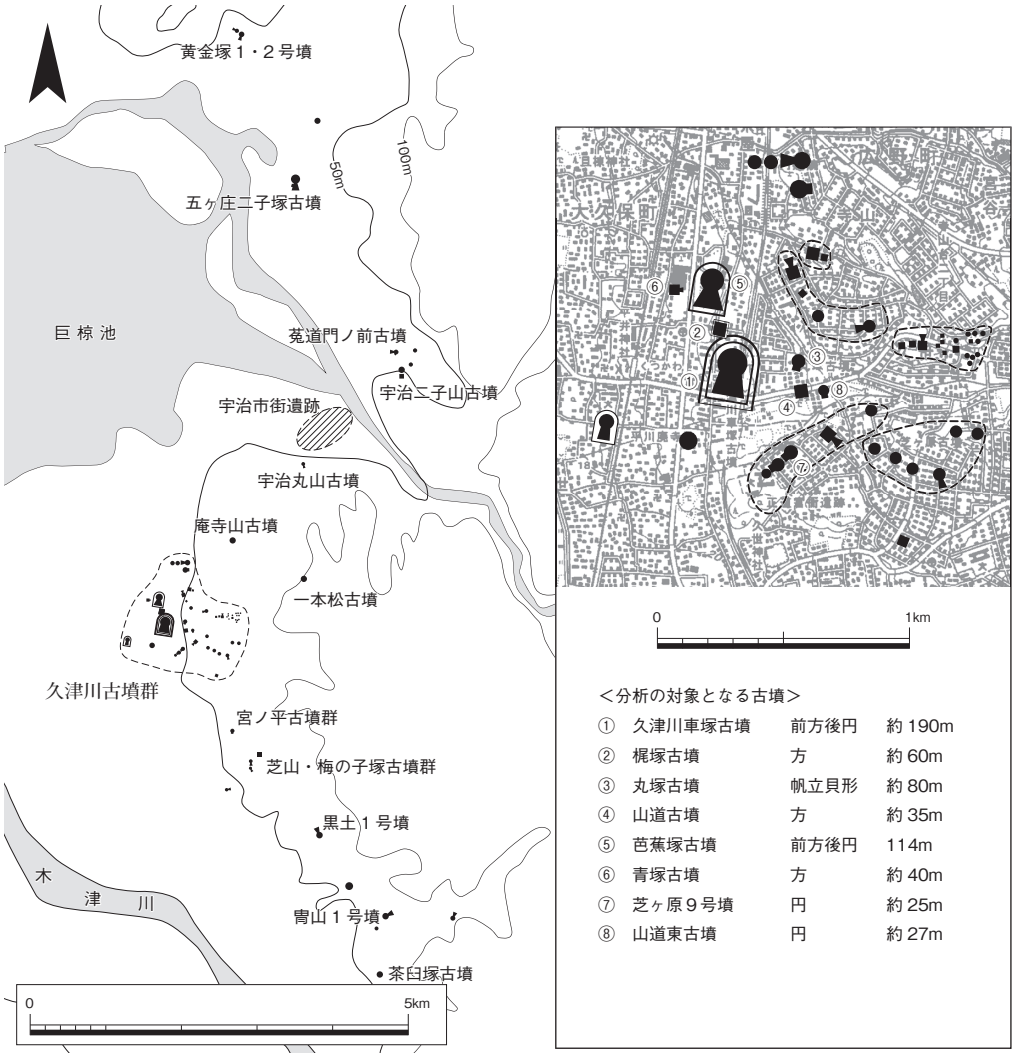


図 23　久津川古墳群とその周辺の主要古墳分布図

南山城全域が同一の古墳群（首長の政治・経済領域）として扱えるかについては問題が残るが、久津川古墳群の様相を明らかにすれば、古墳時代中期の様相をさぐることができることを示した点は大きい。そのような理由から、久津川古墳群の埴輪生産を分析して導き出されたモデルは、当時の王権中枢の埴輪生産の縮図である可能性が高い。これが久津川古墳群を分析する理由となる。

（２）各古墳出土埴輪の分析

①久津川車塚古墳（図24）　南山城地域最大の前方後円墳（墳長約190m）で、長持形石棺を埋葬施設にもち、鉄製甲冑や鉄製武器、銅鏡などの豊富な副葬品が出土している（梅原1920、古谷1988ほか）。墳丘からは、家形埴輪と蓋形・盾形・靫形などの器財埴輪が出土している。円筒埴輪は、中堤埴輪列から計50個体以上が検出されているが、墳丘は調査が及ばず表採資料が10個体程度のみである。また、外濠からは埴輪棺が検出されている。円筒埴輪は川西宏幸の埴輪編年のⅢ期の指標となっている。墳丘規模や豊富な副葬品の内容から、古墳時代中期の南山城地域の盟主墳と想定されている（小泉2002）。

埴輪については、先述の通り中堤埴輪列資料が中心となるが、完形に復原できる個体はない。埴輪列

資料が大半を占めるため、法量を定量的に比較できるのは底部の径と高さのみである。中期古墳の埴輪は、底部の法量だけからでも編年に有効であるという古市古墳群での成果があり（上田1997）、まずは底部の法量を図におこして検討を始める（図25）。

すると、法量から３つのまとまりがあることが分かる。そこでこれらのまとまりに便宜上名称を与える。底部径30.0cm～35.0cm、底部高14.0cm～17.5cmの間におさまる一群を車塚L群（KL群）とする。それよりもやや小さく、底部径22.5cm～30.0cm、底部高約12cm～約16cmにおさまる一群を車塚Ｓ群（KS群）とする。KL群と底部高はさほど変わらないが底部径が40cmを超える大きな埴輪が１点あり、これを特大群とする（註１）。いま３つに分けた埴輪群を群ごとに分析していく。

KL群には中堤埴輪列資料と埴輪棺資料が含まれる。胎土は灰白褐色を呈し、チャートなどを含む。焼成は胴部の対向する位置に黒斑がつくことから野焼き焼成と判断できる。成形は高さ５cm程の粘土帯を基部とし、その上に高さ３cm程の粘土紐を巻き上げる。外面調整は１次調整タテハケののち２次調整は静止痕の不明瞭なストロークの長いCa種ヨコハケである（一瀬1988）。突帯の設定にはＬ字状工具によると考えられる凹線が用いられる。内面調整はタテハケ調整を基本とするが、調整が粗く粘土接合痕を観察できる。この製作技術をａ類としておく。埴輪棺資料も埴輪列資料KL群と同じ製作技法が用いられており、製作技術ａ類と判断できる。

KL群は、底部を中心に残存する埴輪列資料からでは条段構成や突帯間隔が復原できない。KL群にはいま分析してきた埴輪列資料のほかに埴輪棺資料の一部が含まれ、埴輪棺は全形が判明する個体が含まれる。そこで埴輪棺資料を検討すると、製作技術ａ類を用いたKL群と同一の埴輪と判断できる。そのため埴輪棺は埴輪列からの転用といえる。よって埴輪棺からKL群の全形・法量を復原することができる。４条５段で、法量は底部高約17cm、突帯間隔約15cm、口縁部高約17cm、全高約80cm、底部径約34cm、口縁部径約42cmとなる。なお口縁部には船形のヘラ記号が施される個体もある（図26－１)。また４段目以上は赤彩がなされている。

次にKS群は、墳丘からの表採品と中堤埴輪列からの出土品である。胎土は赤褐色を呈し、チャートなどを含む。焼成は黒斑を有していることから野焼き焼成である。成形は高さ５cm程度の粘土帯を基部とし、その上に高さ３cm程の粘土紐を巻き上げている。外面調整は１次調整タテハケののち、２次調整に静止痕の明瞭なＢ種ヨコハケ（細分不可能）が施される。内面はナデ調整を基調とし、積み上げ休止ラインに相当し擬口縁状になる付近と、口縁部付近にナナメハケが施される。胎土や色調、外面２次調整、内面調整が明らかに製作技術ａ類とは異なっており、KS群に用いられた製作技術をｂ類とする。

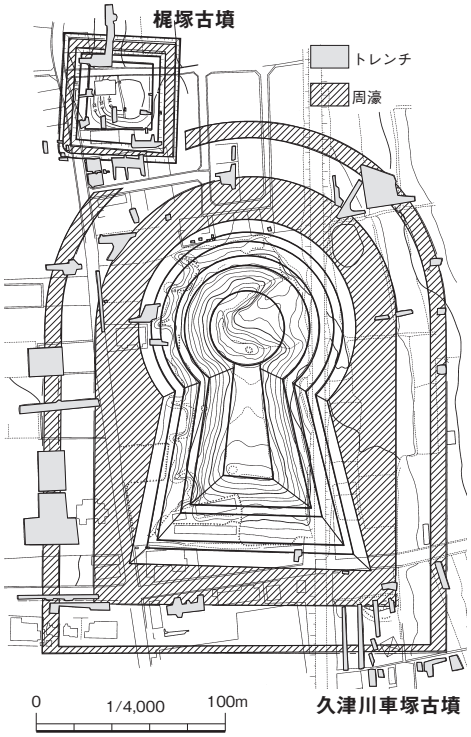


図 24　久津川車塚古墳・梶塚古墳の調査区と墳丘復原図

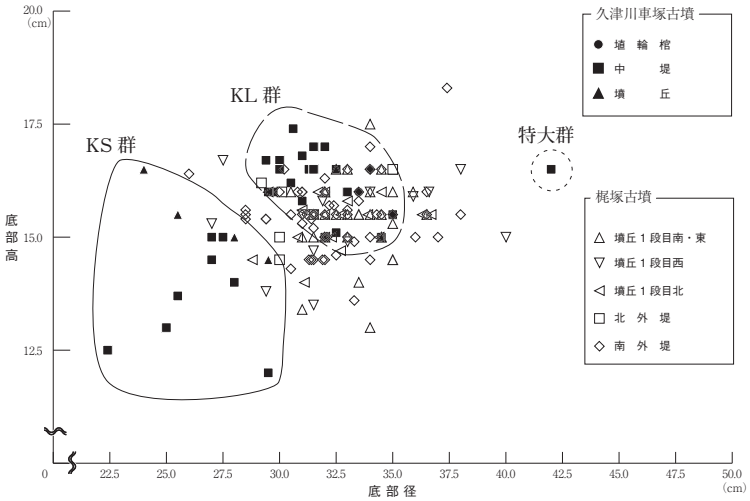


図 25　久津川車塚古墳・梶塚古墳出土円筒埴輪の底部法量散布図

製作技術ｂ類といえる破片からKS群の全形を復原すると４条５段となる。法量は、底部高約15cm、突帯間隔約13cm、口縁部高約12cm、全高約65cm、底部径27cm、口縁部径38cmとなる。

特大群は底部が１点しか存在しないが、径の大きな円筒埴輪は埴輪列中や埴輪棺の中に存在している。製作技術は類型化できるほど数量がないため判然としない。しかし、径の大きな埴輪は口縁部がいわゆる貼付口縁となる個体と対応している可能性が高い。

KL群・KS群円筒埴輪は、製作技術や胎土の違いから異なる埴輪工人集団によって生産された可能性がある。KL群円筒埴輪は製作技術ａ類を用いる工人集団Ａによって生産され、KS群円筒埴輪は製作技術ｂ類を用いる工人集団Ｂによって生産されたのである。つまり４条５段という規格は共通させながらも、法量が異なる埴輪を別個の工人集団が生産していたのである。

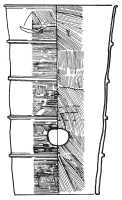
また、作り分けされた埴輪は樹立される場所にも区別がみられた。すなわち、KL群は中堤にのみ、KS群は中堤と墳丘内部に用いられているのである。特大群は数量が少ないために予測も含むが、中堤の要所にのみ樹立されていた可能性がある。このように、作り分けられた埴輪は、古墳の中でも明瞭に使い分けがなされており、墳丘内には小型品、中堤には小型品と大型品、特大品がそれぞれ用いられているのである。

では、久津川車塚古墳でみられた埴輪の作り分けと、使い分けがほかの古墳ではどうであったのかをみていく。

②梶塚古墳　梶塚古墳は一辺約60m の方墳であり、久津川車塚古墳の外堤と一部が重なる（図２）。築造当初から久津川車塚古墳のすぐ北西に配置されることを企画されていたものと考えられる。円筒埴輪は、２段築成の各段平坦面埴輪列と外堤埴輪列から約150 個体が検出されている。外堤上からは鍔付壺形埴輪、盾形埴輪、人物埴輪（図26－３）、馬形埴輪、笊形土器も出土している。

梶塚古墳出土の円筒埴輪の底部の法量を検討すると、すべて久津川車塚古墳のKL 群円筒埴輪と共通する（図25）。KL 群は久津川車塚古墳においては製作技術a 類と対応していた。しかし、梶塚古墳ではKL群のすべてが製作技術a 類によって製作されているわけではない。内面調整にナデを多用し、外

表３　久津川古墳群出土円筒埴輪の製作技術比較表（１）（KL 群・KS 群）

			KL 群		KS 群	
製作技術			a 類		b 類	
製作技法	基　部		S・Z接合、幅約５cm		S・Z接合、幅約５cm	
	外面調整	１次	タテハケ		タテハケ	
		２次	Ca 種ヨコハケ		B種ヨコハケ	
	内面調整		ハケ		ナデ＋ハケ	
	突帯設定技法		凹線		凹線	
	焼　成		野焼き／窖窯		野焼き	
胎　土			チャート・赤色斑粒・長石・石英		チャート・赤色斑粒・長石・石英	
色　調			灰白褐色		黄褐色	

面調整には静止痕の明瞭なB 種ヨコハケを多用する製作技術b 類と共通する埴輪が存在するのである。このような個体は、底部径が他と比べてやや小さい傾向がある。梶塚古墳のやや小型の円筒埴輪に製作技術b 類がみられるのは、久津川車塚古墳の製作技術b 類を用いた工人集団Ｂが、何らかの形で梶塚古墳の円筒埴輪製作に関わった可能性を考える。ただし、梶塚古墳の埴輪生産の主流であったのは製作技術ａ類を用いる工人集団Ａであり、工人集団Ｂの埴輪の数はさほど多くはない。梶塚古墳で主流となる工人集団Ａは、車塚古墳のKL群と梶塚古墳のKL群は舟形のヘラ記号を共有していることからしても同一の工人、または工人集団であった可能性が高い。

ところで、梶塚古墳の円筒埴輪が久津川車塚古墳の円筒埴輪と決定的に異なる点が一つある。それは、車塚古墳の円筒埴輪に明瞭に確認された黒斑が、梶塚古墳の円筒埴輪には認められない点である。また、梶塚古墳の円筒埴輪は断面も黒色を呈さず、内部まで火が廻っている。久津川車塚古墳の円筒埴輪とは焼成の方法が異なり、窖窯焼成が導入されていると判断できる。

さらに人物埴輪や馬形埴輪など、それまで当古墳群では確認できなかった形象埴輪が導入されている。窖窯焼成の導入を契機として人物埴輪・動物埴輪を配置するという様式までもが伝わり、それを実行しているものと考える。

③丸塚古墳　丸塚古墳は後円部径64 m、全長80 mの帆立貝形古墳で、墳丘埴輪列から約50 個体の円筒埴輪が出土している。円筒埴輪のほかに朝顔形埴輪と大型家形埴輪、三角板革綴短甲を模した甲冑形埴輪片などが出土している。円筒埴輪の底部径・底部高の分布はすべて久津川車塚古墳のKS 群円筒埴輪と共通する（図27）。それらの個体は製作技術b 類で製作される。丸塚古墳の円筒埴輪はすべての個体に黒斑が認められ、断面も黒色を呈しているため、窖窯焼成以前の埴輪と判断できる。

このことから丸塚古墳の円筒埴輪生産は、製作技術b 類を用いる工人集団Ｂを主体に埴輪が生産・供給されたと想定できる。久津川車塚古墳の墳丘長約180m に対し、丸塚古墳は全長約80m と規模が劣り、大型のKL 群円筒埴輪を樹立しない点で階層差が反映されており、埴輪生産も墳丘規模に応じて車塚古墳のように大規模ではなかったと考えられる。

④山道古墳　山道古墳は一辺約35mの方墳で、墳丘埴輪列から10個体の円筒埴輪が検出されている。ほかには朝顔形埴輪片と三角板革綴短甲を模した甲冑形埴輪片、草摺形埴輪片がある。円筒埴輪の底部の法量はKS群と共通し、製作技術もｂ類である。丸塚古墳と同じく黒斑がみられる。外堤には埴輪列が形成されず、葺石も施されていない。墳丘２段目以上は削平され不明だが埴輪の総量からみてそれほど

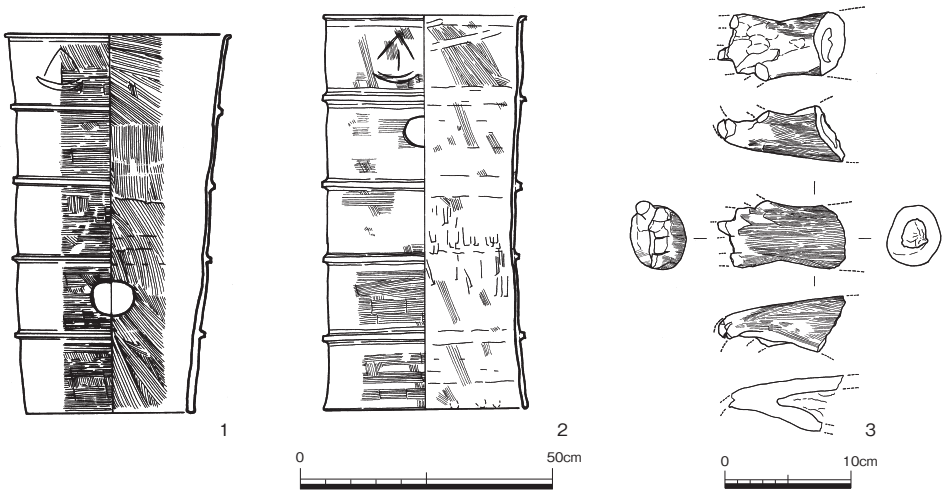


図 26　久津川車塚古墳（１：KL 群）・梶塚古墳（２：KL 群、３：人物・腕）出土の埴輪

多くの埴輪は見込めない。よって、山道古墳の埴輪生産はそれほど大規模のものではなかったと推測できる。

⑤芭蕉塚古墳　芭蕉塚古墳は墳長114 mの前方後円墳で、当古墳群では久津川車塚古墳に次ぐ規模である。円筒埴輪は、墳丘本体の埴輪列、造出上の埴輪列、外堤の埴輪列などから合計約100 個体出土している。造出からは家形埴輪、盾形埴輪、靫形埴輪が、墳頂からは家形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪、靫形埴輪が、さらにくびれ部からは鰭付朝顔形埴輪、囲形埴輪が検出されている。当古墳群において埴輪の全体像を復原しうる数少ない古墳である。

出土円筒埴輪の底部径・底部高の分布を確認すると、KL群・KS群とは分布域が異なり、底部径30cm 以上の一群と、20cm ～ 25cm 前後の小型の一群に大きく分かれることがみてとれる（図28)。そこで、やや大きな埴輪の一群をBL 群（芭蕉塚Ｌ群）とし、それより小さな一群をBS 群（芭蕉塚Ｓ群）とする。製作技術を確認するとＢＬ群円筒埴輪もＢＳ群円筒埴輪も、外面１次調整はタテハケ、２次調整はB種ヨコハケ、内面はナデののちに口縁部付近のみハケメを施す。焼成はすべて無黒斑で断面までしっかりと火が廻っている。これらから窖窯焼成によるものといえる。また、外面２次調整に用いられるB 種ヨコハケの種類は、突帯間隔の残るものではBc 種ヨコハケが最も多くみられる。一部には静止痕の傾くBd 種ヨコハケがみられる。このことから、両群ともに製作技術はb 類であり、一つの工人集団が大小２つの規格の円筒埴輪を生産している可能性が考えられる（註２）。ところで製作技術ｂ類は、窖窯焼成導入以前では小型のKS群を生産する工人集団Ｂと対応するものであった。久津川車塚古墳の埴輪生産を担った工人集団Ｂは、車塚古墳の完成後一部は梶塚古墳の埴輪生産も担いつつ、当古墳群で埴輪生産を担い続けていたものと考える。それは、製作技術が同一であることから推測できる。つまり、芭蕉塚古墳の埴輪生産を担った工人集団は、車塚古墳のKS群の埴輪生産を担った工人集団Ｂの系譜を継いでいるものと考えられるのである。

各群の埴輪の出土位置を確認すると、BL群は外堤上から、BS群は墳丘・造出から出土している。久津川車塚古墳と同じく墳丘には小型埴輪しか樹立されていない点が興味深い。

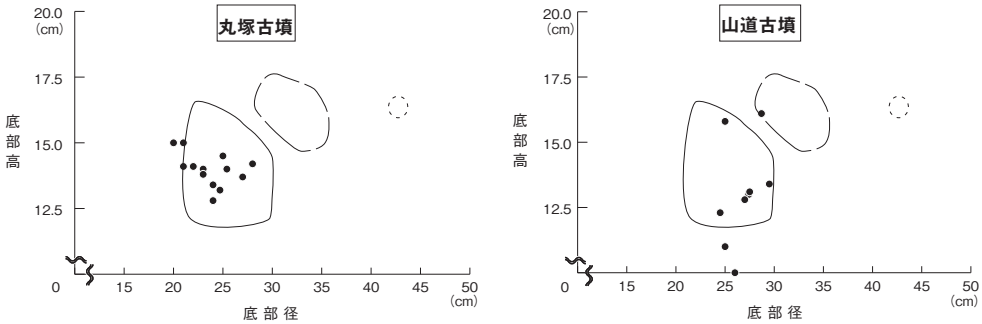


図 27　久津川古墳群出土円筒埴輪底部法量散布図（1）

表４　久津川古墳群出土円筒埴輪の製作技術比較表（２）（KS 群・BL 群・BS 群）

			KS 群		BL 群	BS 群
製作技術			b 類			
製作技法	基　部		S・Z 接合、幅約５cm			
	外面調整	１次	タテハケ			
		２次	B 種ヨコハケ			
	内面調整		ナデ＋ハケ			
	突帯設定技法		凹線			
	焼　成		野焼き（KS 群） 窯窯焼成（BL・BS 群）			
胎　土			チャート・赤色斑粒・ 長石・石英			
色　調			黄褐色			

⑥青塚古墳　青塚古墳は、芭蕉塚古墳に隣接する方墳（一辺約40m）である。大量の円筒埴輪や蓋形埴輪、盾形埴輪、靫形埴輪などの形象埴輪が出土している。数値の判明する数個体の底部径・底部高の分布は、すべて小型のBS 群円筒埴輪となる。口縁部まで判明する個体がないため全形は不明であるが、製作技術はb 類となる。胎土・焼成具合は芭蕉塚古墳と非常に似通っている。形象埴輪は科学分析がおこなわれ、両古墳の埴輪の胎土が非常に近似していることが判明しており、文様の構成や製作技術からも同じ工房の製作と考えられている（三辻・近藤・犬木2012）。円筒埴輪についても、同様に芭蕉塚古墳の円筒埴輪工人集団が生産に携わっていたと想定できそうである。

⑦芝ヶ原９号墳　芝ヶ原9 号墳は、径約25m の造出付円墳で、約30 個体の円筒埴輪と、朝顔形埴輪・蓋形埴輪・靫形埴輪・甲冑形埴輪・盾形埴輪・家形埴輪が出土している。全形の判明する円筒埴輪はないが、透孔の配置などから３条４段の埴輪が想定される。底部径・底部高の両方の判明する個体は少ないが、大半が底部径の小さなBS 群円筒埴輪に分類できる。一部に底部径・底部高ともに大きな個体が存在し、BL 群円筒埴輪も少量存在しているようである。製作技術は両群円筒埴輪ともにb 類となる。これは芭蕉塚古墳の現象と同一である。製作技術を共有する工人集団Ｂが、大小の円筒埴輪をつくり分けているものと考えられる。

⑧山道東古墳　山道東古墳は、径27m の造出付円墳で、50 個体以上の円筒埴輪のほか、朝顔形埴輪・家形埴輪・囲形埴輪・蓋形埴輪・盾形埴輪・靫形埴輪が出土している。全形の判明する円筒埴輪は、３条４段である。底部径・底部高の数値の分布は、小型のBS 群円筒埴輪となる。製作技術は分かるもの

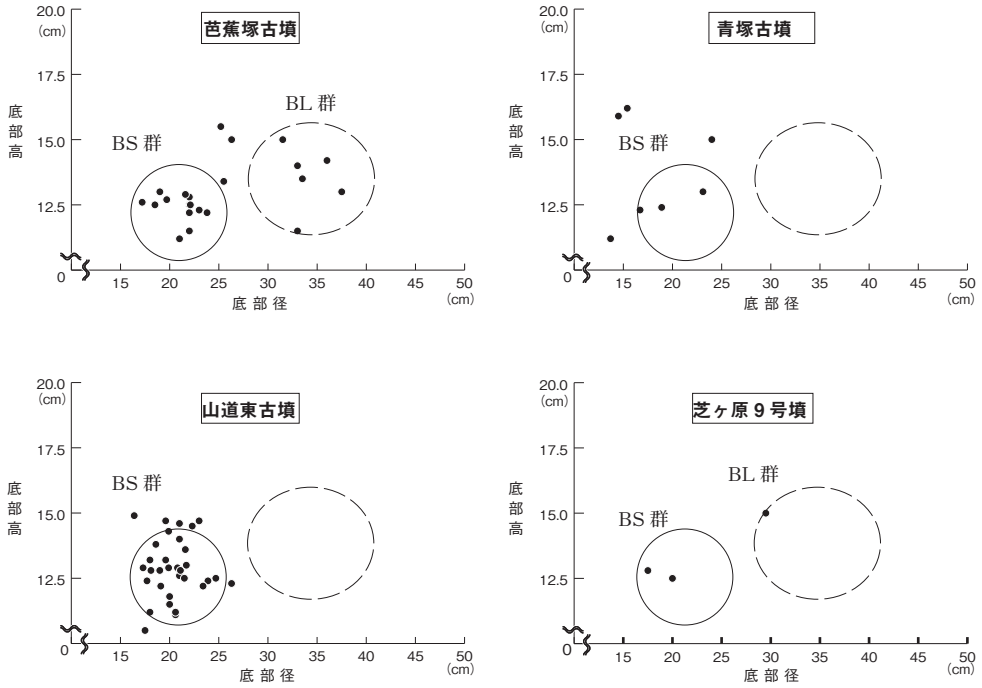


図 28　久津川古墳群出土円筒埴輪底部法量散布図（２）

ではすべてb 類である。外面２次調整は、典型的なBc 種ヨコハケが最も多く、Bb 種ヨコハケも散見する。

（３）埴輪の系統と編年

久津川古墳群に所在する各古墳の円筒埴輪を詳察することで、埴輪生産の様相が大まかにみえてきた。そこで、以下では久津川古墳群の埴輪生産を時系列に沿って考察していく。

まず、久津川古墳群の円筒埴輪を時間的に大きく区分する要素として、焼成技法がある。久津川車塚古墳、丸塚古墳は明瞭に黒斑が確認され、断面は黒色を呈しているため、野焼き焼成である。一方、梶塚古墳、芭蕉塚古墳、青塚古墳、山道東古墳、芝ヶ原９号墳は無黒斑で、断面までしっかり火が廻っているため窖窯焼成と考えられる。野焼き焼成が窖窯焼成よりも先行するため、前者の埴輪群の方が後者のそれよりも相対的に古い。

次に、中期の円筒埴輪で多く用いられている外面２次調整のB種ヨコハケの細分と、その出現頻度によるセリエーション作業を試みる。B種ヨコハケの細分は一瀬和夫によって示され、底部高の縮小と対応してその出現率が変化していくことが上田睦らによって明らかにされている（一瀬1988、上田1997）。まずはB種ヨコハケ各種の出現頻度と底部高の関係を調べる。前節までの分析で、工人集団ＢがB種ヨコハケを多用することが判明している。そこで工人集団Ｂの円筒埴輪を検討し、次に工人集団Ａの円筒埴輪についても検討する。

まず工人集団Ｂの円筒埴輪のうち、Ｂ種ヨコハケの細分が可能な丸塚古墳、芭蕉塚古墳、青塚古

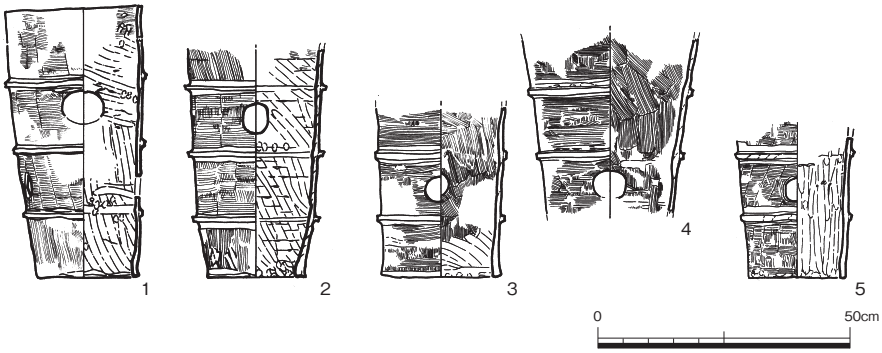


図 29　山道東古墳（1）、芝ヶ原９号墳（2）、芭蕉塚古墳（3・4）、青塚古墳（5）出土の埴輪

墳、芝ヶ原９号墳、山道東古墳を検討する。丸塚古墳では円筒埴輪の70％がBb種ヨコハケ、残り30％がBc種ヨコハケを施す個体であり、突帯間を２周以上回るヨコハケ調整が主流である。青塚古墳ではBc種ヨコハケを施す個体とBd種ヨコハケを施す個体が存在する。量比は未整理資料が多く不明である。芝ヶ原９号墳では、Bc種ヨコハケを施す個体が70％弱を占め、約20％がBd種ヨコハケを施す個体、残りは外面２次調整がない個体である。山道東古墳ではBb種ヨコハケを施す個体が約15％、Bc種ヨコハケを施す個体が80％弱、残りはBd種ヨコハケを施す個体と外面２次調整を施さない個体である。

B種ヨコハケ各種の出現頻度を比較することで以下のことが判明する。丸塚古墳はBb種ヨコハケを施す個体が主体的である。丸塚古墳の埴輪には黒斑があり、他の古墳の埴輪よりも先行するため、Bb種ヨコハケがB種ヨコハケの各種の中で最も古相を示しているといえる。次に、山道東古墳ではBb種ヨコハケを施す個体が少数となり、代わってBc種ヨコハケを施す個体が主流となる。丸塚古墳にBc種ヨコハケが施された個体が存在していることから、２次調整技法がBb種ヨコハケからBc種ヨコハケへと主流が変動したことが想定できる。さらに芝ヶ原９号墳ではBb種ヨコハケを施す個体が消え、Bc種ヨコハケが主流となる。そして、静止痕の傾いたBd種ヨコハケが登場する。このように、Bb種ヨコハケが主体を占めていたものが、次第に典型的なB種ヨコハケであるBc種ヨコハケに、さらにはBd種ヨコハケやヨコハケ調整を施さないものにその主流が変遷していく様子が確認できる。

では、底部高や突帯間隔はどう変遷するであろうか。B種ヨコハケ各種の出現率で、丸塚古墳→山道東古墳→芝ヶ原９号墳→芭蕉塚古墳→青塚古墳の順に並べられたが、まず底部高を検討する。丸塚古墳は14.0～14.5cmに頻度の山がある。山道東古墳、芝ヶ原９号墳、芭蕉塚古墳、青塚古墳では12.5～13.0cmに頻度の山がある。底部高に関しては、丸塚古墳のみが突出して高いことが分かる。よって、底部高は窖窯焼成導入前の高いものから、導入後の低いものへと変遷しているといえる。次に、突帯間隔を検討する。丸塚古墳で突帯間隔の判明するKS群円筒埴輪は存在しないため不明である。山道東古墳、芝ヶ原９号墳、芭蕉塚古墳、青塚古墳では突帯間隔が12.5cm前後に集中する。これら４古墳は底部高もほぼ等しく、ほぼ同規格の円筒埴輪が生産されていると言える。

底部高と突帯間隔では、Bb種ヨコハケが主体を占める丸塚古墳の埴輪でやや高く、Bc種・Bd種ヨコハケが主体となる４古墳が丸塚古墳よりも低い値となることが分かった。よって、Bb種ヨコハケが主体を占める丸塚古墳が先行し、Bc種・Bd種ヨコハケが主体となる窖窯焼成導入後の４古墳がそれに続

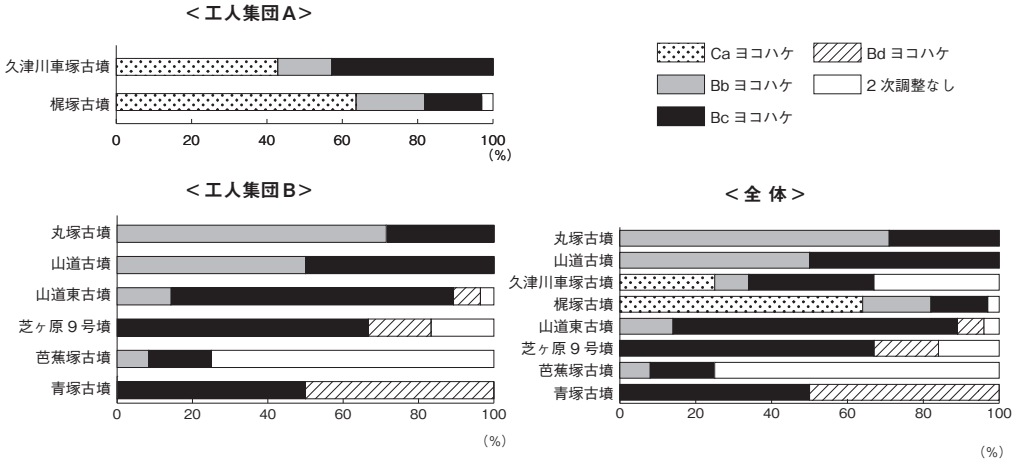


図 30　久津川古墳群出土埴輪におけるＢ種ヨコハケ各種の出現頻度

くことを追認できる。

以上の分析から、工人集団Ｂの生産した円筒埴輪の変遷が以下のように考えられる。まず、窖窯焼成以前に丸塚古墳の円筒埴輪が生産され、窖窯焼成が導入された後、B種ヨコハケ各種の出現頻度から、山道東古墳→芝ヶ原９号墳→芭蕉塚古墳→青塚古墳の順に埴輪生産が行われたといえるであろう。ただし、窖窯焼成後の４古墳については、底部高・突帯間隔といった法量が近い値を示し、生産に大きな時間差がないものと推察される。

次は、工人集団Ａの生産した久津川車塚古墳と梶塚古墳の円筒埴輪についても検討する。久津川車塚古墳はほとんどが突帯間の器壁にヨコハケ調整がなされるが、それらは器壁に明瞭な静止痕が残存しないCa種ヨコハケが主体となる。一部に、静止痕の明瞭なヨコハケがみられるがこれらも器壁を２周以上していることから、Bb種ヨコハケとなる。久津川車塚古墳のKL群円筒埴輪はCa種ヨコハケが主体で残りはBb種ヨコハケとなる。梶塚古墳では、Ca種ヨコハケを施す個体が60％強、次いでBb種ヨコハケを施す個体が約20％、Bc種ヨコハケを施す個体が約15％となる。久津川車塚古墳と同様Ca種ヨコハケが主体を占めるが、Bb種ヨコハケやBc種ヨコハケの比率も増加している。

上記の分析成果を踏まえて、検討した全古墳の円筒埴輪を時系列順に並べる。まず、焼成技法が野焼き焼成である丸塚古墳と久津川車塚古墳が相対的に古い。この二古墳の円筒埴輪の法量が全体的に久津川車塚古墳の方が大きいことから久津川車塚古墳が先行するといえなくもないが、大きな時間差は考えられずほぼ同時としておきたい。久津川車塚古墳の次に埴輪生産がなされたのは、久津川古墳群で最初に窖窯焼成を導入した梶塚古墳である。久津川車塚古墳と共通するヘラ記号を持つことから両古墳の埴輪生産の連続性は容易に想定でき、窖窯焼成の埴輪の中では相対的に古く位置づけられる。その後、山道東古墳と芝ヶ原９号墳、芭蕉塚古墳、青塚古墳と続き、中期の埴輪生産は終了する。

主要古墳の編年的位置は、久津川車塚古墳が帯金式甲冑のうち革綴式と鋲留式の両者をもつこと、大阪府誉田御廟山古墳と相似した墳形をもつことなどから和田編年（和田1987）の七期の中でも前半、須恵器型式（田辺1981）のTK73型式に位置づけられる。古市古墳群ではすでに誉田御廟山古墳で窖窯焼

成の埴輪が導入されているが、久津川古墳群への導入は一段階遅れ、次の梶塚古墳の段階となる。よって梶塚古墳は七期後半となる。芭蕉塚古墳には小札鋲留式冑、短甲（覆輪部分のみで型式不明）とそれらの付属具が、青塚古墳では横矧板革綴式短甲がそれぞれ出土している。青塚古墳の短甲は革綴式帯金式短甲であるが、地板が横矧板であり地板の中では最も新しい部類に入る。また芭蕉塚古墳の外堤からはTK73～TK216型式に位置づけられる須恵器が出土している。このことから芭蕉塚古墳が八期前半、青塚古墳が八期後半となる（註３）。

以上各古墳の埴輪の編年的な位置付けが明確となったが、以下では埴輪工人集団の動向を時系列に沿って整理してみたい（図31）。

まず、車塚古墳の造営に際して、KL群を生産する工人集団Ａ、KS群を生産する工人集団Ｂの最低２つの工人集団が組織される。近隣の宇治市金比羅山古墳、宇治二子山古墳にもⅢ期の埴輪が樹立されているが、法量や製作技術が異なることから、全く別の工人集団が活動していたと考える。久世支群のそれぞれの集団は４条５段の規格は共有させつつも、底部など法量が異なる埴輪を生産した。そして、それぞれは埴輪の供給先も異なる。工人集団Ａは車塚古墳の中堤埴輪列へ、工人集団Ｂは車塚古墳の墳丘内部と中堤埴輪列、さらには車塚古墳よりも階層的に下位に位置づけられる丸塚古墳と山道古墳へも供給する。より多くの工人集団を組織し製品の供給を受けた車塚古墳の当古墳での階層的優位性が想定できる。

工人集団Ｂがまだ車塚古墳、丸塚古墳、山道古墳への埴輪生産おこなっているうちか、終わった直後に久津川古墳群に窖窯焼成技法と人物・動物埴輪が伝わってくる。窖窯焼成技法をいち早く取り入れた工人集団Ａは、梶塚古墳の埴輪の生産を担う。ここに車塚、丸塚、山道への埴輪供給を終えた工人集団Ｂの一部が窖窯焼成技法を学ぶために工人集団Ａとともに埴輪生産をおこなう。梶塚古墳において製作技術ｂ類の埴輪が少量見られるのはこのためと考える。

ところが梶塚古墳の埴輪生産が終わると工人集団Ａは当古墳群から姿を消す。一方で梶塚古墳の埴輪生産中に窖窯焼成技法を学んだ工人集団Ｂは当古墳群に定着し、埴輪生産を継続する。工人集団Ｂは３条４段のBS群を基本的に生産するが、４条５段以上のBL群なども生産する。窖窯焼成が導入される以前は工人集団ごとに埴輪を作り分けていたのに対し、窖窯焼成導入後は一つの工人集団が大小の埴輪を作り分けるようになるのである。作り分けるとはいえども、供給する先は階層差に応じている。すなわちBL群は芭蕉塚古墳の外堤へ、BS群群は芭蕉塚古墳の墳丘、青塚古墳、芝ヶ原９号墳、山道東古墳へとそれぞれ供給されている。工人集団は一つに統合されたものの、前代に確立していた階層と場所に応じた埴輪の使い分けは踏襲されているのである。この使い分けは、今城塚古墳などの後期の大型前方後円墳においても見られることから、中期以降の大型墳においては一般的な様相であったのであろう。

（４）小結

以上、久津川古墳群各個墳出土埴輪の様相を詳細に分析してきた。以下はその成果を簡潔にまとめる。

まず、久津川車塚古墳の円筒埴輪は底部の法量からKL群・KS群・特大群の３つに大別できた。そしてKL群には製作技術ａ類、KS群には製作技術ｂ類がそれぞれ用いられて生産されている。特大群については数量が少なく製作技術の復原に至っていない。さて、本稿では各群で製作技術が異なる現象を工

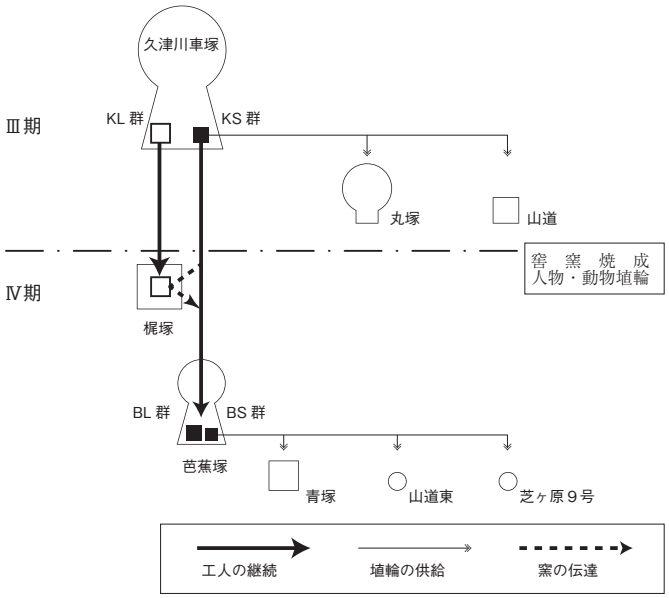


図 31　古墳時代中期の久津川古墳群における埴輪生産の様相模式図

人集団の違いに起因するものと判断した。それは、製作技術が見よう見まねでは伝達されず工人同士が近い関係にあってはじめて共有されると考えるからである。このように考えてよいのなら、KL群は製作技術ａ類を用いる工人集団Ａによって、KS群は製作技術ｂ類を用いる工人集団Ｂによってそれぞれ生産されたのである。

異なる規格の埴輪を各工人集団が生産し、車塚古墳に樹立する。KL群は中堤埴輪列に用いられ、KS群は墳丘本体と中堤埴輪列の両方に樹立される。つまり墳丘は一つの規格で統一されていたのに対し、中堤ではKL群・KS群、さらに特大群まで樹立してより装飾的に仕上げていたのである。

梶塚古墳は、墳丘・外堤の両者からKL群のみが出土している。製作技術もａ類であり、工人集団Ａが生産したものと考えられる。さらに、久津川車塚古墳のKL群と共通するヘラ記号があることから、両者の埴輪生産はほぼ同時期に同一集団によってなされたと推測した。ところが、梶塚古墳の埴輪はすべて無黒斑であり窖窯焼成が採用されている。また、外堤には人物埴輪・動物埴輪も列べられていた。このことから、工人集団が継続して埴輪を生産していても、窖窯焼成だけが技法として伝播していることが判明した。そして、窖窯焼成の伝播は単なる技法の差にとどまらず、人物埴輪・動物埴輪といった新たな埴輪の導入をも内包していることが分かった。梶塚古墳の円筒埴輪には工人集団Ｂがかかわったと考えられる埴輪も一部にみられた。これは、工人集団Ｂの一部が窖窯焼成技法を学ぶために工人集団Ａとともに埴輪生産をおこなった所産と考えた。

工人集団Ａは梶塚古墳の埴輪生産を終えると当古墳群から姿を消し、工人集団Ｂが当古墳群での埴輪生産を担うこととなる。芭蕉塚古墳の円筒埴輪は底部の法量からBL群・BS群に大別できた。その両

者ともが製作技術ｂ類、すなわち工人集団Ｂによって生産された。規格の違いは古墳の中で使用される位置と対応していた。BL群は外堤に、BS群は墳丘にそれぞれ使用され、外側ほど大型の埴輪を樹立するのである。

また、この埴輪の大小は古墳の階層差をも反映しており、芭蕉塚古墳以外の青塚古墳、山道東古墳、芝ヶ原９号墳では基本的にBS群のみが供給されている。

このように、古墳時代中期の埴輪生産と埴輪の使用は、古墳での使用される位置と、古墳自体の階層差を反映させる装置としての役割が大きく、それに左右されていたといえるであろう。では、次章では久津川古墳群の埴輪生産・埴輪使用の様相が一般的であるのかを検証したい。そして、前後の時代と比較することによって古墳時代中期の埴輪生産の特徴を明確にしていきたい。

３．古墳時代中期の埴輪生産の特質

（１）他の古墳群との比較

①古市古墳群　天野末喜（天野1994）は、同古墳群出土埴輪を大型・中型・小型に分類し、各古墳のどの位置でどの大きさの埴輪が使われるかを分析している。Ⅱ期の津堂城山古墳（前方後円墳、約210m）においては、外堤で中型を基本としつつ要所々々で大型の埴輪を樹立し、墳丘には中型が樹立されたとする。Ⅲ期の仲津山古墳（前方後円墳、約290m）ににおいても津堂城山古墳と同じ様相がみられた。

ところが、窖窯焼成が導入されたⅣ期になると誉田御廟山古墳（前方後円墳、約425m）は墳丘内部の状況は不明であるが、外堤では大型の埴輪のみで構成される。同時期のはざみ山古墳（前方後円墳、約103m）でも外堤は大型の埴輪のみで構成され、墳丘には中型の埴輪が樹立される。時期が下り市野山古墳（前方後円墳、約230m）では大型埴輪の径と高さの縮小によって中型との法量差がなくなり、外堤に樹立されるようになる。

さらに、笠井敏光と吉田珠己（笠井・吉田1992）は墳丘の形と規模と使用される埴輪の対応関係をチェックした。基本的には前方後円墳とその他の墳形の間に格差があることを見出している。Ⅲ期には前方後円墳＞円墳＞方墳の順に使用される埴輪の法量が小さくなるが、Ⅳ期前半には前方後円墳≧方墳となり、さらにⅣ期後半には前方後円墳・帆立貝形古墳＞円墳・方墳となり、方墳の埴輪は相対的に法量が小型になる。

このように古市古墳群においては墳丘に応じた埴輪の使い分けが古墳時代中期を通して貫徹している。ただし中期を通して等質だったというわけではなく、時期ごとに複雑な様相を呈していたのである。

では使い分けられる埴輪がどのように生産されたのであろうか。高橋克壽（1994）は、Ⅲ期の間は埴輪の規格ごとに製作技術差があることから、別の工人集団がいると想定している。ところがⅣ期以降は大小の規格間の製作技術差が解消され、「大王墓の埴輪生産者を頂点とする階層的な機構」が整備されるとしている。

古市古墳群の埴輪生産の様相は簡潔にまとめると、Ⅲ期の間は埴輪の大小の規格ごとに工人集団が組織されていたが、Ⅳ期になると大王墳の埴輪生産集団が頂点にいつつも、一つの工人組織として統合

され、埴輪の大小を作り分けるようになるということになる。

②三島古墳群　次に摂津の三島古墳群の埴輪生産を検討する。太田茶臼山古墳および周辺の埴輪を有する古墳への埴輪の供給は、新池埴輪窯から行われていたことが判明している。田中智子は、太田茶臼山古墳、小型方墳群の総持寺古墳群と新池埴輪窯の埴輪を比較している（田中2005）。ハケメパターンの分析などから、太田茶臼山古墳と総持寺古墳群には、埴輪の規格が異なるにもかかわらず、明らかに同じ工人集団によって製作された埴輪が供給されていたことが判明した。このことから、同一工人集団が異なる規格の埴輪を生産していたことが明らかになった。新池埴輪窯での埴輪生産の様相は、久津川古墳群の窖窯焼成導入後の埴輪生産と類似している。窖窯焼成が導入された後の埴輪生産は、埴輪の大小を一つの工人集団がつくり分け、基本的にはすべて同じ埴輪を供給していたことが想定される。しかし、太田茶臼山古墳や芭蕉塚古墳のような大型古墳には大型の埴輪も生産・供給していたのであろう。

以上、久津川古墳群と古市古墳群、三島古墳群の埴輪生産を比較することによって、古墳時代中期の埴輪生産の実態が明らかとなった。つまり、窖窯焼成導入以前は、埴輪の規格に応じて埴輪が別個生産されていた。窖窯焼成の導入によって、埴輪の規格に関係なく同一工人集団が一括して埴輪を生産・供給していたものと推測できる。一見複雑な埴輪の生産・供給システムが、窖窯焼成の導入によって組織化され、より生産的になったのであろう。

ところで、加藤一郎は古墳時代中期の埴輪生産について、Ⅲ期の奈良県コナベ古墳とⅣ期の大阪府百舌鳥御廟山古墳の円筒埴輪を詳細に分析し、両古墳とも規格の異なる埴輪に同一のハケメパターンが存在することから、同一工人集団による埴輪生産がⅢ期以降に一般化していると説く（加藤2013）。近畿地方において大型古墳の埴輪生産の実態が判明した稀有な例である。特に、Ⅲ期の段階からすでに同一工人集団による大小のつくり分けが判明した点は大きな成果である。しかし、佐紀古墳群の埴輪生産像と百舌鳥古墳群の埴輪生産像の共通項から、古墳時代中期の埴輪生産が同一とみる点にはやや疑問が残る。なぜなら、古墳時代中期には各古墳群ごとに埴輪工人集団が組織されたと推定でき、その変遷を追うことではじめて他の古墳群と比較できると考えるからである。

（２）古墳時代前期・後期との比較

①古墳時代前期　古墳時代前期の埴輪生産については、生産地が特定できず、また分析事例も一部の古墳に限られており実態は不明な点が多い。とはいえ、少数ではあるが分析事例が蓄積されており、廣瀬覚による京都府向日丘陵古墳群、兵庫県五色塚古墳などの検討から概ね復原できる（廣瀬2000、2007など）。向日丘陵古墳群では、古墳築造のたびに大和東南部から埴輪生産の内容が断続的に持ち込まれた可能性が指摘される。向日丘陵古墳群では、古墳時代前期初頭から古墳築造を継続していても、埴輪生産は連続しておらず、工人集団の固定化がみられないのである。前期後葉の五色塚古墳では、中小古墳の埴輪生産組織に対応する小グループがいくつも統制され、大規模な埴輪生産を行っていた可能性が考えられる。前期から中期初頭の中小古墳の埴輪が形態的・技術的に均質的であるのは、この小グループを介して埴輪や製作技術が伝播したことに起因することが推察されるのである。つまり、古墳時代前期においては、埴輪工人集団が固定化されず、大和東南部などの王権中枢との交流を通して埴輪生産が伝播していたと推測されるのである。前期後葉のⅡ期の円筒埴輪については、極めて高い斉一性を持つことから、ある程度工人が固定化されていたことが推測されている（高橋1994）。Ⅱ期の実態が判然とし

ない状況ではやや勇み足となるが、Ⅲ期以降、古墳群で埴輪生産が固定化する過渡的な様相を示しているものと考えておきたい。

②古墳時代後期　古墳時代後期については、筆者らが行った京都府物集女車塚古墳の分析をもとに生産体制像を想定できる[註4]（原田・渡井2011）。物集女車塚古墳では、埴輪の条段構成や再下条突帯に断続ナデ技法Ｂを用いる点などは共通する。断続ナデ技法やその他の調整技法を細分し、まとめると複数の工人の関与が復原できた。しかし実見したかぎりではすべての個体でハケメパターンが共通する。兄弟工具等を含めて工具が１つかどうかは遺存状態が悪く判然としなかったが、ハケメパターンが共通するほど工人同士の距離が近いことが考えられる。

また、４次調査19ｂトレンチ出土のＨ１Ｅは他の円筒埴輪と比較して器壁も薄く、再下条の断続ナデ技法Ｂによる突帯も丁寧で、底部調整も入念に行われている。断続ナデ技法Ａを用いる２条目以上の突帯も丁寧で、かつ突帯間隔もほぼ揃い全体に整った印象を受ける。しかし、その他の埴輪では、再下条突帯が器壁を１周する間に水平を逸して始点と終点で高低差が生じていたり（同トレンチＨ１）、底部調整を行わないために底部に歪みが生じていたり（同Ｈ３）と埴輪生産に熟練していない印象を受ける。報告書では言及しなかったが、Ｈ１Ｅのような埴輪を製作できる工人が、物集女車塚古墳の埴輪生産のために緊急に組織された地元の土器づくりを担っていた人々に技術を伝え、生産されたものと考えている。千葉県山倉古墳群においては、小橋健司によって「エース工人体制」が想定されている（小橋2004）。エース工人体制とは、埴輪生産の熟練した１人の工人が埴輪生産の大部分を担い、エース工人のみでは生産が追いつかない場合にそれ以外の工人が関与するというもので、エース工人の生産した埴輪が大多数を占める。物集女車塚古墳では、熟練した工人の手によるＨ１Ｅのような埴輪が突出して数が多いということはなく、破片を含めてＨ１Ｅと共通しない「未熟」な埴輪の方が圧倒的に多い。埴輪の胎土を観察すると基本的にすべての個体がチャートを多く含むため地元の粘土と想定でき、ハケメパターンも共通するため、Ｈ１Ｅのみが他所から運ばれたということは考えられない。よって、山倉古墳群のようなエース工人が埴輪生産が大部分を担うという構造はとらないが、Ｈ１Ｅを製作できる工人が物集女車塚古墳の埴輪生産にあたって他所から派遣され、地元で埴輪生産組織を組織したものと考えうる。Ｈ１Ｅの埴輪製作技術がどこから系譜をたどれるかについては今後の検討課題であるが、古墳時代後期の近畿地方においては工人や埴輪の移動が活発で、古墳群を超えた広がりを見せている可能性が高い。

４．結論

以上、久津川古墳群の埴輪生産の分析と他古墳群、前後の時期との比較を通して古墳時代中期の埴輪生産の様相がより明確になった。以下ではその要点を簡潔に述べて論を収斂させる。

①古墳時代中期前半のⅢ期では、埴輪の大小を異なる工人集団を組織して作り分けていた。これは製作技術差からも想定できる。ところがⅣ期になると埴輪の大小を一つの工人集団が作り分けるようになる。この現象は久津川古墳群と古市古墳群において確認でき、中期後半の様相は三島古墳群でも確認できる。よって、窖窯焼成の導入によって埴輪工人集団・工人組織が再編され、より統制のとれた生産体制へと変化したと考える。

②古墳時代中期の久津川古墳群に樹立された埴輪は、製作技術の連続性から継続的に埴輪生産を担った工人集団によって生産・供給された。古墳時代前期のように古墳築造のたびに工人集団を組織する一回性の生産ではない。

③中期の埴輪をⅢ期とⅣ期を画する要素は焼成技法の差のみととらえられてきたが、窖窯焼成の導入にともなって人物埴輪・動物埴輪も古墳に樹立するようになる。つまり埴輪「様式」の一大転換期であり、大きな画期といえる。

④古墳時代中期の埴輪の大中小は、先学の明らかにしてきたように墳丘の形と規模による階層差と対応して使い分けされる。ただし、大型古墳には大型のみ、小型古墳には小型のみという単純な図式ではなく、大型古墳には大・中・小すべて、小型古墳には小のみといった使い分けがある。また、墳丘に樹立される埴輪ほど小さく、外堤ほど大きな埴輪が使われる傾向があり、これは中期前方後円墳においては一般化できる。しかしこの使い分けは、埴輪が時代の経過とともに小さくなり規格が明瞭でなくなるにつれて解消される。

ただし、今城塚古墳では墳丘の埴輪より内堤外側の埴輪が大きな傾向があり、後期の大王墳においては中期の埴輪の使い分けを踏襲している可能性が高い。

⑤古墳時代中期の埴輪は古墳群ごとに生産された可能性が高い。それは、久津川古墳群久世支群に隣接する広野支群において造営される金比羅山古墳と宇治二子山古墳の円筒埴輪が全く別の工人集団による生産と考えられるからである。つまり工人集団の違いは、首長の政治・経済領域の違いを反映している可能性が高く、古墳群の範囲を認定し、首長系譜を検討していく根拠として使用できる。このように考えると、久世支群と広野支群の造墓主体はまったく別のものと考えられる。

おわりに―課題と展望―

久津川古墳群平川支群の埴輪生産を丹念に分析したことで古墳時代中期の埴輪生産の一面が明らかになったが、下記の点が課題として残った。

第一に、前期から中期、中期から後期への埴輪生産体制の変遷過程の解明である。前期から中期の埴輪生産に連続性が見られるのか、それとも全く別のものであるのかを検討する必要がある。特に、久津川車塚古墳に引きつけて考えると、車塚以前の埴輪や近隣古墳の埴輪と製作技術の連続があるかが鍵となる。また、同様に中期後半から後期への変化の中で埴輪生産体制がどのように変わるかが明らかにされる必要がある。中期後半から後期にかけては古墳の動向から、社会に大きな変化が起こった時期と考えられており、この変化が埴輪生産の変遷を追うことで明らかにしうると考えられる。

第二に、窖窯焼成と人物・動物埴輪の各地への導入過程である。久津川古墳群では窖窯焼成の導入と人物・動物埴輪の導入がセットとして捉えることができた。この現象が他の古墳群・古墳においても一般的であるのかを検証していく必要がある。

第三に、古墳時代を通した埴輪の大小、使い分けの変遷を追うことである。古墳時代中期に完成する大型前方後円墳の埴輪樹立方式がどのように展開していくかを通時的に検証して区別する必要がある。

以上の課題は今後の検討としつつ、本章を終える。

註

1　車塚古墳17次調査（外濠南側東寄り）で検出された埴輪棺および97年度調査で検出された埴輪の中に、KL群、KS群、特大群のいずれにも該当しない個体がある。これらはいずれも製作技術もａ類・ｂ類のどちらにも当てはまらない。車塚古墳に本来樹立していたか、芝ヶ原10号墳から何らかの理由で運ばれた可能性が指摘されている（小泉・廣瀬1998）。

2　胎土分析によれば、大型品と小型品の粘土は採取地が異なるとされる（三辻ほか2012）。本稿では製作技術がすべて同じであることから、同一の工人集団によるものと考えるが、今後詳細な分析を継続した結果別の工人集団による製品となる可能性はある。いずれにしても、大型品と小型品を生産した工人が製作技術が共通するほどに近い関係にあったことは否定できない。

3　青塚古墳の短甲については、三角板革綴短甲と横矧板鋲留衝角付冑であるということを、阪口英毅氏よりご教示いただいた。

4　後期の埴輪生産については、特に関東での事例が蓄積されている（犬木1995、城倉2009など多数）。生産地と消費地の両方をおさえた分析には説得力があり、参考すべき点が多い。畿内においても少しずつ分析が蓄積されつつあるが、全体を把握するには至っていない。今後、畿内における後期の分析事例が増加することでより後期の埴輪生産の実態が解明するものと考える。

第５章　中期大型古墳群の埴輪生産（２）－兵庫県西条古墳群の分析

はじめに

加古川下流域は、日岡山古墳群や西条古墳群などの大型古墳群があるだけでなく、竜山石製石棺の産出地であること、奈良時代に記述された『播磨国風土記』の存在などから、古代の「播磨」を考える上で重要な地域といえる。

当地域の古墳は、古くから認識され、たびたび議論の俎上にのせられるが、資料的制約もあり詳細な検討がなされてこなかった。この20年で、行者塚古墳や時光寺古墳など重要な古墳の発掘調査がおこなわれ、埴輪が大量に出土した。検討材料が出揃いつつある現在、当地域の埴輪を改めて検討する必要が出てきている。

本章では、西条古墳群に所在する人塚古墳の埴輪の分析を中心に据えつつ、加古川下流域の埴輪との比較を通して、当地域の埴輪生産について明らかにしていきたい。

１．対象地域の古墳の概要（図32）

加古川下流域には、埴輪の有無はあるものの多くの古墳が築造されている。まずはその概要を整理したい。左岸域には日岡山古墳群と西条古墳群の２つの古墳群があり、ほかにも東沢１号墳などのように単独で築造される古墳も存在している。岸本道昭の先行研究（岸本2000、2013など）から、西条古墳群の西条52号墓が庄内式期に築造され、前期から中期にかけては日岡山古墳群に、中期には西条古墳群に、後期には右岸域に造営の中心がそれぞれあることが判明している。ただし、後期の群集墳を除いては詳細な時期を決定できる要素に乏しく、あくまで墳形や一部判明している副葬品等を総合的に見た上での配列に過ぎない。これらの古墳の中で埴輪をもつ古墳はさらに少なく、確実な出土資料を有するのは、日岡山古墳群では北大塚古墳、西条古墳群では行者塚古墳・人塚古墳・尼塚古墳、東沢１号墳、右岸域の里古墳・西山大塚古墳、カンス塚古墳となる。

なお、生産遺跡としては、淡輪技法の普通円筒埴輪や石見型埴輪を焼成したと考えられる坂元遺跡が調査されているが、供給先が不明である。

２．人塚古墳の埴輪について（図34～38）

以上のように、加古川下流域の古墳のうち、確実な出土資料は希少である。そこで、まずは最近調査された西条古墳群・人塚古墳の出土資料について検討を加え、その分析を主眼に据えて、加古川下流域の埴輪生産を考えたい。

①　人塚古墳の概要

人塚古墳の発掘調査は主に、平成20・22・25年度の計３次おこなわれている。第１次（平成20年度）調査は、墳頂からの十字の調査区、第２次（平成22年度）調査は南東「くびれ」部調査区、第３次（平成25年度）調査は南西「くびれ」部の調査区である。発掘調査の成果から、墳丘は２段築成、第１段の大部分は地山成形で斜面の葺石はなし、第１段平坦面に埴輪列めぐる（残存は南東くびれ部調査区の

図 32　加古川下流域の主要古墳・遺跡分布図（『尼塚古墳』を改変）

明治29年測図大正12年修正　大日本帝国陸地測量部発行　五万分一地形図「高砂」

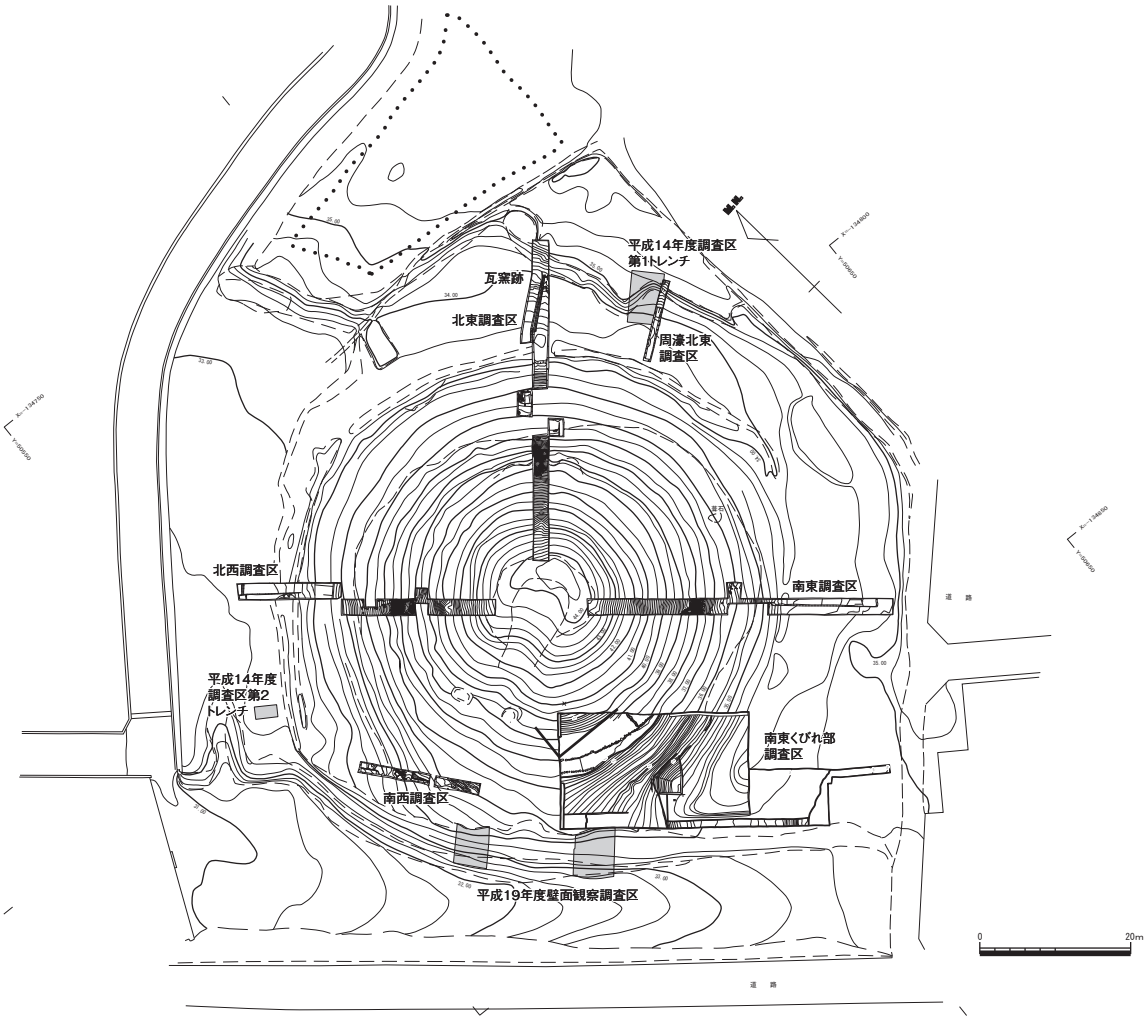


図 34　人塚古墳　墳丘測量図・調査区配置図

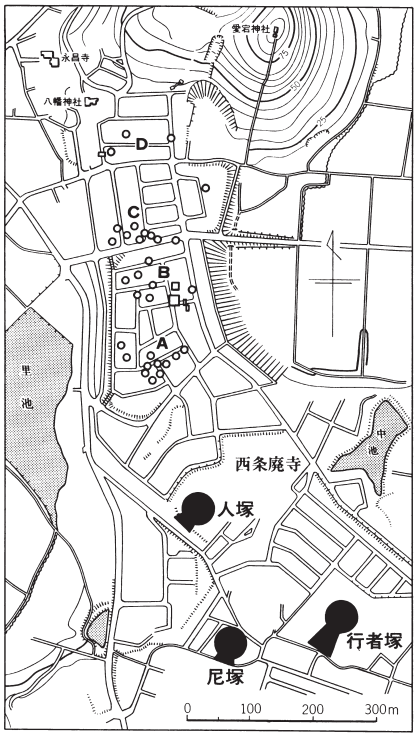


図 33　西条古墳群古墳分布図
（『加古川市史』４より）

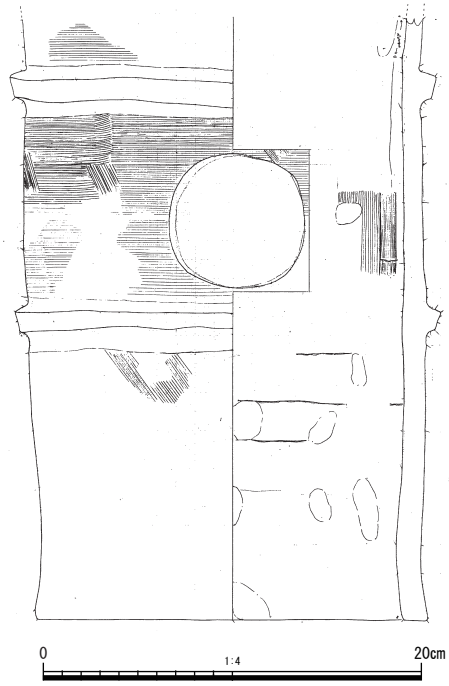


図 35　人塚古墳　出土円筒埴輪

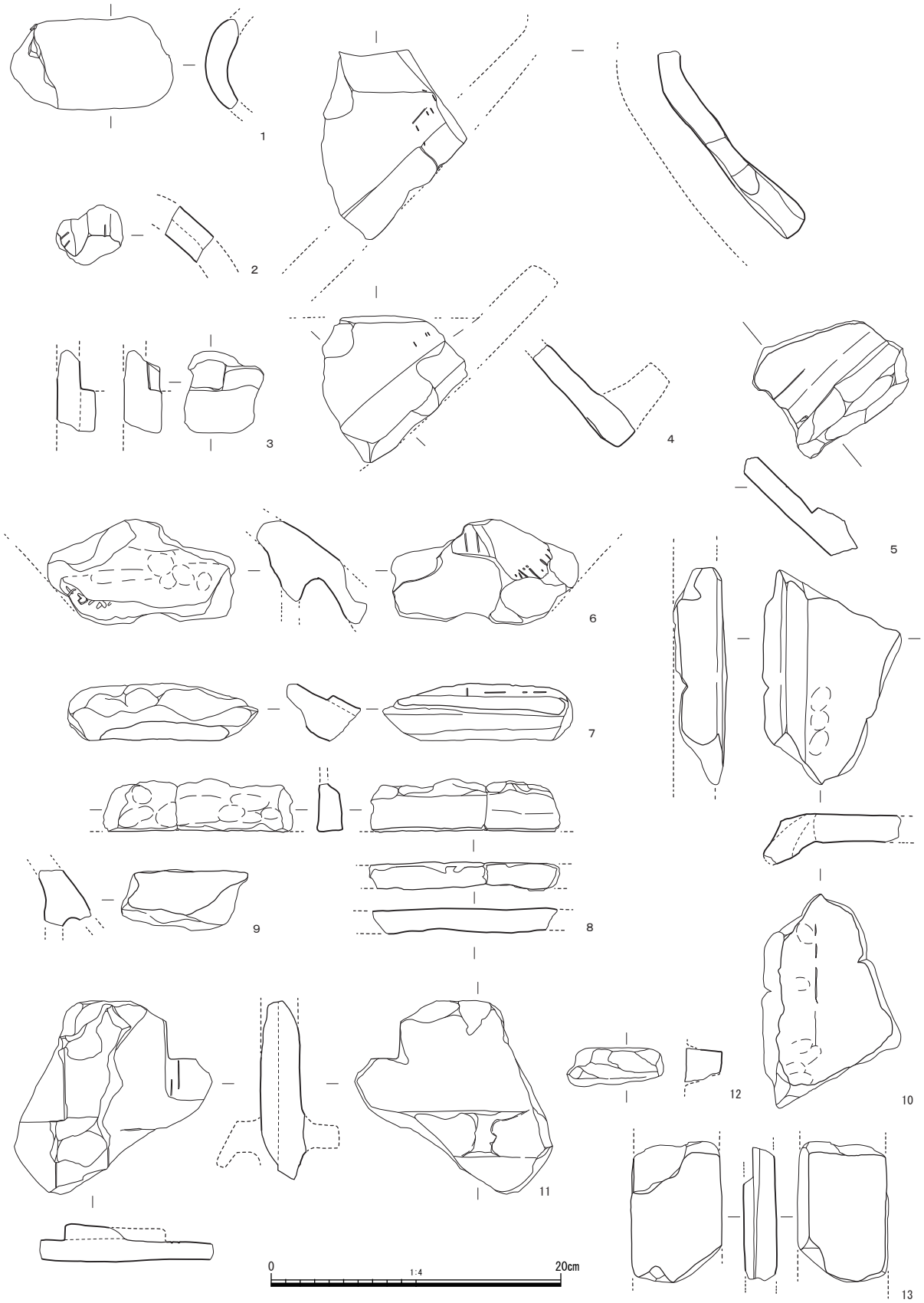


図 36　人塚古墳　出土形象埴輪（1）　家形埴輪

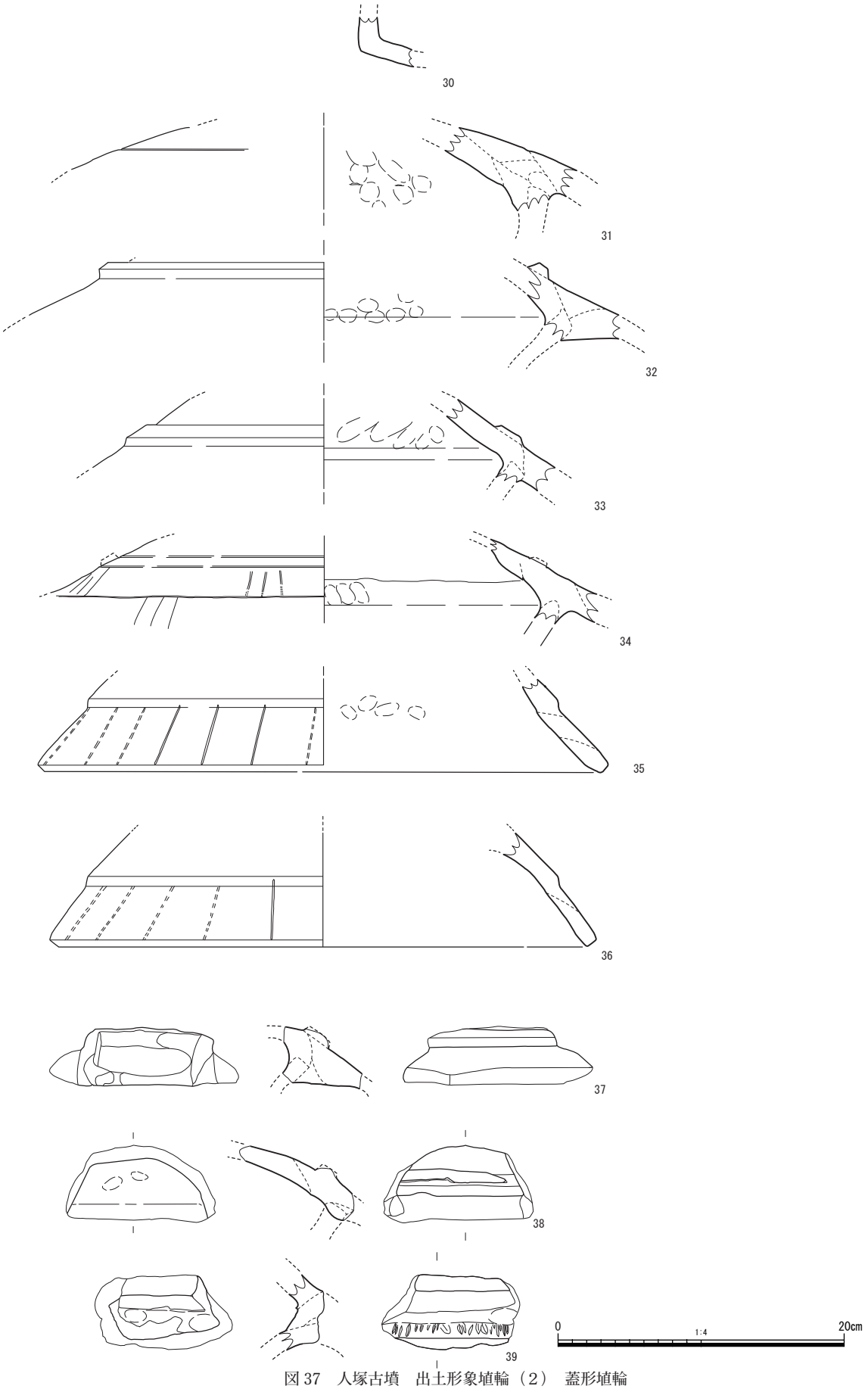


図 37　人塚古墳　出土形象埴輪（２）　蓋形埴輪

図 38　人塚古墳　出土形象埴輪（３）　各種器財・鶏形埴輪

み）、第２段は葺石を施す、南西方向に前方部状の突出部の存在の可能性、その北側にも突出部（造り出しか？）が存在する、という構造が判明し、墳丘径は約50m、高約11mに復元できる。

埴輪は各調査区より出土しており、原位置をたもった埴輪列は南東・南西調査区で検出している。ただし、墳丘の削平が著しく全形を復元できるほどの個体はなく、破片も小片ばかりである。

円筒埴輪は、黒斑を有し、外面２次調整にＢ種ヨコハケを用いている。墳丘埴輪列資料のうち、南西調査区（造り出し）上の埴輪（図35）の残存がもっともよい。ただし、この個体はほかの墳丘平坦面埴輪列資料と比較して径が小さく、また底部高が高く、様相が異なっている点が注意を要する。当個体（図35）は、２段目の対向する位置に円形の透孔を穿つ。２段目外面の１次調整はナナメハケ、２次調整は風化のため判然せず静止痕は確認できないが、連続する横方向のハケメの流れが変化する箇所が確認できる。また、ハケメの切り合いから１段中を２周以上していることが確認できる。内面は、ナデおよびハケである。ほかの個体は底部高が判明する個体が数点存在するのみで、全形は不明である。Ｂ種ヨコハケ（細別は不可能）を施す個体の破片が存在する。

形象埴輪はすべての調査区から出土しているが、特に南東くびれ部調査区での出土が多い。調査面積の関係もあろうが、前方部とされる部分に形象埴輪が配置されており、それらの破片がくびれ部から出土したものと考えられる。そのほかの調査区では、基本的に上段斜面など墳頂平坦面からの転落と考えられる出土状況の破片が多い。そのため墳頂平坦面には形象埴輪が配置されていたものと推測できる。ただし、それらの構成や数量は不明である。次に各形象埴輪の観察所見と特徴を述べる。

家形埴輪（図36）　家形埴輪は、胎土や色調等を総合して個体識別を試みたが、個体数、建物構造の正確な復元には至っていない。

１は切妻造もしくは入母屋造の屋根部で、頂部に近い。破風板が剝離しており、ヘラ状工具による刻みが入る。頂部付近は風化が進んでおり、鰭や堅男木の有無は確認できない。

２は風化が著しく確証はできないが、板状の粘土が一定の面積残っていることから屋根部と判断した。

３は屋根部である。押縁突帯が残存する。押縁突帯の上部には網代表現と考えられる線刻が一部残存する。

４は屋根部で、身舎部との接合部分である。屋根部は破風板が剥離しており、１と同様に刻みが残る。身舎と屋根は別づくりであり、屋根部裏面の身舎と接合する部分に刻みを入れて、接着を強めている。

５は屋根部で、身舎部との接合部分である。風化が著しく文様・調整とも判然としない。

６は風化が著しく確証はできないが、板状の粘土が一定の面積残っていることから屋根部と判断した。

７は身舎部の方柱を表現した粘土板である。２枚の粘土板を重ねている。左右は透孔部である。表面は丁寧になでられ、線刻は確認できない。

８は壁体部である。７と同様に柱は粘土板を複数枚重ねることで立体的に表現している。内外面のほぼ対応する位置に粘土の剝離した痕跡がみられる。この部位より下方にも柱表現が続いている。このことから、高床建物を表現している可能性がある。

いずれの個体も全形を復元できるほどではないが、高床の大型建物を表現した家形埴輪であった可能性が高い。屋根構造は切妻造りのもののみが出土している。いずれの破片も墳丘斜面や葺石の上面から出土していることから、墳頂に配置されていた可能性が高い。

靫形埴輪（図38）　靫形埴輪と考えられる個体は、６点存在している。

40は背板部と考える。風化が著しく、文様や調整は不明である。

41は矢筒側面の鰭部と考える。矢筒部とは直角に接合する。上部には粘土を削り出して段差を作り出す。下部には線刻が施されている。

42は矢筒側面の鰭部と考える。半円形に削り出した粘土板の縁に沿って弧線を刻む。半月状粘土板の裏面には粘土の剥離痕跡がある。円筒部からの支持粘土があった可能性がある。

43は背板部と考えられる。二重の弧線の内側に円弧の中心部に向かう平行線が充てんされている。

44は矢筒部と考えられる。横帯を粘土板で表現し、その中に梯子状の線刻を入れる。

いずれの個体も全形を復元できるほどではない。基本的に粘土紐の貼り付けや削り出しによって段差を立体的に表現している。

盾形埴輪（図38）　盾形埴輪は、主に線刻から個体識別を試みたが、いずれの個体も完形には復元できず、全体の規模や形状を推定することはできない。

45～55はすべて盾面である。円筒部に粘土板を張り付けて盾面を平坦に作っている。円筒部の突帯がつく部分から盾面の裏面にかけては支持粘土がつく。文様は綾杉文・複合鋸歯文・平行線文によって構成される。綾杉文は基本的に外周に入れられる（48・51・52・53）が、下端にのみ平行する１条の線を入れる個体（46）がある。複合鋸歯文は外周綾杉文の内側が入れられる。中軸線を入れる個体（49）と、入れない個体（45・46・47）がある。また鋸歯文には、内向のもの（45・49）と、外向のもの（46・47）がある。

これら文様の組み合わせから、複数の種類の盾形埴輪が存在した可能性がある。製作技法上の特徴は、円筒部の外面を盾面として利用し、盾面が大きく湾曲せずほぼ平坦であることとなる。このことから、田中秀和による断面形分類のＣ類に属する（田中1994）。ただし、盾面の頂部が山形であるのか平坦であるのかは不明である。

文様構成は、外区に鋸歯文を、内区には菱形文か鋸歯文を、内外区の分割界線に綾杉文か平行文をそれぞれ配している。外区の鋸歯文は外向きのものと内向きのものの両者があるが、基本的に同じパターンで、小栗明彦の鋸歯文分類（小栗2004）のＤⅢa類に該当する。

蓋形埴輪（図37）　蓋形埴輪は、布張り表現や中位突帯、製作技法といった要素から、最低でも２種類存在したと考える。

30は軸受け部下端部である。軸受け部下端突帯は見られない。

31は笠部の破片である。台部の延長で笠上半部を成形し、その後、笠下半部を接合している。笠下半部と基部の隙間には、補強のための粘土が充填されている。中位突帯は幅２cm程である。剥離痕から台部と笠部の接合部分より上に貼り付けられていることが確認できる。笠部の布張り表現は上半部に３条１セットの沈線が確認できることから、線刻による表現であることが確認できる。

32も笠部の破片である。笠部の端部付近に段差をつけている。段差以下の部分は幅３cmおきに１条の沈線が施される。

33は32と同様の型式である。

34は笠部の破片である。台部の延長で笠上半部を成形し、その後、笠下半部を接合している。笠上半

の成形の際のナデが内面に残っている。１と同様、笠下半部と基部の隙間には粘土が充填される。中位突帯は幅２cm程でやや突出している。笠下半部よりやや上に貼り付けられる。

35は笠部の破片である。台部の延長で笠上半部を成形し、その後、笠下半を接合している。中位突帯は風化のためもあろうが、他の中位突帯をもつ個体より、幅が狭く、あまり突出しない。台部と笠部のほぼ直上に接合される。

蓋形埴輪は小栗明彦による分類の「有立飾無肋木形式」に属する（小栗2007）。破片ではあるが立ち飾りと思われる個体が１点出土している。笠部の布張り表現は上段に３本の線刻を施すものがみられる。

また、笠端部に段差をつけ、そこに１条の線刻を幅３cmおきに施す個体も確認されている。このような特徴は「有立飾無肋木形式」にないものであって、別形式の蓋形埴輪と考えられる。行者塚古墳に類例が認められる。笠部と台部の接合に際し「津堂城山タイプ」（松木1990）を採用している個体が確認できる。

鶏形埴輪（図38）　58～60は鶏形埴輪と考えられる。58・59は翼と考えられ、表面には平行線で羽を表現する。体部から剝離した痕跡が裏面に確認できる。60は筒尾部と考えられる。頂部付近に近く、尾部突帯が剥離している。表面は平行線文が入れられるが、数条の平行線は尾部突帯の剥離痕と平行している。頭部や脚部が出土していないため確定はできないが、鶏形埴輪である蓋然性が高い。上段の葺石上や上段斜面から出土しており、墳頂に配置されていたと考えられる。

以上、人塚古墳の形象埴輪に特徴を述べてきた。破片のため断定はできないが、靫形埴輪には段差を粘土紐で立体的に表現する個体が認められる点、家形埴輪に大型建物が認められる点が特徴といえる。

②西条古墳群のなかでの位置付け（図39～41、表５）

円筒埴輪は、行者塚古墳・尼塚古墳ともに出土している。行者塚古墳の埴輪は黒斑を有するが、尼塚古墳は無黒斑である。そこでまず、人塚古墳同様に黒斑を有する行者塚古墳と比較を試みる。

行者塚古墳の資料（図40）は、報告書に記載されたものが、４条５段、２・４段目に円形透孔を千鳥配列、外面は、１次調整タテハケ、２次調整ヨコハケ、内面調整はナデおよびハケである。法量は、表５に記載した。底径や底部高は人塚古墳と近い個体も存在するが、これは行者塚古墳における小型品である。人塚古墳の個体が完形に復元できないため比較は困難であるが、両古墳の埴輪には形態的、技法的な共通点が多く、さらには胎土・焼成もほぼ同質である。人塚古墳の完形資料がまたれるが、両古墳の円筒埴輪は、ほぼ同時かつ近しい関係の工人集団が生産をになっていた可能性が高い。

尼塚古墳の円筒埴輪（図41）は、全形が復元できず、さらに風化が著しいために調整も不明瞭である。諸要素を総合していくと、法量が復元できるが、いずれも行者塚古墳および人塚古墳の資料よりも小さな数値が導き出せる。また、尼塚古墳のみ黒斑を有しておらず、科学分析によって厳密に判断する必要はあるものの肉眼では胎土も若干異なっている。尼塚古墳は行者塚古墳および人塚古墳とは、型式学的に距離がある円筒埴輪が生産されており、これは、工人集団が別である可能性を考える。

次に形象埴輪を比較する。西条古墳群において形象埴輪が出土している古墳は、人塚古墳と行者塚古墳である。尼塚古墳からも蓋形埴輪と考えられる破片が出土しているが、細片のため比較が困難である。行者塚古墳では墳頂や各造り出しにおいて多くの形象埴輪が検出されており、また全形も復元できる。

よってここでは、行者塚古墳の形象埴輪との比較をおこなうことで、人塚古墳の形象埴輪を位置づける。

家形埴輪では、人塚古墳において高床の大型建物があるのに対し、行者塚古墳においてはそれがない。ただし行者塚古墳の家形埴輪は、形式や規模にバリエーションが多く、家形埴輪が群として配置されている状況が復元されている。単純に大型建物の有無のみで、階層差や時期差を述べることは難しい。むしろ破風板の接着技法などの製作技法において共通点があるため、両古墳の工人が何らかの関係を有していた可能性を指摘しておきたい。

蓋形埴輪では、両古墳ともに共通する型式の個体が出土しており、また製作技法も類似している。人塚古墳には立飾りと考えられる破片があるが、すべての個体に立飾りはついていない可能性が高い。

靫形埴輪・盾形埴輪も、両古墳ともに共通する文様表現があり、製作技法も共通している。両古墳の靫形埴輪の中には、粘土紐によって段差を表現する個体が存在している。

鶏形埴輪は、頭部などの出土ではないため確定はできないが、人塚古墳にのみ存在する。

以上から、各形象埴輪は行者塚古墳と人塚古墳で共通する要素が多いことがわかる。これは、両古墳の埴輪工人が情報を共有できるほど近い距離でほぼ同時期に製作したことを示している可能性が高い。人塚古墳の形象埴輪は破片が多いため断定はできないが、両古墳の埴輪生産がほぼ同時におこなわれたとみておきたい。

③加古川中・下流域の古墳との比較

では、人塚古墳を含む、加古川下流域に所在する古墳との比較を試みたい。ただし、人塚古墳の埴輪の時期（川西Ⅲ期）に該当する埴輪を有する古墳がないため、時期は異なるが、Ⅳ期の埴輪を有する古墳との比較をおこなう。

高砂市・時光寺古墳は径46mの円墳で、墳頂方形埴輪列・墳頂外周埴輪列・墳丘平坦面埴輪列などから多数の埴輪が出土している。円筒埴輪はⅣ期に位置づけられ、百舌鳥古墳群と規格・製作技術が共通しているとされる（図48）。

形象埴輪は、家形・蓋形・靫形・盾形のほかに写実的な馬形埴輪が存在する。家形埴輪は、破片のため全体像は不明であるが、切妻造り・寄棟造りの両者が存在する。高床建物は存在しない。蓋形埴輪は、有立飾り式・無立飾り式の両者が出土している。両者が存在する点は人塚古墳と共通するが、文様構成が異なっている。これは時期差・系統差である可能性が高い。靫形埴輪は、段差表現がなく、すべて線刻によって表現されている。この点は人塚古墳よりも後出的な要素と考えられそうである。盾形埴輪は文様パターンが異なっており、系譜的に別の工人集団が関わった可能性が高い。

以上、時光寺古墳の埴輪をみてきたが、時期や地域が異なることに起因するためか、人塚古墳とは異なる様相を確認できた。

次に、西条古墳群にほど近い東沢１号墳と比較する。東沢１号墳は一辺20mの方墳で、円筒埴輪や陶質土器・須恵器が出土している。造り出しからは、土器類とともに家形埴輪が出土している（図47）。

円筒埴輪は、つくりが粗く近隣を含め系譜を追えない。口縁部の形態が土師器の形態に近いため、土器づくりの工人が臨時に編成されて生産した可能性がある。

一方で家形埴輪は、形態・製作技術とも非常に丁寧である。こちらは、行者塚古墳出土家形埴輪に近

い形態のものもある。そのため、行者塚古墳・人塚古墳で家形埴輪生産に携わった工人が、東沢１号墳の埴輪生産において家形埴輪を製作した可能性がある。古市・百舌鳥古墳群との直接的関係は考えづらく、地域内で埴輪が伝播したことを示す好例といえる。

以上から、人塚古墳の埴輪は、行者塚古墳と共通点が多く、ほぼ同時期に生産された可能性が高い。２古墳での埴輪生産が終わったのち、生産に携わった工人集団は一度解体されるが、その一部は東沢１号墳の埴輪生産をおこなう。そして、尼塚古墳の築造に際して新たな工人集団が組織された可能性が考えられる。

このような埴輪生産の様相は、同じ中期の古墳群のうちの階層構成型の古墳群とは様相が異なっている。報告者の分析した京都府久津川古墳群は、古墳時代中期を代表する階層構成型の古墳群で、ここでは埴輪生産が中期の間は継続していることが特徴としてみいだせた（原田2015）。久津川車塚古墳の築造を契機に埴輪工人集団が組織され、窖窯焼成や人物埴輪の導入など古市・百舌鳥古墳群の埴輪の様相と常に同調しつつ、芭蕉塚古墳の埴輪生産までが一連の工人集団による生産とみなせる型式学的な変化を追える。同じ様相を呈する古墳群として報告者は、加西市の玉丘古墳群を想定している。ここでも初代の玉丘古墳の築造を契機として埴輪生産が開始され、製作技法は常に古市・百舌鳥古墳群と同調しつつ更新されるが、型式学的な連続性から生産の継続性を想定できる。

一方で西条古墳群は行者塚古墳、人塚古墳、尼塚古墳と単独で大型墳が築造され、周辺に付属墳が築かれない。行者塚古墳・人塚古墳で共通した円筒・形象埴輪が存在するが、この２古墳は計画的に同時に築造されることが意図されていたものと考えられ、埴輪生産も同時におこなわれた。その後いったん当古墳群における埴輪生産は断絶し、尼塚古墳が築造される際にあらたに工人集団を組織して埴輪生産がおこなわれた、と解釈できるのである。

また、時光寺古墳のように古墳群を形成せず単独で、かつ古市・百舌鳥古墳群をはじめとした王権中枢との関係性で古墳が築かれる場合、埴輪工人集団へは王権中枢からダイレクトに情報が伝わり生産している。単独で古墳が築かれるという点では東沢１号墳も同じであるが、東沢１号墳の場合は王権中枢というよりむしろ近隣の古墳との関係で情報が伝わっており、質的には大差がある。

以上をまとめると、古墳時代中期の埴輪生産の伝わり方にはパターンがいくつかあり、加古川下流域の古墳はそのパターンがそれぞれで表出しているのである。埴輪生産の様相を比較することで、王権中枢との距離感や、地域内での首長層の関係性を捉えることができた。

３．埴輪からみた古墳時代の加古川下流域

日岡山古墳群・北大塚古墳の資料が調査で出土したものであることから、現時点での最古例と考えたい。遅くとも北大塚古墳の造営時には埴輪生産が開始されるが、日岡山古墳群出土の副葬品には、三角縁神獣鏡などの王権中枢との関係を示すものがあることから、埴輪生産もそことの直接的な関係で行われた可能性を考える。ただし、その系譜を追い切れていない。

次に、北大塚古墳の埴輪と行者塚古墳・人塚古墳の埴輪には胎土・製作技法などの要素に共通性がみられない。このことは、北大塚古墳と行者塚古墳・人塚古墳の埴輪生産が異なる集団（工房）によるものと考える。行者塚古墳・人塚古墳の造営に当たって、再度、王権中枢から埴輪生産が導入されたもの

と考える。それは、行者塚古墳の副葬品に半島・大陸との関係を有するものが多く、その関係性を重視した王権から直接的に埴輪生産が導入されたものと考えるからである。同様の現象は、竜山石製石棺を産出していた加古川右岸域の時光寺古墳にも表出している。

また、行者塚古墳・人塚古墳の埴輪生産が終了するとそこで生産組織は解体され、西条古墳群の後続する尼塚古墳には引き継がれていない。この点は、当該古墳群の首長系譜を一系列とみるかといった問題にも関わってくる。現時点で定見を得ていないが、同一古墳群内の埴輪生産が示す状況は、必ずしも首長系譜の継続を指示していない場合もあると考える。

さらに、王権中枢との関係性で埴輪生産が行われる古墳がある一方で、東沢１号墳のように地域内伝播を想起させるような古墳もある。埴輪の伝播のあり方を考える上で興味深い例であり、必ずしもすべての古墳における埴輪生産が王権との関係で生まれないことを示すものと考える。

なお、後期になると、右岸のカンス塚、西山大塚、里古墳（図44～46）の築造にともない埴輪が生産される。西山大塚古墳と里古墳は、同工品といえるような類似した埴輪があることを確認しているが、十分な検証に至っていない。当地域の古墳時代後期の埴輪生産については今後の検討課題である。

おわりに

本章では、西条古墳群の埴輪を中心に古墳時代中期の埴輪生産と埴輪の伝わり方について検討してきた。資料が増加したとはいえ、まだまだ検討すべき課題は多く、特に古墳時代後期については資料は多いものの検討が追いついていない。これらについては今後の検討課題とし、地道な検討を続けていきたい。

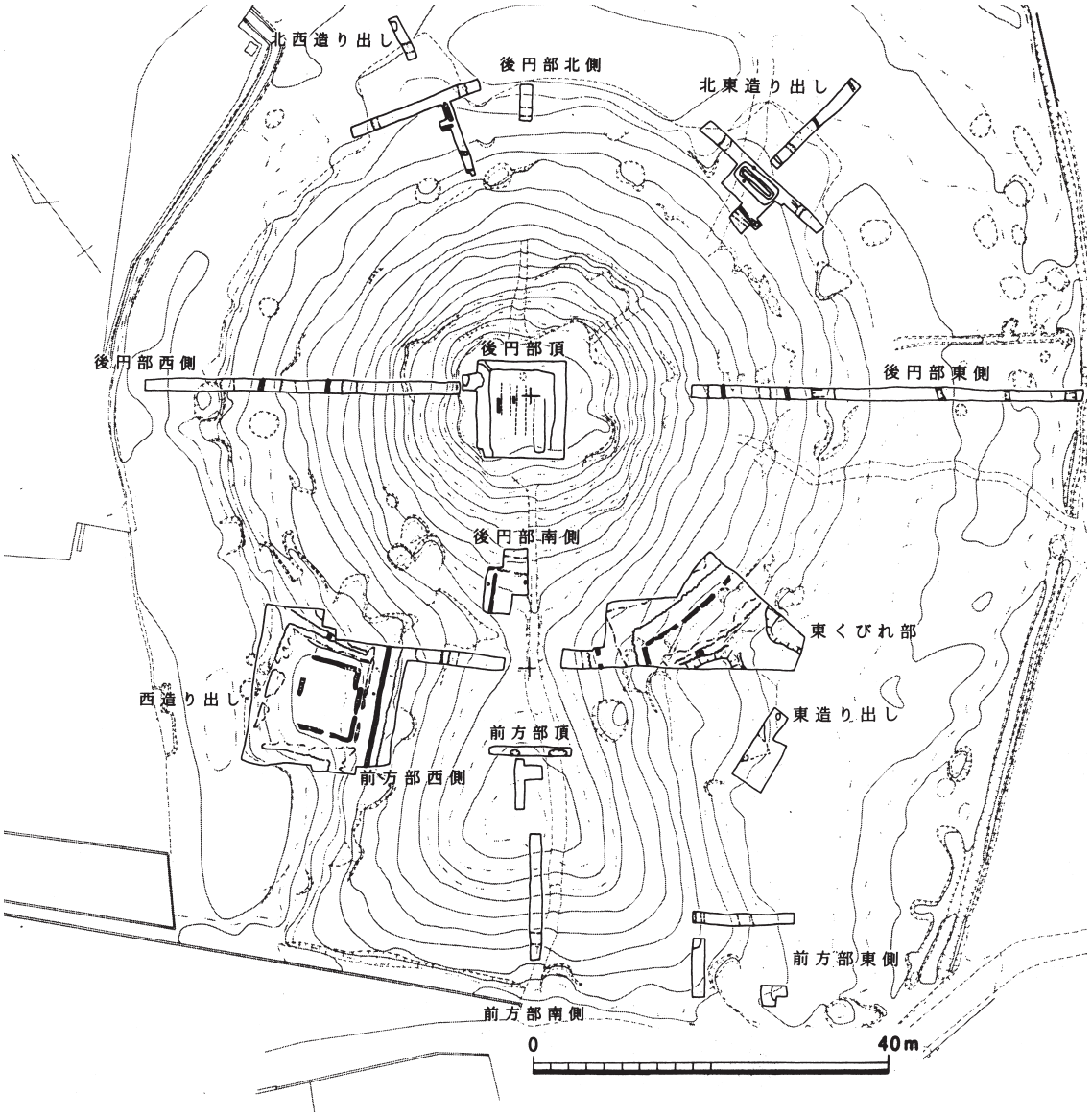


図 39　行者塚古墳　墳丘測量図・調査区配置図（『行者塚古墳』より）

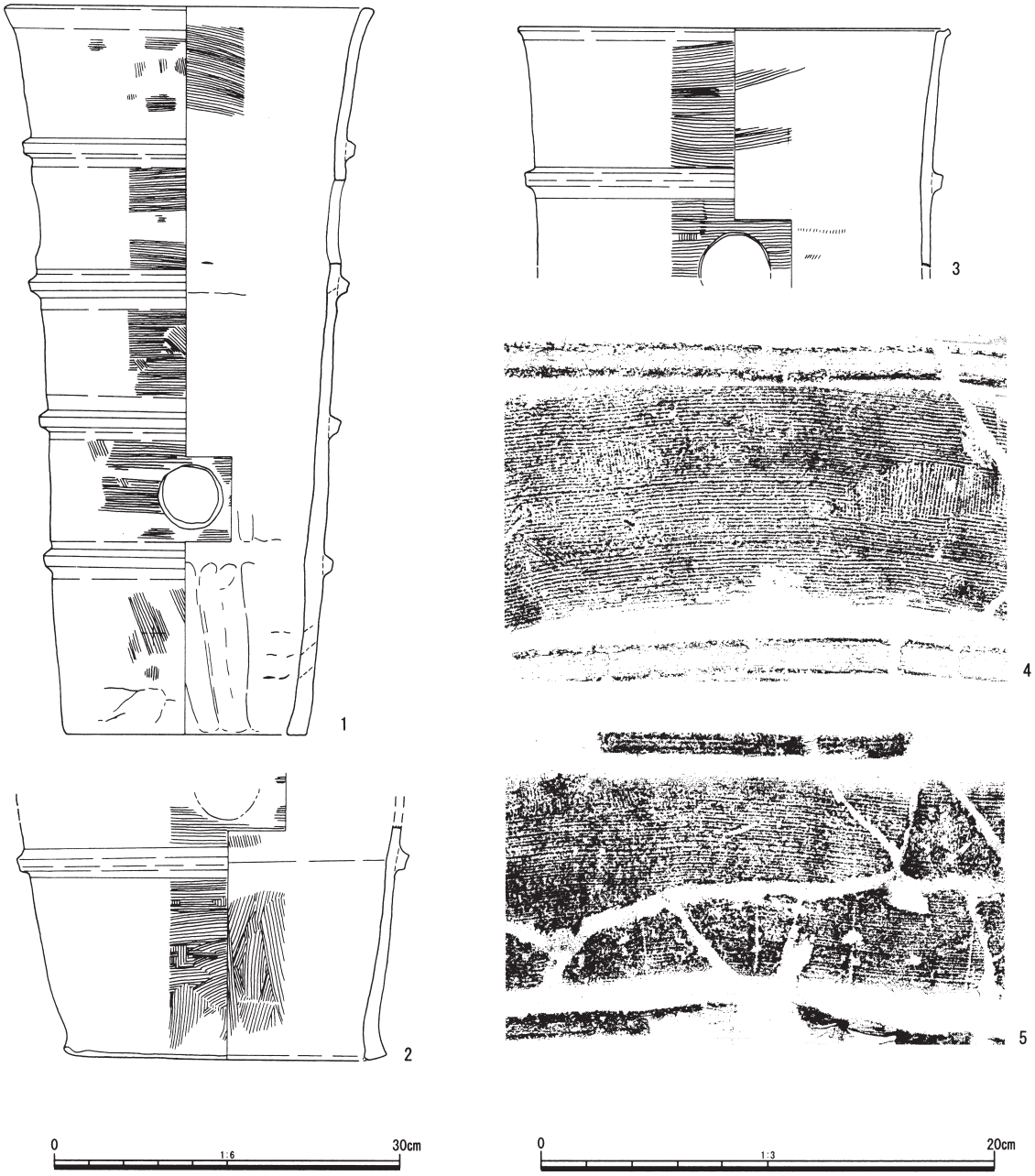


図 40　行者塚古墳　出土円筒埴輪（『尼塚古墳』より）

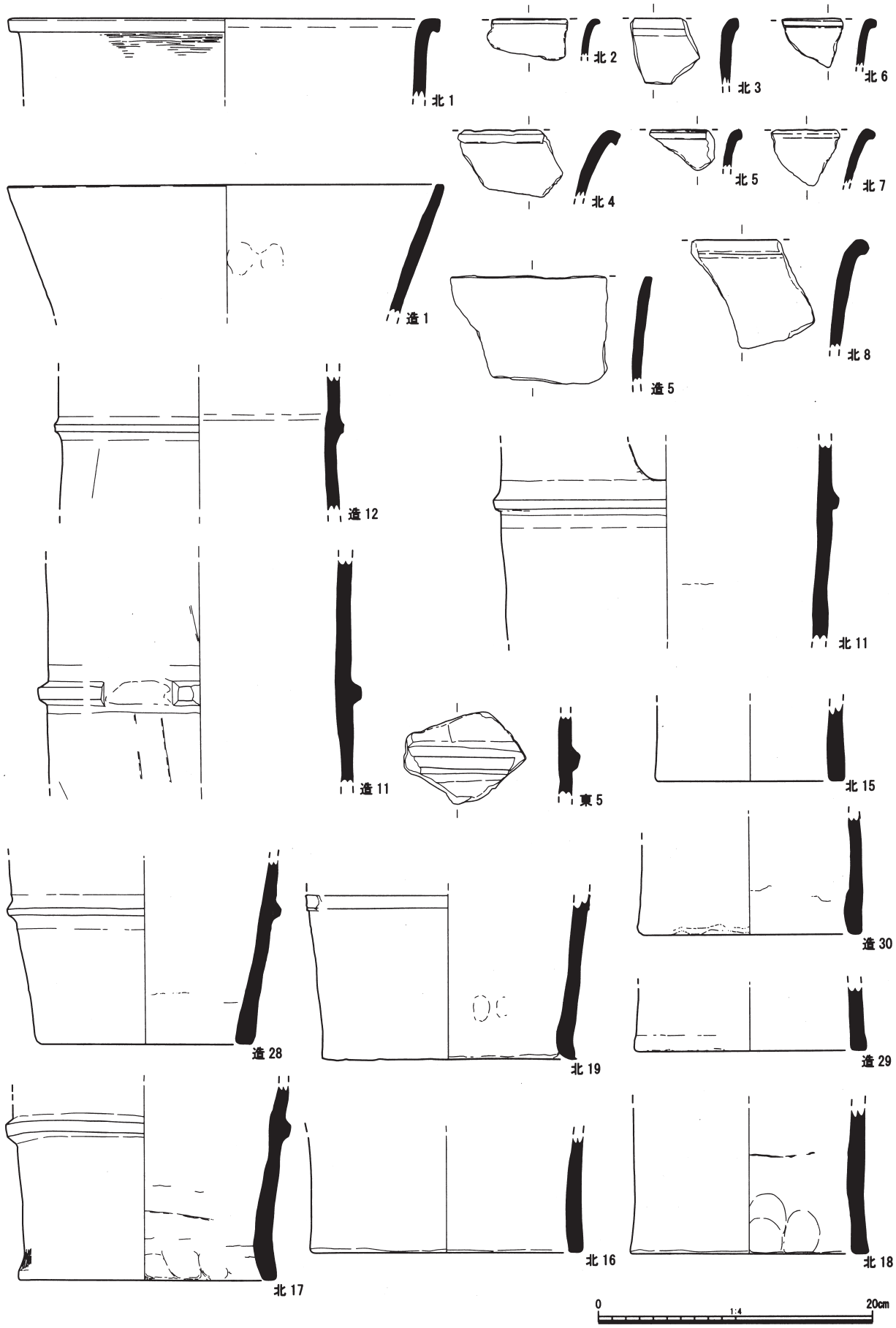


図 41　尼塚古墳　出土円筒埴輪（『尼塚古墳』より）

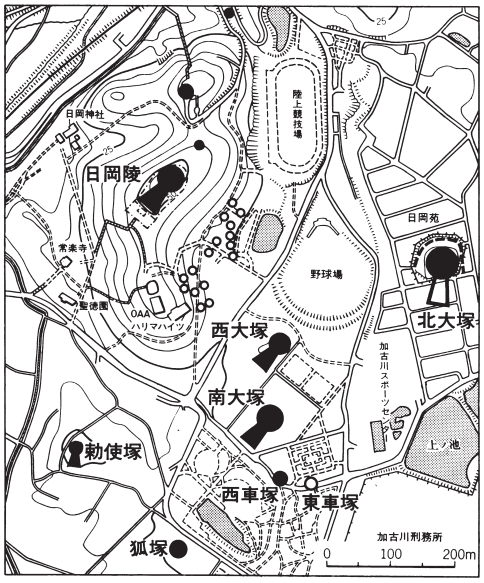


図 42　日岡山古墳群古墳分布図（『加古川市史』４より）

表５　西条古墳群と日岡山古墳群の円筒埴輪比較

		北大塚古墳	行者塚古墳	人塚古墳	尼塚古墳
口縁部	形状	-	直立	直立　外折	直立　外折
	高さ	-	12 ～ 12.5cm 13.6cm	-	9.3cm 以上
胴　部	間隔	-	11.5 ～ 14cm	12.5cm	10.2cm 以上
底　部	径	21cm	18 ～ 23cm 24 ～ 29cm	19 ～ 20cm 22 ～ 23cm 27cm	13.4cm、15.2cm、16.4cm、17.0cm、18.4cm、18.5cm、19.4cm
	高さ	13.4cm 以上 （底径 21cm）	14 ～ 19cm	12.5 ～ 13cm、 16.2 cm 18.2 ～ 18.7cm	9.9cm　11.5cm 12cm 前後
調　整	外面１次	タテハケ	タテハケ	タテハケ	タテハケ？
	外面２次	ヨコハケ　連続	ヨコハケ　連続 ヨコハケ　継続	ヨコハケ　連続 ヨコハケ　継続	ヨコハケ　継続
	内面	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	ナデ　ハケ？
突　帯	形状	方形・台形	方形・台形	方形・台形	方形・台形
	高さ	0.8 ～ 1.0cm	0.9 ～ 1.3cm		0.4 ～ 0.9cm
	設定技法	凹線	凹線	凹線	無
透　孔		□	□△（少）○	○	○
黒　斑		有	有	有	無

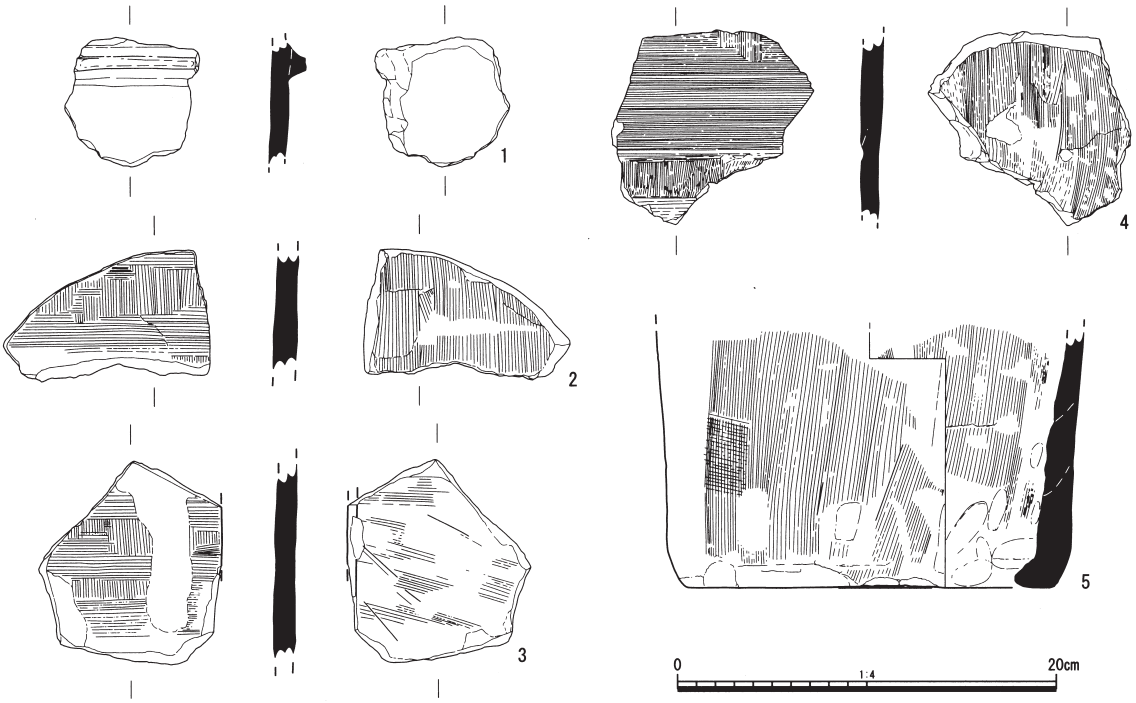


図 43　北大塚古墳　出土円筒埴輪（『尼塚古墳』より）

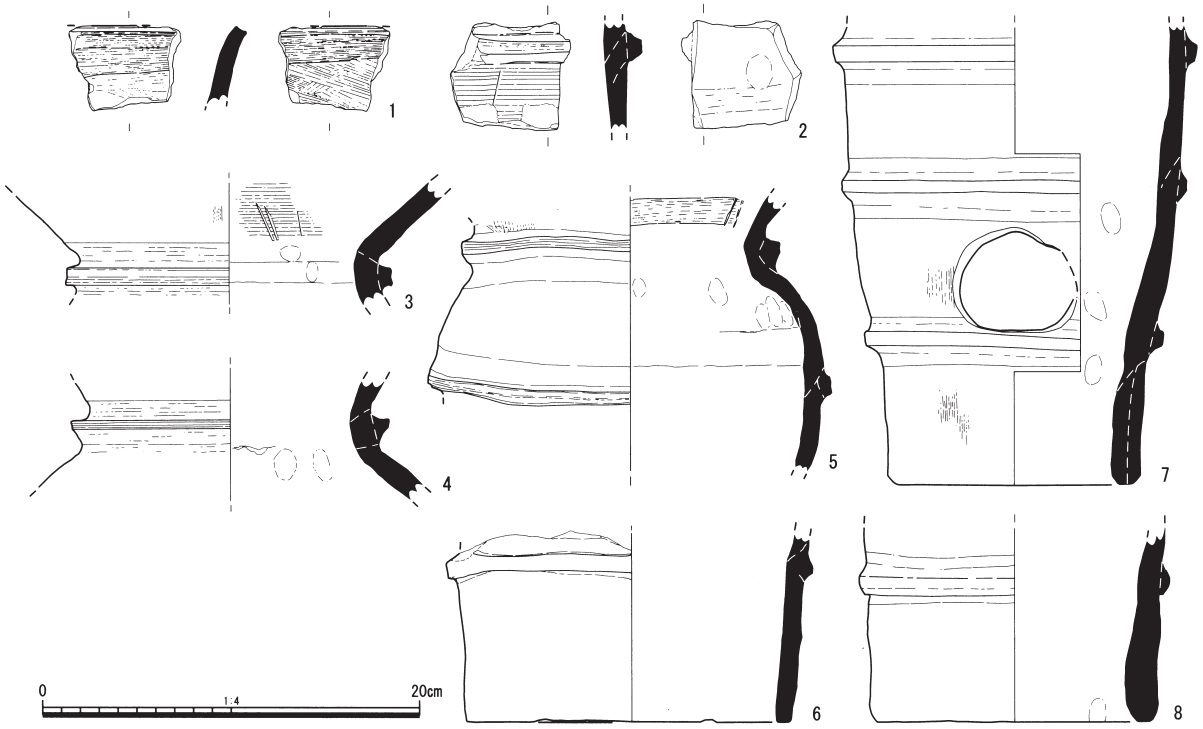


図 44　カンス塚古墳　出土円筒埴輪（『尼塚古墳』より）

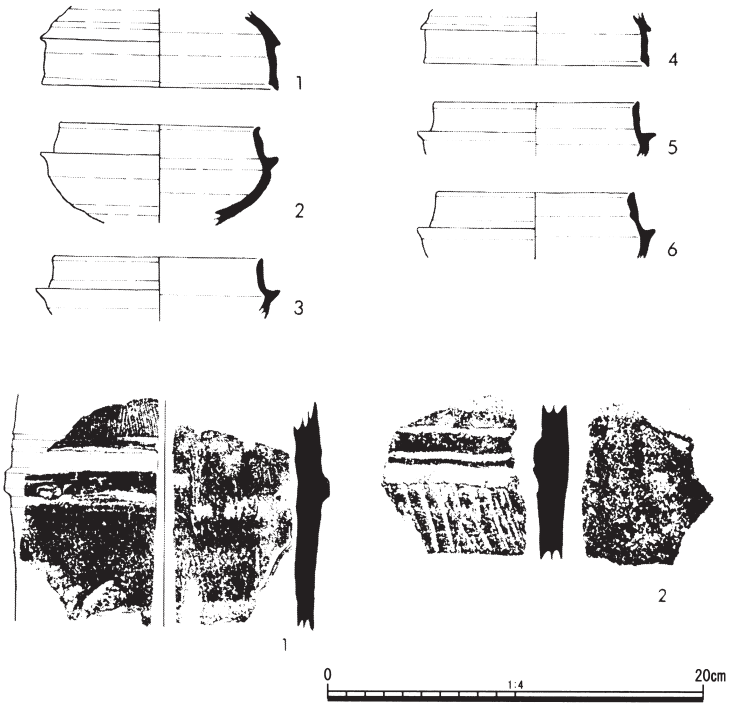


図 45　西山大塚古墳　出土須恵器・円筒埴輪（『尼塚古墳』より）

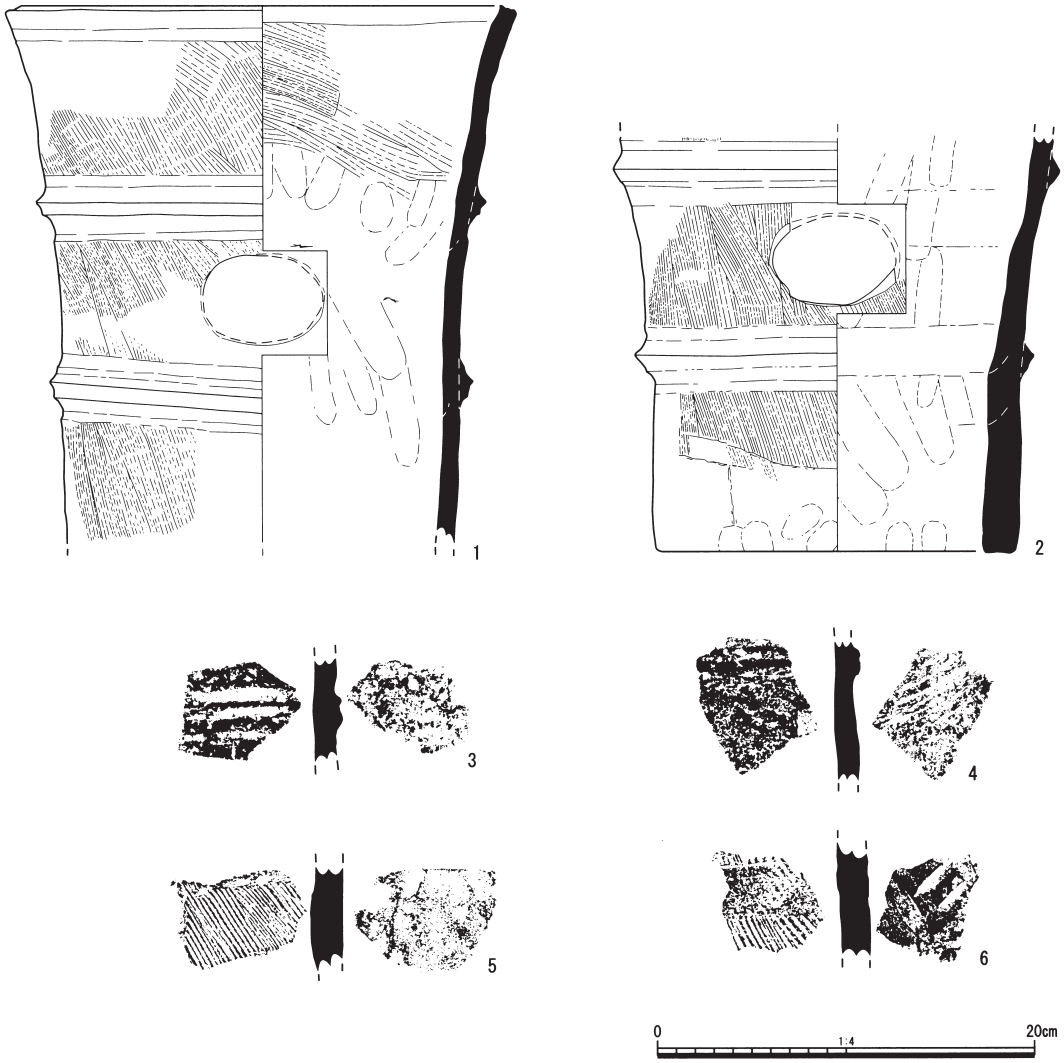


図 46　里古墳　出土円筒埴輪（『尼塚古墳』より）

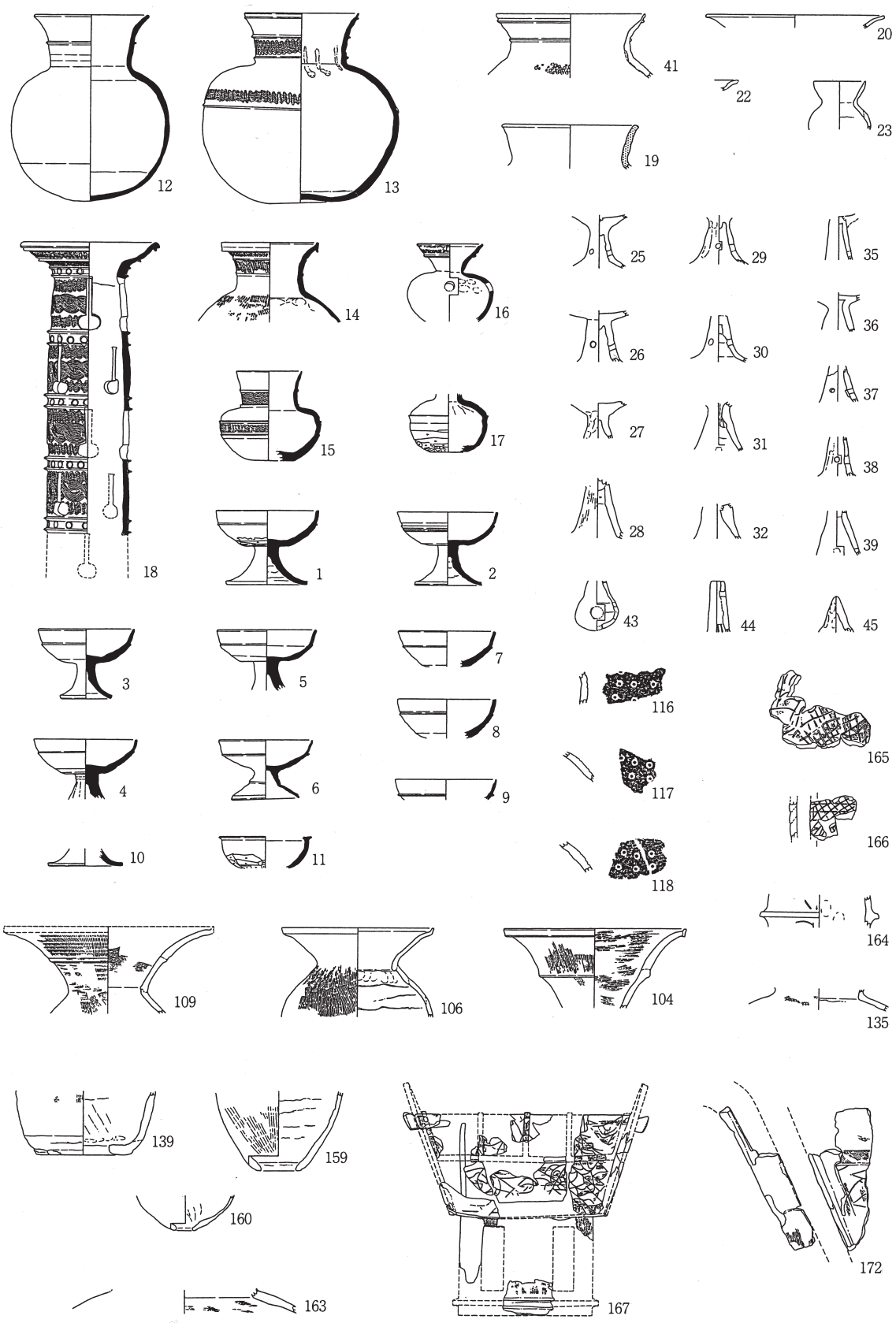


図 47　東沢１号墳　造り出し出土埴輪・土器（『東沢１号墳』より）　縮尺は任意

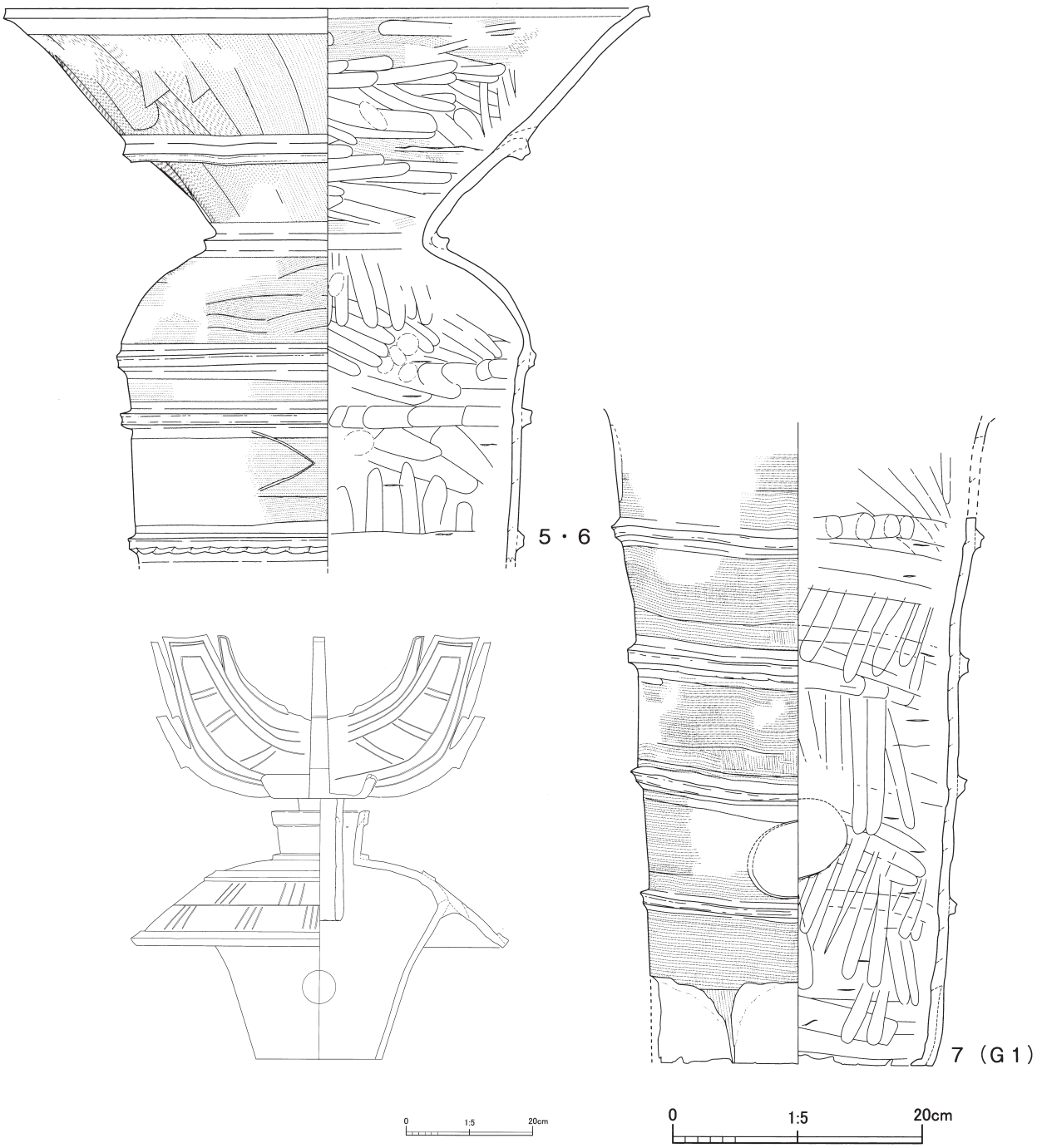


図 48　時光寺古墳出土埴輪（『時光寺古墳』より）

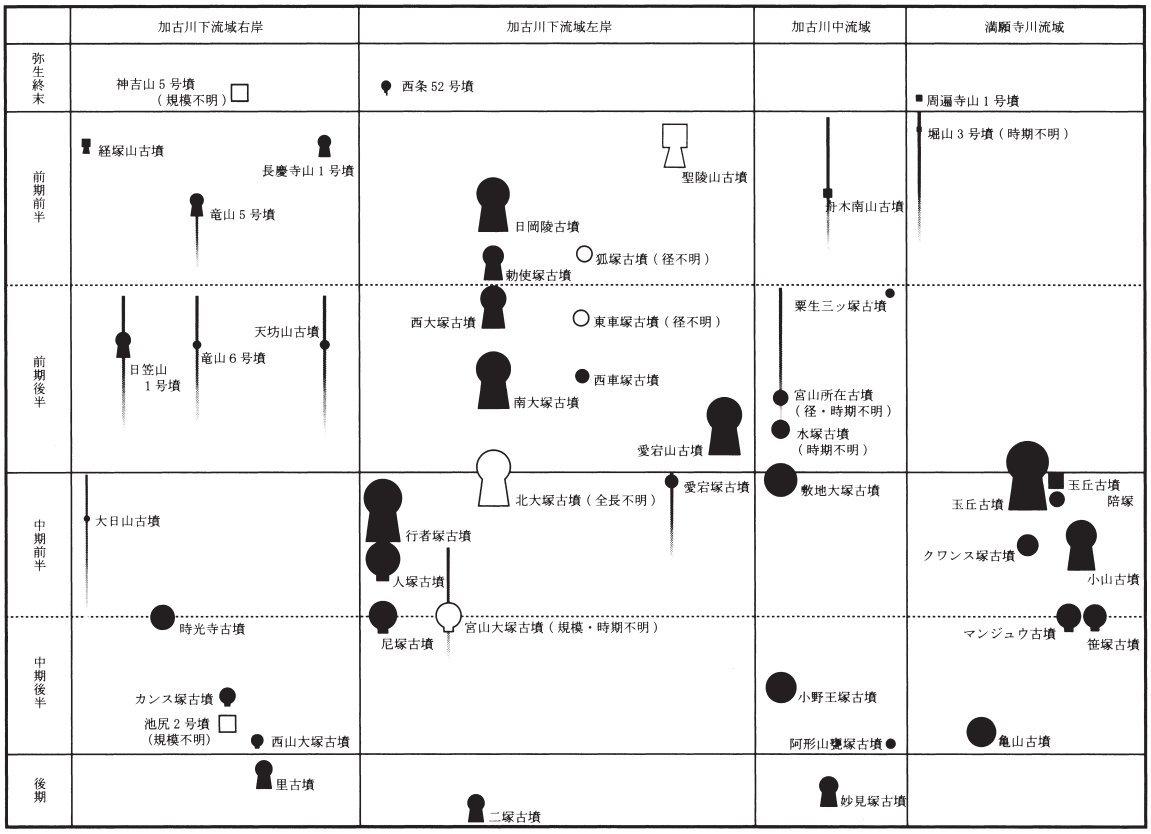


図 49　加古川流域の古墳編年（藤原 2012 より）

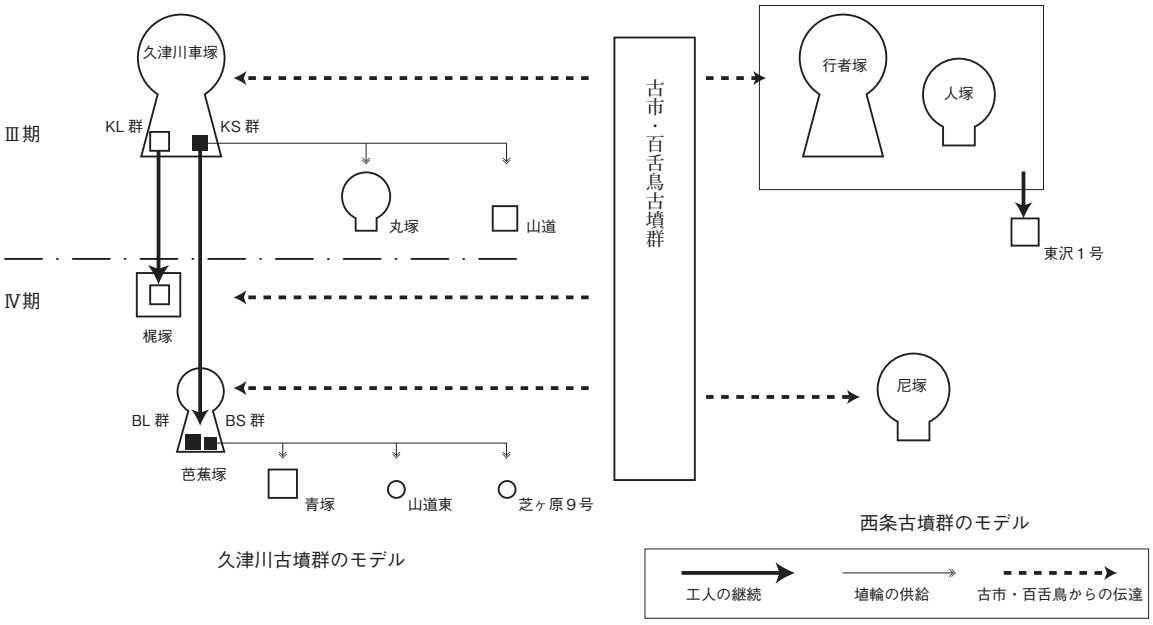


図 50　古墳時代中期の埴輪生産モデル

第６章　山城地域における古墳時代後期の埴輪生産

はじめに

古墳時代後期になると近畿地方では、横穴式石室を採用する古墳が徐々に増え、やがて群集墳にも横穴式石室が採用されるようになる。中期古墳までは基本的に竪穴系の埋葬施設を設け、埋葬施設上や造出しなどに埴輪を配置し、そこでなんらかの儀礼を執行していたと考えられるのに対し、後期古墳では横穴式石室などの横穴系の埋葬施設が主流となり、その内部や前庭部へと儀礼の場も移動する。そのため、後期後半以降は埴輪の配置も必要不可欠なものではなくなり、埴輪を配置する古墳の数が減少する。とはいえ、後期前半は中期以来の埴輪配置が踏襲された古墳も多く残り、また、古墳の数自体も増加しているため、埴輪の出土数も膨大となる。

本論では、古墳時代後期の山城盆地北部における埴輪の分析から、その生産体制について通時的に考察する。

１．古墳時代後期の埴輪研究の現状

近畿地方の古墳時代後期の埴輪については、出土する古墳・遺跡の個別事例報告や、Ⅳ群系・Ⅴ群系などといった形態・製作技術の差を生産集団差と捉えた系統研究、編年大系の構築が主流である。それは先述の通り、埴輪が出土する古墳数が多く、総合的な検討が追いついていないためである。全体を見通した検討についても、断続ナデ技法などの一部の技法を有した埴輪や、石見型盾形埴輪など特徴的な形態の形象埴輪の分布状況を基にした政治史的な解釈に埴輪の分析が用いられることはあっても、それらの有機的な関係を導き出す基礎的な作業はほとんどなされていない。

対照的に関東地方では、後期以降に古墳の築造と埴輪の配置が最盛期を迎えることと、埴輪を焼成していた窯跡の発掘調査も進んでいるため、近畿地方以上に生産地と消費地の分析が進んでおり、生産体制と流通の様相を詳らかに解明することができつつある（犬木1995、城倉2009など）。そこでは、同工品分析を主軸として、生産供給体制の解明や地域間交流の様相までもが明らかにされている。

近畿地方と関東地方とでは、埴輪の大きさや調査された生産地の有無など検討の条件こそ異なるが、関東地方で蓄積されてきた方法論を取り入れることで、近畿地方における古墳時代後期の埴輪生産の様相は明らかになるものと考える。そこで、本論では、古墳時代後期の山城地域北部における一古墳出土の埴輪について同工品分析を基軸に分析する。その上で同地域内のほかの古墳の埴輪と比較することで、当地域の古墳時代後期の埴輪生産の状況を考察する。

考察に当たって主な検討の対象とするのは、向日市物集女車塚古墳である。当古墳は墳丘長約46mの前方後円墳で、後円部に左片袖式（玄室から見た場合は右片袖式）横穴式石室をもつ。鉄製武器、馬具などの副葬品、須恵器などが豊富にあり、古墳時代後期中葉の当該地域の首長墳と考えられる。埴輪は墳丘に配置されていたことが発掘調査で判明しており、各段平坦面と墳頂、造り出しにそれぞれ配置される。山城地域北部で墳丘、石室、副葬品、埴輪がすべて判明している調査事例は少なく、貴重である。そのため、当古墳の埴輪を分析することで、首長墳における埴輪生産の一様が判明するものと考えられ

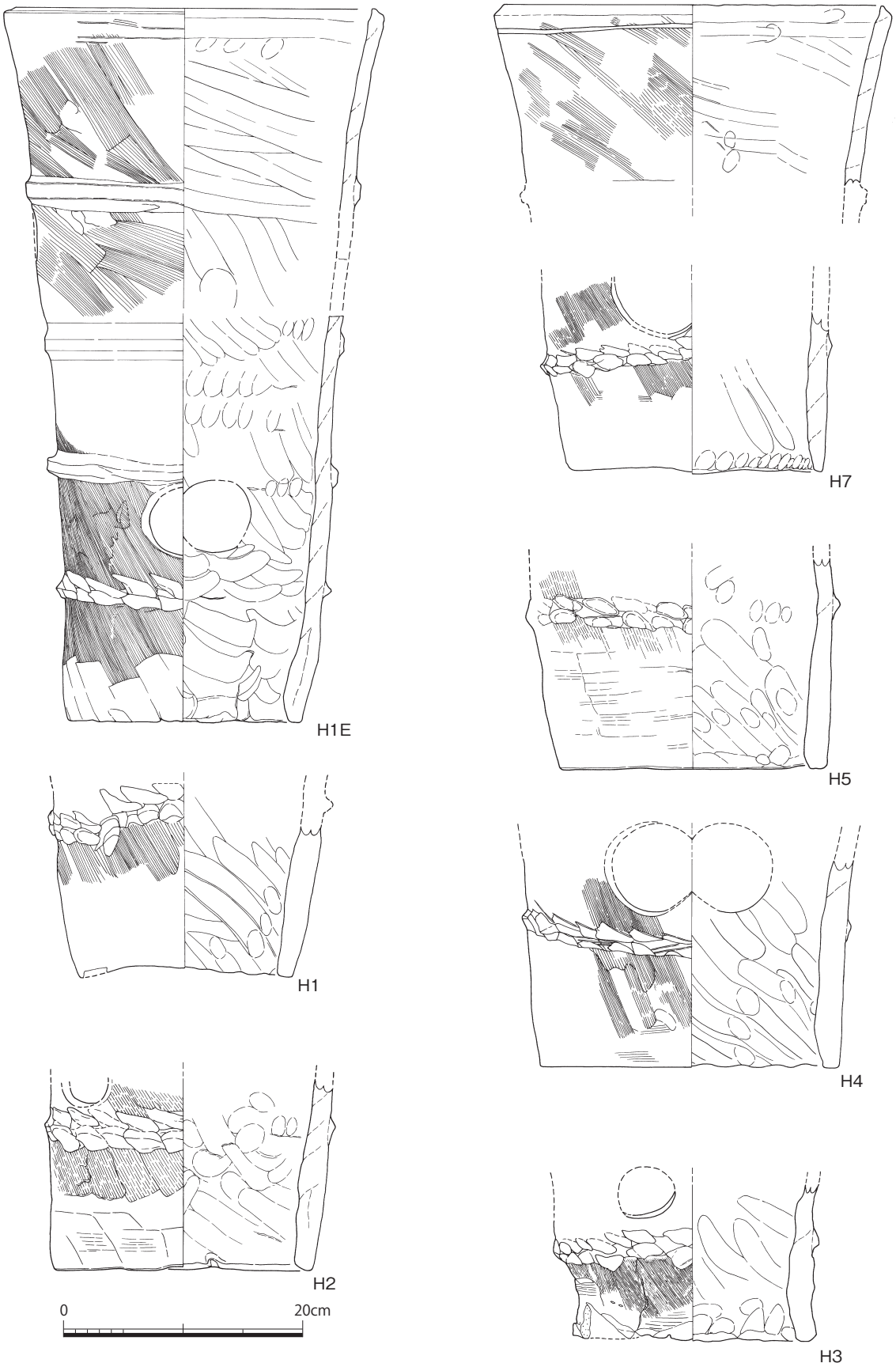


図 51　物集女車塚古墳　第 4 次調査出土円筒埴輪

る。以下、物集女車塚古墳の埴輪を分析する。

２．物集女車塚古墳出土埴輪の検討

物集女車塚古墳に配置された埴輪は、そのほとんどが底部のみしか残存しておらず、全体の形状や製作技術をみこした生産体制の復元は難しい。とはいえ、最下条突帯に断続ナデ技法Ｂが使用されており、その手法に個人差があらわれている可能性が高いため、ある程度の生産体制は復元可能である。

そこでまずは、物集女車塚古墳の円筒埴輪の製作工程について、ほぼ全形が復元できた第４次調査出土資料（図51）を詳細に検討し、その上で、生産体制の復元を試みる。

物集女車塚古墳第４次調査で、埴輪列の終点に横倒しの状態で検出されたＨ１Ｅは、接点はないものの、出土状況から全形を復元できる資料である。４条突帯５段構成の普通円筒埴輪である。２・４段目には直交させて円形透孔を穿孔する。全体の形状は少し外傾気味に直立する。ハケメの始点やユビナデの始点で粘土が厚くなっている部分や、粘土の小塊が付着する部分が多くみられる。これは、成形時の粘土の含水量が多く、ハケを施した際に粘土塊がハケ原体に掻き取られ、次のハケを施す際に擦り付けられた結果生じたものであると考えられる。

成形は断面の観察から幅５㎝、厚さ２㎝程度の粘土板を２枚貼り合わせた基部の上に、２～３㎝程度の粘土紐を口縁部まで積み上げていく。ただし、口縁部まで粘土紐を積み上げた後に内外面調整を行うのではなく、所定の高さまで達した時点で調整を加えているものと考えられる。内面はユビナデが丁寧に行われ、ほとんどの粘土紐接合痕を消しとる。

外面はナナメハケメの方向が第３段目・第４段目・第５段目で変化し、この変化と内面ユビナデの調整範囲ともほぼ一致し、断面観察によって得られた粘土紐の境界とも一致する。これらのことから、ここで調整を加えるために粘土紐積み上げの休止があったものと想定される。この休止は、乾燥を含む休止ではなく、あくまで粘土紐積み上げと、内外面調整を行うための休止と考えられる。

以上の観察した結果、円筒埴輪の成形は以下の手順で行ったものと想定した（図52）。①基部製作、②粘土紐積み上げ、③内外面調整、④粘土紐積み上げ、⑤内外面調整、⑥　④、⑤の工程をさらに２回繰り返し、⑦突帯製作、⑧透孔の穿孔、⑨底部調整、⑩口縁部調整である。

外面調整のナナメハケメを見ると、始点や主軸が揃っていることが見て取れる。ハケメの始点と、内面調整のナデの変化点は一致しており、またこの変化点と粘土紐積み上げ痕跡も一致することから、この変化点で粘土紐積み上げの休止があったものと想定される。この休止は３回あり、粘土紐積み上げ単位ごとに内外面を調整している。突帯の貼り付けは、粘土紐積み上げがすべて終了した時点で行われているものと考えられる。

さて、川西宏幸の円筒埴輪編年　（川西1978、以下「川西編年」）Ｖ期の円筒埴輪は粘土紐を一度に口縁部まで積み上げるために底部調整が必要になったとされる。藤井幸司は畿内の窖窯焼成後の円筒埴輪の成形技法を検討し 、突帯製作を含む粘土紐積み上げ単位を２回繰り返して成形する一群（Ａｃ群）と、口縁部まで一度で粘土紐を積み上げる一群（Ｃ群）が、古墳時代後期の畿内での一般的な技法としている（藤井2003）。物集女車塚古墳の円筒埴輪を藤井の分類に当てはめると、突帯製作を含まない粘土紐積み上げ単位を４回繰り返すＢｂ群となる。この成形技法は古墳時代中期の鳴谷東１号墳での

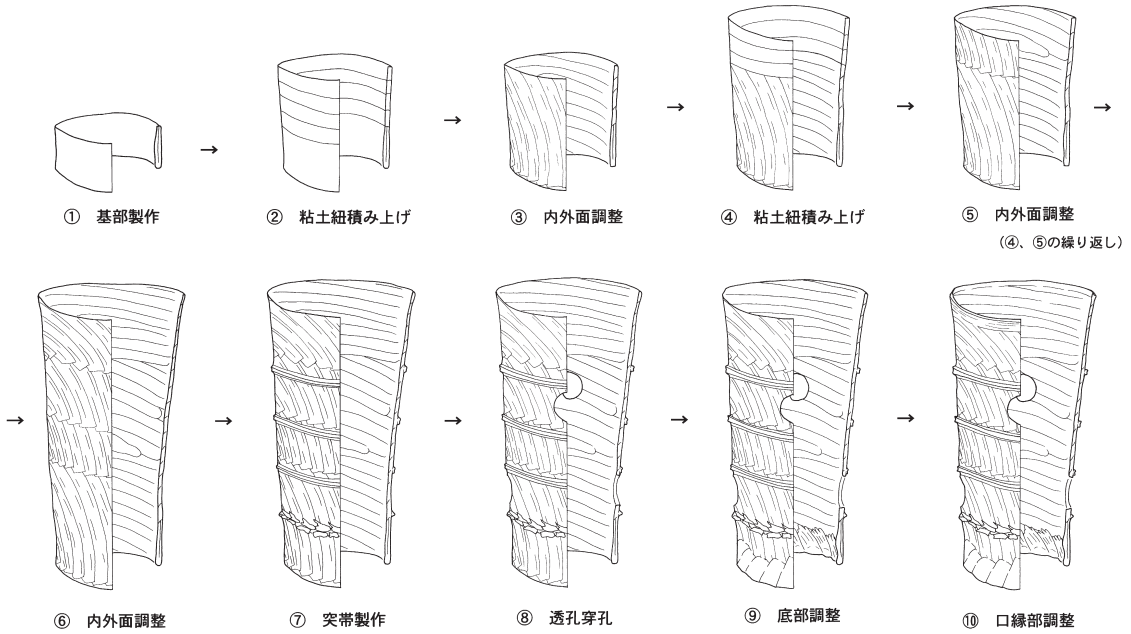


図 52　物集女車塚古墳　円筒埴輪の製作工程復元図

み確認されている技法で、突帯貼り付け前に再度タテハケを施すという特徴が見られ、畿内の一般的な埴輪成形技法とは異なるとされる。物集女車塚古墳の円筒埴輪にはこの２次タテハケは施されていない。

ところで、４条突帯５段構成で高さ60㎝程度に復原される物集女車塚古墳の円筒埴輪は粘土紐積み上げを一度で行うことは難しいであろう。仮に一度で積み上げたとしても、Ｈ１Ｅのように内面調整のナデを丁寧に施すことは不可能である。物集女車塚古墳の円筒埴輪の成形は内外面調整の変化と粘土紐積み上げが一致し、そこにタイムラグがあったものと想定できる。そのタイムラグが短い場合、口縁部まで一度で粘土紐を積み上げたといえるかもしれない。しかし、明らかに内外面調整の方向が変化していることから、これを粘土紐積み上げの休止ラインとみた方がよいと考える。

このタイムラグについては、円筒埴輪生産体制と関わってくるものと考えている。高橋克壽は６世紀の埴輪生産について、拠点的生産地からの広域供給を想定している（高橋1994）。物集女車塚古墳の円筒埴輪は、１条目突帯がすべて断続ナデ技法Ｂで貼り付けられており、また、後述のとおりハケメパターンを共有することから考えて、同一工房の製品と考えて差し支えない。諸技法等の組み合わせから、少人数での生産が想定され、工人一人あたりの生産量は多大になると考えられる。円筒を一本ずつ丁寧に仕上げていくよりは、同時に数本を製作していく方が効率的である。同時に複数本の円筒埴輪を製作するのなら、同一の作業を繰り返しながら仕上げていくであろう。その場合、このタイムラグは他の埴輪の成形を行っている時間と捉えることができる。仮にそのように成形していっても、多量の水分を含んだ粘土であるため底部に歪みは生じるものと考えられる。

古墳時代後期の埴輪成形技法は省略が進んでいくが、藤井はＡｃ群がＣ群に変化していくことを想定しており、その省略化は埴輪を配置する古墳の減少ともほぼ対応している。そういった省略化の中で、突帯製作を含まない粘土紐積み上げ単位を多数回繰り返すＢｂ群も存在している。これは時勢に逆行し

表６　物集女車塚古墳　第４次調査出土円筒埴輪の属性対応表

類型	色　調	胎　土	底部径	底部高	第１条突帯	ハケメパターン	底部調整	埴　輪
A	灰橙色	精製される チャート、石英・長石を含む	中	中	１類	同一	Ⅰａ類	H1E
B	黄橙色	やや良 チャート・石英・長石類を含む	大	高	１類		Ⅰａ類	H5
C			中	中	１・２類		Ⅰａ類	H7
D			中～大	高	２類		Ⅰａ類	H2,H4
E	赤橙色	やや良 赤色斑粒を多く含む	中	高	２類		Ⅰａ類	H1
F	灰白色	不良、 赤色のチャートを多く含む	楕円	不揃い	２類		Ⅱ類	H3,T3

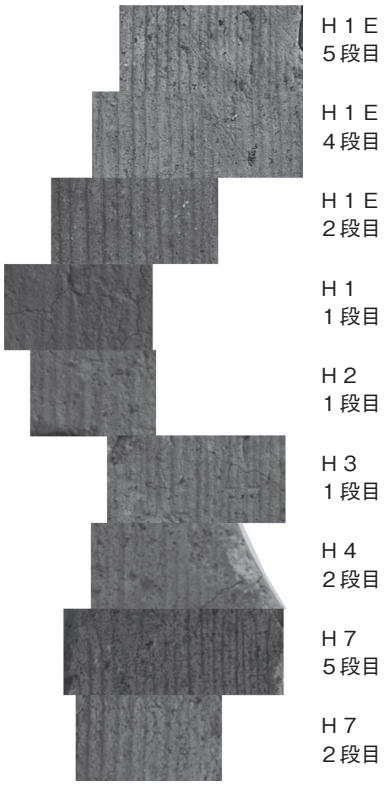


図53　物集女車塚古墳　円筒埴輪のハケメパターン（等倍撮影）

ているようにも見えるが、４条突帯５段構成の円筒埴輪を一人で複数本同時に製作する場合には効率的であったのかもしれない。

生産体制　物集女車塚古墳の円筒埴輪の生産体制については、２・３次調査報告においても言及されている。それによると、底部の形状・調整と胎土に強い相関関係が認められ、計11類に分けられている。そして、その各類で使用されている底部調整の工具とハケ工具には、それぞれ同じ工具が使用されていると推定されることから、11の類型は工人個人に対応すると考えられている（弘田1988）。

今回も底部のみが残存する個体ばかりであるので、底部調整の有無、色調・胎土、断続ナデ技法の詳細から分類を試みた（表６）。底部調整を行う個体では色調・胎土によって分類することができ、その分類と法量が対応することがわかる。特に、色調が黄橙色を呈する一群は法量で細分でき、その細分と断続ナデ技法の各手法が対応する。このようにして分類した結果、６つの類型に分けられる。それぞれの類型が工人個人を示すものとは断言できないが、それにかなり近いものであろう。

ところで、ハケメパターンを分析すると、パターンが酷似する工具が使用されていることがわかった（図53）。パターンが一致する理由としては、原材の打ち割りによって生じた「兄弟工具」、ハケのみを専門で施す工人の存在（分業体制）、ハケ工具の貸借などの可能性が挙げられるであろう。以下、それらについて検討を加える。

まず、「兄弟工具」であるが、Ｈ１Ｅを除き器面の風化が進んでおり、その断面形態を詳細に分析することができなかった。城倉正祥は原材の打ち割りによって「兄弟工具」を含めた同一の木目を生み出すことは限られていると考えている（城倉2009）。物集女車塚古墳のハケ工具にも基本的には「兄弟

工具」などの同一の木目を生じさせる工具はなかったものと考えておく。

次に、分業体制の検討にはいるが、仮にそれが進んでいた場合、円筒埴輪成形の各工程に工人が存在しているであろう。確かに、今回は底部調整でも３つの手法、断続ナデ技法でも２ないし３つの手法のみしか確認していないが、より細かく動作を復原することでさらに類型化できる可能性がある。

しかし、今回は残存状況の関係でそれを行うことはできず、限られた属性からの分類のみで分業体制の検討を行った。その結果、分類された６類型が工人個人に対応する可能性を有しており、分業して埴輪を製作しているようではない。よって分業の可能性は否定されると考える。

最後に、ハケ工具の貸借の可能性は、各類型がハケメパターンを共有することが重要である。各類型として把握される埴輪は、各工人の作品と考えても差し支えなさそうである。さらに、すべての個体で１条目突帯に断続ナデ技法Ｂを用いていることから、同一工房で生産された製品である蓋然性は極めて高いと考える。

さて、近年の埴輪生産体制に関する議論では、特に「同工品論」が主流である（犬木1995、小橋2004、城倉2009など）。そこでは、「ハケメ」を分析上の重要な属性に位置付け、一人の工人が製作した作品群を識別することで生産体制を読み取ろうとしている。また、ハケ工具には「属人性」があるとの前提で議論されている。それでは、ハケメパターンを共有する物集女車塚古墳の埴輪は一人の工人が作っていたのかというと、そのようにはならないであろう。限られた属性を総合的に判断して６つの類型に分けられたにもかかわらずハケメパターンを共有する理由としては、工具の貸借の可能性が高いと考えられる。

以上、物集女車塚古墳の円筒埴輪の分類と、ハケメパターンの検討から考えられる生産体制について言及してきた。古墳時代後期の埴輪は、拠点生産地からの一括供給が想定されている（高橋1994）。しかし、周辺を含めて、物集女車塚古墳出土埴輪と同じ工房で製作されたといえるような埴輪は見つかっていない。つまり、物集女車塚古墳のために生産体制を組織した可能性が高いのである。

そこで、次節では、山城地域に分布する後期古墳で埴輪を配置しているものを抽出し、物集女車塚古墳の埴輪との比較を試みる。その上で、当地域における埴輪工人に系譜を追えるものがあるかを検討したい。

３．各古墳・遺跡出土の埴輪について

山城地域北部には、古墳時代後期以降、土地利用が進み多くの古墳群が展開する桂川左岸の嵯峨野地域と、古墳時代前期には向日丘陵を中心に首長墳が展開する桂川右岸の乙訓地域に大きく別れる。さらに、鴨川の流域の鳥羽地域や北白川付近にも古墳が築造されており、埴輪を配置するものもある。

調査によって得られた資料は少ないが、当地域の埴輪生産を推し量る上で外すことのできない資料であるため、ここで検討を加える。宇野隆志も指摘するように（宇野2008）、嵯峨野地域と乙訓地域の資料を比較することで当地域の実態がより明確になるものと考える。

①　嵯峨野地域（桂川左岸地域）

天塚古墳　天塚古墳は墳長約70mの前方後円墳で、くびれ部と後円部にそれぞれ横穴式石室をもつ。

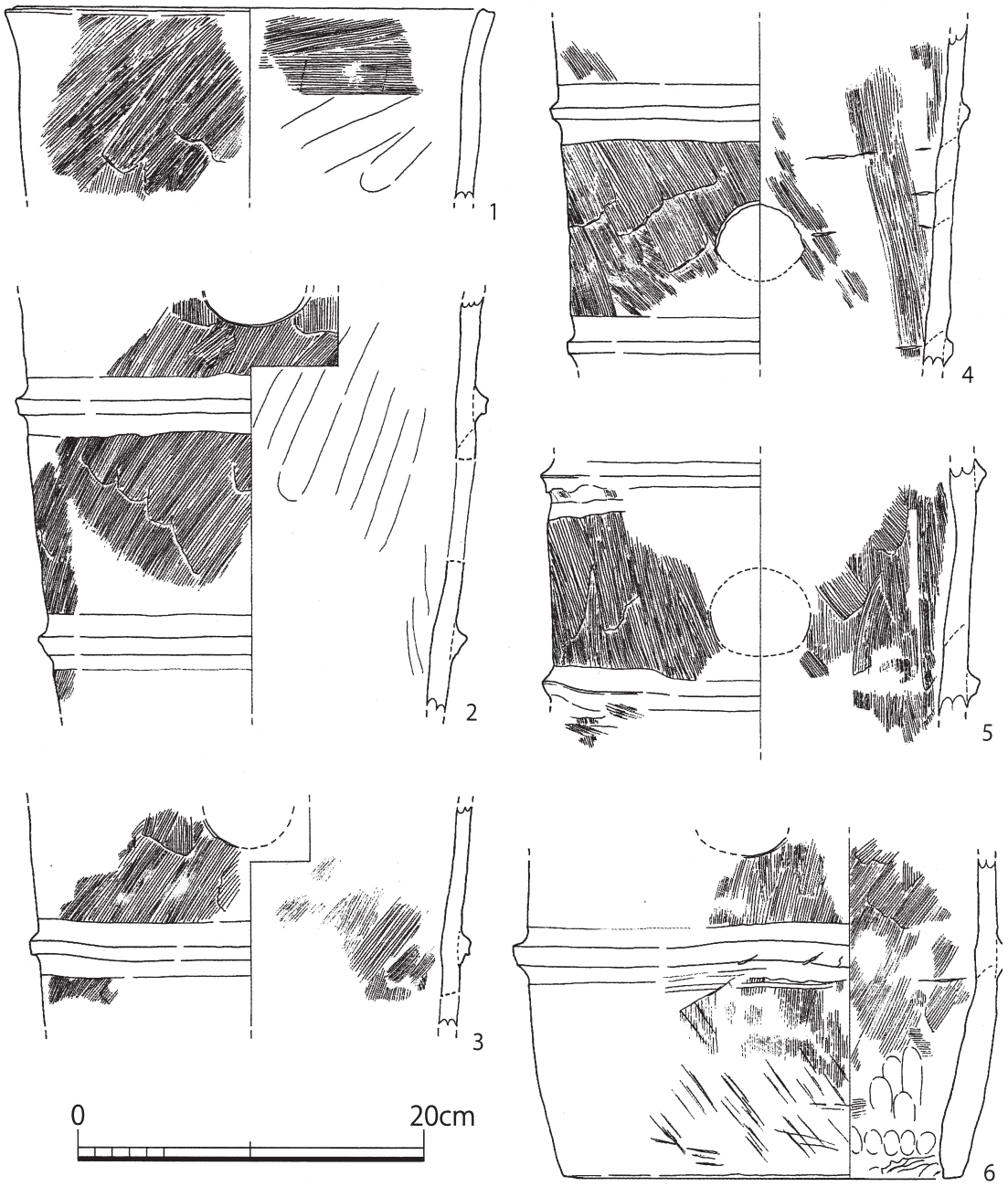


図 54　天塚古墳出土円筒埴輪

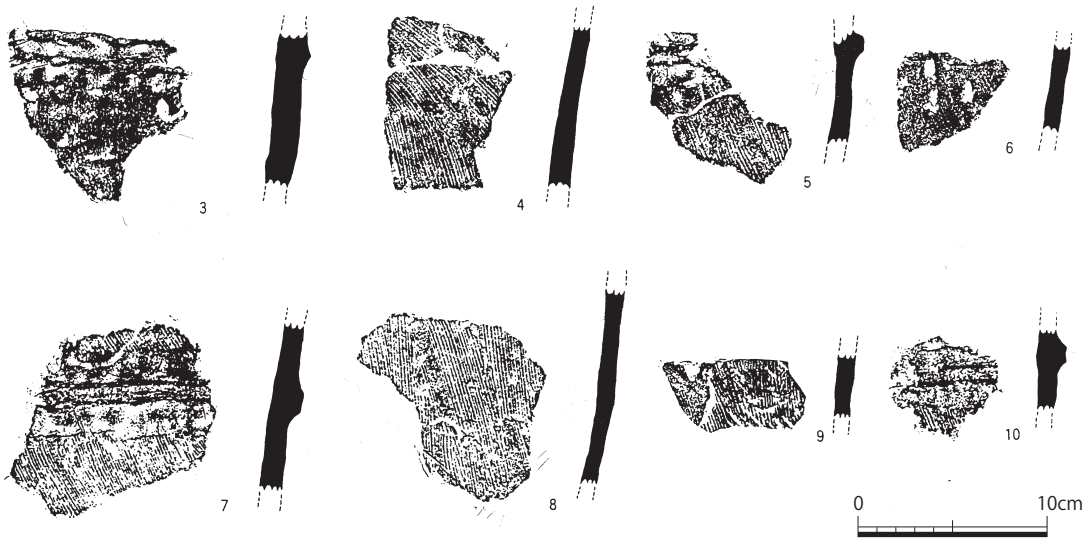


図 55　広隆寺旧境内出土埴輪

埴輪は発掘調査によって得られたものではないが、くびれ部に開口する横穴式石室の前庭部、または造出と考えられる場所で表採されている。条段数は不明だが、３段分が残る破片から、各段に２つの円形透孔を千鳥状に先行することが判明しており、４条５段構成になるものと考えられる。すべての突帯が断続ナデ技法Aで成形されている。最下段は板押圧による底部調整が確認できる。硬質に焼成され、中には須恵器のように青灰色を呈するものもある。表採されている資料の中に確実に形象埴輪といえるものはなく、円筒埴輪と朝顔形埴輪のみが配置されていた可能性が高い。

さて、天塚古墳の円筒埴輪の中に、１次調整ナナメハケが右上がりになるものが多数見られる。これは、左手にハケ工具を持って作業を行っていたことを示している。ハケメの始点も左から右に移る様子を確認できることから、外面調整を左手で行う工人がいた可能性が高い。

清水山古墳　清水山古墳は天塚古墳のすぐ北にかつて存在した前方後円墳で、削平を受けて残存していない。周辺の調査で埴輪片が出土しており、天塚古墳とよく似た胎土、焼成で、調整技法もほぼ同一といえる。ただし、小片が数片あるだけなので、実態は不明である。

広隆寺旧境内　天塚古墳・清水山古墳の北方に位置する広隆寺旧境内の調査で埴輪片が出土している。１次調整ナナメハケで突帯は低平である。天塚古墳のものとよく似ているが、小片のため実態は不明である。周辺に埴輪を配置するような古墳は見つかっておらず、広隆寺の造営に先行する古墳があり削平を受けたか、埴輪窯があった可能性はあるが、遺跡の性格は不明である。

嵯峨野地域は、古墳時代後期になってから古墳の築造が始まる地域である。当然、それまで埴輪生産をした痕跡は見つかっておらず、当該期になって初めて埴輪が導入される地域である。現状見つかっている資料はすべて破片であるが、よく似た製作技法、胎土、焼成であることから、同一工房で生産されたか、同一系譜の工人集団による埴輪であった可能性が高い。ほぼ同時に生産されたと考えるなら、物集女車塚古墳の築造より一段階前の須恵器MT15型式の段階にあたると考えられる。物集女車塚古墳の資料とは焼成の具合、粘土素地の違いから、一系統として考えることはできない。

図 56　清水山古墳出土埴輪

② 乙訓地域（桂川右岸地域）

山田桜谷１号墳　墳頂48mの前方後円墳と考えられている。横穴式石室を主体部にもつとみられ、天井石と考えられる石材が露出している。埴輪も数片採集されており、後期古墳で出土する資料と類似している。１次調整はナナメハケで、突帯は低平である。蓋形埴輪と考えられる破片も見つかっている。

山田桜谷２号墳　墳丘は流出が激しく、墳形・規模ともに不明である。埴輪が表採されており、外面２次調整にBc種ヨコハケを確認できる。蓋形埴輪と考えられる破片も見つかっている。突帯の突出は１号墳のものより高く、また、外面２次調整の存在から、２号墳が１号墳に先行するものと考えられる。

穀塚古墳　山田桜谷古墳のある丘陵を降りた段丘上に築かれた墳長45mの前方後円墳で、金銅製の帯金具、青銅製の馬具類などの豊富な副葬品をもつが、現在墳丘は消滅している。埴輪は円筒埴輪・楕円当埴輪・蓋形埴輪・動物埴輪が知られている。円筒埴輪は１次調整タテハケのみで終わり、一部に２次調整ヨコハケを加えるものもある。直径も小さいものが大半を占める。

天鼓の森古墳（桂中学）　天鼓の森古墳とその近隣に所在した清水塚古墳は、調査がされないまま消滅した。その２古墳に近い箇所で埴輪や須恵器が出土しており、天鼓の森古墳の埴輪の可能性が考えられている。条段構成は不明であるが、上下２段に円形透孔を千鳥配置する個体があることから、３条４段以上の可能性が高い。外面調整は１次調整ナナメハケで、突帯は断続ナデ技法Aで成形される。底部は板押圧による底部調整が行われる。硬質に焼成される個体が多く、須恵器と同様に青灰色を呈するものが大半を占める。

さて、これらの資料の大半は、外面１次調整ナナメハケが右上がりである。これは天塚古墳の埴輪と同様、左利きの工人がことを示している。

井ノ内車塚古墳　全長約32mの前方後円墳である。近年の長岡京市の調査により、後円部に横穴式石室があったことが判明している。埴輪は、後円部西側の造出上と石室の開口する東くびれ部付近から多く出土している。西造出上と東くびれ部とでは、出土する埴輪の種類に偏りがある。西造出上では家形埴輪、人物埴輪・動物埴輪、円筒埴輪が出土し、東くびれ部では、円筒埴輪とともに石見型盾形埴輪が多く出土する。埴輪を配置の違いは、そこで行われた儀礼やその機能差を表しているものと考えられるが、本報告を待って考察したい。円筒埴輪は、４条５段以上に復元でき、２・３段目に円形透孔を千鳥状に配置する。外面１次調整はナナメハケで、底部は板押圧による底部調整が行われる。焼成は酸化焔焼成で須恵器のように青灰色にはならない。

塚本古墳　全長約30mの前方後円墳で、墳丘は削平を受けていたが、周濠から須恵器、円筒埴輪、蓋形埴輪・大刀形埴輪などの器財埴輪、石見型盾形埴輪、人物埴輪、動物埴輪が出土している。円筒埴輪

の器高はほぼ60cm弱で４条５段である。一部に５条６段のものもあるが、器高は４条５段のものと同じである。外面１次調整はタテハケに近いナナメハケで、突帯成形には断続ナデ技法Aが用いられる。また底部は板押圧による底部調整が確認できる。硬質に焼成されるが、青灰色のものと橙色のものとが混在している。

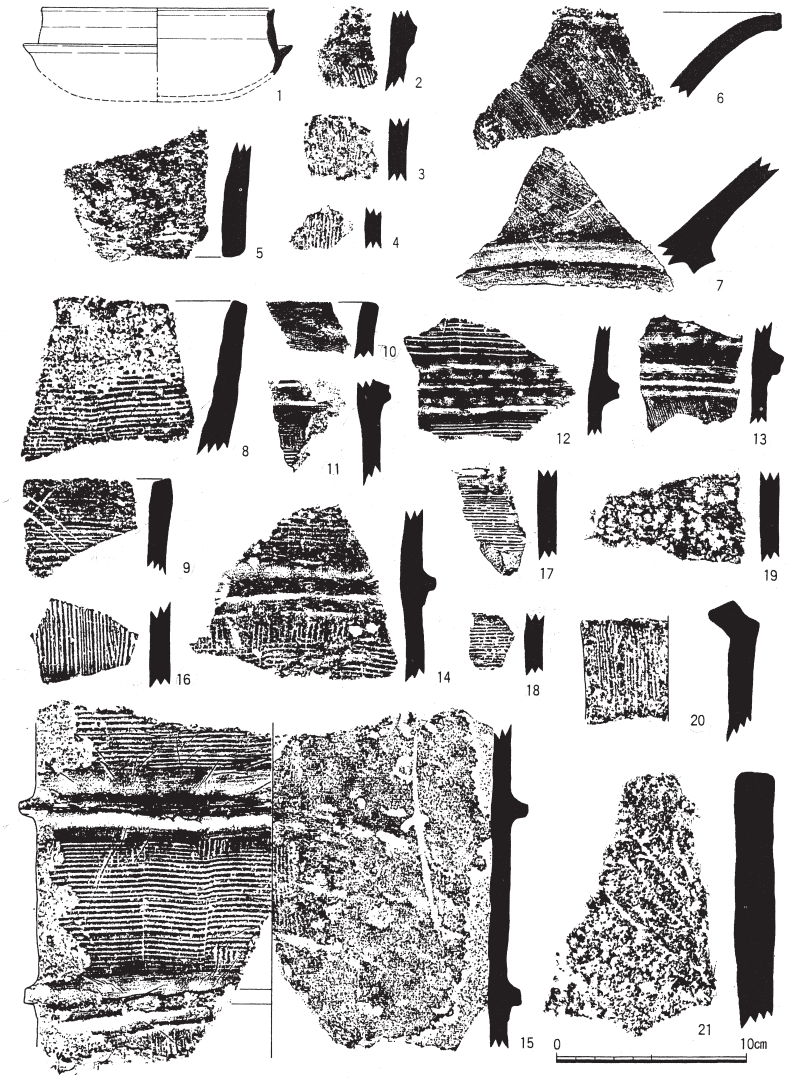


図 57　山田桜谷古墳群（１～５：１号墳、その他：２号墳）

舞塚１号墳　全長約40mの前方後円墳である。周濠から円筒埴輪、前方部付近からは人物埴輪が出土している。

芝１号墳　全長33mの前方後円墳である。後円部に横穴式石室があるが、石材を抜き取られている。埴輪は、くびれ部付近と前方部端で見つかっている。完形に復元できる円筒埴輪は４条５段構成で、２・３・４段目に円形透孔を千鳥状に配置する。外面１次調整はナナメハケで、１個体だけだが２次調整ヨコハケを施す個体がある。突帯は断続ナデ技法Aによって成形されている。底部調整は板押圧による底部調整が施される。焼成は良好である。

さて、芝塚１号墳の円筒埴輪の外面調整ナナメハケを見ると、右上がりになる個体が一定量存在する。天塚古墳、天鼓の森古墳の円筒埴輪と同様に、左利きの工人がいた可能性が高い。

③　その他の地域

鳥羽古墳群　20mの円墳とそれを取り囲むような一辺10m程度の方墳６基からなる。埴輪は円墳から出土しており、円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪、靫形埴輪がある。円筒埴輪は２種類あ

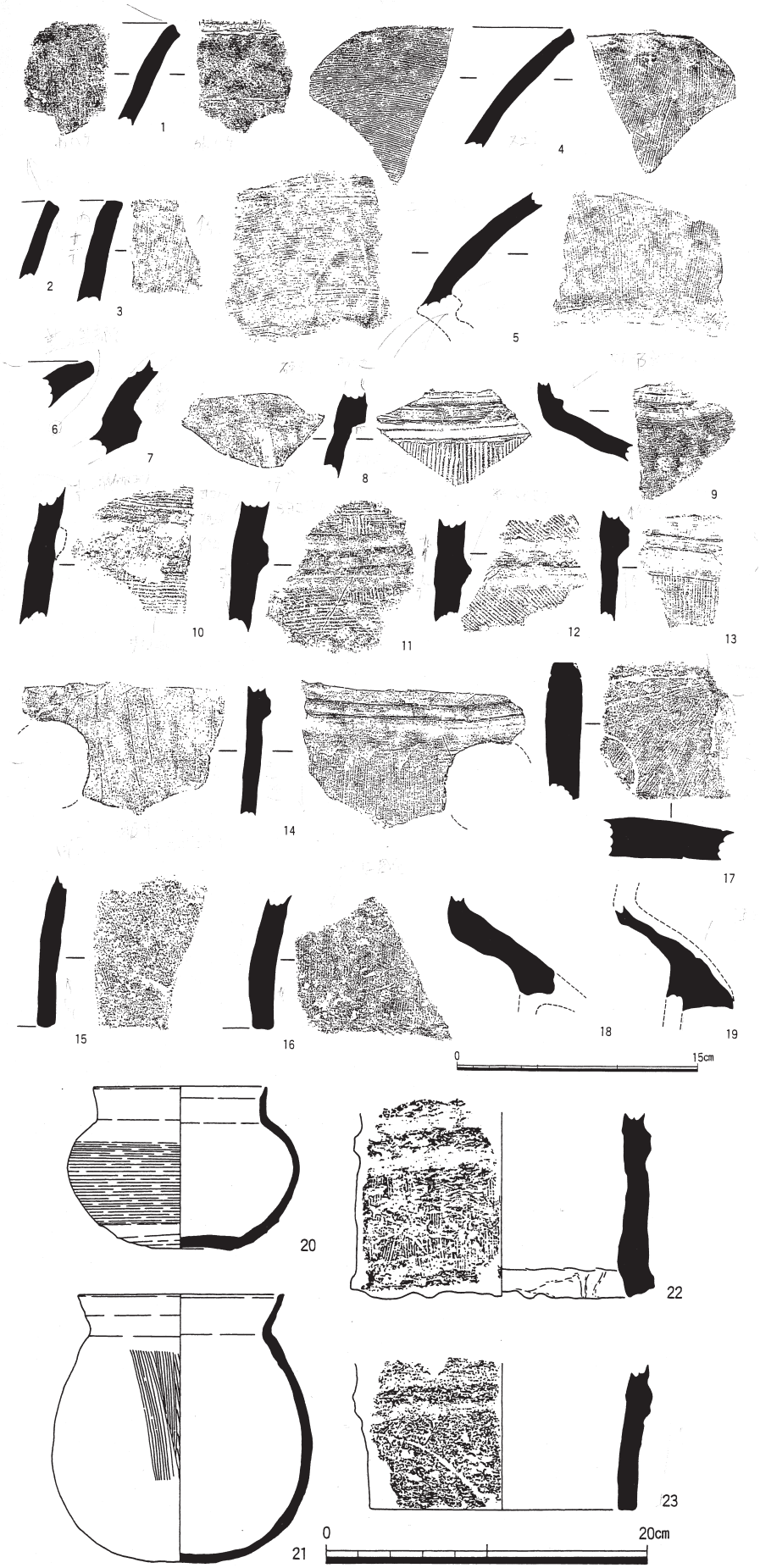


図 58　穀塚古墳出土埴輪

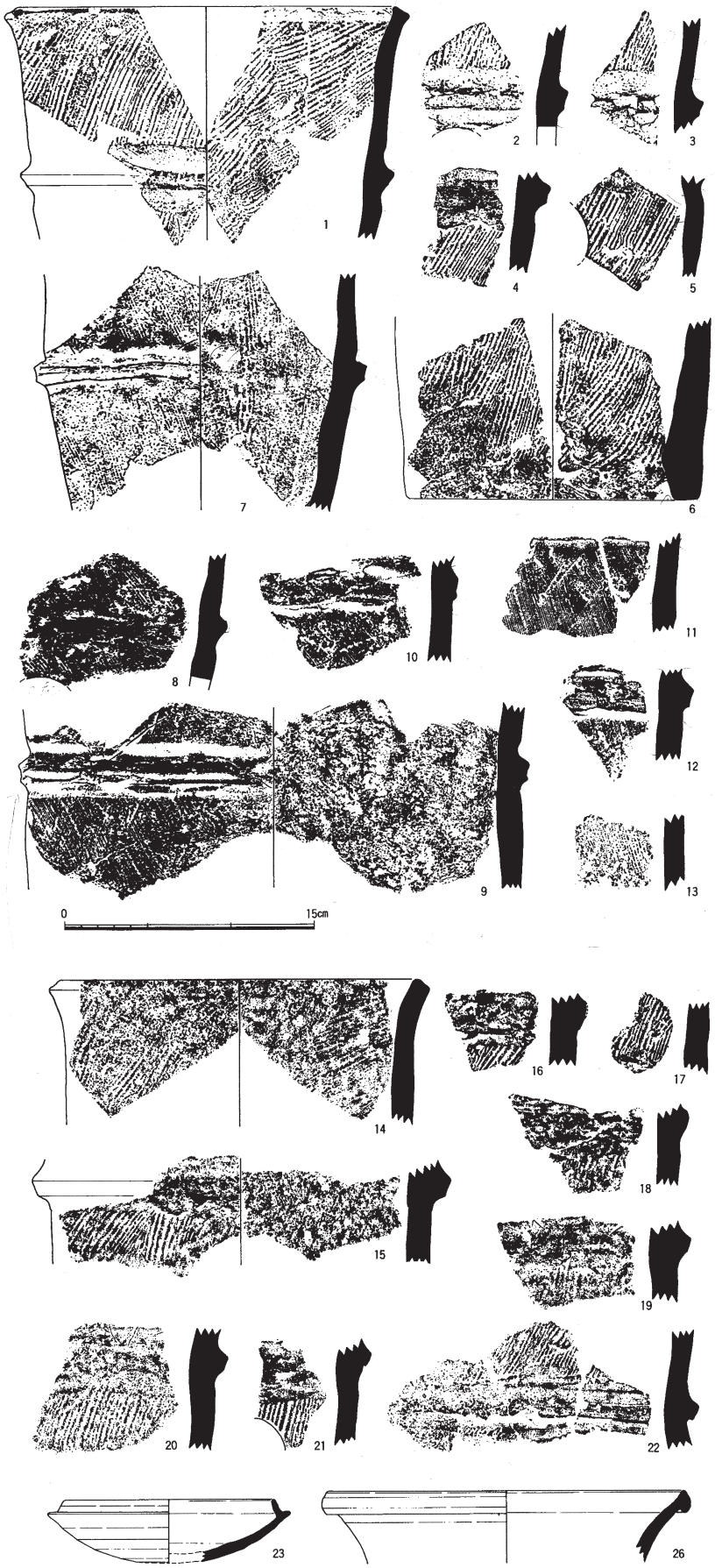


図 59　天鼓の森古墳（桂中学校）出土遺物

り、一つは外面２次調整B種ヨコハケをもつもの、いま一つは外面２次調整はなく、１次調整ナナメハケのものである。これら２種類の埴輪が配置されていた可能性が高く、中期的な埴輪と後期的な埴輪をつなぐ良好な一括資料となる。この古墳群の東側に、現在白河天皇陵に治定される古墳があるが、この古墳の周辺で行われた発掘調査でも埴輪が出土しており、鳥羽古墳群の円墳と同じく、B種ヨコハケをもつ埴輪と外面２次調整のない埴輪が混在している。

吉田二本松古墳群（京大構内）　一辺15m弱の方墳が８基見つかっており、８号墳のみやや規模が大きい可能性がある。８号墳の調査で円筒埴輪・家形埴輪・人物埴輪・馬形埴輪が見つかっている。円筒埴輪は３種類に分かれ、３条４段のものが40cmで２・３段目に円形透孔を千鳥状、４条５段構成のものが器高約50cmで２・４段目に円形透孔を千鳥状、５条６段構成のものが器高約55cmで２・３・５段目に円形透孔を千鳥状を基本に配置する。外面調整は１次調整ナナメハケで、底部は板押圧による底部調整を施す個体も存在する。突帯は断続ナデ技法Ａによって成形される。円筒埴輪はハケメが最低２種類に分類でき、５条６段構成のもののみ異なっている。

４．山城地域北部における古墳時代後期の埴輪生産体制

以上、山城地域北部における古墳時代後期の各古墳の埴輪の観察結果を述べてきた。記述からは、古墳をこえて円筒埴輪の製作技術は似たものがあるようにみえる。しかし、実際に資料をすべて観察したところ、同じ工人や工人集団が生産したようにはみえないことが多い。それは、図面をみるとよりはっきりとするが、全体の形状がまず大きく異なることに起因する。そして、ハケメの施し方や、突帯の成形の仕方など、古墳を超えた共通事項は基本的にはみることができない。ただし、天塚古墳、天鼓の森古墳、芝塚１号墳の円筒埴輪にみられた右上がりのナナメハケは、使われているハケ工具こそ違えど、系譜を追える可能性がある。

以下、時期ごとに埴輪の状況を追って記述する。

まず、古墳時代中期にこの地域において埴輪を配置する古墳は、大山崎町鳥居前古墳や、長岡京市恵解山古墳など少数である。向日市域の長岡京の下層には古墳時代中期の埴輪を配置した古墳がいくつか知られているが、実態は不明なものが多い。つまり、中期古墳から引き続いて埴輪を生産したというようなことは考えづらいのである。

後期前葉（須恵器TK23・TK47型式の段階）になると、それまで古墳の築造がなかった地域でも小規模墳丘をもつ古墳群が築造されはじめる。鳥羽古墳群や吉田二本松古墳群がそれに当たる。これらの古墳は、それまでの中期古墳の秩序の中では埴輪を配置されないような古墳の規模であり、そこに円筒埴輪だけでなく、人物・動物埴輪や精巧な家形埴輪なども配置されている。また、これらのことから、こういった古墳群の埴輪生産は、古墳の被葬者が王権中枢や、埴輪についての情報をもつほかの地域の首長との個別の関係で技術が導入されている可能性が高い。

一方で桂川の右岸地域では、豊富な副葬品をもつ穀塚古墳と、そのすぐ近くの丘陵尾根上に山田桜谷２号墳が築造され、埴輪が配置されている。上述の墳丘規模の小さな古墳群とは異なり、前方後円墳が単独で築造されている。中期の階層構成型の古墳群であれば近在する２つの古墳の埴輪生産は共通であろうが、この２古墳の埴輪に共通性はなく、まったく別の埴輪工人集団を想定した方がよい。山田桜

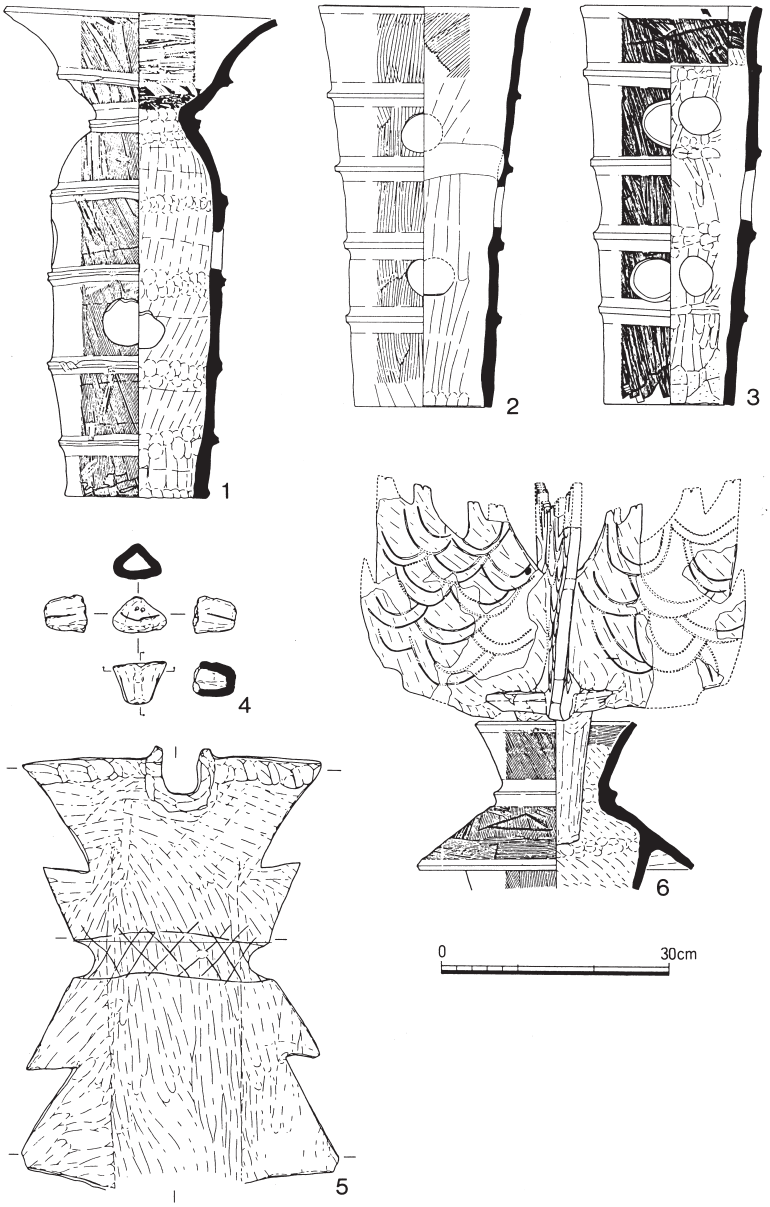


図 60　塚本古墳出土埴輪

谷２号墳の墳丘規模は不明であるが、穀塚古墳の墳丘規模を凌駕するわけでも極端に小さいわけでもなく、ほぼ同規模であろう。近在する位置に古墳を築造する場合でも、異なる埴輪工人集団を組織するような首長同士の関係性をうかがうことができる。

つまり後期前葉の当該地域は、古墳群ごと、さらにいえば古墳ごとに埴輪生産が組織されていた可能性が高い。これは、当該地域に安定的かつ大量に埴輪を必要とするような中期古墳がなく、引き継ぐべき体制がなかったことも要員の一つである。

次に、後期中葉（須恵器MT15・TK10型式の段階）になると、嵯峨野地域で古墳の築造が始まる。また桂川右岸地域において単独で首長墳が築造される。嵯峨野地域の天塚古墳、清水山古墳は隣接して

いることもあり酷似した埴輪が配置されている。また、生産遺跡かどうかは判然としないが、広隆寺旧境内内でも埴輪が見つかっており、それらの埴輪は共通点が多く、同一工房で生産された埴輪である可能性が高い。また、天塚古墳、芝１号墳では右上がりのナナメハケを有する円筒埴輪が一定量存在している。形態的特徴や技法的な特徴も酷似しており、この埴輪を製作した左利きの工人が同一である可能性は高い。ただし、ハケメパターンは不一致であることから、工房・工具は別である可能性が高い。さらにこの左利き工人は、天鼓の森古墳の円筒埴輪生産にも関与していた可能性がある。こちらもハケメパターンの一致を確認できないが、そのほかの突帯などの製作技法の特徴から、同一の工人の可能性が高い。

つまり、この段階は、後期前葉のような古墳ごとに系譜が異なる生産体制が組織されたのではなく、工房こそ異なるものの工人が移動することで埴輪生産が継続的に行われた可能性がある。ただし、生産の拠点となるような場所は想定しづらく、広隆寺旧境内遺跡が生産遺跡とするなら天塚古墳との位置関係が示すように、築造される古墳の近隣で埴輪を生産した可能性が高い。

最後に後期後葉（須恵器MT85・TK209型式の段階）は、埴輪を配置する古墳が物集女車塚古墳以外はない。物集女車塚古墳の円筒埴輪には、当該地域のおいて確認できない断続ナデ技法Bによる突帯成形が採用されている。断続ナデ技法Bを最下条突帯に採用する円筒埴輪の系譜は、淀川流域の三島地域やさらに四国北部の瀬戸内地域、九州北部と広域に存在し、それらの地域のどれかからの流入と考えられる。

つまり、物集女車塚古墳の円筒埴輪は後期中葉の拠点をもたない工人集団の系譜は引き継がず、また新たに組織されていた可能性が高い。

以上から、古墳時代後期の山城地域北部における埴輪生産は、時期によってまったく異なっていた可能性が高い。奈良盆地の菅原東埴輪窯跡や、摂津三島地域の新池窯のように拠点となるような埴輪生産地域は、山城北部地域では想定しづらく、古墳築造のたびに新たに組織された可能性が高い。ただし、後期中葉のように、広域に工人が移動するような体制がとられることもある。

生産体制の変遷は、当時の古墳から考えられる社会状況とも一致しているものと考えられる。つまり、後期前葉は中期的な秩序が崩壊し、新興の中小首長層や有力家長層が台頭し、王権の中に取り込んでいくような体制が想定されている（和田2004）。それまで古墳を築造しない地域であらたに古墳を築造し、埴輪を配置するようになるという現象がそれを示している。埴輪生産も王権に取り込まれたことで、その情報を有する他地域からそれぞれが情報を得ている。後期中葉の前半には王権中枢に動揺があり、やがて後半には体制が整えられるようになると、埴輪生産も安定的に行われるようになる。そして、体制がより整備される後期後葉になると、近畿地方の大型古墳で埴輪の配置が縮小されるようになる。山城地域北部においても物集女車塚古墳を最後に埴輪を配置する古墳は途絶える。

以上のことから、山城地域北部における古墳時代後期の埴輪生産は王権中枢の政治動向と密に関連して展開していたことが判明した。

一方、同時期の関東地方においては、生出塚窯など拠点となる生産地が存在し、広域に埴輪を供給していた状況が知られている（城倉2011など）。古墳時代後期に埴輪を配置する古墳が多くなる、関東地域の埴輪生産と、逆に埴輪を配置する古墳が徐々に減っていく近畿地方とでは、その生産体制が異なっ

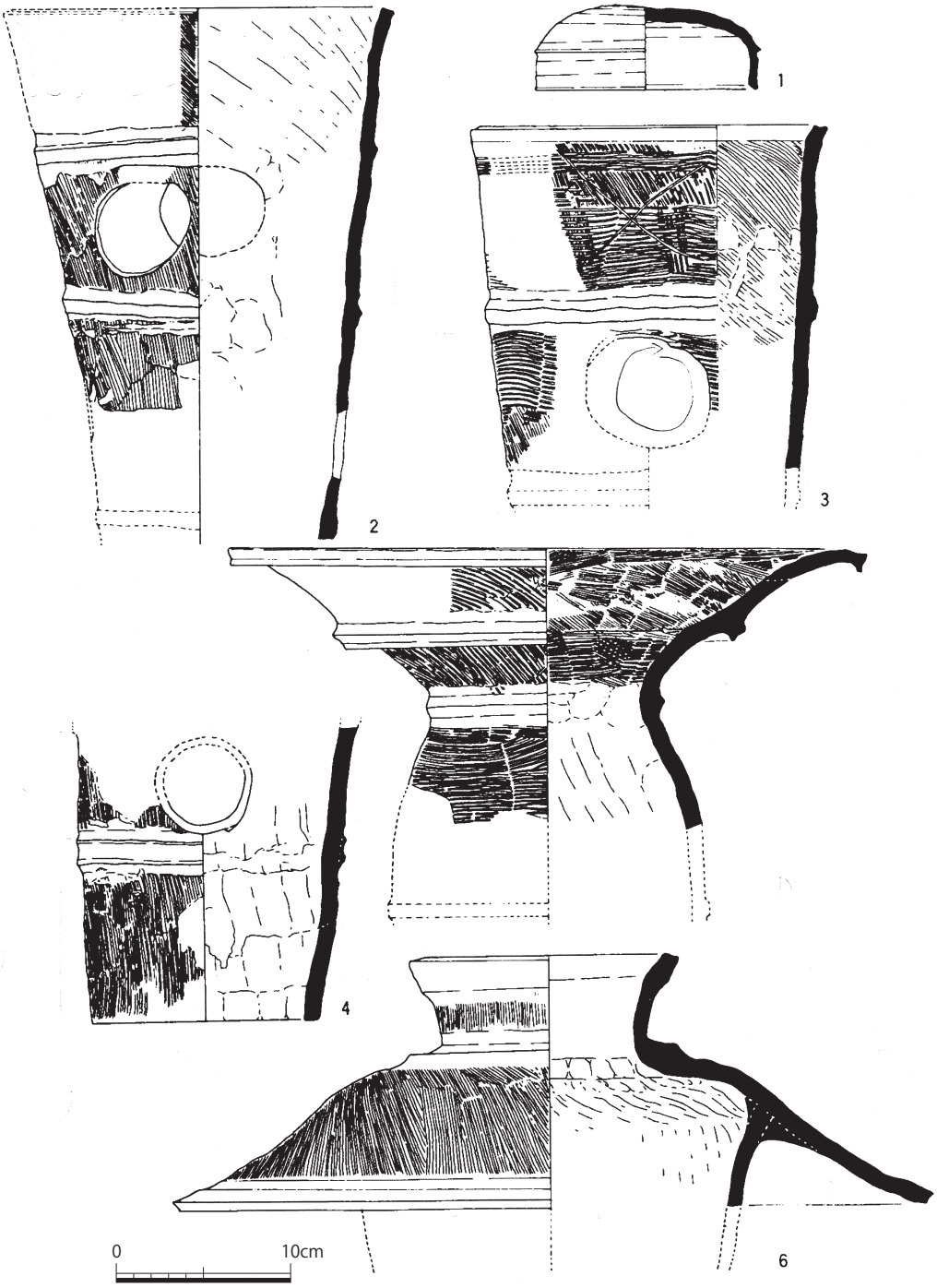


図 61　鳥羽古墳群

ていたのは当然である。

おわりに

古墳時代後期の埴輪は、人物埴輪・動物埴輪に注目が集まり、また資料が爆発的に増加する関東地域

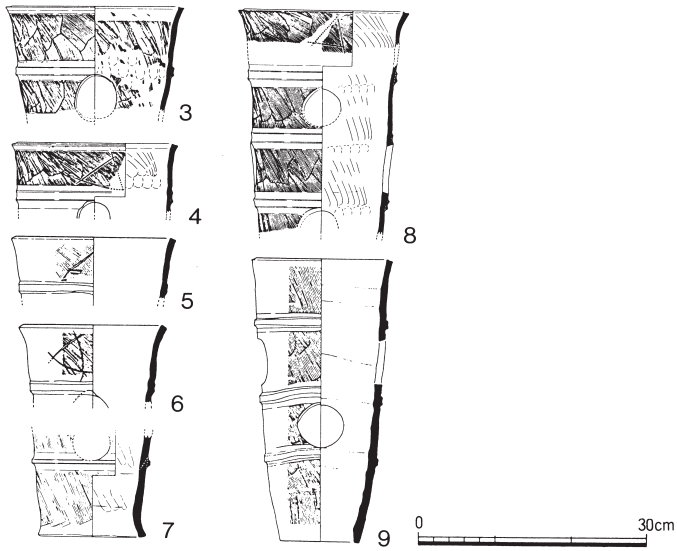


図 62　舞塚１号墳出土埴輪

の埴輪についての検討が進んでいたことで、それらの地域でつくられた埴輪生産のイメージがそのまま近畿地方にも援用されることが多かった。本章での分析のように、近畿地方で埴輪生産の状況を捉える研究は数少ない（廣瀬2016など）。近畿地方の埴輪生産の終焉を考えていく上で、同様の研究の蓄積が必要となる。

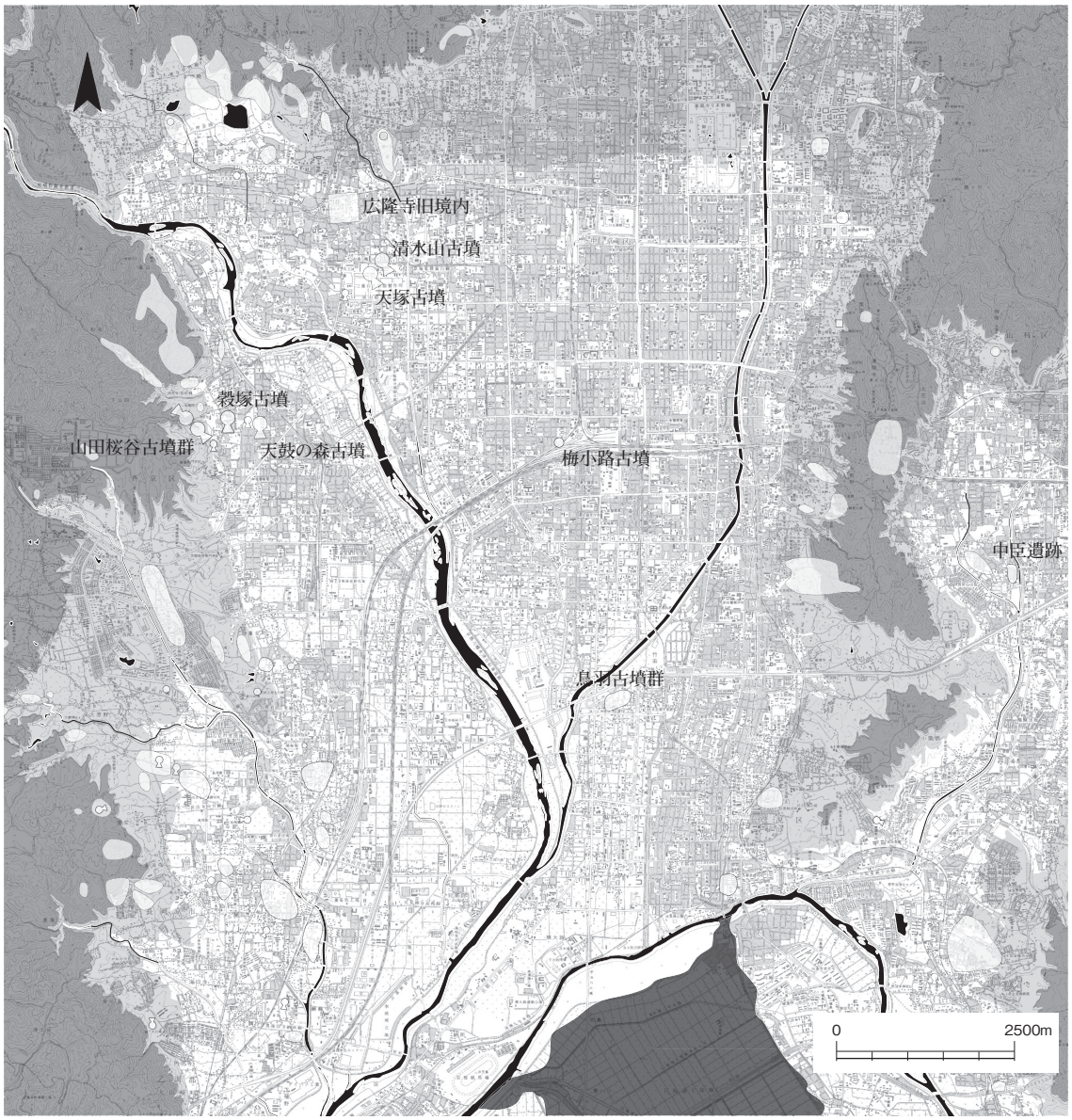

広隆寺旧境内
清水山古墳
天塚古墳
穀塚古墳
山田桜谷古墳群
天鼓の森古墳
梅小路古墳
中臣遺跡
鳥羽古墳群
0
2500m

図 63　対象古墳分布図

表７　対象古墳・遺跡の埴輪一覧

古墳・遺跡名	墳形	規模（m）	埋葬施設	埴輪							土器	備考
				円筒（・朝顔）						形象		
				条段数	透孔	調整						
						外面	内面	突帯	底部調整			
天塚古墳	方円	71	横穴式石室２基	４条５段	円形１段おき千鳥	ナナメハケ	ナナメハケ・ナデ	断続ナデＡ	○	×	須恵器MT15	須恵質・右上がりハケメあり
清水山古墳	方円	60			円形	ナナメハケ	ナデ	台形三角形				
広隆寺旧境内	―	―	―		円形	ナナメハケ	ナナメハケ・ナデ	断続ナデＡ				
山田桜谷１号墳	方円	約48	横穴式石室か？			タテハケ	ハケ・ナデ	断続ナデＡ		蓋	TK23	
山田桜谷２号墳	円？					１次タテハケ→２次Bc種ヨコハケ	ハケ・ナデ	台形	×	蓋		
穀塚古墳	方円	45	竪穴式石槨		円形	タテハケ（一部にBヨコ）	ナデ	一部に断続ナデＡ	×	蓋・動物		副葬品多数
桂中学校（天鼓の森古墳？）	方円	80 ？				ナナメハケ	ナナメハケ・ナデ	断続ナデＡ	○		須恵器TK10	須恵質・右上がりハケメあり
鳥羽古墳群	小型円・方墳群	円：20程方：10～13程			円形	ナナメハケ タテハケ→B（c）ヨコ タテハケ	ナデ ナナメハケ ナデ	三角形	×	蓋・靫・巫女	須恵器TK23・47～	Bヨコの個体とタテハケのみの個体は胎土が異なる
物集女車塚古墳	方円	48	横穴式石室	４条５段	円形１段おき千鳥	ナナメハケ	ナデ	１条目：断続ナデB それ以外は断続ナデA	○	石見・盾持人？	須恵器MT85	
井ノ内車塚古墳	方円	36				ナナメハケ	ハケ・ナデ			石見・動物		
塚本古墳	方円	30		４条５段・５条６段	円形千鳥	ナナメハケ	ハケ・ナデ	断続ナデＡ		蓋・大刀・石見・馬・人物	須恵器MT15	須恵質あり
舞塚１号墳	方円	39				ナナメハケ	ハケ・ナデ	断続ナデ技法Ａ		人物		
芝１号墳	方円	33		４条５段	円形各段千鳥	ナナメハケ	ハケ・ナデ	断続ナデ技法Ａ	○			須恵質・右上がりハケメあり
吉田二本松８号墳	方	13以上		３条４段・４条５段・５条６段	円形各段千鳥	ナナメハケ	ナデ	断続ナデ技法Ａ	○	家・人物・馬	須恵器TK23・TK47	

第７章　王権周縁部における埴輪生産の変遷

はじめに

第２章から第６章にわたって、古墳時代前期初頭から後期にかけての埴輪生産について時代を追って分析してきた。本章ではそれらの成果を振り返りつつ、古墳時代を通して埴輪生産がどのような体制で行われてきたかについて記述し、その特質と背景について考察を加える。

第２章では、埴輪の起源とされる特殊器台形埴輪を、製作技術の詳細な観察から検討した。特に底部の成形技法を比較すると、大和と吉備で異なることが判明した。吉備では特殊器台で採用されていた反転製作技法を特殊器台形埴輪にもそのまま採用していたが、大和で生み出された反転調整技法を採用した特殊器台形埴輪は、地方へ拡散し、吉備においても導入されていった。古墳時代前期初頭の奈良盆地東南部を中心とした王権中枢の古墳には、各地の墳墓に採用されていた要素が取り込まれており、その要素を「大和化」したものを各地に波及させていた可能性が高い。特殊器台形埴輪を配置する古墳をみると、水陸交通の要衝などに立地し、副葬品も鏡や鉄製武器類などを多量に持つものがあり、王権中枢との関係を想起させるものもある。つまり、特殊器台形埴輪の生産にあたっては、王権中枢から直接的な導入があった可能性が高く、地域的な展開はほとんどみられず、王権との関係でのみ成立しうる可能性が高い。

第３章では、古墳時代前期後葉から中期初頭にかけてのⅡ群円筒埴輪について山城地域北部の出土例を分析した。若干の時期差はあるが、共通した製作技術、規格の埴輪が、首長系譜論の中では一系譜とされる古墳群・地域を超えて存在していることを確認し、その背景に広範囲の地域に分布する集落による協業体制の可能性を想定した。埴輪生産についても、この協業体制のもとに行われた可能性があり、山城地域北部では木津川水系を利用した大和北部の佐紀古墳群との関係の中で埴輪生産が導入されて、広範囲に及ぶ巨椋池連合によって維持された可能性を考えた。同様に広範囲に埴輪を供給する体制を、和泉地域の大園遺跡から摩湯山古墳への供給と集落の関係、明石海峡付近の五色塚古墳と周辺の古墳での埴輪の共有関係から確認できた。ただし、和泉地域と明石海峡地域では、摩湯山古墳と五色塚古墳という当時では列島トップクラスの規模をほこる前方後円墳の築造が契機となっていた可能性があり、巨椋池連合の埴輪生産と異なる側面もある。とはいえ、広範囲に埴輪を供給するような地域社会が背景に存在する点は共通しており、その社会を背景とした埴輪生産が当時の埴輪生産の特質といえた。

第４章では、中期大型古墳群の埴輪生産について、京都府久津川古墳群の分析を通して明らかにした。久津川古墳群は、発掘調査によって副葬品や墳丘構造が判明している古墳が多く、古墳の階層性を考慮に入れた検証が可能である。久津川古墳群のうち、古墳ごとに埴輪生産体制を分析し、次に古墳同士で比較した。その結果、久津川車塚古墳の埴輪生産と梶塚古墳の埴輪生産は、大型品の生産において共通の工人集団が想定できた。また、久津川車塚古墳の築造以降、小型品の埴輪生産については当古墳群に工人集団が定着しており、基本的にはこの工人集団が中心となって系譜を追うことが出来る。さらに、久津川古墳群では、窖窯焼成の導入とほぼ同時に人物埴輪と馬形埴輪が導入されており、窖窯焼成と人物・動物埴輪の導入のセット関係を強く想起できた。久津川古墳群で考えられる埴輪生産モデルは、摂

津三島地域の古墳群においても確認でき、王権周縁部における中期の大型古墳群の埴輪生産の様相を解明できた。

第５章では、第４章に引き続いて中期大型古墳群の埴輪生産について、兵庫県西条古墳群の分析を基軸に考察した。Ⅲ期以降に首長墳が連続して築造される古墳群の埴輪生産について考察する。西条古墳群では行者塚古墳・人塚古墳がほぼ同時に埴輪の生産がなされていることが判明し、これまで首長系譜の分析で縦並びにされていた関係が崩れる可能性が高まった。さらに、後続すると考えられていた尼塚古墳の埴輪は、前２古墳とは系譜がまったく異なり、同一首長系譜としてよいかという課題が浮き出てきた。また、西条古墳群の東に単独で築造される東沢１号墳では、家形埴輪は行者塚古墳・人塚古墳と遜色のないものであるが、円筒埴輪は土器のような口縁部や稚拙な形態・製作技術であることから、行者塚古墳・人塚古墳の形象埴輪生産に従事した工人が家形埴輪は製作するが、円筒・朝顔形埴輪は土器づくりの工人を臨時に編成して生産がなされたものと考えた。

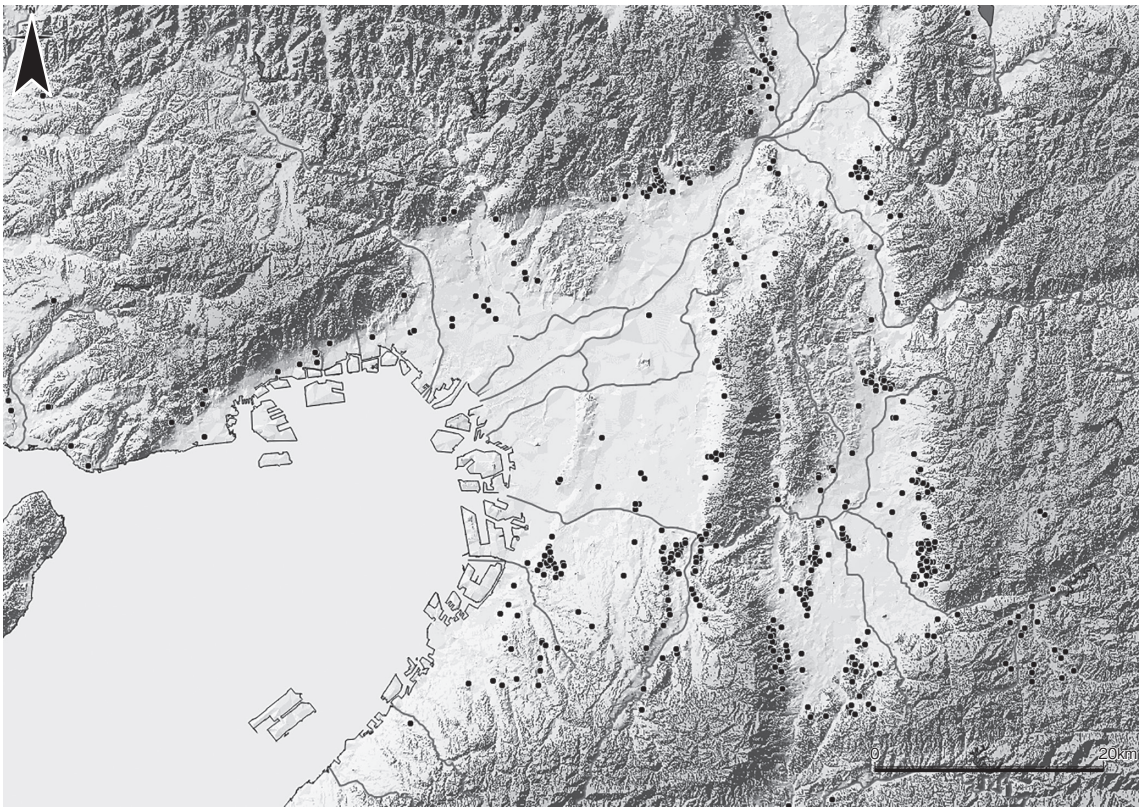
中期の大型古墳群といっても、階層構成型の大型古墳群とならない場合は、埴輪生産の継続がなされずに王権中枢との直接的な関係で導入され、生産が終わると解体するようなものであったことが判明した。ただし、解体された工人の内には地元に埴輪を伝えるような場合もある可能性が高まった。

第６章では、古墳時代後期の山城地域北部の埴輪を対象に分析した。特に、向日市物集女車塚古墳の資料で実施した同工品分析では、同古墳の埴輪生産が製作技法の個人差等からは数種類に分類できるものの、工具痕であるハケメパターンはすべてで共通することが判明し、その理由としては工具の貸借を想定した。その正否はともかくとして、ハケメパターンが共通するほどに工人同士の距離が近く、それほど大規模な生産体制ではないことは確かであろう。また、物集女車塚古墳の埴輪の系譜を、周辺の古墳出土資料に求められるか検討したところ、その可能性が低いことが判明した。そこで、古墳時代後期の各古墳出土埴輪の特徴を比較したところ、基本的には古墳の築造のたびに埴輪生産が組織された可能性が高まった。ただし、一部の資料については系譜として捉えてもよいようなものもあり、各古墳の被葬者同士の関係で埴輪生産が組織されている可能性を考えた。

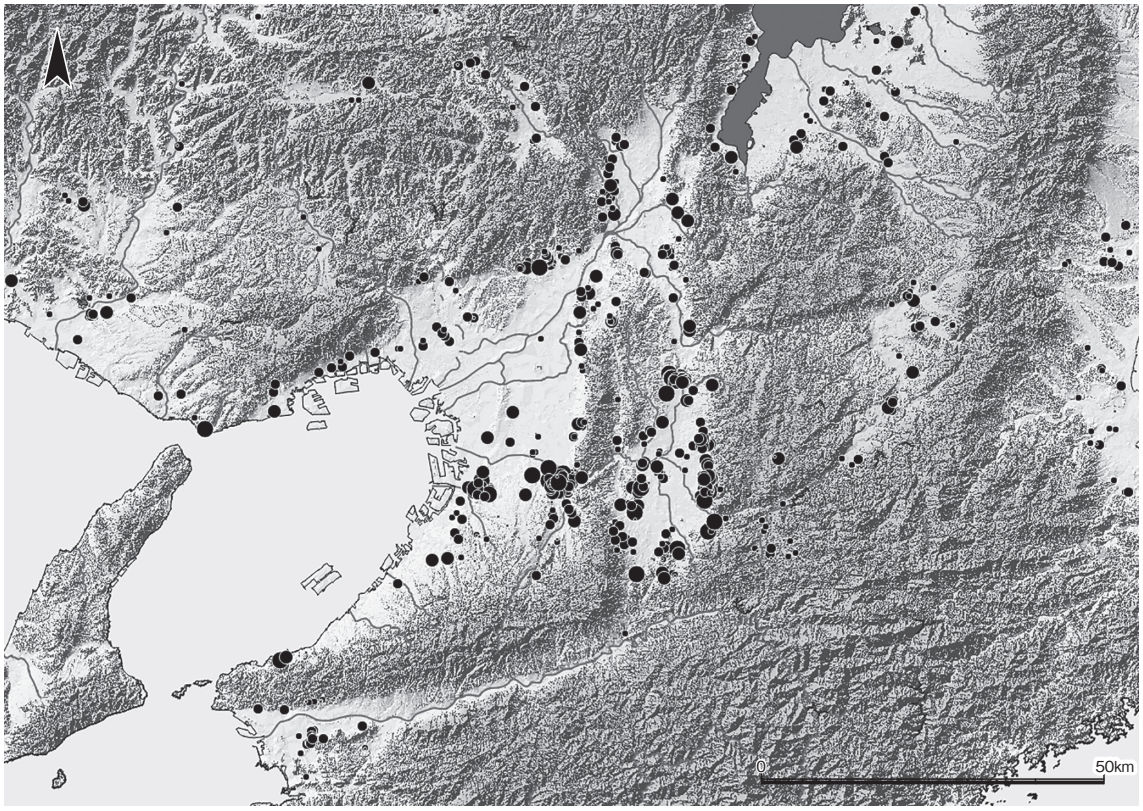
１．王権中枢外縁域の埴輪生産

以上、本論文での分析結果について概略を述べてきた。ではこれらの分析結果と、既往の成果等とを総合した上で、古墳時代の埴輪生産体制について通史的にその特質を見ていきたい。ただし、その前に、本論において分析対象とした古墳や古墳群が、当時の社会においてどのような位置を占めていたかについて考察しておきたい。その考察には、ＧＩＳソフトウェアを利用する。

まず、1991年より発行された『前方後円墳集成』に基づき、その古墳の所在地を座標系に則ったものに変換し、墳形と墳長を入力したデータベースを作成した。そのデータベースを地図に表示させ、近畿地方の前方後円墳の分布を示した。本来は、円墳や方墳なども分布図に表示すべきであるが、30m以上の古墳は、近畿地方には約2000基ほど存在しており、それらをすべて反映させると煩雑になるため、見送った。また、当時の社会は、古墳の形と規模によって階層が表されている可能性が高く、その上位に位置する前方後円墳の分布は、当時の社会の状況を反映しているものと考えられる。よって前方後円墳のみを分布図に表示して当時の社会について考察することは問題ない。



前方後円墳の分布



前方後円墳の規模ごとの分布

図 64　近畿地方の前方後円墳の分布

なお、ベースマップには、国土地理院が公開している基盤地図情報を用いた。海岸線や河川については当時の地形を復元するべきであるが、その作業に至っていない。

では分布図を見ると、近畿地方に分布する前方後円墳のほとんどが、河川沿いや沿岸のやや高まった場所に築造されている様子を確認できる。近畿地方でも、のちに畿内と呼ばれる地域を切り取ったのが、図64上である。先に述べたことがより詳細に視認できる。奈良盆地では、盆地の中央付近にはほとんど前方後円墳が築造されず、山沿いや、平地に近い丘陵尾根上に築造されている様子を確認できる。大阪平野でも、旧大和川の支流沿いの高まった部分にこそ築造されるが、河内潟のあった場所には当然ながら前方後円墳の築造はみられない。

次に、墳丘規模の差が、築造地域に反映されるかをみたい。図64下は、墳丘規模ごとにスタイルを変えて示したものである。当然ながら、奈良盆地と大阪平野に巨大古墳が築造される様子を看取できる。一方で、やや開けた平野に点的に存在する大型古墳や、水陸交通の要衝と考えられるような場所に点的に存在する大型古墳が存在することも確認できる（註1）。これらの古墳は、下垣仁志が想定したように、畿内の四至に近接するような位置に戦略的に配置された古墳（下垣2005）である可能性が高いものと推断できる。

以上、古墳時代を通して前方後円墳の築造状況を見ると、奈良盆地と河内の古市古墳群、和泉の百舌鳥古墳群にその数が集中し、さらに墳丘規模もほかの地域を凌駕していることが分かる。この地域こそが当時の王権の中枢であり、大王墳は基本的にこれらの地域のどこかに築造されているものと考えられる。当時の王権は、各地の首長と大王が重層的に階層構成をなし、首長は大王にヒトやモノを提供することで、大王は首長に古墳の築造に関する、モノや情報を与えることで成立していたものと考えられる。そのため、前方後円墳には当時の政治的な影響が色濃く反映されており、その分布範囲が当時の王権の領域と考えてもいいであろう。その中でも、先述の奈良盆地と大阪平野の大型古墳群は別格であり、大王家とそこに仕える人びとの墓域であったと想定できる。

その王権中枢に広がる前方後円墳が分布する範囲が、本論での対象となった古墳が分布する範囲であり、これらの地域は王権中枢に対しての外縁域といえる。王権中枢ほどではないものの、これらの地域においても大型前方後円墳は密に分布し、王権中枢の運営に何らかの形で関わった可能性を考えることができる。

つまり、本論文で分析した古墳は、王権中枢そのものではないものの、何らかの形で王権中枢とは関係を持っていたと考えることのできる古墳であり、そこで行われた埴輪生産は、王権中枢の影響を強く受けたものと考えることができる。よって、本論で明らかにした埴輪生産の様相は、古墳時代の王権中枢の埴輪生産の一部を示しているものとして差し支えないであろう。

では、以下に時代ごとに埴輪生産体制の特質について記述してきたい。

①　前期初頭

この時期の埴輪は特殊器台形埴輪である。埴輪を配置する古墳の数自体も多くはなく、１基の古墳への配置数も少ないため、少人数で製作にあたるような生産体制であった可能性が高い。製作技術が共通し、文様の型式学的変化がスムーズにおこっていることから、特殊器台形埴輪の工人集団は固定化され

ていた可能性がある。この工人集団は、初期こそヤマトと吉備の両地域にあったが、ヤマトの集団に収斂されていく様子を製作技術からは読み解くことができた。特殊器台形埴輪を配置する古墳は、吉備のものを除くと、副葬品の種類や数から王権中枢との強い結びつきを想起できる。例えば、兵庫県権現山51号墳は、王権中枢を介して入手したであろう三角縁神獣鏡を副葬し、京都府元稲荷古墳は鏡こそないものの多種多様の鉄器を副葬している。元稲荷古墳の特殊器台形埴輪は、使用されている胎土こそ地元のものであるが、製作技術はヤマトで見られるものと変わりない。王権中枢が保有していた特殊器台形埴輪の工人集団が、元稲荷古墳の築造に際して派遣されたのであろう。このことは、特殊器台形埴輪を配置する古墳に後続する古墳があっても、そこには特殊器台形埴輪が配置されないことも傍証となろう。

②　前期前葉～中葉

特殊器台形埴輪がまだ生産されている段階に、Ⅰ群円筒埴輪が創出され生産が開始される。特殊器台形埴輪とⅠ群円筒埴輪との最大の差異は、多量に配置されることを目的とするかである。つまりⅠ群円筒埴輪の生産体制は、大量に埴輪を生産するための体制といえ、それに合わせて製作技術も整備されている（廣瀬2013）。廣瀬は製作技術が型式学的に変遷をたどることから、王権中枢においては、埴輪生産が継続して行われていた可能性を考えている（同上）。ただし、各地の埴輪生産については、各首長墳の築造のたびに王権中枢から技術が導入されており、首長墳が連続して築造されるような場合についても、地域の中での連続性は想定しづらいと考えている。筆者も、廣瀬が検討対象とした京都府向日丘陵に築造される古墳出土資料を実見の上、検証したが、古墳ごとに大きく様相が異なっており、埴輪生産が古墳群の中で継続していない状況を確認している。

前期初頭の特殊器台形埴輪は、形態・技法・文様の３点が特に複雑であり、また配置する箇所も限られていたため、大規模な生産体制は想定できず、また、埴輪を配置する古墳も少なかった。しかし、この時期になると埴輪を配置する古墳では、墳頂の方形埴輪列や段築平坦面に埴輪列がめぐるようになり、普通円筒埴輪の総量は増加する。そして、埴輪を配置する古墳の数も特殊器台形埴輪のみを配置する古墳の数より増加する。ただし、王権中枢が埴輪生産をコントロールしており、すべての古墳に埴輪を配置させていたわけではないと考えている。それは副葬品の組成から同時期と考えられるすべての古墳に埴輪が配置されていないことからも明らかである。

もちろん、香川県などにおける壺形埴輪や器台系埴輪の展開は、畿内王権中枢との関わり以外で説明する必要がある。しかし、この時期の各地のほとんどの古墳の埴輪生産は、王権中枢との直接的な関係によって成立しており、地域内での展開や地域同士の系譜関係を追えることは稀である。

③　前期後葉から中期初頭

Ⅱ群と呼ばれる円筒埴輪が生産されたこの時期は、高橋克壽が指摘するように高い斉一性・規格性のある埴輪が各地に展開する時期である（高橋1994）。本論で明らかにしたとおり、この時期の埴輪生産は、広域に埴輪を供給する体制を取っていたものと考えられる。ここでいう広域とは、水系や流域といった首長系譜論の根拠となっている範囲をこえ、それらを複数あわせるような範囲である。

例えば、山城地域北部においては、特徴的な盾形埴輪があらわしているように、淀川に注ぐ桂川、木

津川、宇治川の３河川の流域が一体となって埴輪生産がなされていたものと捉えられた。同様の埴輪生産体制は、和泉地域、明石海峡付近の地域においても確認できる。ただし、和泉地域では摩湯山古墳、明石海峡付近の地域では五色塚古墳という、当時の列島内においてもトップクラスの規模をほこる前方後円墳の築造がなされている。山城地域北部にそういった古墳は築造されていない。にもかかわらず、広域に埴輪が供給されているのは、地域を超えた集落の協業体制が行われるような社会状況を想定できる。大型の前方後円墳の築造を契機として和泉地域と明石海峡付近の地域は、王権中枢との直接的な関係性の中で工人集団の組織を行うが、山城地域北部においては淀川流域で山陰や琵琶湖から東国へ抜けるという交通の要衝をいうこともあり、王権中枢からの技術導入を想定できる。以上から前期後葉から中期初頭にかけての埴輪生産は、広域の協業体制をとる集落の状況を背景として、河川の水系を基本とする狭い地域いくつかを超えて供給するような体制が取られていたものと考えられる。

④　中期

窖窯焼成の導入という窯業生産上の大きな画期がおこっているこの段階の埴輪生産は、基本的に古墳群の中で完結する。前代が水系を基本とする地域が複数あつまった広域に埴輪が供給されるような体制であるのに対して、この時期は、それよりも範囲は狭くなる。この時期、大王墳を頂点とした階層構成が明確になり、各地域においても階層構成型の古墳群が形成されるようになる。さらに、古墳における埴輪配置の方式がほぼ定型化し、墳丘の墳頂、各平坦面、造出上、周堤上などに多量かつ多種の埴輪を配置するようになる。前段階に、中期の埴輪配置方式の創出をみることができるが、定型化したのはこの段階である。この２点が相互に関係することで、古墳群内での埴輪生産が行われるのであろう。すなわち、地域の大首長墳の埴輪生産を基軸に据え、そこに動員された複数の工人集団が生産する埴輪を、地域の中小古墳にも分配することで、大首長が階層的な優位性を示すことができたのである。前時代は複数の地域首長の連合体で協力して埴輪生産を維持していたのに対して、中期は地域の大首長が埴輪生産を維持・管理していた。そのため、大首長墳が連続して築造される場合は、工人集団に継続性を確認できる。

一方で、大首長墳こそ築造されるものの、中小古墳が築造されず、階層構成型の古墳群にならない地域では、古墳の築造のたびに埴輪生産集団を組織していた可能性が高い。この場合は、前期前葉から中葉の埴輪生産の様子と近い印象があり、王権中枢との関わりの中で埴輪生産が行われる。

⑤　後期

後期になると、中期までは見ることのできた階層構成型の古墳群が近畿地方ではほぼなくなり、埴輪生産の様相が中期とはまた一変する。各地で初期群集墳と呼ばれる木棺直葬を主体部に持つ小型円墳軍が展開すると、埴輪もそれらの古墳の一部には配置される。ここで取られた埴輪生産体制は、群集墳の内部でも古墳ごとに別項の工人集団が組織される点が特徴といえる。つまり、古墳の被葬者が王権やその他の地域首長との個別的な関係で埴輪工人集団を組織し、ヒト・情報を入手したために、隣り合う古墳であっても埴輪の形態や、製作技術、組成が異なるのである。後期中葉になると、工人・工人集団の移動を基本とする継続性を、古墳や古墳群を超えて見出すことができる。ある古墳で埴輪生産に従事し

た工人集団が、移動して別の古墳の埴輪生産に従事するような体制である。そのため、形態や製作技術が似ていても、胎土や工具が異なる状況を確認できるのである。しかし、その体制も後期後葉に近づくにつれて崩れる。それは近畿地方で埴輪を配置する古墳の数が減少していくことと関係するものと考えられる。

以上、本論で対象とした王権中枢に対する外縁域といえる埴輪生産の状況を、古墳時代を通して振り返ってきた。埴輪生産体制は常に一定ではなく、王権中枢との関係や地域社会の状況によってその規模やあり方は変動していることが判明した。高橋克壽が想定した（高橋1994）、前期から前期初頭にかけての埴輪生産のイメージはここでも同様に捉えることができたといえる。一方で中期以降に関してみるとその想定と大きく異なる点も出てきた。中期では、古墳群のあり方、階層構成型の古墳群であるかなどが埴輪生産の様相を大きく左右しているし、後期では、広域に埴輪を供給するような体制は、本論の分析では想定しづらく、もしろ個別に埴輪生産が行われていたことを明らかにできた。

さて、本論の分析を通じて、古墳群や地域とはなにかということに迫ることができる可能性が出てきたと考える。特に、これまでの古墳時代研究で重要視されてきた古墳の築造状況を社会状況と読み替えて政治史を語る、首長系譜論については、埴輪生産から新たな展開を生み出せるものと考えられる。そこで本論の最後に、埴輪生産から首長系譜を検証することとしたい。

２．埴輪生産と首長系譜論

古墳時代には実に多くの古墳が様々な地域に造営された。古墳は１基単独で造営されることは少なく、多くの場合は複数基で古墳群を形成している。その古墳群の中でも、墳形、墳丘規模や副葬品の品目・量の豊かさから、古墳群を構成する他の古墳を圧倒する古墳がある。そのような古墳については、地域における首長の墳墓である可能性が高いと言うことから、「首長墓」・「首長墳」と呼ばれている。古墳時代の首長墳は前方後円墳（前方後方墳）であることが多く、まれに帆立貝式古墳や大型円墳がそれに代わることがある。こういった首長墳は、複数が時間差をもって築造されることが多い。都出比呂志は、この現象を「代々の首長一族の墳墓群であることを示す」とし、これを首長墓系譜または首長系譜と定義した（都出1988）。各地域の首長墓系譜の変化を比較することで、地域の中でイニシアティブをとった首長の交替を論じ、その背後にある王権の政治変動について検討することができるのである。

そのような首長系譜であるが、実際に血縁のある一族であったのかは、人骨出土例が少ないことから、ほとんど証明されていない。首長系譜が血縁関係にある一族によっていても、そうでなくても、同じ地域に連綿と首長墳を形成することのできる権力基盤があったものと想定できる。そのような首長・首長墳の権力・経済・生活基盤については、近藤義郎による月の輪古墳の発掘調査・研究によって、「一つの主要な水系をもつ一まとまりの平野地域を単位に前期とみなしうる主要大型古墳の数基ずつが存在」することが呈示されて以降（近藤1960）、その定義に基づいた分析が行われる。ただ、ほとんどの場合が7世紀以降に律令国家が制定した評・郡とその範囲が重なっているため、それを利用することが多い。

さて、古墳の築造はいくつもの段階を経ており（和田1989、土生田1995）、それぞれに人員を調達していたものと想定できる。その中でも、墳丘の築造にかかわる土木作業や、外表施設である埴輪の生産・運搬・配置には多くの人員が必要となったであろう。埴輪生産には首長が基盤とする地域から工人

が調達されたであろう。埴輪工人は、首長墳が造営されるたびに組織されることもあるであろうし、専業的に埴輪生産を行う場合もあるであろう。また、埴輪は首長墳のみならず古墳群を構成する古墳にも供給されることがある。その場合は、埴輪工人が恒常的に組織されていなければ、生産が追いつかない。よって、首長墳のみならずそれよりも階層的に下位の古墳にも埴輪を供給している古墳群においては、専業とまではいかなくても埴輪生産に恒常的に従事した工人集団がいたものと考えられる。そのような埴輪工人集団が代々の首長に継承されている場合、埴輪工人の連続性が首長系譜を証明することになるであろう。さらに、隣接する地域で同時に首長系譜が営まれている場合、その両者に埴輪生産組織がある場合は、基本的に埴輪の技術的が異なると考えられる。技術系譜の異なる埴輪の存在をもって、首長系譜が異なることを示せるであろう。それが分かることによって、首長系譜を構成する古墳群の領域や、首長の権力基盤である地域の範囲が一定度示せるのではないだろうか。

ここではそのような問題意識で、埴輪生産から首長系譜に迫る試みを行う。

３．首長系譜論と埴輪生産に関する研究史とその課題

首長系譜論についての研究は、前に示した近藤の成果以降各地で展開され、近年は出土遺物の詳細な型式学的検討や編年の確立によってより精緻なものとなってきている。首長系譜研究の学史は、下垣仁志によって網羅的に蒐集整理されているため（下垣2012、2016）、ここではそのすべてを取り上げず、特に重要と考えられる論点を整理したい。

後藤守一らは戦前、群馬県白石古墳群を調査し、立地、型式変遷、内部構造を基礎に継続的に築造された古墳の変遷過程を示している（後藤・相川1936）。戦前の後藤らの視点をさらに発展させたのが、近藤義郎である。近藤は月の輪古墳の調査を契機として、一まとまりの平野という地域単位を基礎とする集団が、一つの首長系譜を生み出す母胎となったことを示した（近藤1960）。近藤の視点は後の研究の基礎となり、高度経済成長期の開発などによって蓄積した調査成果を位置づける際の手本となっている。

各地で首長系譜についての議論が高まると、次にそれらを総合的に分析した成果が登場する。野上丈助は大阪府域の首長系譜研究を進め、畿内では古墳時代前期後半に首長系譜の基礎単位が揃い、5世紀に盟主的首長が複数の首長系譜を統合して大規模な古墳群を形成する地域があることを明示した（野上1970）。白石太一郎は畿内の大型古墳群が、大和東南部、大和北部、河内と後の和泉の古市・百舌鳥、摂津三島、そして大和東南部へと移動する現象を、王権中枢の政治的変動と対応すると説いた（白石1969）。小野山節は各地の首長系譜の中で、5世紀の前半と後半のある時期に前方後円墳を造れず、大型円墳や帆立貝式古墳しか造れない古墳があることを見出し、これを河内王朝による規制の結果と見た（小野山1970）。都出比呂志は各地の首長系譜の消長を相互に比較し、首長系譜が断絶する時期が5世紀前葉、5世紀後葉、6世紀前葉の3回あり、各地で同じような傾向が見出せるとした（都出1988）。首長系譜の断絶と継続を地域内での「輪番制」などの証左とする意見もあるが（吉田晶1973）、それが全国的に連動する現象であることを示し、古墳時代の政治史研究に与えた影響は大きい。都出の指摘は、全国各地の前方後円墳の集成・編年作業である、『前方後円墳集成』（近藤編1992～1994）や、『全国古墳編年集成』（石野編1995）などによって、検証されつつある。また近年では、各地域でも前方後円

墳を主とする古墳の変遷から首長系譜を再検討する動きも多く見られ、九州（九州前方後円墳研究会）、中国･四国（中国四国前方後円墳研究会）、東北・関東（東北・関東前方後円墳研究会）などで、新出資料なども加えて活発な議論を行っている。

これらの研究を基礎として、和田晴吾は古墳時代中期に複数の首長系譜を統合した地域首長連合があり、それらの上に大王を頂点とするピラミッド的な首長連合体制が形成されたことを示した（和田1998）。また、鏡や鉄製甲冑といった「威信財」といわれる副葬品の変化と首長系譜の変動を結びつける研究も興っている（田中1983、福永1998など）。中でも、鏡の保有と古墳複数埋葬を首長系譜論と結びつけた下垣の指摘は重要となる。すなわち、それまで断続面ばかりが注目されていた首長系譜であるが、「系譜」と呼んでいる継続面にあまり目が向けられていなかった。継続面を鏡の長期保有と古墳複数埋葬に見られる埋葬原理の共通性から首長系譜の継続面を明らかにしたのである。

以上のように、古墳自体や副葬品の様相から首長系譜論にアプローチする研究は多く存在している。しかし一方で、先述の通り首長の領域に関する議論や、その領域内で展開された手工業生産への首長の統制に関する議論は少ない。特に、埴輪生産について首長系譜論とからめた議論は極端に少ないといえる。それは、埴輪研究が技法の変遷を基軸に据えた型式学や編年を目的としたものが多いことに原因があると考える。また、技法の伝播から王権の支配領域の拡大を論じる議論や、少数の古墳出土埴輪の詳細な分析を通した埴輪生産体制論などは、マクロ･ミクロな視点の両極端な研究であり、その中庸が少ないのである。首長系譜を継続させる一地域で埴輪生産がどのように変化したのか、そして、それらが全国的にどのような違いや共通点があるのかを検討する必要があるのではないだろうか。また、埴輪生産の継続が認められる場合、それは首長系譜の継続を示す証左にもなり得るし、製品の拡がりを見ることで埴輪生産を統制した首長の基盤を想定することも可能になるであろう（註２）。

よって以下では、埴輪生産の継続性と首長系譜の継続性について検討したい。首長系譜を形成する古墳群において、埴輪生産が継続しているのかを検討するために、階層構成がはっきりとしており、前方後円墳を頂点とした政治体制がもっとも成熟したと考えられる古墳時代中期のモデルを検証する。

４．京都府山城盆地における古墳時代中期のケーススタディ

上記の課題を解決するためには、首長系譜を形成し、かつ継続的に埴輪が生産・供給されている古墳群で検討する必要がある。そこで、第４章で示した、調査が継続的に行われ、一定量の埴輪が出土している京都府久津川古墳群を検討の対象としたい。

久津川古墳群では、墳形と墳丘規模などで秩序づけられた、ピラミッド型の階層構成を形成していることが判明している（和田1998）。

久津川古墳群最大の久津川車塚古墳の埴輪生産は、外堤を中心に配置される大型のA群円筒埴輪を製作技術a類で生産する集団と、外堤の一部と墳丘本体に配置される小型のB群円筒埴輪を製作技術b類で生産する集団の二つによって行われたと考えられる。なお焼成は黒斑が見られることから野焼き焼成と考えられる。

久津川車塚古墳に次ぐ規模をもつ芭蕉塚古墳の埴輪生産は、大型のA群円筒埴輪も小型のB群円筒埴輪も、製作技術b類によって生産されている。焼成はすべて窖窯焼成による。

前章でも検討したように、久津川古墳群では窖窯焼成に伴って埴輪生産体制の再編がなされていると考えられる。すなわち、窖窯焼成導入以前では、大型円筒埴輪制を生産する工人集団と小型円筒埴輪を生産する工人集団が別個に存在していた。それは、それぞれが異なる埴輪製作技術を有していることから推測できる。そして窖窯焼成が導入されると、小型円筒埴輪を生産する工人集団のみが埴輪生産を継続し、この集団が大型円筒埴輪の生産も行うようになる。窖窯焼成導入以前に大型円筒埴輪の生産に従事していた集団は解散したか、小型円筒埴輪生産組織に取り込まれたのではないかと推測できた。

つまり、久津川車塚古墳の墳丘本体の埴輪を生産していた工人集団が、芭蕉塚古墳の埴輪生産にも技術系譜上の継続を見せているのである。このことから、芭蕉塚古墳の首長が、久津川車塚古墳の埴輪生産に従事した集団を引き継いだと想定できる。よって、技術系譜が同じである埴輪工人を首長が引き継ぎ、久津川車塚古墳と芭蕉塚古墳の首長系譜が継続していることが示せる。

久津川古墳群を構成する丸塚古墳や山道古墳、山道東古墳、芝ヶ原古墳群にも久津川車塚古墳、芭蕉塚古墳と同じ工人集団からの埴輪の供給が確認できる。久津川車塚古墳、芭蕉塚古墳の被葬者である地域首長の基盤を支える人々の古墳にも、同じものが供給されることで、地域のまとまりが共有できていたものと推測される。

では次に、久津川車塚古墳や芭蕉塚古墳が築造されたのとほぼ同じ時期の他地域の様相についてみてく。特に久津川古墳群の北方宇治市域には宇治二子山古墳（北墳：円墳40m、南墳：円墳34m）が、また、同じ淀川水系である桂川右岸では恵解山古墳（前方後円墳128m）がそれぞれ築造され、ともに調査で埴輪が出土している。

宇治二子山古墳は北墳の墳丘裾埴輪列から26本の円筒埴輪、墳頂部埴輪列から３本の円筒埴輪、他に墳丘裾流土中から家形埴輪片、蓋形埴輪片、草摺形埴輪片、靫形埴輪片が出土している。円筒埴輪は、全形をうかがうことのできる資料はないが、図上で復元すると、４条５段で全高65.5～68.5cmとなる。底部径は20.0cm前後で、底部高は11.0cm前後となる。すべて黒斑を有し、野焼き焼成である。製作技術を確認すると、外面調整は、１次調整がタテハケで、２次調整がＢ種ヨコハケを施す個体とナデる個体、またはそのどちらも省略する個体がある。75％以上の個体が底部に外面２次調整を施していない。内面調整は、底部付近からナデ調整を行い、口縁部付近のみハケ調整が確認できる。久津川古墳群の円筒埴輪と比較すると、底部径・底部高ともに宇治二子山北墳が小さいことが分かる。製作技術は、久津川古墳群のb類と類似するが、B種ヨコハケは主体的とはならず、ナデ調整が多く使用される点で異なる製作技術であると考えられる。

恵解山古墳は第1段平坦面、第2段平坦面、造出上で埴輪列が検出されているが、現地取り上げを行わずに保存している個体もあるため、全様をうかがうことはできない。円筒埴輪、朝顔形埴輪の他に、壺形埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪、靫形埴輪、甲冑形埴輪、水鳥形埴輪、船形埴輪が出土している。円筒埴輪の全形は図上でも復原できない。底部径は20cm前後、底部高は13cm前後と16cm前後の２つの規格がほぼ同比率で存在する。突帯間隔は12cm前後である。器壁表面が風化しているものが多いため判然としないものが多いが、黒斑を有する個体が多く見受けられ、野焼き焼成である。製作技術は、外面１次調整がタテハケかナナメハケ、外面２次調整は突帯間を１周するBc種ヨコハケと2周以上するBb種ヨコハケ、Ca種ヨコハケが認められ、２次調整を施さない個体も存在する。内面調整は、ナ

デ調整が主体を占める。底部径・底部高は宇治二子山北墳のそれと近いが、底部高が高い個体が存在し、様相がやや異なる。また、製作技術は全形の分かる資料がないため推測の域を出ないが、b類に近い（註3）。

以上、久津川古墳群と同時期に近接地域の首長墳の埴輪の様相を検討した。その結果、首長系譜が異なれば、埴輪の様相が異なることが分かる。特に、隣接する久津川古墳群と宇治二子山古墳とで埴輪の様相が全く異なることは注目される。

おわりに

以上、山城地域の主要中期古墳の埴輪の様相から、異なる首長系譜で埴輪生産の様相が異なることを確認した。また、久津川古墳群では、久津川車塚古墳と芭蕉塚古墳で埴輪生産に継続性が認められ、首長系譜の継続と埴輪生産の継続がリンクする可能性があることを示した。

以上から、地域首長連合単位での埴輪生産が想定され、同一の埴輪製作技術で製作された埴輪が配置される古墳は、その大首長を支えた首長層の古墳である可能性が考えられる。埴輪の拡がりを確認することで、地域首長連合の権力基盤を復元できるであろう。

また、同一古墳群において埴輪生産が継続しており、首長墳が連続して造営される場合、それを首長系譜としてより確実に捉えることができるであろう。

上述のとおり、首長系譜論は水系と平野によって範囲を囲い、その中で大型古墳が継続して造営されるものを指すことが多かった。そこに、墳丘に大量に配置される埴輪生産という視点を加えることによって、首長系譜の権力基盤の範囲や、首長系譜の連続性をより強く示すことができるようになるであろう。

ただし、本論で示した通り、前期や後期の埴輪生産は古墳ごとの個別性が高く、地域内で系譜を追えないことがほとんどであることから、その他の遺物の状況や、特に後期であれば横穴式石室のプランや構築技術などで地域を囲む作業が必要になる（太田2016など）。また、前期後葉から中期初頭、そして中期全般では、地域や広域の地域間での埴輪生産の継続性が考えられた。集落の状況や土器の集落間の比較などを通して、この範囲が妥当であるのかを検討していく必要である。

本論でしめした埴輪生産の時期ごとのあり方を基礎として、ほかの遺物・遺構でも状況把握を行っていけば、当時の社会状況の一端を知ることができることを示し、本章をおえる。

註

1　近年特にこれらの古墳のうち、可耕地が少ない海沿いの場所で大型の墳丘規模をほこり、単独で築造される古墳を「海浜型前方後円墳」（広瀬 2012）と呼び、その築造背景の特異性を解釈する基礎的研究が行われている（かながわ考古学財団編 2015）。

2　窯などの生産地から広域に埴輪が供給されることも考えられる。実際 6 世紀の関東では一つの生産地から広域に埴輪が拡散している状況が判明しつつある（小橋 2005、城倉 2011b など）。埴輪が供給されていた範囲が一系譜の首長の権力基盤である可能性もあるが、複数系譜の首長によって共有された埴輪製作集団がおり、その範囲に埴輪が供給されている可能性がある。地域ごとに生産されていた埴輪を共有することで、擬制的同族関係が生じさせ、首長同士の一体感を生まれさせていたものと想定される。いずれにしても、現在蓄積されつつある古墳時代後期の関東の事例が、古墳時代前期、同中期、さらに他の地域と同じであるかは、今後検討していく必要がある。

3　恵解山古墳では、造出から出土した個体の中に径が大きい、口縁部とそこからした 2 段が残存するものがある。外面 2 次調整に Bb 種ヨコハケと Ca 種ヨコハケが併用され、内面はハケ調整である。また、焼成や胎土も墳丘出土の埴輪とは異なり、この 1 点のみが異質である。

終　章　　王権中枢の埴輪生産への予察と展望

本論では、古墳時代の埴輪生産体制について、古墳群内での継続性、地域内・地域間での系統性を明確にすることを目的として、一古墳における埴輪の詳細な分析と、古墳群など周辺の古墳の埴輪との比較作業を行ってきた。古墳群において古墳の築造が連続していると考えられる場合に、それを首長系譜の継続ととらえ、埴輪生産も継続していたと考えて論が展開されていたが、実際に埴輪生産に継続性があるのかを検証する作業を行った。

本論で分析の対象とした古墳が、王権中枢と考えられている大和盆地や大和川を下った古市古墳群、さらに大阪湾に面した百舌鳥古墳群などの地域のすぐ外側に位置する古墳で、王権中枢に対しての外縁域といえる地域の古墳である。この地域の埴輪生産を通時的に分析することで、調査が少なく、実態が必ずしも明瞭になっていない王権中枢の埴輪生産体制を追求できると考えている。

そこで、本章ではこれまで分析してきた結果を踏まえて、王権中枢の埴輪生産体制について考察していきたい。

結論から述べると、古墳時代を通して常に一定の体制が取られていたわけではなく、当時の政治状況や社会状況を反映して常にその体制が変化している可能性が高まったといえる。

まず配置する埴輪の数も少なく、配置する古墳の数も少ない前期初頭の特殊器台形埴輪の生産は、製作技術を詳細に分析した結果、王権中枢が主導的に工人集団を管理しており、地方では王権中枢との直接的関係によって埴輪の導入がなされている可能性が高まった。つまり、王権中枢では特殊器台形埴輪を生産する工人集団の系譜が追えるのである。

Ⅰ群円筒埴輪が生み出されると、古墳に配置する埴輪の量が増え、埴輪を配置する古墳の数も増加してくる。この時期も特殊器台形埴輪の生産体制と同じく、王権中枢では中心的に埴輪生産を担う工人集団がいた可能性が高い。それは、廣瀬覚が明らかにしたように製作技術がスムーズに変遷していること(2013)や、各地の埴輪が王権中枢の埴輪と直接的に系譜関係を追えることなどから考えられる。ただし、地方では古墳築造のたびに王権中枢から埴輪生産についての情報を入手したとみられ、古墳が継続している古墳群においても埴輪生産の継続性は確認できない。つまり、埴輪は地方に定着しないのである。

Ⅱ群円筒埴輪が生み出される前期後葉から中期初頭は、地方においてはこれまでの生産体制とは大きく異なっていた。その違いとは、地域が広域に協業体制をとるような社会に変化し、埴輪生産もその協業の一つとして成立していたということである。王権中枢の大王墳に匹敵するような大型古墳が築造される和泉地域や明石海峡付近の地域での埴輪生産体制を見ると、規格が揃い、統制のとれた生産体制を想定できている（廣瀬 2006)。古墳の規模も大王墳と大差のないこれらの古墳の埴輪生産体制から、王権中枢においても、これまで以上に統制のとれた生産体制がとられていた可能性が高い。

中期になると、地方においてはⅡ群埴輪の生産体制で見られたような広域の協業体制はみられなくなり、かわって古墳群ごとに埴輪生産が行われるようになる。古市古墳群と百舌鳥古墳群においても、そこで生産されている埴輪が規格などの相違点からは別の工人集団がいたことを示している可能性が高く、王権中枢においても、古墳群ごとの埴輪生産がなされていた可能性が高い。ただし、技法の変遷や

規格の縮小化という大まかな変化の方向性が一致していることも見逃すことはできず、別集団とはいえ情報共有がなされるような関係は有していた可能性が高い。

中期の古墳群ごとの埴輪生産体制では、大王墳とその付属墳とで共通する埴輪が配置されることがある。埴輪生産のために人員等を提供することで共通した埴輪を入手し、配置できていたと考えられる。墳形と規模から見ると階層的に上位の古墳と下位の古墳で埴輪が共通する事例は地方の階層構成型古墳群においても確認できる。他方、階層構成型にならない首長墳のみが継続するような古墳や、単独で首長墳が築造される地域では、前期の埴輪生産体制と同じく王権中枢との直接的関係で埴輪生産がなされていた。

後期には、中期のように大王墳とその付属墳が集中する古墳群は見られない。そのため、埴輪生産も基本的には古墳築造のたびに組織されていた可能性が高い。奈良県の菅原東埴輪窯のように拠点となる生産地があり、広域に埴輪を供給するような体制は、近畿地方ではほとんど確認できない。地域の古墳も、地域内で系統を追えない場合が多く、古墳群で隣り合う古墳であっても配置される埴輪の様相がまったく異なるということがおこっている。王権中枢と呼ばれる地域の存在を考えづらい後期の埴輪生産体制は、大王墳であっても古墳築造のたびに組織されており、継続して集団が保持されていた可能性は低いと考える。むしろ今城塚古墳の埴輪生産体制を見ると、埴輪生産のノウハウを持つ複数集団を各地から呼び寄せて生産にあたらせていた可能性は考えられる。

こういった後期古墳の埴輪生産体制が、７世紀以降増加する寺院造営の際、１寺院の瓦製作集団が複数系統から成り立つという体制にも引き継がれていた可能性がある。

従来、古墳時代後期の埴輪生産体制を、関東地方の埴輪生産体制を参考にして、広域に供給するような一元化されたものととらえられる向きがあった（高橋 1994 など）。しかし、本論で明らかにしたように、近畿地方においてはそのような体制はとられておらず、多元的な状況ととらえられる。また、前期から後期に向かうにつれて埴輪生産体制が寄り整備されていくような状況も想定されていたが、時代ごとに異なる社会背景に起因して、まったく異なる埴輪生産体制がとられていることもわかった。

埴輪生産の継続と断絶を吟味していくことで、首長系譜論で考えられてきた地域の範囲も時代によって変化している可能性も示すことができた。この点は土器などのほかの遺物や集落の状況も加味することでより明確になるものと考えられるが、集落研究がようやく軌道に乗ってきたいま、本論で時代ごとに範囲が異なることを示すことができたことは、今後の研究の展開にも期待が持てるといえる。

埴輪生産の継続と断絶が示す時代背景を明らかにすることで、古墳時代の手工業生産体制の一端を明らかにできただけでなく、そこから派生するさまざまな課題が明らかになったことが本論の成果であり、その課題をより浮き立たせるために、今後も丹念に埴輪生産を分析していきたい。

＜引用・参考文献＞

青木勘時　2001「初期埴輪と土器」『立命館大学考古学論集』Ⅱ　同刊行会　pp.97－112

青柳泰介　2003「導水施設考－奈良県御所市・南郷大東遺跡の導水施設の評価をめぐって－」『古代学研究』第160号　古代学研究会　pp.15－35

青柳泰介　2007「家形埴輪の製作技法について再論」『埴輪論考Ⅰ－円筒埴輪を読み解く－』（『大阪大谷大学博物館報告書』第53冊）　大阪大谷大学博物館　pp.133－152

赤塚次郎　1979a「古市方形墳整理ノートより」『古代学研究』第89号　古代学研究会　pp.34－41

赤塚次郎　1979b「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』第90号　古代学研究会　pp.15－25

赤塚次郎　1980「コナベ古墳外堤出土埴輪の制作法に関する問題」『奈良市埋蔵文化財調査報告書－昭和54年度－』奈良市教育委員会　pp.94－102

赤塚次郎　1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』（『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』24集）　愛知県埋蔵文化財センター　pp.34－50

赤塚次郎　1992「東海」『古墳Ⅲ　埴輪』（『古墳時代の研究』第９巻）雄山閣　pp.47－56

赤塚次郎　1997「須恵器系埴輪の拡散」『古文化談叢』伊達先生古稀記念論集刊行会　pp.309－323

赤塚次郎　2003「もう一つの埴輪の起源」『古代近畿と物流の考古学』学生社　pp.68－78

秋山日出雄・網干善教　1959『室大墓』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊）奈良県教育委員会

浅田博造　2007「尾張型円筒埴輪の製作手順と規格化現象」『伊藤秋男先生古稀記念考古学論文集』同刊行会　pp.213－228

浅野良治　2008「北陸における埴輪をもつ古墳」『古代文化』第59巻第４号　古代学協会　pp.146－154

天野末喜　1994「河内のはにわ―古市古墳群の円筒埴輪―」『第２回加悦町文化財シンポジウム　はにわの成立と展開―日本各地におけるはにわの導入と展開―』加悦町教育委員会　pp.22-35

天野末喜・松村隆文　1992「近畿」『古墳Ⅲ　埴輪』（『古墳時代の研究』第９巻）　雄山閣　pp.56－68

有馬　伸　1998「円筒埴輪の成立過程」　1997 年度に立命館大学大学院文学研究科へ提出の修士論文

石野博信ほか　1976『纒向』桜井市教育委員会

石母田正　1955「古墳時代の社会組織」『日本考古学講座』第５巻　河出書房　pp.289－307

一瀬和夫　1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要』Ⅴ　大阪府教育委員会　pp.65－100

一瀬和夫　1992a「河内平野とその周辺の埴輪編年概観」『古代文化』第44巻第10号　古代学協会　pp.8－12

一瀬和夫　1992b「古市古墳群における埴輪群の変遷－大型古墳を中心として－」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集　pp.279－288

一瀬和夫　1998「古墳時代前期における円筒埴輪生産の確立」『古代』第105号　早稲田大学考古学会　pp.29－48

一瀬和夫　2003「円筒埴輪の外面調整から」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（『第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』）第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会　pp.64－79

一瀬和夫　2005『大王墓と前方後円墳』吉川弘文館

一瀬和夫　2011『巨大古墳の出現－仁徳朝の全盛』文英堂

一瀬和夫・十河良和・河内一浩　2008「古市・百舌鳥古墳群の埴輪編年」白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』（平成17年度～19年度科学研究費補助金〔基盤研究（A）研究成果報告書〕)奈良大学文学部文化財学科　pp.297－356

伊藤　純　1994「鰭付埴輪の製作技法」『古代文化』第46巻第６号　古代学協会　pp.32－46

稲村　繁　2000「家形埴輪論」『埴輪研究会誌』第４号　埴輪研究会　pp.1-30

今尾文昭　2011「播磨」『古墳時代（上）』（『講座　日本の考古学』７）　青木書店　pp.306-308

犬木　努　1995「下総型埴輪基礎考－埴輪同工品論序説－」『埴輪研究会誌』第１号　埴輪研究会　pp.1－36

犬木　努　1996「埴輪製作における個体内・工程別分業と種別分業」『埴輪研究会誌』第２号　埴輪研究会　pp.1－30

犬木　努　1997「茨城県猿島郡堺町百戸出土人物埴輪の再検討」『MUSEUM』No.549　東京国立博物館　pp.47－71
犬木　努　2002a「円筒埴輪という装置」『墓制』②（『東アジアと日本の考古学』Ⅱ）雄山閣出版　pp.32－36
犬木　努　2002b「埴輪同工品論の現在」『季刊考古学』第79号　雄山閣　pp.32－36
犬木　努　2005「下総型埴輪再論－同工品識別の先にあるもの－」『埴輪研究会誌』第９号　埴輪研究会　pp.1－22
犬木　努　2007a「西都原の埴輪から見えてくるもの－カタチ・技術・工人・組織－」『巨大古墳の時代－九州南部の中期古墳－』西都原考古博物館　pp.44－48
犬木　努　2007b「同工品論から見た下総型埴輪の内と外－「同工品論」と「型式論」－」『埴輪論考』Ⅰ－円筒埴輪を読み解く－（『大阪大谷大学博物館報告書』第53冊）大阪大谷大学博物館　pp.50－70
井上義也　2000「九州における埴輪の導入－福岡県を中心として－」『九州の埴輪　その変遷と地域性』第３回九州前方後円墳研究会　pp.379－392
井上義也　2008「北部九州における畿内系埴輪」『古代文化』第59巻第４号　古代学協会　pp.586－595
猪熊兼勝　1979『埴輪』（『日本の原始美術』６）講談社
上田宏範　1955「埴輪」『日本考古学講座』第５巻　河出書房　pp.142－151
上田宏範　1959「埴輪の諸問題」『世界考古学大系』第３巻　日本Ⅲ　古墳時代　平凡社　pp.157－163
上田　睦　1996「円筒埴輪から見た古市・百舌鳥古墳群の構成」『倭の五王の時代－巨大古墳の謎に迫る－』（藤井寺の遺跡ガイドブックNO.7）藤井寺市教育委員会事務局　pp.3－20
上田　睦　1997「出土埴輪から見た古市古墳群の構成」『堅田直先生古稀記念論文集』　同刊行会　pp.277－313
上田　睦　2000「古市古墳群を中心とした古墳時代中期前半期の円筒埴輪の規格－玉手山古墳群出土埴輪の理解のための考察－」『玉手山古墳群の研究』Ⅰ　埴輪編　柏原市教育委員会　pp.133－160
上田　睦　2003「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第5号　埴輪検討会　pp.1－32
植野浩三　1993「埴輪生産と須恵器工人－奈良県ウワナベ古墳の須恵器を中心にして－」『文化財学報』第11集　奈良大学文学文化財学科　pp.27－39
植野浩三　1994「古墳時代中期の手工業生産と政治秩序－須恵器生産の展開を中心にして－」『文化財論集』文化財学論集刊行会　pp.265－276
植野浩三　2002「TK73型式の再評価－高杯の消長を中心にして－」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会　pp.227－240
上野祥史　2012「帯金式甲冑と鏡の副葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集（［共同研究］マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期の武器武具の研究）　国立歴史民俗博物館　pp.477－498
上原真人　1973「考察」『御堂ヶ池群集墳第20号墳』六勝寺研究会
上峯篤史・山崎啓ほか2004『朝原山・長刀坂古墳群―京都市嵯峨野群集墳の分布・測量調査報告―』立命館大学考古学研究会
宇垣匡雅　1981「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」『考古学研究』第27巻第4号　考古学研究会　pp.55－72
宇垣匡雅　1984「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』第31巻第3号　考古学研究会　pp.59－82
宇垣匡雅　1992「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究』上　山陽新聞社　pp.279－297
宇垣匡雅　1997「特殊器台形埴輪の文様と編年－古市秀治「特殊器台形埴輪の研究」について－」『考古学研究』第43巻第4号　考古学研究会　pp.98－102
宇垣匡雅　2013「特殊器台・特殊器台形埴輪編年に関する一考察」『日本考古学』第36号　日本考古学協会　pp.1－14
内田真雄　2007「山城の横穴式石室」『研究集会　近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局　pp.151-162
宇野隆夫編　2006『実践　考古学GIS　先端技術で歴史空間を読む』NTT出版株式会社
宇野隆志　2008「史跡　天塚古墳」『京都市内遺跡試掘調査報告』平成19年度　京都市文化市民局　pp.21-24
宇野隆志　2009「北山城における後期古墳の分布と群構成」『京都府の群集墳』（第16回京都府埋蔵文化財研究集会）pp.62-76

梅原末治　1914「山城の古墳墓」『人類学雑誌』第29巻第12号　東京人類学会
梅原末治　1920『久津川古墳研究』関信太郎
梅本康広　1995「桂川流域の埴輪編年と地域性」『平成５年度（財）向日市埋蔵文化財センター　年報　都城』６（財）向日市埋蔵文化財センター　pp.30－66
梅本康広　2003「山城の円筒埴輪編年概観」『埴輪論叢』第５号　埴輪検討会　pp.93－120
梅本康広　2007「淀川流域の東海系埴輪とその製作動向」『埴輪論叢』第６号　埴輪検討会　pp.137－157
梅本康広　2012「摂津・山城」『古墳出現と展開の地域相』（『古墳時代の考古学』第２巻）同成社　pp.93-106
大賀克彦　2002「凡例　古墳時代の時期区分」古川登編『小羽山古墳群』（『清水町埋蔵文化財調査報告書』Ⅴ）福井県清水町教育委員会　pp.1－20
大賀克彦　2013「玉類」『副葬品の型式と編年』（『古墳時代の考古学』４）同成社　pp.147-159
大久保徹也　1996『中間西井坪遺跡』Ⅰ　香川県埋蔵文化財研究会
大久保徹也　2004「古墳時代研究における「首長」概念の問題」広瀬和雄他著『古墳時代の政治構造』青木書店　pp.309-330
大澤正吾2010「前期古墳における土器の配置・配列の展開と龍子三ツ塚１号墳」『龍子三ツ塚古墳群の研究－播磨揖保川流域における前期古墳群の調査－』（『大手前大学史学研究所オープン・リサーチセンター研究報告』第９号・『たつの市文化財調査報告』２）　たつの市教育委員会　pp.291－312
太田宏明　2016『横穴式石室と古墳時代社会～遺構分析の方法と実践～』雄山閣
大塚初重　1959「大和政権の形成－武器武具の発達－」『世界考古学大系』第３巻　日本Ⅲ　古墳時代　平凡社　pp.67-87
大西智和　1992「円筒埴輪の編年－九州の埴輪を素材として－」『人類史研究』第８号　人類史研究会　pp.37－64
大西智和　1993「地域性の発現からみた円筒埴輪の導入と展開の再解釈－九州の事例－」『九州考古学』第68号　九州考古学会　pp.49－63
大西智和　2000「大隅のおける埴輪の導入－北部九州の埴輪導入との関連から－」『九州の埴輪　その変遷と地域性』第３回九州前方後円墳研究会　pp.468－471
大村　直　1985「円筒埴輪編年の現状と課題－前期を中心として－」『考古学ジャーナル』No.253　ニューサイエンス社　pp.24－28
岡内三眞・中條英樹編　2002『埴輪をつくる』早稲田大学会津八一記念博物館
岡内三眞・和田晴吾・宇野隆夫　1981「京都府長岡京市カラネガ岳１・２号墳の発掘調査」『史林』第64巻第３号　史学研究会　pp.388－431
置田雅昭　1977「初期の朝顔形埴輪」『考古学雑誌』第63巻第３号　日本考古学会　pp.37－58
奥村清一郎　1993「嵯峨野の前方後円墳」『京都考古』第72号
小栗明彦　1992「埴輪倒立技法の問題」『史学研究集録』第17号　國學院大学大学院日本史学専攻大学院会　pp.17－41
小栗明彦　2004「畿内の盾形埴輪文様分類試案」『堀田啓一先生古稀記念　獻呈　論文集』同作成委員会　pp.240－246
小栗明彦　2007「蓋形埴輪編年論」『埴輪論考Ⅰ－円筒埴輪を読み解く－』（『大阪大谷大学博物館報告書』第53冊）大阪大谷大学博物館　pp.153－226
小野山節　1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第３号　考古学研究会　pp.73－73
賀来孝代　2002「埴輪の鳥」『日本考古学』第14号　日本考古学協会　pp.37-52
角林文雄　2005「墳墓・葬式・埋葬関係語の分析」『古代学研究』第171号　古代学研究会　pp.27－32
笠井敏光・吉田珠己　1992「古市古墳群の埴輪の規格性」『古代文化』第44巻第９号　古代学協会　pp.23－27
樫田　真　1992『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』石川県小松市教育委員会
柏田有香・古川匠・浅井猛宏　2016「山城地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房　pp.77-99
堅田直・白石太一郎　1962「京都府西山第１号，第２号，第５号墳発掘調査概報」『先史学研究』第４号　同志社大学先

史学研究室　pp.41-45
加藤一郎　2000a「前期古墳の円筒埴輪」『遡航』第18号　早稲田大学大学院文学研究科考古談話会　pp.3－23
加藤一郎　2000b「群馬県浅間山古墳の埴輪」『埴輪研究会誌』第４号　埴輪研究会　pp.91－108
加藤一郎　2001「埴輪の拡散」『玉手山古墳群の研究』Ⅰ　埴輪編　柏原市教育委員会　pp.82－100
加藤一郎　2003「関東における中期古墳の円筒埴輪」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（『第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』）第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会　pp.288－314
加藤一郎　2008a「九州南部における埴輪の伝播と受容－唐仁大塚古墳表採資料の紹介をかねて－」『大隅串良岡崎古墳群の研究』（『鹿児島大学総合研究博物館研究報告』No.３）鹿児島大学総合研究博物館　pp.233－242
加藤一郎　2008b「大山古墳の円筒埴輪－窖窯焼成導入以降における百舌鳥古墳群の円筒埴輪－」白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』（平成17年度～19年度科学研究費補助金〔基盤研究（A）研究成果報告書〕)奈良大学文学部文化財学科　pp.491－514
加藤一郎　2009「百舌鳥陵墓参考地　墳丘裾護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第61号　宮内庁書陵部　pp.36－88
加藤一郎　2010「雲部車塚古墳の埴輪と須恵器－窖窯焼成導入期の諸問題－」『雲部車塚古墳の研究』（『兵庫県立考古博物館研究紀要』第３号）兵庫県立考古博物館　pp.145－156
加藤一郎　2011a「円筒埴輪の設置方法」『埴輪研究会誌』第15号（杉山晋作先生退任記念）　埴輪研究会　pp.5－18
加藤一郎　2011b「小奈辺陵墓参考地　墳塋裾護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第62号　宮内庁書陵部　pp.39－86
加藤一郎　2012「赤井谷１号横穴の埴輪とコナベ古墳の埴輪－古墳時代中期開始の画期および共通するハケメをもつ埴輪について－」『埴輪研究会誌』第16号　埴輪研究会　pp.1－18
加藤一郎　2013「古墳時代中期の埴輪生産に関する予察」『技術と交流の考古学』同成社　pp.558-569
加藤一郎　2014「誉田御廟山古墳併行期の埴輪」『古代』第132号　早稲田大学考古学会　pp.39-61
加藤一郎　2015「埴輪からみた古墳時代前期の大型古墳について－埴輪編年に関する雑感－」『埴輪研究会誌』第19号　埴輪研究会　pp.1－6
金澤雄太・藤原光平　2012「出土埴輪からみた尼塚古墳の位置づけ」『加古川市西条古墳群　尼塚古墳』大手前大学史学研究所　pp.39－56
鐘方正樹　1993「久津川古墳群研究の検討課題」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』関西大学　pp.215－235
鐘方正樹　1997a「前期古墳の円筒埴輪」『堅田直先生古希記念論文集』同刊行会　pp.239－259
鐘方正樹　1997b「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内Ⅰ－杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告－』（『奈良市埋蔵文化財調査研究報告』第１冊）奈良市教育委員会　pp.407－417
鐘方正樹　1999「２条突帯の円筒埴輪」『埴輪論叢』第１号　埴輪検討会　pp.109－131
鐘方正樹　2001「古墳時代前期の円筒埴輪編年と玉手山古墳群」『玉手山古墳群の研究』Ⅰ　埴輪編　柏原市教育委員会　pp.101－116
鐘方正樹　2003a「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第４号　埴輪検討会　pp.1－38
鐘方正樹　2003b「円筒埴輪の地域性と工人の動向」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（『第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』）第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会　pp.175－191
鐘方正樹　2007「茨木市将軍山古墳・紫金山古墳の円筒埴輪」『埴輪論叢』第６号　埴輪検討会　pp.1－13
鐘方正樹・中島和彦　1992a「菅原東遺跡の調査　第200次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成3年度』奈良市教育委員会
鐘方正樹・中島和彦　1992b「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1991　奈良市教育委員会　pp.1－22
金田明大・津村宏臣・新納泉編　2001『考古学のためのGIS入門』古今書院

亀井正道　1977「祈りの形象－埴輪」『土偶・埴輪』（『日本陶磁全集』３）中央公論社
河上邦彦・豊岡卓之・卜部行弘・坂靖編1996『中山大塚古墳　附篇　葛本弁天塚古墳　上の山古墳』（『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第82冊）　奈良県教育委員会
河内一浩　2002「中期古墳の埴輪」『季刊考古学』第79号　雄山閣　pp.22－25
河内一浩　2003「古墳時代後期における円筒形埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第４号　埴輪検討会　pp.39－59
河内一浩　2009「二つの河内・古市型円筒形埴輪－軽里3号墳出土埴輪の紹介－」『埴輪研究会誌』第13号　埴輪研究会　pp.77－92
川西宏幸　1973「埴輪研究の課題」『史林』第56巻第４号　史学研究会　pp.108－125
川西宏幸　1977「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』第２巻第４号　（財）大阪文化財センター　pp.13－46
川西宏幸　1978・79「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２・４号　日本考古学会　pp.95－164, 372－387
川西宏幸　1988『古墳時代政治史序説』塙書房
川西宏幸　1992「河内への道」『古代文化』第44巻第９号　古代学協会　pp.1－7
川畑　純　2009「前・中期古墳副葬鏃の変遷とその意義」『史林』第92巻第２号　史学研究会　pp.285－323
川畑　純　2010a「古墳副葬矢鏃の生産・流通・保有・副葬」『古代学研究』第185号　古代学研究会　pp.1－20
川畑　純　2010b「大型定角式鉄鏃の変遷と雲部車塚古墳の鉄鏃組成」『雲部車塚古墳の研究』（『兵庫県立考古博物館研究紀要』第３号）　兵庫県立博物館　pp.121－128
川畑　純　2011「衝角付冑の型式学的配列」『日本考古学』第32号　日本考古学協会　pp.1－31
川畑　純　2014「武器埋納の展開と変遷」『七観古墳の研究－1947年・1952年出土遺物の再検討－』京都大学大学院文学研究科　pp.333－352
川畑　純　2015『武具が語る古代史－古墳時代社会の構造転換』（プリミエ・コレクション60）　京都大学学術出版会
川畑　純　2016『甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱いの研究』平成24～27年度科学研究費（学術研究助成基金助成金（若手研究（B））研究成果報告書　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
川村和子　1997「５世紀代の蓋形埴輪の変遷」『西墓山古墳―古市古墳群の調査研究報告Ⅲ―』（『藤井寺市文化財報告』第16集）藤井寺市教育委員会　pp.164-173
瓦　片生　1903「埴輪円筒に就て」『考古界』第２篇第９号　考古学会　pp.12-16
北島大輔　2000「古墳出現期の広域編年」『Ｓ字甕を考える－その成立と拡散波及と定着解体－』第７回東海考古学フォーラム三重大会　pp.249－268
岸本　圭　1996「北部九州における円筒埴輪の規格性」『九州考古学』第71号　九州考古学会　pp.34－52
岸本直文　1992「前方後円墳築造規格の系譜」『考古学研究』第39巻第２号　考古学研究会　pp.45－63
岸本直文　1995「三角縁神獣鏡の編年と前期古墳の新古」『展望考古学』考古学研究会　pp.109－116
岸本直文　2005「播磨における４・５世紀の政治変動」『前方後円墳の築造規格からみた古墳時代の政治的変動の研究』（平成13～16年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書）大阪市立大学大学院文学研究科　pp.31-38
岸本直文　2008「前方後円墳の二系列と王権構造」『ヒストリア』第208号　大阪歴史学会　pp.1－26
岸本道昭　2000「前方後円墳の多様性―揖保川水系を素材として―」古代学協会四国支部第14回大会事務局編『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部　pp.123-137
岸本道昭　2013『古墳が語る播磨』神戸新聞総合出版センター
喜田貞吉　1921「埴輪考」『民族と歴史』第５巻第５号　日本学術普及会　pp.319-334
喜田貞吉　1930「埴輪と其の起源及伝説に就いて」『考古学』第１巻第４号 pp.1-2
木立雅朗　2003「『刷毛目』調整と工具の基礎的研究Ⅰ」『立命館大学考古学論集』Ⅲ　同刊行会　pp.1079－1104
北山　惇　1989「加古川市南大塚古墳の前方部竪穴石室と出土の三角縁神獣鏡について」『神戸古代史』No.8　神戸古代史研究会　pp.1-21
狐塚省蔵　1976「吉備型器台論－古墳出現前夜を中心とした吉備地方における集団関係について－」『異貌』第４・５号共同体研究会　pp.2－16, 29－43

京都大学考古学研究会　1971『嵯峨野の古墳時代』京大考古学研究会出版事務局
清野謙次　1923「考古漫録」『社会史研究』第９巻第４号
金　一圭（金　憲奭：訳）　2011「陶質土器の観点からみた初期須恵器の年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集　国立歴史民俗博物館　pp.1－32
蔵本晋司　2008「土器供献の系譜－古墳時代前期壺形埴輪の底部穿孔方法について－」『古代学研究』第180号（森浩一先生傘壽記念論文集）　古代学研究会　pp.117－130
車崎正彦　1992「関東」『古墳Ⅲ　埴輪』（『古墳時代の研究』第９巻）雄山閣　pp.29－39
小泉裕司　2002「古墳時代の城陽」『城陽市史』第１巻　城陽市役所　pp.86－215
小泉裕司　2005「久津川古墳群の範囲と構成の再検討」『龍谷大学考古学論集』Ⅰ　同刊行会　pp.55－66
小泉裕司　2012「久津川古墳群について」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第64集　城陽市教育委員会　pp.30－34
小泉裕司・廣瀬覚　1998「久津川車塚古墳発掘調査概報（97－１～３トレンチ）」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第35集　城陽市教育委員会　pp.5-11
公益財団法人かながわ考古学財団編　2015『海浜型前方後円墳の時代』同成社
国立歴史民俗博物館編　1994『はにわ人は語る』山川出版社
古閑正浩編　2007『境野１号墳』（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第34集）大山崎町教育委員会
後藤守一　1927『日本考古学』四海書房
後藤守一　1931「埴輪の意義」『考古学雑誌』第21巻第１号　日本考古学会　pp.26－50
後藤守一　1933『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』（『帝室博物館学報』６冊）
後藤守一　1937「埴輪より見たる上古時代の葬礼」『齋藤先生古稀祝賀記念論文集』
後藤守一　1942『埴輪』（『アルス文化叢書』15）
小橋健司　2004「山倉１号墳出土埴輪について」『市原市山倉古墳群』市原市文化財センター　pp.185－208
小橋健司　2005「山倉１号墳出土埴輪から見た生出塚遺跡－同工品論が映す埴輪生産プロジェクトの一例－」『埴輪研究会誌』第９号　pp.23－68
小浜　成　2008「誉田御廟山古墳と今城塚古墳」白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』（平成17年度～19年度科学研究費補助金〔基盤研究（A）研究成果報告書〕)奈良大学文学部文化財学科　pp.515－527
小林行雄　1944「埴輪論」『史迹と美術』第15輯ノ４
小林行雄　1949「黄泉戸喫」『考古学集刊』第2冊　東京考古学会
小林行雄　1957「埴輪」『世界陶磁全集』1　河出書房　pp.221－230
小林行雄　1960「埴輪」『陶磁全集』1　平凡社　pp.1－16
小林行雄　1974「埴輪」『陶磁大系』3　平凡社　pp.85－132
小林行雄　2002「円山陵墓参考地・入道塚陵墓参考地調査報告」『書陵部紀要』第53冊　宮内庁書陵部
近藤喬一・都出比呂志　1971「京都府向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第６号　史学研究会　pp.116－139
近藤義郎　1960「地域集団としての月の輪地域の成立と発展」『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会　pp.368－387
近藤義郎　1983『前方後円墳の時代』岩波書店
近藤義郎　1995「大和の最古型式前方後円墳と宮山型特殊器台」『みずほ』第16号　大和弥生文化の会　pp.50－65
近藤義郎　2003a「東国・吉備・大和」『古代吉備』第24号　古代吉備研究会　pp.１－24
近藤義郎　2003b「特殊器台・特殊壺」『古代史の海』第33号　「古代史の海」の会　pp.2－33
近藤義郎編　1991『権現山51号墳』同刊行会
近藤義郎・春成秀爾　1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第３号　考古学研究会　pp.13－35
坂井田英幸ほか　1962「山城久津川古墳群の研究」『同志社考古』第２号　同志社大学考古学研究会　pp.25－55
阪口英毅　1998「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲－変遷とその特質－」『史林』第81巻第５号　史学研究会　pp.1－39
阪口英毅　2010「帯金式甲冑の成立」『遠古登攀』遠山昭登君追悼考古学論集　同刊行会　pp.305－320
櫻井久之　1991「長原40号墳の埴輪」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ　大阪市文化財協会　pp.183-191

笹栗　拓　2009「地域社会と群集墳論に関する一考察」『京都府の群集墳』（第16回京都府埋蔵文化財研究集会）
佐藤晃一　2000「埴輪の成立と変遷－丹後型円筒埴輪の分布と背景－」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』（『季刊考古学』別冊10）雄山閣　pp.84－91
澤田秀実　2012「国家形成過程における前方後円墳秩序の役割～考古学的成果から国家形成を考える～」『メトロポリタン史学』第８号　メトロポリタン史学会　pp.29-57
下垣仁志　2005「倭王権と文物・祭式の流通」前川和也・岡村秀典編『国家形成の比較研究』学生社　pp.76-99
下垣仁志　2011『古墳時代の王権構造』吉川弘文館
下垣仁志　2012「古墳時代首長墓系譜論の系譜」『考古学研究』第59巻第２号　考古学研究会　pp.56-70
下垣仁志　2016『古墳時代銅鏡の研究』平成25 ～ 27 年度科学研究費補助金（若手研究Ｂ）研究成果報告書（第一分冊），立命館大学文学部
城倉正祥　2005「同工品分析による埴輪製作組織の復元」『埴輪研究会誌』第９号　埴輪研究会　pp.69－88
城倉正祥　2008「北武蔵における埴輪生産の定着と展開」『古代文化』第60巻第１号　古代学協会　pp.97－107
城倉正祥　2009『埴輪生産と地域社会』学生社
城倉正祥　2010「生出塚窯産円筒埴輪の編年と生産の諸段階」『考古学雑誌』第94巻第１号　日本考古学会　pp.1－50
城倉正祥　2011a「埼玉古墳群の埴輪編年」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第5号　埼玉県立さきたま史跡の博物館、埼玉県嵐山史跡の博物館　pp.57－91
城倉正祥　2011b『北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群』奈良文化財研究所　科研費補助金若手研究（B)研究成果報告書
城倉正祥　2012「埴輪」『古墳時代研究の現状と課題』上　古墳研究と地域史研究　同成社　pp.343－362
白井克也　2003a「馬具と短甲による日韓交差編年－日韓古墳編年の平行関係と暦年代－」『土曜考古』第27号　土曜考古学研究会　pp.85－114
白井克也　2003b「日本における高霊地域加耶土器の出土傾向－日韓古墳編年の並行関係と暦年代－」『熊本古墳研究』創刊号　熊本古墳研究会　pp.81－102
白井克也　2003c「新羅土器の型式・分布変化と年代観－日韓古墳編年の並行関係と暦年代－」『朝鮮古代研究』第4号　朝鮮古代研究刊行会　pp.1－42
白石太一郎　1975「ことどわたし考－横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐって－」『橿原考古学研究所論集　創立35周年記念』吉川弘文館（2011「ことどわたし考－横穴式石室の埋葬儀礼をめぐって－」『古墳と古墳時代の文化』塙書房に改稿論考所収　pp.357－385）
末永雅雄　1947『埴輪』大八洲出版
末永雅雄・上田宏範　1961『桜井茶臼山古墳』奈良県教育委員会
杉井　健　1992「長法寺南原古墳におけるヒレ付円筒埴輪の製作技法」『長法寺南原古墳の研究』（『長岡京市文化財調査報告書』第30冊）
長岡京市教育委員会杉山秀宏　1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第８　八木書店　pp.529－644
鈴木一有　2003「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集　帝京大学山梨文化研究所　pp.49－70
鈴木一有　2008「遠江における埴輪受容の変質」『古代文化』第60巻第１号　古代学協会　pp.77－86
鈴木一有　2009「中期型冑の系譜と変遷」『考古学ジャーナル』No.581　ニューサイエンス社　pp.12－16
鈴木敏則　1990「遠江の淡輪系円筒埴輪」『転機』３号　向坂鋼二　pp.1－46
鈴木敏則　1993「静岡県内のB種ヨコハケをもつ埴輪」『静岡県考古学研究』25　静岡県考古学会　pp.1－18
鈴木敏則　1994a「淡輪系円筒埴輪」『古代文化』第46巻第２号　古代学協会　pp.39－50
鈴木敏則　1994b「遠江の尾張系埴輪」『転機』第５号　転機同人会　pp.85－116
鈴木敏則　2003「淡輪系円筒埴輪2003」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（『第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』）第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会　pp.97－121

鈴木敏典　2003「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』第14　八木書店　pp.255－276
鈴木裕明　2011「埴輪樹立と木製樹物」『墳墓構造と葬送祭祀』（『古墳時代の考古学』3）同成社　pp.84－94
角南辰馬　2014「前方後円墳における造出しの出現と変遷」『郵政考古紀要』第60号　郵政考古学会　pp.77－91
清家　章　1992「円筒埴輪」『長法寺南原古墳の研究』（『長岡京市文化財調査報告書』第30冊）
清家　章　1999「古墳時代周辺埋葬考－畿内の埴輪棺を中心に－」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学考古学研究室　pp.231－260
清家　章　2001「猪名川左岸域における小古墳の意義－埴輪の規格から見た地域支配－」『待兼山遺跡Ⅲ－大阪大学旧医療技術短期大学跡地試掘調査報告－』大阪大学埋蔵文化財調査委員会 pp.74－88
清家　章　2010『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会
十河良和　1998「百舌鳥古墳群出土円筒埴輪の様相」『網干善教先生古稀記念考古学論叢』同刊行会　pp.611－636
十河良和　2003「日置荘西町窯系円筒埴輪の検討」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（『第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』）第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会　pp.135－173
十河良和　2008「古市・百舌鳥・玉手山古墳群の埴輪研究の歩み」白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』（平成17年度～19年度科学研究費補助金〔基盤研究（A）研究成果報告書〕)奈良大学文学部文化財学科 pp.270－296
平良泰久　1975「南山城の後期古墳と氏族」『京都考古』第14号
高井健司　1987「１号墳出土埴輪と都月ｂ類」『七つ坑古墳群』同発掘調査団　pp.110－120
高野政昭　1995「加古川下流域における首長墓の変遷」『西谷眞治先生古稀記念論文集』西谷眞治先生の古稀をお祝いする会　pp.173-208
高橋克壽　1988「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻第２号　史学研究会　pp.259－294
高橋克壽　1992「器財埴輪」『古墳Ⅲ　埴輪』（『古墳時代の考古学』第９巻）雄山閣　pp.90－108
高橋克壽　1993「西都原171号墳の埴輪」『宮崎県史研究』第7号　宮崎県総務部県史編さん室　pp.39－54
高橋克壽　1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第２号　考古学研究会　pp.27－48
高橋克壽　1995「山津照神社古墳の埴輪と6世紀の畿内の埴輪」『琵琶湖周辺の6世紀を探る』京都大学文学部考古学研究室
高橋克壽　1996『埴輪の世紀』（『歴史発掘』９）講談社
高橋克壽　2006「埴輪－場から群像に迫る」『専門技能と技術』（『列島の古代史　ひと・もの・こと』5）　岩波書店 pp.287－305
高橋克壽　2010「山陰の古墳時代前期埴輪の特質」『遠古登攀』遠山昭登君追悼考古学論集　同刊行会　pp.375－387
高橋克壽　2011「形象埴輪と葬送祭祀」『墳墓構造と葬送祭祀』（『古墳時代の考古学』３）同成社　pp.216－226
高橋克壽　2012「埴輪」『古墳時代』下（『講座　日本の考古学』８）青木書店　pp.237－269
高橋克壽編　2008「特輯　王陵系埴輪の地域波及と展開」『古代文化』第59巻第４号・第60巻第１号　古代学協会
高橋健自　1911「支那発掘土偶及び其埴輪との関係」『考古学雑誌』第１巻第11号
高橋健自　1913『考古学』聚精堂
高橋健自　1925「殉死と埴輪」『中央史壇』第11巻第２号
高橋健自　1929『埴輪及装身具』（『考古学講座』第1号）
高橋美久二　1988「木製の埴輪再論」『東アジアの古代文化』第56号　大和書房
竹中克繁　2008「王陵系埴輪『地域受容』の一類型－古墳時代中期における南九州の埴輪生産－」『古代文化』第59巻第４号　古代学協会　pp.94－103
田中智子　2005「総持寺古墳群をめぐる埴輪生産と供給」『総持寺遺跡－古墳時代中期の小規模古墳群の調査－』（『大阪府埋蔵文化財調査報告』2004－２）　大阪府教育委員会　pp.207－218
田中智子2008「ウワナベ古墳系列の埴輪をめぐる諸問題－上人ヶ平５号墳出土埴輪の検討から－」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会　pp.211－225

田中秀和　1988「畿内における蓋形埴輪の検討」『ヒストリア』第118号　大阪歴史学会pp.63-85
田中秀和　1994「畿内における盾形埴輪の検討―革盾模倣盾形埴輪を中心として―」『大阪市文化財論集』大阪市文化財協会pp.119-145
田中元浩　2013「古墳出現期における墳墓土器祭祀の成立と波及」『立命館大学考古学論集』Ⅵ（和田晴吾先生定年退職記念論集）同刊行会　pp.203－217
田中良之　1995『古墳時代親族構造の研究－人骨が語る古代社会－』柏書房
田辺昭三　1966『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
谷木光之助　1930「埴輪の装置状態」『考古学』第１巻第４号　東京考古学会　pp.15-23
塚田良道　2007『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣
辻川哲朗　1999「円筒埴輪の突帯間隔設定技法の復元」『埴輪論叢』第１号　埴輪検討会　pp.1－15
辻川哲朗　2003a「突帯」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（『第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』）第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会　pp.3－30
辻川哲朗　2003b「長浜市垣籠古墳の再検討」『考古学に学ぶ（Ⅱ）』（同志社大学考古学シリーズⅧ）同刊行会　pp.389－400
都出比呂志　1971「円筒埴輪起源問題」（「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」）『史林』第54巻第６号　史学研究会　pp.116－139
都出比呂志　1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第３号　考古学研究会　pp.17-34
都出比呂志　1981「埴輪編年と前期古墳の新古」『王陵の比較研究』（昭和54年度科学研究費補助金（総合Ａ）研究成果報告書）京都大学文学部考古学研究室　pp.35－48
都出比呂志　1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』第22号　史学篇　大阪大学文学部　pp.1－16
都出比呂志　1989a『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
都出比呂志　1989b「埴輪作者の手の動き」『郵政考古紀要』第24号　郵政考古学会　pp.29－33
都出比呂志　1989c「古墳が造られた時代」『古墳時代の王と民衆』（『古代史復元』６）講談社　pp.25－52
都出比呂志　1991「日本古代の国家形成論序説－前方後円墳体制の提唱」『日本史研究』第343号　日本史研究会　pp.5－39
都出比呂志　1999「首長系譜変動パターン論序説」『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』平成８年度～平成10年度科学研究費補助金（基盤Ｂ・一般２）成果報告書　大阪大学文学部　pp.5－16
都出比呂志　2005『前方後円墳と社会』塙書房
椿　真治　2008「出雲東部地域における埴輪出土古墳・中期後半を中心として」『古代文化』第59巻第４号　古代学協会　pp.113－123
坪井正五郎　1988「埴輪土偶に基いて古代の風俗を演ぶ」『東京人類学会雑誌』第３巻第23号　東京人類学会
坪井正五郎　1901『はにわ考』東洋社
寺沢知子　2012「ヤマト王権における政権動向－東大寺山古墳の評価を事例として－」『神女大史学』第29号　神戸女子大学史学会　pp.57-96
寺村裕史　2014『景観考古学の方法と実践』同成社
轟俊二郎　1973『埴輪研究』第１冊
富山直人　2006「カンス塚古墳―出土遺物の実測作業から―」『喜谷美宣先生古稀記念論集』喜谷美宣先生古稀記念論集刊行会　pp.185-197
豊岡卓之　1982「特殊器台型式について」『考古学と古代史』（『同志社大学考古学シリーズ』１）　同刊行会　pp.135－140
豊岡卓之　1999『古墳のための年代学』（平成11年度秋季特別展図録）　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
豊岡卓之　2003「特殊器台と円筒埴輪」『橿原考古学研究所紀要　考古学論攷』第26冊　奈良県立橿原考古学研究所

pp.33－96
豊田祥三　2008「伊勢における王陵系埴輪の展開」『古代文化』第60巻第１号　古代学協会　pp.56－64
豊島直博　2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房
永江寿夫　2008「若狭地方の出土埴輪について」『古代文化』第59巻第４号　古代学協会　pp.134－145
中島雄二　2008「但馬・丹後地域における埴輪の諸様相」『古代文化』第59巻第４号　古代学協会　pp.124－133
中村一郎・笠野毅　1976「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号　宮内庁書陵部　pp.57－65
奈良拓弥　2010「竪穴式石槨の構造と使用石材からみた地域間関係」『日本考古学』第29号　日本考古学協会　pp.61－80
新納　泉　2001『地理情報システムを用いた古墳時代社会の研究』科学研究費補助金基盤研究(C) (2) 研究成果報告書
西川英樹　2010「行者塚古墳と西条古墳群」『大型古墳からみた播磨』第12回播磨考古学研究集会資料集　同研究集会実行委員会　pp.4-7
西川　宏　1964「吉備政権の性格」『日本考古学の諸問題－考古学研究会10周年記念論文集』河出書房新社　pp.145－171
西嶋定生　1961「古墳と大和政権」『岡山史学』第10号　岡山史学会　pp.154－207
西谷眞治　1964「向日町元稲荷古墳」『京都府文化財調査報告』第23冊　京都府教育委員会　pp.63－84
西谷眞治　1989「豪族の誕生」『加古川市史』第１巻　加古川市　pp.212-250
西本和哉　2009「生駒山西麓地域における古墳時代中期の古墳群形成の特質」『考古学研究』第55巻第４号　考古学研究会　pp.55－74
野上丈助　1976「埴輪生産をめぐる問題」『考古学雑誌』第61巻第３号　日本考古学会　pp.1－22
萩原恭一　2008「房総半島における埴輪の波及と展開」『古代文化』第60巻第１号　古代学協会　pp.87－96
橋本達也　1998「縦矧板・方形板革綴短甲の系譜と技術」『青丘学術論集』第12集　韓国文化研究振興財団　pp.47－76
橋本達也　2001「弥生・古墳時代における盾の系譜」『季刊考古学』第76号　雄山閣出版　pp.48-51
橋本博文　1980「埴輪祭式論－人物埴輪出現後の埴輪配列をめぐって－」『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会　pp.337－365
橋本博文　1981「埴輪研究の動静を追って」『歴史公論』第７巻第２号　雄山閣　pp.120－130
橋本博文　1988「埴輪の性格と起源論」『論争・学説　日本の考古学』第５巻　古墳時代　雄山閣　pp.168－246
埴輪検討会2003「円筒埴輪共通編年（案）」『埴輪論叢』第４号　埴輪検討会　pp. 1 - 9
土生田純之　1995「古墳構築過程における儀礼－墳丘を中心として－」『古墳文化とその伝統』勉誠社　p.99－117（1998『黄泉の国の成立』学生社に再録　pp.202－221）
土生田純之　1998『黄泉の国の成立』学生社
濱田耕作　1911「支那の土偶と日本の埴輪」『藝文』第２年第１号
原田大六　1954『日本古墳文化』東京大学出版会
原田昌浩　2014「特殊器台形埴輪からみた元稲荷古墳の位置付け」『元稲荷古墳』（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第101集）　pp.123-134
原田昌浩　2015「古墳時代中期の埴輪生産－京都府久津川古墳群の分析事例から－」『考古学研究』第61巻第４号　考古学研究会　pp.65－85
原田昌浩　2016「加古川下流域の埴輪　人塚古墳の調査成果を中心に」『播磨の埴輪』第17回播磨考古学研究集会　pp.9-32
原田昌浩　2017「デジタル技術を用いた古墳の調査方法について」『畿内の首長墳』（平成25～28年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書）立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻　pp.595-604
原田昌浩・渡井彩乃　2011「物集女車塚古墳の円筒埴輪の製作技法」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第88集　（財）向日市埋蔵文化財センター　pp.240－248
春成秀爾　1970「捏造された前方後円墳」『考古学研究』第17巻第２号　考古学研究会　pp.6-12

春成秀爾　1977「埴輪」『考古資料の見方＜遺物編＞』（『地方史マニュアル』６）　柏書房　pp.195－245
春成秀爾　2015「楯築墳丘墓から箸墓古墳へ－龍神祭祀からたどる－」『国際学術会議「交響する古代」Ⅴ　予稿集』明治大学日本古代学研究所　pp.99-112
春成秀爾ほか　1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第３集　国立歴史民俗博物館
坂　靖　1988「埴輪の規格性」『考古学と技術』（『同志社大学考古学シリーズ』Ⅳ）同志社大学考古学シリーズ刊行会　pp.187－199
坂　靖　2007「大和の円筒埴輪」『古代学研究』第178号　古代学研究会　pp.1－21
坂　靖　2009『古墳時代の遺跡学』雄山閣
坂　靖・穂積裕昌　1989「淡輪技法の伝播とその問題」『和歌山市　木ノ本釜山（木之元Ⅲ）遺跡』和歌山市教育委員会　pp.76－101
東影　悠　2007「近畿地方における尾張型埴輪の様相」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』（『大阪大学文学部考古学研究報告』第4冊）大阪大学文学研究科考古学研究室　pp.301－316
東影　悠　2008a「東北地方における埴輪生産の系譜」『古代文化』第60巻第１号　古代学協会　pp.117－126
東影　悠　2008b「古墳時代中期から後期における円筒埴輪の規格とその変質－円筒埴輪の４条突帯５段構成化－」『待兼山遺跡Ⅳ』大阪大学埋蔵文化財調査室　pp.95－112
東影　悠　2008c「尾張系埴輪の製作技術と生産体制」『橿原考古学研究所論集』第15　八木書店　pp.307－325
東方仁史　2010「山陰東部における埴輪の導入と展開」『円筒埴輪の導入とその画期』中国四国前方後円墳研究会　第13回研究会発表要旨集　pp.71－79
東方仁史　2010「笊形土器研究ノート」『遠古登攀』遠山昭登君追悼考古学論集　同刊行会　pp.41－51
東方仁史　2003「器財埴輪からみた昼飯大塚古墳―蓋形埴輪と盾形埴輪を中心として―」『史跡昼飯大塚古墳』本文編（『大垣市埋蔵文化財調査報告』第12集）大垣市教育委員会　pp.403-412
東方仁史　2014「七観古墳の形象埴輪にかんする諸問題」阪口英毅編『七観古墳の研究―1947・1952年出土遺物の再検討―』京都大学大学院文学研究科　pp.321-331
菱田哲郎　1996『須恵器の系譜』（『歴史発掘』10）講談社
菱田哲郎　2007『古代日本　国家形成の考古学』（シリーズ『諸文明の起源』14）京都大学学術出版会
日高　慎　1994「人物埴輪の共通表現とその背景」『筑波大学先史学・考古学』第６号　筑波大学歴史・人類学系　pp.1－29
日高　慎　2012「葬送儀礼」『古墳時代研究の現状と課題』上　古墳研究と地域史研究　同成社　pp.363－384
櫃本誠一　1974「兵庫県下における前方後円墳」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第２集　兵庫県教育委員会　pp.195-235
櫃本誠一　1987「播磨地域における古墳の展開」『横田健一先生古稀記念　文化誌論叢（上）』横田健一先生古希記念会　pp.304-402
櫃本誠一　1994「褶墓と日岡山古墳」『風土記の考古学』２　播磨国風土記の巻　同成社　pp.89-109
広瀬和雄　1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編，山川出版社
広瀬和雄　2003『前方後円墳国家』角川書店
広瀬和雄　2009「古墳時代像再構築のための考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第150集
広瀬和雄　2012「東京湾岸・「香取海」沿岸の前方後円墳―５～７世紀の東国当地の一事例―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第167集　国立歴史民俗博物館　pp.67-112
廣瀬　覚　2000「寺戸大塚古墳における埴輪生産組織復原にむけての予察」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第50集（財）向日市埋蔵文化財センター　pp.119－144
廣瀬　覚　2002「前・中期古墳の埴輪配列」『季刊考古学』第79号　雄山閣　pp.51－55
廣瀬　覚　2003a「摂津猪名川流域における前期古墳の埴輪とその系譜」『古代文化』第55巻第９号　古代学協会　pp.1－26
廣瀬　覚　2003b「埴輪の伝播と工人論－前期古墳における生産組織分析の事例から－」『埴輪－円筒埴輪製作技法の

観察・認識・分析－』（『第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』）第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会 pp.205－224

廣瀬　覚　2006「五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産」『史跡五色塚古墳　小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』神戸市教育委員会　pp.239－256

廣瀬　覚　2007「巨大古墳の埴輪生産組織像－神戸市五色塚古墳の検討から－」『埴輪論考Ⅰ－円筒埴輪を読み解く－』（『大阪大谷大学博物館報告書』第53冊）　大阪大谷大学博物館　pp.25－49

廣瀬　覚　2008「メスリ山古墳出土埴輪の再検討」『メスリ山古墳の研究』（『大阪市立大学考古学研究報告』第３冊）大阪市立大学日本史研究室　pp.90－102

廣瀬　覚　2009a「埴輪の成立過程をめぐる諸問題」『ヒストリア』第218号　大阪歴史学会　pp.30－44

廣瀬　覚　2009b「前期古墳の埴輪」『関西例会160回シンポジウム『前期古墳の変化と画期』発表要旨集』考古学研究会関西例会　pp.123-140

廣瀬　覚　2010「近畿における前期古墳の埴輪」『円筒埴輪の導入とその画期』中国四国前方後円墳研究会　第13回研究会発表要旨集　pp.1－20

廣瀬　覚　2011「埴輪の編年　①西日本の埴輪」『古墳時代史の枠組み』（『古墳時代の考古学』１）　同成社 pp.173-186

廣瀬　覚　2012「前期古墳の埴輪」『前期古墳の変化と画期・古墳時代集落研究の再検討』（『考古学研究会例会シンポジウム記録』８）考古学研究会　pp.71－96

廣瀬　覚　2013「製作技術からみた埴輪様式の成立と展開」『立命館大学考古学論集』Ⅵ（和田晴吾先生定年退職記念論集）同刊行会　pp.231－240

廣瀬　覚　2014a「埴輪生産組織の時間的・空間的諸相－近畿中部の分析事例を中心に－」『大阪大谷大学博物館報告書』第61冊　大阪大谷大学博物館　pp.46-67

廣瀬　覚　2014b「再び埴輪研究の現在に思う」『大阪大谷大学博物館報告書』第61冊　大阪大谷大学博物館　pp.104-105

廣瀬　覚　2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社

弘田和司1988「埴輪」『物集女車塚古墳』（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第23集）向日市教育委員会

福永伸哉　1999「古墳時代の首長系譜変動と墳墓要素の変化」『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』平成８年度～平成10年度科学研究費補助金（基盤B・一般２）成果報告書　大阪大学文学部　pp.17－34

福永伸哉　2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会

藤井幸司　2003「円筒埴輪製作技術の復原的研究－窖窯焼成導入以降を中心に－」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（『第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』）第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会　pp.31－62

藤井幸司　2005「大日山35号墳の調査成果」『日本考古学』第19号　日本考古学協会　pp.129－141

藤井幸司　2007「小古墳にみる円筒埴輪生産の具体相－和歌山県船戸箱山古墳出土円筒埴輪製作者の系譜から－」『埴輪論考Ⅰ－円筒埴輪を読み解く－』（『大阪大谷大学博物館報告書』第53冊）　大阪大谷大学博物館　pp.1－24

藤井康隆　2006「尾張における円筒埴輪の変遷と「猿投型円筒埴輪」」『埴輪研究会誌』第10号　埴輪研究会　pp.82－100

藤井康隆　2008「濃尾地方の古墳と王陵系埴輪」『古代文化』第60巻第１号　古代学協会　pp.65－76

藤沢　敦　1991「菅沢２号墳の埴輪生産体制」『菅沢２号墳』山形市教育委員会

藤沢　敦　2002「東北地方の円筒埴輪－窖窯焼成埴輪の波及と生産－」『埴輪研究会誌』第６号　埴輪研究会　pp.17－42

藤沢　敦　2003「東北地方の円筒埴輪－技法・系譜・伝播－」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（『第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』）第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会　pp.315－330

藤薮勝則　1997「埴輪製作集団の復元」伊達宗泰編『黄金塚２号墳の研究』（『花大考研報告』10号）黄金塚２号墳発掘調査団　pp.195-204

藤原光平　2012「加古川流域における古墳の動向」『加古川市西条古墳群　尼塚古墳』大手前大学史学研究所　pp.87-107
渕内美智子・小泉裕司　2012「青塚古墳整理調査」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第64集　城陽市教育委員会　pp.5－21
古市　晃　2015「国家形成期の王権と地域社会」『歴史評論』786号　校倉書房　pp.20－33
古市秀治　1996「特殊器台形埴輪の研究－岡山県南部出土の資料を中心に－」『考古学研究』第43巻第１号　考古学研究会　pp.55－76
古市秀治　2002「特殊壺形埴輪に関する覚書」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』下巻　古代吉備研究会　pp.209－214
古谷　毅　1988「京都府久津川車塚古墳出土の甲冑－いわゆる“一枚鍬”の提起する問題－」『MUSEUM』No.445　東京国立博物館　pp.4－17
古屋紀之　2007『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣
穂積裕昌　2004「いわゆる導水施設の性格について－殯所としての可能性の提起」『古代学研究』第166号　古代学研究会　pp.1－20
前田真由子　2009「製作技法からみた家形埴輪の変遷とその画期－近畿地方出土家形埴輪を中心に－」『古文化談叢』第61集　九州古文化研究会　pp.99－116
増田逸郎　1987「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』（『柳田敏司先生還暦記念論文集』）新人物往来社　pp.401－421
増田精一　1976『埴輪の古代史』新潮社
松木武彦　1988「畿内における靫形埴輪の変遷―埴輪描かれた鏃と実物の鏃―」『待兼山遺跡Ⅱ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会pp.33-47
松木武彦　1990「蓋形埴輪の変遷と画期―畿内を中心に―」『鳥居前古墳―総括編―』（『大阪大学文学部考古学研究報告』第１冊）大阪大学文学部考古学研究室　pp.69-92
松木武彦　1992「蓋形埴輪の形式と範型」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集埋蔵文化財研究会　pp.271-378
松本正信　1992「播磨」『前方後円墳集成』近畿編　山川出版社　pp.100-106
丸川義広　1989a「洛西山田の古墳分布について」『京都考古』第51号
丸川義広　1989b「横穴式石室の平面形態の分析」『大枝山古墳群』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第8冊）
丸川義広　1992「福西古墳群と大枝山古墳群―京都市の西郊に営まれた二つの群集墳について―」『長岡京古文化論叢』Ⅱ　中山修一先生喜寿記念事業会
丸川義広　1997「松尾山の群集墳―松尾十三塚古墳の紹介も含めて―」『研究紀要』第4号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所
丸川義広　1998「横穴式石室平面形態の検討補稿」『研究紀要』第5号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所
丸川義広　2009「北山代を古墳後期から素描する」『京都府の群集墳』（第16回京都府埋蔵文化財研究集会）
三木弘・三好玄・東影悠・金澤雄太・山田暁・原田昌浩・山本亮・橋泉・渡井彩乃・木村理・和田一之輔　2015「和泉地域における古墳時代前期の埴輪生産」『大阪府立近つ飛鳥博物館　館報』18巻　大阪府立近つ飛鳥博物館　pp13－32
三辻利一　2012「土器の考古学研究と分析化学」『志学台考古』第12号　大阪大谷大学文化財学科　pp.36-58
三辻利一　2013『新しい土器の考古学』同成社
三辻利一・犬木努・近藤麻美　2012「統計学の手法による古代・中世土器の産地問題に関する研究（第34報）－畿内の古墳群出土埴輪の化学特性－」『志学台考古』第12号　大阪大谷大学文化財学科　pp.1-35
水野正好　1971「埴輪芸能論」『古代の日本』２　角川書店　pp.255－278
光井清三郎　1902「埴輪円筒は果して柴垣に象れるものか」『考古界』第２篇第７号
宮本長二郎　1996「古墳時代の家形埴輪」『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版　pp.259-338
三好　玄　2016「和泉地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房　pp.161-188
森岡秀人　1992「古墳祭祀のはじまり」『近畿Ⅰ』（『［新版］古代の日本』第5巻）　角川書店　pp.121－145
森下章司　1998「鏡の伝世」『史林』第81巻第４号　史学研究会　pp.1－34

森下章司　2005「前期古墳副葬品の組み合わせ」『考古学雑誌』第89巻第１号　日本考古学会　pp.1－31
森下章司　2007「考古学から復元する製作者集団・工人」『埴輪論考Ⅰ－円筒埴輪を読み解く－』（『大阪大谷大学博物館報告書』第53冊）　大阪大谷大学博物館　pp.71－87
森下章司・廣瀬覚　2003「円筒埴輪の製作技法」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（『第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』）第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会　pp.332－382
森田克行　2003「今城塚古墳と埴輪祭祀」『東アジアの古代文化』第117号　大和書房　pp.57－82
森田克行　2011『よみがえる大王墓・今城塚古墳』（シリーズ『遺跡を学ぶ』077）　新泉社
森本　徹　2007「墓室内への土器副葬の意味」『横穴式石室誕生　黄泉の国の成立』（『大阪府立近つ飛鳥博物館図録』45）大阪府立近つ飛鳥博物館　pp.97－106
森本六爾　1928「埴輪」『考古学研究』第２年第１号
森本六爾　1930a「埴輪研究史略」『考古学』第１巻第４号　東京考古学会　pp.3-8
森本六爾　1930b「埴輪の製作所址及窯址」『考古学』第１巻第４号　東京考古学会　pp.23－27
安川　満　1991「特殊器台形埴輪の地域的動向」『権現山51号墳』同刊行会　pp.147－156
安川　満　2008「特殊器台形埴輪にみる畿内と吉備」『古代文化』第59巻第４号　古代学協会　pp.104－112
屋木秀雄・丸川義広　1999・2000「山城嵯峨野の古墳所在地点について」『京都考古』第86・88・89号
矢野桂司・中谷友樹・河角龍典・田中覚編　2011『京都の歴史GIS』シリーズ　日本文化デジタル・ヒューマニティーズ03　ナカニシヤ出版
山内英樹　2003「埴輪研究の現状と課題～「基底部調整」をめぐる諸問題について～」『宮山古墳群の研究』（『島根県古代文化センター調査研究報告書』16）島根県教育委員会・島根県古代文化センター
山内英樹　2003「円筒埴輪製作工程における基底部調整」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（『第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』）第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会　pp.80－95
山崎　武　2004a「埼玉県岡部町千光寺１号墳出土埴輪について」『幸魂－増田逸朗氏追悼論文集－』北武蔵古代文化研究会　pp.59－84
山崎　武　2004b「生出塚埴輪窯の生産と供給について」『市原市山倉古墳群』市原市埋蔵文化財センター　pp.231－235
山崎　武　2004c「生産と流通」『考古資料大観』４　弥生・古墳時代　埴輪　小学館　pp.231－240
山田俊輔　2008「上毛野における畿内系埴輪の地域波及と展開」『古代文化』第60巻第１号　古代学協会　pp.108－116
山田俊輔　2011「毛野の埴輪」『古墳時代毛野の実像』（『季刊考古学』別冊17）雄山閣　pp.115－119
山田良三　1969「尼塚古墳発掘調査報告」『立命館文学』第289号　立命館大学人文学会　pp.26-64
横山浩一　1978「刷毛目調整工具に関する基礎的検討」『九州文化史研究所紀要』第23号　九州大学九州文化史研究施設（2003『古代技術史攷』岩波書店に追註・補遺を加え再録　pp.3－30）
横山浩一　1993「刷毛目板の形状について」『論苑考古学』天山舎　pp.437－442
吉田恵二　1973「埴輪生産の復原」『考古学研究』第19巻第３号　考古学研究会　pp.30－48
龍谷大学文学部考古学資料室（平良泰久・下村晴文編）　1972『南山城の前方後円墳』（『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告』Ⅰ）
若杉智宏　2010「渋谷向山古墳の埴輪」『玉手山１号墳の研究』（『大阪市立大学考古学研究報告』第４冊）大阪市立大学日本史研究室　pp.183－196
和田　萃　1969「殯の基礎的考察」『史林』第52巻第５号　史学研究会（1995『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』上　塙書房に再録　pp.5－83）
和田一之輔　2005「摂津猪名川流域における古墳時代後期の埴輪供給関係」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学研究室　pp.671－696
和田一之輔　2010「尾張系埴輪の展開にみる諸相」『待兼山考古学論集』Ⅱ　大阪大学考古学研究室　pp.525－538
和田一之輔　2012「靫形埴輪の編年と系統」『文化財論叢Ⅳ』（『奈良文化財研究所学報』第92冊）奈良文化財研究所　pp.169-195

和田晴吾　1976「畿内の家形石棺」『史林』第59巻第３号　史学研究会　pp.1－59
和田晴吾　1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第２号　考古学研究会　pp.44－55
和田晴吾　1988「南山城の古墳－その概要と現状－」『京都地域研究』第４号　立命館大学人文科学研究所　pp.22－34
和田晴吾　1989「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』（『古代史復元』第６巻）講談社　pp.105－119
和田晴吾　1992a「群集墳と終末期古墳」『近畿Ⅰ』（『新版　古代の日本』第５巻）角川書店　pp.325－350
和田晴吾　1992b「地域の概要・山城」近藤義郎編『前方後円墳集成』近畿編　山川出版社　pp.56－67
和田晴吾　1994「古墳築造の諸段階と政治的階層構成」『ヤマト王権と交流の諸相』（『古代王権と交流』第５巻）名著出版　pp.17－47
和田晴吾　1995「棺と古墳祭祀－『据えつける棺』と『持ちはこぶ棺』－」『立命館文学』第542号　立命館大学人文学会　pp.22－49
和田晴吾1997「墓壙と墳丘の出入り口－古墳祭祀の復元と発掘調査－」『立命館大学考古学論集』Ⅰ　同刊行会　pp.195－211
和田晴吾　1998「古墳時代は国家段階か」『権力と国家と戦争』（『古代史の論点』④）　小学館　pp.141－166
和田晴吾　2003「棺と古墳祭祀（2）－『閉ざされた棺』と『開かれた棺』－」『立命館大学考古学論集』Ⅲ　同刊行会　pp.713－725
和田晴吾　2004「古墳文化論」『東アジアにおける国家の形成』（『日本史講座』第１巻）東京大学出版会　pp.167－200
和田晴吾　2009「古墳の他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第152集　pp.247－272
和田晴吾　2011「古墳時代研究小史」『古墳時代』下（『講座　日本の考古学』８）青木書店　pp.54－99
和田晴吾　2014『古墳時代の葬制と他界観』吉川弘文館
和田晴吾　2015『古墳時代の生産と流通』吉川弘文館
和田千吉　1902「埴輪円筒は果して土留なるか」『考古界』第２篇第２号

遺跡参考文献

壺笠山古墳　丸山竜平・梶原大義1987「大津市発見の特殊器台形埴輪」『季刊考古学』第20号　雄山閣、丸山竜平1987「巨大古墳の発生　近江壺笠山遺跡と埴輪の起源」『東アジアの古代文化』第52号　大和書房、丸山竜平1992 「大津市壷笠山古墳の特殊器台型埴輪について」 『究班』埋蔵文化財研究会
元稲荷古墳　近藤喬一・都出比呂志（京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団）1971「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第6号　史学研究会、本報告書
中山大塚古墳　田中英夫・奥田尚1985「奈良県中山大塚古墳の特殊器台形土器」『古代学研究』第109号　古代学研究会、豊岡卓之・卜部行弘・坂 靖 編1996『中山大塚古墳　附篇　葛本弁天塚古墳・上の山古墳』（『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第82冊）奈良県立橿原考古学研究所
西殿塚古墳　福尾正彦1991「衾田陵の墳丘調査」『書陵部紀要』第42号　宮内庁書陵部、松本洋明・宮崎雅充2000「西殿塚古墳」松本洋明編『西殿塚古墳　東殿塚古墳』（『天理市埋蔵文化財調査報告』第７冊）天理市教育委員会
東殿塚古墳　東 潮・関川尚功1981「東殿塚古墳」千賀久編『磯城・磐余地域の前方後円墳』（『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第42冊）奈良県教育委員会、松本洋明・青木勘時2000「東殿塚古墳」松本洋明編『西殿塚古墳　東殿塚古墳』（『天理市埋蔵文化財調査報告』第７冊）天理市教育委員会
馬口山古墳　田中新史1989「奈良盆地東南部の大形前方後円墳出現に関する新知見」『古代』第88号　早稲田大学考古学会
燈籠山古墳　東 潮 1981「燈籠山古墳」千賀久編『磯城・磐余地域の前方後円墳』（『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第42冊）奈良県教育委員会
箸墓古墳　丸山竜平1975「野洲郡野洲町富波遺跡調査報告」『滋賀県文化財調査年報』昭和48年度、中村一郎・笠野毅1976「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号　宮内庁書陵部、春成秀爾・白石太一郎・杉山晋作・奥田尚1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第３集　国立歴史民俗博物館、徳田誠志・清喜裕二1999「倭迹迹日百襲姫命大市墓被害木処理事業（復旧）箇所の調査」『書陵部紀要』第51号　宮内庁書陵部

纒向遺跡　石野博信・関川尚功編1976『纒向』奈良県立橿原考古学研究所
葛本弁天塚古墳　豊岡卓之・卜部行弘・坂 靖 編1996『中山大塚古墳　附篇　葛本弁天塚古墳・上の山古墳』（『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第82冊）奈良県立橿原考古学研究所
東郷遺跡　奥和之編1989『東郷遺跡発掘調査概要』Ⅰ-八尾市桜ヶ丘・旭ヶ丘所在－　大阪府教育委員会
萱振遺跡　原田昌則1996「萱振遺跡第７次調査（KF88-7）」『萱振遺跡』（『八尾市文化財調査研究会報告』52）（財）八尾市文化財調査研究会
小阪合遺跡　新海正博ほか2005『小阪合遺跡（その三）－山本団地建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査－』（『（財）大阪府文化財センター調査報告書』第132集）（財）大阪府文化財センター
西川遺跡　宇垣匡雅1985「兵庫県尼崎市西川遺跡出土の特殊器台形埴輪」『古代学研究』第109号　古代学研究会
権現山51号墳　近藤義郎編1991『権現山51号墳』同刊行会
都月坂１号墳　近藤義郎・春成秀爾1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号　考古学研究会、近藤義郎1986「都月坂１号墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県
七つ坑１号墳　高井健司・近藤義郎編1987『七つ坑古墳群』七つ坑古墳群発掘調査団
網浜茶臼山古墳　宇垣匡雅1984「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』第31巻第3号　考古学研究会、安川満2007「網浜茶臼山古墳」『神宮寺山古墳・網浜茶臼山古墳』岡山市教育委員会
操山109号墳　宇垣匡雅1984「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』第31巻第3号　考古学研究会
浦間茶臼山古墳　宇垣匡雅1984「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』第31巻第３号　考古学研究会、宇垣匡雅1987「吉備の前期古墳－Ⅰ　浦間茶臼山古墳の測量調査－」『古代吉備』第９号、安川満（近藤義郎・新納泉編）1991『浦間茶臼山古墳』真陽社
中山茶臼山古墳　宮内庁書陵部陵墓課編2006『埴輪Ⅴ』宮内庁書陵部、吉備中山総合調査委員会編1975『吉備中山総合調査報告』岡山市教育委員会、近藤義郎1987「最古の前方後円墳」『吉備の考古学』福武書店、宇垣匡雅2010「センター収蔵品紹介vol. ８　－中山茶臼山古墳出土埴輪－」『所報　吉備』第49号　岡山県古代吉備文化財センター、清喜裕二2010「大吉備津彦命墓採集の遺物について」『書陵部紀要』第62号　宮内庁書陵部
宮山遺跡　高橋鎮・鎌木義昌・近藤義郎1987「宮山墳墓群」『総社市史　考古資料編』総社市
矢部大坑古墳　春成秀爾1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第３集　国立歴史民俗博物館、清喜裕二2010「大吉備津彦命墓採集の遺物について」『書陵部紀要』第62号　宮内庁書陵部
矢部B42号墳　井上弘・大智浩1993「矢部古墳群B」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』６（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82）岡山県教育委員会
矢部堀越遺跡　浅倉秀昭1993「矢部堀越遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』６（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82）岡山県教育委員会
矢部伊能軒遺跡　宇垣匡雅1984「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』第31巻第3号　考古学研究会
ヒル塚古墳　桝井豊成編1990『ヒル塚古墳発掘調査概報』八幡市教育委員会、北山大熙2017「埴輪からみた八幡市ヒル塚古墳」『畿内の首長墳』（平成25～28年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書）立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻
女郎花遺跡　八十島豊成・塩貝泰洋1999『女郎花遺跡第３・５次発掘調査概報』（『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第28集）八幡市教育委員会
黄金塚２号墳　伊達宗泰編1997『黄金塚２号墳の研究』（『花大考研報告』10号）黄金塚２号墳発掘調査団
天皇の杜古墳　丸川義広1993「史跡天皇の杜古墳」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、丸川義広1994「史跡天皇の杜古墳」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、北田栄造1994『史跡天皇の杜古墳保存整備事業報告書』京都市文化観光局
乾垣内遺跡　梅本康広1998「乾垣内遺跡（4PIBIC地区）調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第47集　(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会
長法寺南原古墳　梅原末治1937「乙訓村長法寺南原古墳の調査」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第17冊　京都府、

都出比呂志・福永伸哉編1992『長法寺南原古墳の研究』（『長岡京市文化座調査報告書』第30冊）　長岡京市教育委員会

今里車塚古墳　高橋美久二1980「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1980－２）』京都府教育委員会、石尾政信1982「長岡京跡右京第84次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第３冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、木村泰彦1991「長岡京跡右京第352次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第27冊　長岡京市教育委員会、山本輝雄ほか1996「右京第488次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成６年度　（財）長岡京市埋蔵文化財センター、岩崎誠1998「長岡京跡右京第582次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第38冊　長岡京市教育委員会、岩崎誠1999「長岡京跡右京第582次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第39冊　長岡京市教育委員会、岩崎誠2006「右京第832次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成16年度　（財）長岡京市埋蔵文化財センター、木村泰彦ほか2007「長岡京跡右京第871次調査概要」『長岡京市文化財報告書』第49冊　長岡京市教育委員会

境野１号墳　古閑正浩編2007『境野１号墳』（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第34集）大山崎町教育委員会

鳥居前古墳　杉原和雄1970「鳥居前古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1970）』京都府教育委員会、福永伸哉1987「鳥居前古墳」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第６集　大山崎町教育委員会、福永伸哉編1990『鳥居前古墳－総括編－』（『大阪大学文学部考古学研究報告』第１冊）大阪大学文学部考古学研究室、古閑正浩2011「鳥居前古墳第４次調査報告」「鳥居前古墳第５次調査報告」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第42集　大山崎町教育委員会、古閑正浩2012「鳥居前古墳第６次調査報告」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第43集　大山崎町教育委員会

庵寺山古墳　岩崎恭典1973「庵寺山古墳実測調査」『伊勢田塚陶棺発掘調査報告書』伊勢田塚調査会、杉本宏1990「庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第15集　宇治市教育委員会

日岡陵古墳　西谷眞治1996「日岡陵古墳」『加古川市史』第４巻　史料編（自然・考古・古代・中世編）加古川市

勅使塚古墳　高野政昭1996「勅使塚古墳・狐塚古墳」『加古川市史』第４巻　史料編（自然・考古・古代・中世編）加古川市

西大塚古墳　高野政昭1996「西大塚古墳」『加古川市史』第４巻　史料編（自然・考古・古代・中世編）加古川市

南大塚古墳　高野政昭1996「南大塚古墳」『加古川市史』第４巻　史料編（自然・考古・古代・中世編）加古川市

狐塚古墳　高野政昭1996「勅使塚古墳・狐塚古墳」『加古川市史』第４巻　史料編（自然・考古・古代・中世編）加古川市

西車塚古墳　高野政昭1996「西車塚古墳」『加古川市史』第４巻　史料編（自然・考古・古代・中世編）加古川市

東車塚古墳　西谷眞治1996「東車塚古墳」『加古川市史』第４巻　史料編（自然・考古・古代・中世編）加古川市

北大塚古墳　高野政昭1996「北大塚古墳」『加古川市史』第４巻　史料編（自然・考古・古代・中世編）加古川市

西条52号墓　西条古墳群発掘調査団（編）1964『西条古墳群発掘調査略報』西条古墳群発掘調査団、西谷眞治・日野宏1996「西条52号墳」『加古川市史』第４巻　史料編（自然・考古・古代・中世編）加古川市、西条古墳群発掘調査団2009「西条52号墓発掘調査の記録」『弥生墓からみた播磨』（第9回播磨考古学研究集会の記録）同研究集会実行委員会

行者塚古墳　高野政昭1996「行者塚古墳」『加古川市史』第４巻　史料編（自然・考古・古代・中世編）加古川市、菱田哲郎・高橋克壽・森下章司・一瀬和夫ほか1997『行者塚古墳発掘調査概報』（『加古川市文化財調査報告書』15）加古川市教育委員会

人塚古墳　本報告、森下章司・西村秀子編2016（予定）『加古川市西条古墳群　人塚古墳』

尼塚古墳　高野政昭1996「尼塚古墳」『加古川市史』第４巻　史料編（自然・考古・古代・中世編）加古川市、森下章司・西村秀子編2012『加古川市西条古墳群　尼塚古墳』大手前大学史学研究所

カンス塚古墳　喜谷美宣1985『加古川市カンス塚古墳発掘調査概要』加古川市教育委員会、竹谷俊夫1996「カンス塚古墳」『加古川市史』第４巻　史料編（自然・考古・古代・中世編）加古川市、金澤雄太・藤原光平2012「出土埴輪からみた尼塚古墳の位置づけ」『加古川市西条古墳群　尼塚古墳』大手前大学史学研究所

里古墳　西川英樹1998「里古墳の発掘調査について」『文化財ニュース』No.41　加古川市教育委員会

時光寺古墳　清水一文・今西康宏2009『時光寺古墳　発掘調査報告書』（『高砂市文化財調査報告』10）高砂市教育委員会
東沢１号墳　山田清朝2012『加古川市　東沢１号墳』（『兵庫県文化財調査報告』第431冊）兵庫県教育委員会
天塚古墳2008『京都市内遺跡試掘調査報告』平成19年度　京都市文化市民局
穀塚古墳1991『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成２年度　京都市文化観光局
山田桜谷古墳群　1988『京都市埋蔵文化次調査概要』昭和60年度　京都市埋蔵文化財研究所
広隆寺旧境内　1997『京都嵯峨野の遺跡―広域立会調査による遺跡調査報告―』京都市埋蔵文化財研究所
清水山古墳　1985『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』　京都市文化観光局
天鼓の森古墳　1989『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和61年度　京都市埋蔵文化財研究所
鳥羽古墳群　1984『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和59年度　京都市文化観光局、1986『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和58年度　京都市埋蔵文化財研究所、1987『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和59年度　京都市埋蔵文化財研究所、1989『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和61年度　京都市埋蔵文化財研究所、1994『京都市埋蔵文化財調査概要』平成元年度　京都市埋蔵文化財研究所
芝古墳　2015『京都市内遺跡発掘調査報告』平成26年度　京都市文化市民局、2016『京都市内遺跡発掘調査報告』平成27年度　京都市文化市民局
井ノ内車塚古墳　2000『長岡京市文化財調査報告書』第41冊　長岡京市教育委員会、2012『長岡京市文化財調査報告書』第61冊　長岡京市教育委員会、2013『長岡京市文化財調査報告書』第64冊　長岡京市教育委員会、2014『長岡京市文化財調査報告書』第66冊　長岡京市教育委員会、2015『長岡京市文化財調査報告書』第68冊　長岡京市教育委員会
物集女車塚古墳　1989『物集女車塚』（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第23冊）　向日市教育委員会、2011『向日市埋蔵文化財調査報告書』第88冊　向日市教育委員会
吉田二本松８号墳　2015『京都大学構内遺跡調査研究年報　2013年度』京都大学文化財総合研究センター
塚本古墳1984『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第１集　財団法人長岡京市埋蔵文化財センター、1991『長岡京市史』資料編１　長岡京市
舞塚１号墳　1991『長岡京市史』資料編１　長岡京市

なお、各章の初出、新稿の対応は以下の通りである。
序　章…新稿。
第１章…新稿。
第２章…「特殊器台形埴輪からみた元稲荷古墳の位置付け」（2014）をもとに加筆。
第３章…新稿。
第４章…「古墳時代中期の埴輪生産－京都府久津川古墳群の分析事例から－」（2015）を一部加筆・修正。
第５章…「加古川下流域の埴輪　人塚古墳の調査成果を中心に」（2016）をもとに加筆・修正。
第６章…「物集女車塚古墳の円筒埴輪の製作技法」（2011）のうち、筆者執筆分のみをもとに加筆。
第７章…新稿。一部は「デジタル技術を用いた古墳の調査方法について」（2017）をもとに加筆。
終　章…新稿。